

対人関係の基盤としての「身体接触」に関する生涯発達行動学的検討  
(課題番号 16203035)

平成16年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書

平成19年12月

研究代表者：根ヶ山光一（早稲田大学人間科学学術院・教授）

はじめに

現代の対人関係は、地域社会・家族形態・生活スタイルの変化により、希薄化の度を強める傾向にある。そのため、家庭・教育現場・企業などの場において、人間関係上のストレスや障害、あるいは疎外からくるさまざまな問題が生じている。なかでも生活形態のハイテク化、コミュニケーション形態のバーチャル化により、対人・対物関係において身体やその接触を体験する機会が急速に減少し、それが心理面・行動面の深刻な不全性をもたらしている。このことは、「裸のサル」として、敏感な皮膚を外界にさらして、他者やモノと直接に触れあうことを選択したヒトの存在様式に逆行するような事態であり、現代生活のもつ陰の部分として看過できない問題である。

身体の意味は、言うまでもなく年齢・性別・社会的関係によって大きく異なる。また、身体接触は、正負の両面をあわせもち、身体接触を行う者同士の歴史性、関係性、文脈によってもその意味は変わってくる。しかも身体接触は、正・負の両極にわたって強烈な情動を伴うがゆえに、そのあり方は対人関係の根底を規定する。本研究は、基礎と臨床の両側面から、身体接触の多様な意味をリアルな生活の場で多面的・生涯発達の捉えなおそうとするものであった。

本研究は身体接触が、文字・音声や表情などと異なり、強い「私」(当事者)性と情動性(愛と憎しみの両側面)をもち、また同時双方向性(当事者がともに与え手であると同時に受けてでもあるという二重性)、状態共有性(行為のみならず触れあっているという状態でもあるという性質)、全身関与性(全身のどこでも用いることができ、また全身のどこにでも向けることができる)を備えているという点において、きわめてユニークかつ重要なコミュニケーションチャンネルである(根ヶ山、2002)という独自の視点をもつ。しかもその視野には、身体とは正の面ばかりでなく負の面においても強力な関係構築・維持の媒体であり、接触がその実現の舞台であって、身体接触のもつ関係構築上 positive な機能と negative な機能について等しく光を当てるべきであるという明確な志向性がある。それを基礎・臨床の両場面にまたがって見つめ、私達の生活の中に埋め込まれた身体接触の意味を浮き彫りにするということには重要な意義がある。しかもそれらの背後にある生涯発達の因果関係を積極的に追究し、それらのことを通じて、対人関係上(特殊な場面を除いて)軽視されてきた身体接触というコミュニケーションの広範かつ豊かなあり方に正当な光をあててその複合的な機能を立体的に考察することは、今日の私達が抱える問題に解決の方途を提案することにつながるであろう。

身体接触の問題は、従来母子関係における「スキンシップ」といった領域で限定的に注目されがちなテーマであった。しかしそれは、母子だけに限定される問題ではなく、positive な面からのみ

捉えられるできものでもない。本研究はまず、検討の舞台を縦横に拡張し、正負の両面からこの問題を総合的に考察しようという斬新な人間科学的試みとして位置づけられる。本研究ではその対象を胎児から高齢者にまで広げて、そのそれぞれの段階においてどのような身体接触がどういう相手に、どのような文脈で見られるのかを、異なる切り口で検討する。そしてそれらを通観するなかで、それぞれの段階における身体接触が、それ以前のもしくはそれ以降の身体接触とどのように関連付いているかなどについても示唆を求める。

身体という質量を何かに接触させるという行為は、心・環境・行動と関わる学際的な切り口であり、それはとくに認知主義的な人間理解を補完するものである。そのことの重要性は、1992年に米国マイアミ大学に「身体接触研究所 (Touch Research Institutes)」が創設されたことにも表れている。さらに、生涯発達という観点は今日の発達心理学界における大きなトレンドであり、そのなかで身体というそれ自体経年的に変化する実体を包含させつつ、その接触という行為の意味の一生にわたる発達を心理学的に検討することは重要なことである。

本研究は、以上のような問題意識をふまえて、「身体接触」が対人関係を構築する際の基盤であるという前提に立ち、その重要性を生涯発達の観点から検討したものである。その際、乳児期の母子といった発達の限局されたトピックに収束化することなく、人間のそれぞれの発達段階や各生活状況下で身体接触が対人関係上はたす基本的機能について、時期的に偏りなく注目した。むしろ身体接触の各発達段階における諸相の時系列的な因果関係を積極的に想定し、その発達の推移を理解しようとした。それはすなわち、21世紀の私達の生活において望ましい身体性のあり方について、場面横断的・変化縦断的に考察する試みにほかならないとの考えに基づいてのものである。

本研究では、現代の対人関係を象徴するような身体接触に関するいくつかの場面・行動に注目し、観察・面接・質問紙等によりデータを収集した。それをもとに、身体接触という切り口から現代の対人関係が抱える問題を議論するとともに、対人関係を改善する方策について検討する手がかりが得られることを目指した。その成果については、ここに掲載した諸研究の報告内容から読者諸賢に読み解いて頂きたい。

本研究課題は、人間の生涯発達の諸相における身体接触をめぐる以下の諸研究から構成されている。

まず、胎児の身体接触として、胎動が岡本によって報告される。そして出産を経て母親が乳児に対して行うベビーマッサージ(タッチケアとも呼ばれる)が篠沢によって、抱きが山形・根ヶ山(光)・

山口・京野・西川および京野・西川・根ヶ山（光）・山形・山口によって、それから母子間における身体接触的遊びが根ヶ山（光）・Powers および Powers・Negayama、K.によって、それぞれ報告される。他方、実験室的研究として、子どもと母親の共同注意における母子接触の効果が太田によって検討される。

さらに、保育士というもう一人の養育者も子どもへの身体接触の提供者であり受容者である。オムツ換えという養育行動（村上）と、寝かしつけという養育行動における身体接触（根ヶ山（光）・河原・広瀬・Powers）について、母親と保育士の比較検討が行われる。

家庭以外を主たるフィールドとした研究も報告される。保育園での園児同士のいざこざやその調整・仲直りにおける身体接触が広瀬・根ヶ山（光）によって、障害児通園施設における自閉症児と保育者のくすぐり遊びを介した身体接触が河原によって、さらには養護施設・教育相談機関における幼児・児童の臨床例における身体接触が菅野によって、順次議論される。

続いて山口は、青年同士の身体接触の意味を、熟知度や不安との関係で検討し、根ヶ山（多）・根ヶ山（光）は乳児期から青年期までの子どもとその親との身体接触を、親の観点から分析する。最後に川野は、高齢者の身体接触を、老人保健施設における介助型ロボットとの関わりとしてとりあげる。

## 研究組織

- 研究代表者： 根ヶ山光一（早稲田大学人間科学学術院）  
研究分担者： 河原紀子（共立女子大学家政学部）  
川野健治（国立精神・神経センター精神保健研究所）  
菅野 純（早稲田大学人間科学学術院）  
大藪 泰（早稲田大学文学学術院）  
岡本依子（湘北短期大学保育学科）  
山口 創（聖徳大学人文学部）
- 研究協力者： 京野尚子（大妻女子短期大学）  
広瀬美和（早稲田大学大学院人間科学研究科）  
村上八千世（アクトウェア研究所・早稲田大学人間総合研究センター）  
根ヶ山多嘉子（跡見学園女子大学）  
Niki Powers（Edinburgh 大学）  
西川晶子（戸板女子短期大学）  
大田裕香（早稲田大学大学院文学研究科）  
篠沢 薫（早稲田大学大学院人間科学研究科）  
山形悦子（早稲田大学大学院人間科学研究科）

## 交付額

平成16年度	9,490,000円
(直接7,300,000円；間接2,190,000円)	
平成17年度	5,590,000円
(直接4,300,000円；間接1,290,000円)	
平成18年度	4,940,000円
(直接3,800,000円；間接1,140,000円)	
総計	20,020,000円
(直接15,400,000円；間接4,620,000円)	

## 研究発表

### (1) 学会誌等

広瀬美和 2007 保育園児の調整・仲直り行動における身体接触に注目した日英比較検討 発達研究, 21, 87-99

飯田綾・野崎健太郎・川崎雅子・嶋田洋徳・菅野純 2007 不登校児童生徒を対象とした宿泊体験学習が精神的健康に及ぼす影響：対人関係ゲームを用いたかわり. 臨床心理学研究, vol.6(1), 67-78.

川崎雅子・加藤陽子・菅野純 2006 大学生における信頼感と達成動機およびふれ合い恐怖の心性の関連. 臨床心理学研究, vol.5(1), 45-52.

北爪直美・菅野純 2007 「大学生版ゆとり感尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」臨床心理学研究, vol.6(1), 79-88.

村上八千世・根ヶ山光一 2004 なぜ小学生は学校のトイレで排便できないのか？ 学校保健研究, 46, 303-310.

村上八千世・根ヶ山光一 印刷中 乳幼児のオムツ交換場面における子どもと保育者の対立と調整—家庭と保育園の比較— 保育学研究, 45.

那須昭洋・菅野純 「社会的絆の理論」の再考 2007 発達段階における社会的絆の機能変容に関する試論」人間科学研究, vol. 20(1), 19-26.

根ヶ山光一・河原紀子・福川須美・星順子 (投稿中) 家庭と保育園における1歳児の泣き行動の比較 こども環境学研究.

根ヶ山光一・星三和子・土谷みち子・松永静子・汐見稔幸 2005 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き:保育士による観察記録を手がかりに. 保育学研究, 43, 65-72.

根ヶ山光一・山口創 2005 母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達. 小児保健研究 64, 451-460.

岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・亀井美弥子・青木弥生・石川あゆち・川田学・高橋千枝・八木下暁子・根ヶ山光一 (印刷中) 妊娠期における母子の接触としての胎動:胎動日記における胎動を表すオノマトペの分析から. 湘北紀要(29)

山口創 (投稿中)、身体接触が不安に及ぼす影響-触覚抵抗との関連について、カウンセリング研究

## (2) 口頭発表

布施香織・加藤陽子・菅野純 2006 登校行動持続要因の検討(2) 親にまつわる記述を抽出して. 日本教育心理学会第48回総会.

広瀬美和 2005 子どものいざこざと調整・仲直りにおける身体接触. 乳幼児教育学会第15回大会, 96-97.

Hirose, M., & Negayama, K. 2004 The development of young children's regulation of their relationships and reconciliation after conflict. 18th Biennial ISSBD Meeting.

Hirose, M., Negayama, K., Kawahara, N., & Powers, N. (予定) Touches as young children's regulation of their relationships after social conflict at day nursery in Japan and UK. 20<sup>th</sup> Biennial ISSBD Meeting.

桂川泰典・菅野純 2006 発達障害児と新任支援員との信頼関係構築プロセスに関する一考察:暗黙値の記述を目指して. 日本教育心理学会第48回総会.

加藤陽子・菅野純 2005 行動を持続させる要因の検討:不登校にならなかった者の自由記述から. 教育心理学会第47回総会.

加藤陽子・布施香織・菅野純 2006 登校行動持続要因の検討(1):社会的ネットワークを中心に. 日本教育心理学会第48回総会.

川崎雅子・加藤陽子・菅野純 2006 大学生における信頼感と達成動機およびふれ合い恐怖的心性の関連. 日本教育心理学会第48回総会.

河原紀子 2007 自閉症幼児の身体接触遊び—くすぐり遊びの分析から— 日本心理学会第71回

大会発表論文集, 1123.

Kawahara, N., Negayama, K., Hirose, M., & Powers, N. (予定) Cross-cultural comparison of toddler-caregiver interaction at lunchtime in Japanese and Scottish nurseries. 20<sup>th</sup> Biennial ISSBD Meeting.

川野健治 2006 ロボット介在活動にみる高齢者の接触. (日本心理学会第 70 回大会ワークショップ「ヒューマン・アニマル・ボンドー動物型ロボットの可能性」): 企画者 安藤孝敏・長田久雄)

川野健治, 柴田崇徳, 和田一義 2005 ロボットが媒介する高齢者のコミュニケーション. 日本社会心理学会第 46 回大会論文集, 214-215.

菅野純, 増田みちよ, 綿井雅康, 蓑地一夫 2004 精神的充足・社会的適応力」尺度を活用した教育相談の実践報告(1) クラス集団の質的分析と集団的指導への活用の試み. 日本教育心理学会第 46 回総会.

菅野純・綿井雅康 2005 精神的充足・社会的適応力尺度を活用した教育相談の実践報告(3) クラス集団の中の個の理解. 教育心理学会第 47 回総会.

菅野純・小澤満玲・綿井雅康・増田みちよ 2006 精神的充足・社会的適応力」尺度を活用した教育相談の実践報告(5) 特別支援教育への活用. 日本教育心理学会第 48 回総会.

京野尚子・西川晶子・根ヶ山光一・山形悦子・山口創 2007 母子における抱きの発達と抱きにくさに関する研究(その2). 日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集, 732.

増田みちよ・菅野純・綿井雅康 2006 精神的充足・社会的適応力」尺度を活用した教育相談の実践報告(6) 学校保健における実践報告. 日本教育心理学会第 48 回総会.

村上八千世・根ヶ山光一 2007 乳幼児のオムツ交換場面における子と保育者の対立と調整～保育園と家庭の比較より～. 日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集, 361.

中上英和・菅野純・乙部和昭 2006 大学生および専門学校生の友人関係について アサーションと自尊感情の観点から. 日本教育心理学会第 48 回総会.

那須昭洋・菅野純 2006 大学生の「内的攻撃性」が自己肯定間に及ぼす影響: 他者との関係維持の観点から. 日本教育心理学会第 48 回総会.

根ヶ山光一 2006 親の体臭に対する子どもの不快の発達の变化. 日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集, 486.

根ヶ山光一 2007 抱っこ研究の萌芽: どのように取り組むか. 日本発達心理学会大 18 回大会発表論文集, 205.

根ヶ山光一 2006 対人関係の基盤としての身体接触に関する発達の研究:(1) 乳児における身体接触遊びの日英比較. 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 1233.

Negayama, K. 2006 Age Differences In Children's Immediate Reactions To A Big Earthquake. 19<sup>th</sup> Biennial ISSBD Meeting.

Negayama, K., Kawahara, N., Hirose, M., & Powers, N. (予定) Cross-cultural comparison of

nursery staff's tactics to put children into sleep between Japan and Scotland. 20<sup>th</sup> Biennial ISSBD Meeting.

大藪 泰・大田裕香 2006 対人関係の基盤としての身体接触に関する発達の研究(2) 1歳児の共同注意に与える母親の抱き効果の検討. 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1234.

大田裕香・大藪 泰・根ヶ山光一 2005 母子間での「抱き」と共同注意. 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 534.

Powers, N. & Negayama, K. 2006 Mother-infant vocal play In Japan and Scotland: Do vowels support the expression and perception of emotions in early communication? 19<sup>th</sup> Biennial ISSBD Meeting.

佐野綾子・川野健治・島津直美・田中乙菜 2006 対人関係の基盤としての身体接触に関する発達の研究:(4) 高齢者の接触を誘発するロボット介在活動の検討. 日本心理学会第70回大会発表論文集.

篠沢薫, 根ヶ山光一 2006 ベビーマッサージ場面における親子の行動の縦断的研究. 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 339.

山形悦子・根ヶ山光一・山口創・京野尚子・西川晶子 2007 母子における抱きの発達と抱きにくさに関する研究(その1) - 双対尺度法を用いて -. 日本発達心理学会第18回大会発表論文集, 731.

山形悦子・根ヶ山光一(予定) 「抱き」を通した母子相互作用についての研究 - 母親が感じる「抱きにくさ」に着目して -. 日本発達心理学会第19回大会.

山口創 2006 対人関係の基盤としての身体接触に関する発達の研究(3): 思春期の接触抵抗と心身の健康との関連. 第70回日本心理学会, 1235.

綿井雅康・菅野純 2005 精神的充足・社会的適応力評価尺度の臨床・教育的検討(5) 養育態度との関連について. 教育心理学会第47回総会.

綿井雅康・菅野純・増田みちよ 2006 精神的充足・社会的適応力評価尺度の臨床・教育的検討(6) 無気力感尺度との関連について. 日本教育心理学会第48回総会.

山口創 2006 人と人をつなぐボディトーク. 第5回看護技術学会、岡山大学.

山口創 2007 身体感覚から心を育てる - 身体心理学の立場から -. 第25回日本感覚統合療法学会、大阪府立大学.

### (3) 出版物その他

菅野純 2004 「思春期のこころとからだ」子どもと発育発達, vol.2(6), 362-365.

菅野純 2004 「思春期の子どもと大人」小児看護, 27(13), 1799-1803.

菅野純, 2004 「子どもの育ちを考える」『研究報告書 都幼教』東京都公立幼稚園教育研究会, 第31号, 4-5.

菅野純 2005 「武道で子どもをたくましく育てよう(上)」月刊武道 466, 10-23.



- 菅野純 2005 「武道で子どもをたくましく育てよう(下)」月刊武道 467, 10-23.
- 菅野純 2005 「思春期のこころとからだ」子どもと発育発達. 日本発育発達学会 2(6), 362-365.
- 菅野純 2005 「心の支援が上手だった教師たち」心を育てる学級経営. 明治図書出版 20(9), 9-10.
- 菅野純 2005 「しつけ力の再生に向けて」幼稚園代全 7, 48-51.
- 菅野純 2005 「思春期のこころとからだ」子どもと発育発達. 日本発育発達学会 2(6), 362-365.
- 菅野純, 2005 『子どもの問題と「いまできること」探し』ほんの森出版.
- 菅野純 2006 「<ことば>の基礎づくり」幼稚園じほう, 32(6), 5-11.
- 菅野純, 2007 『教師のためのカウンセリング実践講座』金子書房.
- 菅野純(編著) 2007 『教師のための学校カウンセリング学・小学校編 学校カウンセリングによる30のアプローチ』至文堂.
- 根ヶ山光一 2006 <子別れ>としての子育て 日本放送出版協会。

目次

岡本依子 (湘北短期大学保育学科) 「妊娠期における母子の接触としての胎動：胎動日記における胎動を表すオノマトペの分析から」	1
篠沢薫 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 「ベビーマッサージにおける親子間のかかわりの発達の研究」	11
山形悦子 (早稲田大学大学院人間科学研究科)・根ヶ山光一 (早稲田大学)・山口創 (聖徳大学)・京野尚子 (大妻女子短大)・西川晶子 (戸板女子短大) 「母子における抱きの発達と抱きにくさに関する研究 (1)：双対尺度法を用いて」	17
京野尚子 (大妻女子短大)・西川晶子 (戸板女子短大)・根ヶ山光一 (早稲田大学)・山形悦子 (早稲田大学大学院人間科学研究科)・山口創 (聖徳大学) 「母子における抱きの発達と抱きにくさに関する研究 (2)：母親の抱きに対する意識と抱きにくさに関する質問紙分析」	26
根ヶ山光一 (早稲田大学人間科学学術院)・Powers, N. (Edinburgh 大学心理学科) 「日英の母子における身体接触遊びの縦断的研究」	32
Powers, N. (Edinburgh University) & Negayama, K. (Waseda University) 「Vowel sounds and touch in rhythmic play.」	40
大藪泰 (早稲田大学文学学術院)・大田裕香 (早稲田大学大学院文学研究科) 「子どもの共同注意に関する母親の抱き効果」	53
村上八千世 (アクトウェア研究所・早稲田大学人間総合研究センター) 「乳幼児のオムツ交換場面における子どもと保育者の対立と調整にみる身体接触」	61
根ヶ山光一 (早稲田大学人間科学学術院)・河原紀子 (共立女子大学家政学部)・広瀬美和 (早稲田大学大学院人間科学研究科)・Niki Powers (Edinburgh 大学心理学科) 「日英の保育園における寝かしつけ時の身体接触の比較」	68
広瀬美和 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 「幼児の社会化における身体接触」	77
河原紀子 (共立女子大学家政学部) 「自閉症幼児の身体接触遊び：くすぐり遊びの分析から」	85
菅野純 (早稲田大学人間科学学術院) 「幼児・児童虐待事例における身体接触エピソードの事例検討」	95
山口創 (聖徳大学人文学部) 「思春期における身体接触が不安に及ぼす影響」	104
根ヶ山多嘉子 (跡見学園女子大学) 根ヶ山光一 (早稲田大学) 「日本の親子の“スキンシップ”：親による自由記述から読み解く発達的变化」	114
川野健治 (国立精神・神経センター精神保健研究所)	

「ロボット介在活動にみる高齢者の接触」	126
「総括」	135

# 研究成果報告

# 妊娠期における母子の接触としての胎動 ：胎動日記における 胎動を表すオノマトペの分析から

岡本 依子（湘北短期大学保育学科）

## 【目的】

親子における接触の重要性は古くから認められており、あらゆる角度から接触の効果について検証されている。日本の育児においても、伝統的にスキンシップを重視する傾向があったといえるだろう。ある程度の年齢に達した子どもに何か問題があると感じたとき（指しゃぶりや夜尿、あるいは、非行などについても）、親や周囲の大人の「小さい頃のスキンシップが足らなかったのではないか」といった、スキンシップの不足（しかも幼少期の）と現前の問題を関連づけた言説に出会うことが少なくない。こういった言説が正しいかどうかということではなく、一般的には、スキンシップの重要性が当然のこととされ、育児のなかで重視されてきた表れといえるだろう。

もちろん、親子の接触の機会が減っているのではないかという意見もある。乳幼児を連れての外出に、ベビーカーが使われることが増え、車を運転する女性（母親）が増えたことから車の使用も増えた。だっこやおんぶで肌を触れあわせて歩くという機会は、確かに減ったかもしれない。しかし、乳幼児の調査で家庭に訪問すると、「こうしてると泣きやむから」と、おんぶ紐で乳児を自分の背中に負い家事をこなす母親も、「子どもをずっとだっこしていたら、腱鞘炎になってしまった」と語る母親も少なくない。また、各地域でベビーマッサージの教室や講座が増え、参加者も多いという。現代の子育てにあった形で、接触のあり方が変容しているのかもしれない。

このように、少なくとも日本の育児において接触の重要性は疑いの余地のないものといえる。しかし一方で、接触の重要性が語られるのは、ほとんどが子どもの出生後のこととっていいだろう（低体重出生児などのカンガルーケアも出生後のことである）。本報告では、これまでほとんど議論されることのなかった妊娠期の接触について考えてみたい。

確かに、接触という皮膚を通じた感覚は、非接触から接触への変化に際して意識化されるものである。妊娠期については、子どもが母親の胎内にいる状態であり、非接触の状況が考えづらい。そのため、わざわざ妊娠期の親子の接触として取り上げる必要もなかったのかもしれない。あるいは、子どもの存在が胎内であるため、他者との接触の感覚というより、より自己身体感覚に近いものとして感じられるため、接触として捉えづらいのかもしれない。そうだとすると、妊娠期の親子の接触は捉えづらい問題といえるかもしれない。しかし、妊婦にとって、胎児との接触であると感じられることはないかという、そうではない。妊婦は、胎児の動きを身体的な感覚を通して感じることができる。

さらに、胎動による身体的な感覚は、妊婦が直接我が子を感じることでできる唯一の感覚でもある。近年、超音波検査（エコー検査）による診断が普及し、ほとんどの妊婦が、胎内にいる我が子の超音波映像を目にする機会をもつ。妊婦にとって、超音波映像は、胎内の我が子をイメージするきっかけとなったり（蘭，1989）、妊婦の気持ちに（おもに、ポジティブな）影響を与えたり（三澤・片桐・小松・藤澤，2004）する。しかし、我が子を直接見たり、わが子の声を直接聞いたり、我が子を直接抱いたりするのは、根本的に異なる体験といえるだろう。その意味でも、妊婦にとって胎動がどのような意味を持つ感覚であるかを検討する必要があるといえる。

ところで、胎動については、超音波検査装置を用いて胎児の動きを観察できるようになり、急速に研究が進んだ。多田(1992)によると、妊娠7週ごろから胎芽（胎児）のうごめくような蠕動運動が始まり、9週までに頭部、躯幹部、上下肢などが連続して動く集合運動、10週には体の位置や向きなどを同時に変化させる連合運動へと発達する。16週ま

で運動反射がほぼ完成し、32週以降は体全体として調和のとれた運動となる。そして、33週以降は、胎児が大きくなるため羊水腔が狭くなり、全身運動は活発でなくなる。また、観察時間中に胎動が生じる時間の割合については、妊娠初期には40%で、週齢が増すごとに増加し、妊娠中期に60~70%となり、妊娠末期に向けて漸減する(上妻ら,1983)。

上で述べたように、胎児自身はかなり早い時期から運動を始めるが、母親が胎動を感じることができるのは、妊娠16~20週頃である(間崎・平川,1998)。胎動を感じる時期については個人差が大きく、また、初産婦よりも経産婦の方がより早期に胎動を感じるといわれている(鈴木・久慈,1995)。妊婦にとっては、妊娠初期に赤ちゃんの存在を信じることが難しい(Lumley, 1982)だけでなく、胎動を感じ始めてからも、「赤ちゃん」が動いているという実感はほとんどない。蘭(1989)も、はじめての胎動について、小さな生き物、腹部の小さなけいれん、あるいは、腸に空気が入ったような動きなどのように感じられ、「赤ちゃん」が動いていると感じられることはないと述べている。本研究における胎動日記においても、胎動の感じ始めについて「もしかしてと疑う程度の弱い小さな感触。虫とか、腸が一瞬ピクッと(16週)」と語られていた。

胎動に着目し、妊婦の心理的な変化を詳細に捉えようとする研究は、多くはない。しかし、妊娠期における妊婦の心理的变化の契機として、胎動をあげる研究はある(たとえば、Condon,1985;上妻・岡井・水野,1983;川井・大橋・野尻・恒次・庄司,1990;川井・庄司・恒次・二木,1983,本島,2007など)。胎動を初めて経験した後、妊婦の胎児への愛着が急激に増大すること(Condon, 1985)、胎動が妊娠期の母性的行動をもっとも触発していること(川井ら,1990;川井ら,1983)、または、胎動によって、妊婦の気持ちをポジティブに維持されることを示している。

しかし、これらの研究は胎動の重要性を訴えているが、一方で、胎動が妊婦にとって、どのような意味をもっているか、さらに、妊娠期の間にそれがどのように変化するかを検討した研究は少ない。そこで、岡本・菅野・根ヶ山(2003)は、妊婦が胎動について語ること(「足で蹴る」など胎児の身体の部位や、「赤ちゃんが喜んでいる」など胎児の内的状態など)を、胎児への意味づけと捉え直し、妊婦から見た母子関係の変化を検討した。妊婦が胎動について記した胎動日記を収集し分析した結果、2つのターニング・ポイントを見いだした。第1のターニング・ポイントは、妊娠29-30週であった。この時期、胎動を、胎児の足と捉えた語りが増し、それまで胎動から、「モグラ」や「虫」といった人間以外のものを想起した記述が激減する。そして、妊婦がお腹の存在を「人間の赤ちゃん」として意味づけるようになることが示唆された。第2のターニング・ポイントは、妊娠33-34週で、胎児の足についての語りが一時的減少する時期である。ここでは、胎児の母親に対する応答としての語りから、母親以外の夫の声や外の音に対する応答としての語りへと変化していた。このように、妊婦は、胎動の感じ始めには、自身の体に感じる感覚を胎児の動きと結びつけられず、「虫」や「腸」の動きとしてしか想起できなかったが、妊娠週齢が増すにつれて、胎動を胎児の動きや内的状態の表れとして意味づけるようになったのである。このような胎動の意味づけの変化は、まさに、出産に向けて、親としての発達のプロセスといえるだろう。

ところで、妊婦は、胎動という身体的感覚を「赤ちゃん」の動きと意味づけられるようになったのは、なぜだろう。医師から告げられた出産予定日を逆算しながら、いわゆる心の準備を行っているのだろうか。もちろん、妊婦にとって出産予定日は、強く意識されるものであり、胎児の意味づけに影響を与えるだろう。岡本ら(2003)においても、妊娠後期に、出産を目前に胎児を外の世界に措定するような語りもみられた。しかし、胎動そのものの変化なくしては、妊婦の胎児への意味づけの変化もないのではないだろうか。

そこで本研究では、妊婦が胎動をどのような感覚としてとらえているか。また、妊娠期を通して、胎動そのものの変化に対して、妊婦がどのような感受性を示すのかを検討する。妊婦が胎動そのものをどのように感じているかの指標として、胎動日記において用いられた胎動を表現するオノマトペに着目する。オノマトペとは、動物の鳴き声や人間の声を模写してつくられた擬声語、自然界の物音を真似てつくられた擬音語、および、事物の状態・動作・痛みの感覚・人間の心理状態などを象徴的に表した擬態語の総称である(田守,2002)。本研究における胎動日記から例を挙げると、「ものすごく強くドンドン!と蹴ってきた(20週)」の「ドンドン」や、「ごろんとお腹のなかででんぐり返しをして

いる(35週)の「ごろん」のように、胎動そのものを象徴的に擬態した表現がオノマトペである。オノマトペは、簡潔な形式でありながら、物事を写実的にありありと細かく、主観的感覚を感情込めて言い表すことができるという特徴を持っている(青木, 2003)。妊婦は、胎動を感じたとき、それをどのような感覚として受け止め、どのようなオノマトペを使って日記に記したのだろうか。日記において妊婦が用いるオノマトペの変化を、胎動の感覚の変化として捉えられないだろうか。本研究では、胎動を表現するオノマトペを形態的側面から整理し、その週齢変化を検討する。また、岡本ら(2003)では、妊婦が胎動から、胎児の身体の部位(「足」や「手」など)、胎児の内的状態(「よろこんでいる」など)、胎児の性格、胎児の反応(「〇〇に反応して蹴った」など)などを想起し、胎児のイメージを確立するプロセスを示したが、今回はさらに、胎動の感覚が、このような胎児への意味づけの変化とどのように関連するかも検討したい。

## 【方法】

**胎動日記協力者** 東京近郊に在住する初産妊婦 38 名。妊婦の年齢は、出産時点で平均 30.16 歳(25-39 歳)であった。このうち、出産時まで骨盤位(逆子)だったのは 7 名、また、生まれた子どもは、男児 20 名、女児 18 名であった、第一子が 36 名、第二子が 2 名であった。母親の最終学歴は、専門学校卒 4 名、高校卒 6 名、短大卒 10 名、大学・大学院卒 18 名であった。妊娠期中毒症や切迫流産、切迫早産などのトラブルがあったのは 5 名であった。協力者は、妊娠・出産を目的とした母親学級において募集を行い、それに応じたもの、および、研究者の知り合いや協力者の紹介などで募った。

**倫理的配慮** 倫理的配慮として、協力者には、研究の目的、内容、プライバシーの保護や厳重なデータ管理について、また、研究への参加は協力者の自由意思に基づくものであり、理由に関わらず研究協力の中断ができることを説明した。その上で、承諾を得られた妊婦に胎動日誌を依頼した。

**胎動日記の構成** 胎動日記は胎動 1 回分について、自由記述形式で“胎動について”、“胎動が生じた状況”、および“その胎動に対して”の 3 つの領域に記録するものである。また、胎動日記には、記録日および時間、妊娠週齢を記入する欄をもうけた。

**手続き** 上記の妊婦に胎動日記の記載を依頼した。どの胎動について記録するかは、協力者に任せることとした。これは、1 日に胎動を感じる回数が多くそのうち 1 回を指定することが困難であることと、妊婦の胎動への主観的な思いを積極的にとらえるためには胎動の選定も協力者に任せることがよいだろうと判断したことによる。ただし、協力者には 1 日 1 回程度を目安に記録するよう教示した。協力者 38 名から収集された日記は 1032 で、1 名あたり平均 27.16 (range ; 1-145) の胎動日記を記したことになる。日記の開始週は、平均 29.95 週 (range ; 16-37) で、終了週は平均 37.13 週 (range ; 19-40) であった。

**分析単位** 胎動日記は 3 つの領域から構成されるが、分析においてはこの 3 領域をとくに区別せず胎動 1 回分の記録を分析単位とした。

**期間** 1997 年 5 月～2005 年 6 月

**分析** 得られた 1032 の胎動日記をもとに、妊婦が感じる胎動の感覚の変化を検討する。胎動感覚の変化を表すものとして、本研究では、妊婦が胎動日記において、胎動の感覚を表現するために用いたオノマトペに着目する。どのような種類のオノマトペが用いられているかについて検討する。さらに、胎動を表現するオノマトペと、胎児への意味づけに関わる語りが、妊娠週齢とともに変化するかどうかを検討する。

分析 1 では、1032 のすべての胎動日記を、Table 1 の「胎動を表現するオノマトペ」17 カテゴリについてコーディングし、妊娠期間を通して、妊婦が胎動の感覚をどのようなオノマトペを用いて表現しているかを検討する。具体的には、胎動を表すオノマトペの第一音がどのような音か、清音・濁音・半濁音の別、語基のモーラ数、語基の変形や反復はどうかについて割合を求めた。

分析 2 では、胎動を表すオノマトペと胎児への意味づけとの関連をみるため、分析 1 の 17 カテゴリへのコーディン

次に、Table 1.の「胎児への意味づけ」8カテゴリへのコーディングを加えた25カテゴリについて、2週齢ごとに集計し、双対尺度法を用いて検討した（SPSS ver.12）。

Table 1. 胎動を表現するオノマトペのカテゴリー

カテゴリ		定義	例	
胎動を表現するオノマトペ	第一音	カ行	カ行・ガ行の音から始まるオノマトペ	「クルツと」「ゴリゴリ」など
		タ行	タ行・ダ行の音から始まるオノマトペ	「ツーツと」「ドンドン」など
		ハ行	ハ・バ・パ行の音から始まるオノマトペ	「ヒュルル」「バタバタ」など
		マ行	マ行に属する音から始まるオノマトペ	「モニョモニョ」など
		清音	第一音が清音	「くねくね」「モコモコ」など
		濁音	第一音が濁音	「グイグイ」「ポコポコ」など
		半濁音	第一音が半濁音	「ピクツ」「ポコポコ」など
	語基の種類	1モーラ	語基が1モーラ	「ムムム」「ピューツと」など
		2モーラ	語基が2モーラ	「グリツグリツ」「モソモソ」など
	変形の種類	語基のみ	語基のみのオノマトペ	「グルグル」「ぐにゅ」など
		長音	語基に長音が付加されたオノマトペ	「ぐにゅー」「ぐー」など
		撥音	語基に撥音が付加されたオノマトペ	「グルングルン」「コロン」など
		促音	語基に促音が付加されたオノマトペ	「グルツと」「ヒクツヒクツ」など
		り	語基に「り」が付加されたオノマトペ	「ぐるり」「ピクリ」など
	反復	1回	反復しないオノマトペ	「クルツと」など
		2回	2回反復するオノマトペ	「クルクル」など
		3回以上	3回以上の反復をするオノマトペ	「クルクルクルクル」など
胎児への意味づけ	胎児の身体の部位	手	胎児の手という表現	「(赤ちゃんの)手」
		足	胎児の足という表現	「(赤ちゃんの)足」
		人間以外	胎児を人間以外で表現	「モグラ」「虫」など
	胎児の内的状態		胎児の気持ちや思考など内的状態の表現	「(赤ちゃんが)喜んでいる」「いやがっている」など
	胎児の発話		胎児の発話としての表現	「(そんなことじゃダメだぞー)と赤ちゃんに叱られた」など
	胎児の性格		胎児の性格についての表現	「あばれんぼう」「くいしんぼ」など
	胎児応答	母への応答	胎児が母親に反応したという表現	「声をかけたら返事をしたみたいこ…」など
		他への応答	胎児が母親以外のものに反応したという表現	「主人(父)がおなかをさすったら…」など

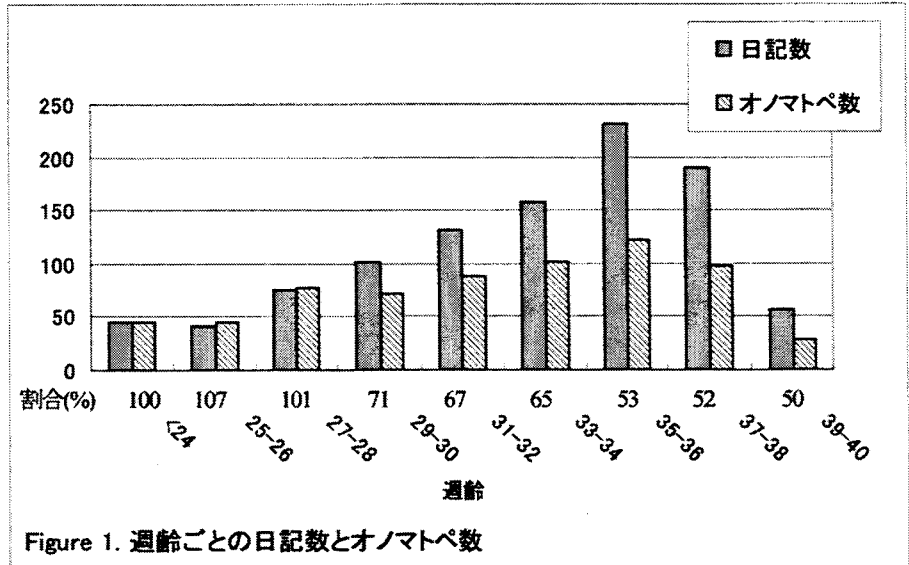
なお、本研究で用いたカテゴリのうち、「胎動を表現するオノマトペ」17カテゴリは、田守・スコウラップ（1999）および田守（2002）のオノマトペの分類を参考に、音韻形態にもとづいて作成した。日本語オノマトペの音韻形態は、1モーラおよび2モーラの語基をもつものに大別できる。モーラとは、音韻論上の単位で、一般的には、1モーラは1つの子音と1つの母音からなる。第一音がどのような音であるか、また、清音・濁音・半濁音のいずれであるかによって、オノマトペのニュアンスが異なってくる。さらに、これらの語基に、促音、撥音、長音、あるいは、「り」を伴って変形形としてのオノマトペや、反復形として用いることでも、ニュアンスが異なってくる。このような知見を考慮して、作成したものである。一方、Table 1.の「胎児への意味づけ」8カテゴリは、岡本ら（2003）において、特徴的で、かつ解釈可能であったカテゴリのみを抽出した。具体的には、胎児の身体の部位（「足」や「手」など）、胎児の内的状態（「よろこんでいる」など）、胎児の性格、胎児の反応（「〇〇に反応して蹴った」など）である。



## 【結果】

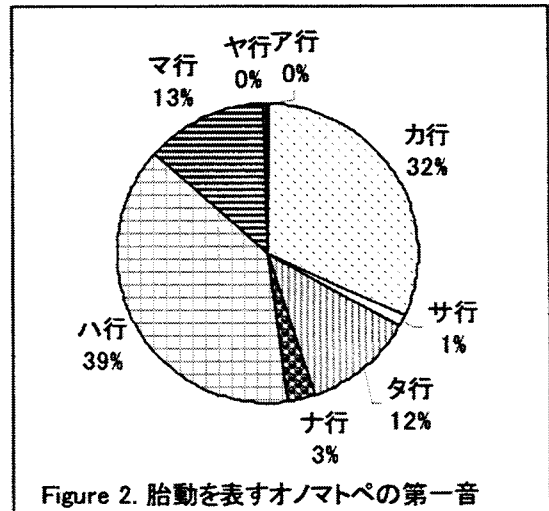
### 分析1

**胎動を表現するオノマトペの概要** 1032の胎動日記において、妊婦が用いた胎動を表現するオノマトペの総頻度は、687であった。妊娠週齢の浅い時期には、ほとんどすべての日記でオノマトペが用いられており、1回の日記において2種類以上のオノマトペが用いられることもあった。週齢が進むにつれ、オノマトペの使用が減り、出産直前には総日記数に対するオノマトペ使用の割合が、約50%となった (Figure 1)。



次に、胎動を表現するオノマトペについて、第一音、語基、変形、および、反復について妊

娠期間を通しての特徴を検討した。第一音については、ハ行（「ぼんぼん」「ポコポコ」など）やカ行（「グルグル」「コロ」など）が多く用いられた (Figure 2)。一方で、32種類の音を使い分けていたことがわかった (Figure 3)。これらの多様なオノマトペのなかには、「グルグル」や「ポコポコ」のように慣習的なオノマトペの他に、「ビューッ (26週)」、「ぎくぎく (30週)」、「デロン (33週)」「ポワ〜ンポワ〜ン (33週)」「ウネウネ (35週)」「クックッ (36週)」「キュウキュウ (38週)」など、妊婦が創造したと思われる臨時のオノマトペも多くみられた。妊婦が胎動をさまざまな音で表現していたことや、現実の音や動作（本研究の場合、胎動の感覚）をできるだけありのままに近い形で表そうとする臨時のオノマトペ (田守, 2002) の使用は、妊婦が胎動の相違に対しそれだけ敏感であった（さらに言うなら、敏感であろうとした）ことの現れではないだろうか。



濁音（「グルングルン」「ポコポコ」など）の使用が多いことも特徴的であった (Figure 4)。日本語オノマトペにおいて、清音に対し濁音の使用（たとえば、「コロコロ」に対して「ゴロゴロ」）は、関わっている音や物が大きいこと、関わっている動作が活発であり、強い力が加えられていることを表すとされている (田守, 2002)。妊婦が、胎動の感覚の大きさや活発さ、力強さに注目しやすいことを表しているのかもしれない。

語基の反復については、連続した繰り返しの音や動作 語基のモーラ数については、1モーラ（「ドドド」など）18.89%、2モーラ（「グルグル」など）81.11%であった。そもそも、日本語オノマトペにおいて1モーラを語基とするものは希である (田守ら, 1999) ので、そのためであると考えられる。

語基の反復については、反復しないオノマトペが 27%、2回または3回以上の反復で表現されたものが、73%であった (Figure 5)。オノマトペの反復は、関わる音や動作の連続や繰り返しの表すものとされている (田守, 2002) ので、妊婦が感じた胎動について単発的であったか、連続的であったかを表したものと考えられる。

語基の変形については、胎動を表すオノマトペにも、「ゴロゴロ」などの、語基のみ以外に、「ゴーロゴーロ」のような長音化、「ゴロンゴロン」のような撥音化、「ゴロツゴロツ」のような促音化、「ゴロリゴロリ」のような「り」の付加がみられた。妊娠期間を通しての割合は、Figure 6.の通りであるが、「共鳴」を表す撥音化と「瞬時性」を表す促音化が特徴的であったといえる。

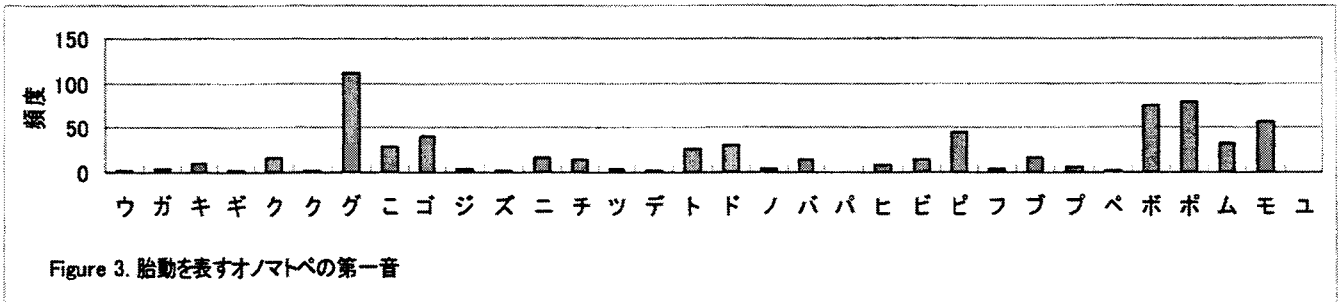


Figure 3. 胎動を表すオノマトペの第一音

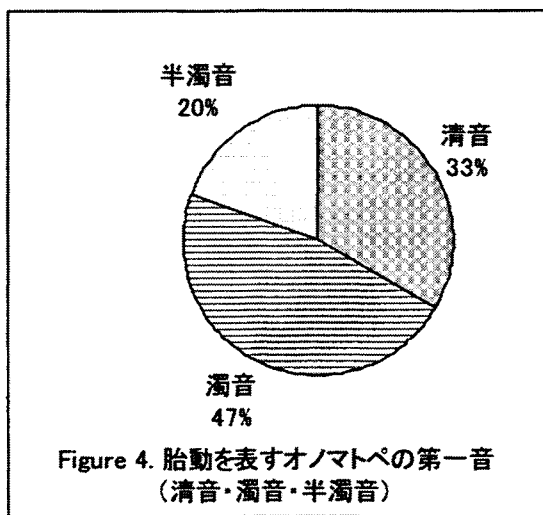


Figure 4. 胎動を表すオノマトペの第一音 (清音・濁音・半濁音)

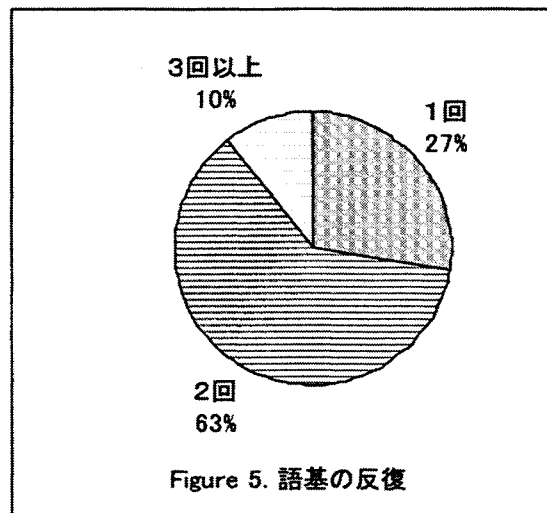


Figure 5. 語基の反復

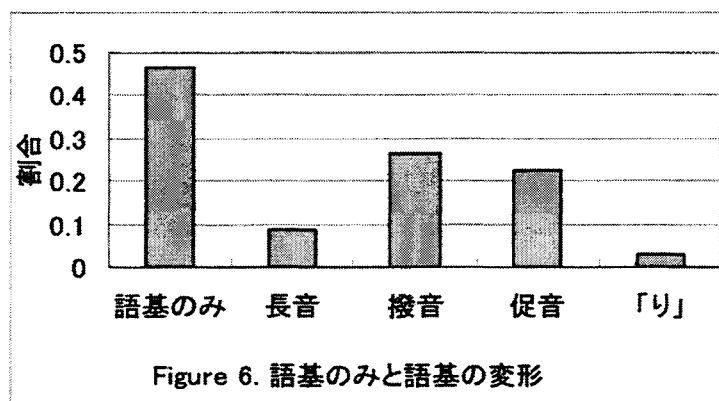


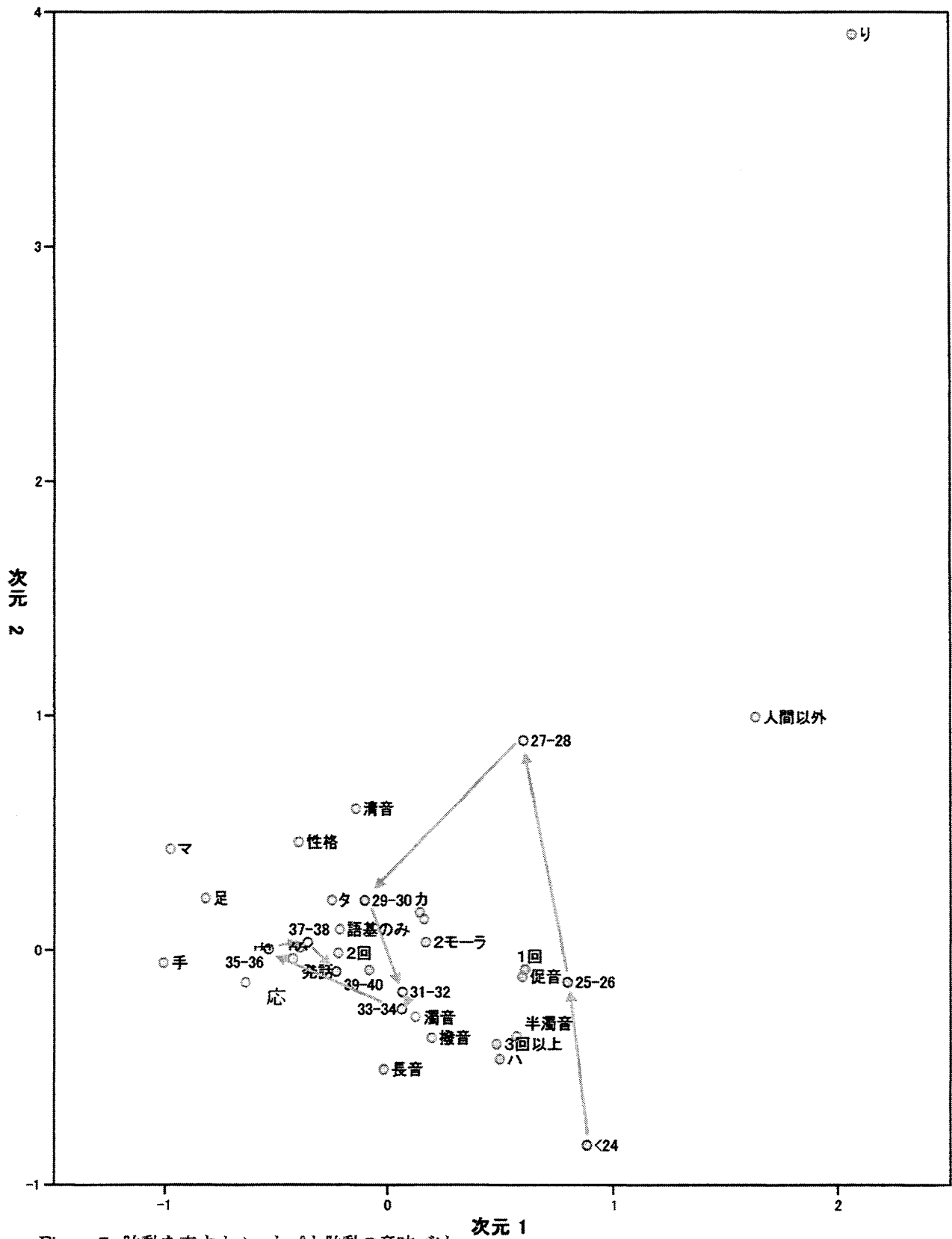
Figure 6. 語基のみと語基の変形

## 分析 2

### 胎動を表現するオノマトペの週齢変化

Table 1.における胎動を表すオノマトペに関する 17 カテゴリと、胎動への意味づけに関する 8 カテゴリについてコーディングしたものを、2 週齢ごとにまとめ、25 カテゴリ (17 カテゴリ+8 カテゴリ) × 9 期間のマトリックスを作成し、双対尺度法を用いた (SPSS ver.12)。得られた結果を図化し、行列カテゴリを同時付置したものが Figure 7.である。

まず、オノマトペについて、語基の変形である「り」の布置が、次元 1 においても次元 2 においても、大きくはずれ



値となっている。ローデータを確認したところ、「り」を付加したオノマトペは頻度が全体的に低いものの、27-28週に増加するという特徴があった。27-28週の布置が、大きく次元2上、正方向へ偏っているのは、このカテゴリに起因

しているものと考えられる。

次に、週齢の変化をみるために、図上に矢印を示した。矢印の向きが変わる時点を変化点と捉えると、～24週→25-26週→27-28週が次元2正方向への変化、29-30週→31-32週→33-34週が次元2負方向への変化、および、35-36週→37-38週→39-40週は互いに近く布置という、3つの時期に分けて考えることができるだろう。それぞれ、第一期、第二期、および、第三期とする。

第一期から第二期、第三期と、次元1上で正から負方向へ移行している。この週齢変化に沿って胎動のオノマトペに関するカテゴリをみると、第一音については「ハ行」→「カ行」・「タ行」→「マ行」と変化、および、「半濁音」→「濁音」・「清音」と変化（濁音と清音は次元2上で変化がみられるが）している。変形の種類については、「促音」→「撥音」・「長音」と変化する。反復については、「1回」「3回以上」→「2回」と変化する。

以上をまとめると、まず、週齢の浅い第一期（～28週）には、他の時期に比べて、ハ行の半濁音の音で促音化した単発またはしばらく連続するオノマトペが特徴的であったことがわかる。これに該当する胎動を表すオノマトペを、日記から例を挙げると、「ピクッ（16週）」「ポンッ（20週）」「ペコッ（26週）」、あるいは、「ポッコポッコポッコ（24週）」、「ピクッピクッピクッ（26週）」などがある。いずれのオノマトペも、小さく弱い動きや何か小さく沸いてくるような感覚を表すものといえるだろう。

つぎに、第二期（29～34週）については、他の時期に比べて、カ行またはタ行で、濁音または清音、語基のみまたは撥音化や長音化したオノマトペが特徴的であった。これに該当する胎動を表すオノマトペを、日記から例を挙げると、「ドカドカ（29週）」、「グリングリン（30週）」、「グイグイ（31週）」、「ギューギュー（31週）」、「グニュグニュ（32週）」、「チクチク（32週）」、「グルグル（32週）」、「クニョ～ンクニョ～ン（33週）」、「コリコリ（33週）」などがある。第一期に比べ、押される感覚や回転の動きを表したオノマトペが用いられ、動きに個性が帯びたといえるだろう。

第三期（35～40週）については、マ行の音が胎動の感覚を表すために用いられている。日記から例を挙げると、「モゾモゾ（35週）」、「ムニユムニユ（36週）」、「モコモコ（36週）」、「モニョモニョ（36週）」、「ムズムズ（38週）」などがある。緩慢な動きや、ものが盛り上がったたりうごめいたりする様子を表すオノマトペが用いられている。お腹のなかで、胎児が大きくなり、動ける範囲が小さくなった状態での動きといえるだろう。

**胎動の意味づけとの関連** ここまで、第一期から第三期までの、胎動を表すオノマトペの特徴をみてきた。これらの胎動感覚の変化は、妊婦の胎児への意味づけとどのように関連するだろうか。

まず、胎児の身体の部位については、次元1正方向に大きく偏って、「モグラ」や「虫」を表す「人間以外」が布置し、負方向に「足」と「手」が布置している。次元1の正方向は、週齢の浅い時期の胎動オノマトペが布置していた。胎動が小さく弱い動きや何か沸いてくるような感覚として感じられる時期には、妊婦は胎動を赤ちゃんと意味づけられず、「人間以外」と意味づけていることがわかる。

「胎児の内的状態」、「胎児の発話」、「胎児の性格」については、いずれも次元1負方向に偏っている。妊娠週齢を重ねながら、胎児の人らしい特徴を意味づけられるようになるのだろう。「胎児の応答」については、第二期の周辺に「母への応答」が布置し、第三期周辺に「他への応答」が布置している。第一期に比べて、胎動の感覚が個性を帯び、明確に感じられるようになると、妊婦はそれをまずは、自分への応答と意味づけ、さらに、緩慢な動きの感覚から胎児が大きくなっていることを感じると、出産を意識してか、胎児を外の世界へ意味づけるようになる（詳細な解釈については岡本ら(2003)を参照）。

また、妊娠期を通して、第一期は胎動のオノマトペが多様性を帯び、第三期に向けて、オノマトペの多様性より、胎児への意味づけの多様性が増す。妊婦は、胎動を感じ始めたころには胎動の感じ方の変化に敏感で、いろいろな表現のオノマトペを用いていたが、徐々に、胎動の感覚より胎児そのものへと関心が移り、胎児の身体や内的状態についてさまざまな意味づけを行うように変化したのだろう。

## 【考察】

本研究では、妊婦が胎動をどのような感覚としてとらえているか。また、妊娠期を通して、胎動そのものの変化に対して、妊婦がどのような感受性を示すのかを検討した。妊婦が胎動そのものをどのように感じているかの指標として、胎動日記において用いられた胎動を表現するオノマトペに着目し、オノマトペの第一音や清音・濁音の違い、語基の変形や反復などを吟味した。さらに、オノマトペとして表現された胎動の感覚と、胎児への意味づけの関連も検討した。

得られた1032の胎動日記を分析した結果、妊娠期には、実にさまざまなオノマトペが用いられていることがわかった。オノマトペに用いる音が豊富であり、語基の変形だけでなく、臨時のオノマトペの使用も認められた。また、胎動を表すオノマトペと胎児への意味づけとの関連について週齢変化を検討した結果、3つの時期に整理することができ、さらに、第一期（～28週）は胎動のオノマトペが多様性を帯び、第三期（35～40週）に向けて、オノマトペの多様性より、胎児への意味づけの多様性が増すように変化することを見いだした。

妊婦が胎動日記において用いた胎動を表現するオノマトペが多様性に富んでいたのはなぜだろうか。胎動とは、多くの人にとって人生の一時期しか経験することがないものであり、胎動の感覚について語られる機会も限られている。したがって、胎動を表現しようとするとき、語彙としてある程度定着したオノマトペが数多くあったとは考えにくい。にもかかわらず、妊婦は多様なオノマトペを用いていた。これは、胎動への感受性の表れといえないだろうか。慣習的なオノマトペだけでなく、臨時のオノマトペも多く用いられていたことから、自分自身の腹部の感覚に意識を集中させ、できるだけ忠実に感覚を言語化しようとしたものと考えられる。臨時のオノマトペは、細やかな弁別性を求めて用いられる。既存の表現にはまりきれない感覚を、細かに弁別して、その動きを余すところなく感じ取ろうとする、妊婦の心理の表れといえるだろう。胎動日記においても「不思議な感覚」といった表現が複数の妊婦から見られた。オノマトペを創作しつつも、まだ表しきれない感覚なのかもしれない。妊娠期間、胎児が見えるわけでも、抱けるわけでもない。その分だけ、妊婦はより感覚をとぎすませて、胎動を積極的に感じ取ろうとしていたのだろう。妊婦の胎動への積極性の結果として、まだ見ることのできない胎児の大きさや動きの変化にも敏感であり、妊娠期を通して、胎動を表すオノマトペが変化したと考えられる。そして、胎動への感性から胎児への意味づけも変化したのではないだろうか。

つまり、胎動は、対人関係の基盤としての身体接触であるといえるだろう。妊娠期という我が子についての情報が限られている時期に、妊婦は、胎動を感じ、その胎動に意識を集中させながら、胎動を生じさせている胎児について想像をふくらませるのではないだろうか。そして、そのきっかけを作っているのは、胎児自身である。胎児が自分の身体を動かすことが、結果的に、妊婦に胎児の命の存在を伝えることとなっているのである。胎動は、胎児がただ動くということに意味があるのではない。胎児の動きに、妊婦が応じること、また、妊婦の声かけや妊婦の体勢の変化、外の音に胎児が反応して動くことといった原初的なやりとりを媒介しているものといえるだろう。

本研究では、胎動を表現するオノマトペについて、量的な分析に終始し、ひとりの妊婦がどのようにオノマトペを変化させるかなど質的な側面には言及できなかった。今後は、このような視点からも分析を進めていきたい。

## 【引用文献】

- 青木昭六 2003 日英語表現比較：宮沢賢治の作品に見られる小野目とペの英訳文に基づいて 愛知学院大学人間文化研究所紀要, 18, 402-348.
- 蘭香代子 1989 母親モラトリアムの時代—21世紀女性におくる Co-セルフの世界 北大路書房
- Condon, J.T. & Corkindale, C. 1997 The correlates of antenatal attachment in pregnant women *British Journal of Medical Psychology*, 70, 359-372
- Condon, J.T. 1985 The Parental-Foetal Relationship—a Comparison of Male and Female Expectant Parents *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology*, 24, 313-320.

- 上妻志郎・岡井崇・水野正彦 (1983). 超音波断層法による胎児行動の解析. *周産期医学*,13,1897-1900.
- 間崎和男・平川舜 (1998). 胎動が激しいがへその緒が巻いてしまわないでしょうか. *周産期医学*,28,186-188.
- 川井尚・大橋真理子・野尻恵・恒次鉄也・庄司順一 1990 母親の子どもへの結びつきに関する縦断的研究—妊娠期から幼児初期まで— 発達の心理学と医学,1(1),pp.99-109.
- 川井尚・庄司順一・恒次鉄也・二木武 1983 妊婦と胎児の結びつき—SCT・PKSによる妊娠期の母子関係の研究— *周産期医学*,13,2141-2146.
- 木島優子 2007 妊娠期における母親の子ども表象とその発達の規定因及び帰結に関する文献展望 京都大学大学院教育研究科紀要, 53, 299-312.
- Lumley, J.M. 1982 Attitudes to the fetus among primigravidae *Australian Paediatric Journal*.
- 三澤寿美・片桐千鶴・小松良子・藤澤洋子 2004 母性発達課題に関する研究 (第2報) —妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちに影響を及ぼす要因— *山形保健医療研究*, 7, 9-21.
- 岡本依子・菅野幸恵・根ヶ山光一 2003 胎動に対する語りにもみられる妊娠期の主観的な母子関係母子関係：胎動日記における胎児への意味づけ, *発達心理学研究*,14,64-76.
- 田守育啓 2002 オノマトペ—擬音・擬態語を楽しむ 岩波書店
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ 1999 オノマトペ—形態と意味— くろしお出版

#### 【謝辞】

本研究にあたって、データ収集において、青山学院短期大学講師の菅野幸恵さん、松山東雲短期大学講師の青木弥生さん、神戸大学大学院の川田暁子さん、東京都立大学大学院の亀井美弥子さん、川田学さん、青森中央短期大学講師の高橋千枝さんに、感謝申し上げます。また、分析にあたって、東京都立大学大学院の東海林麗香さんにもお手伝いいただきました。最後に、お腹の赤ちゃんを心待ちに胎動日記を書き続けてくださったお母様方に心よりお礼申し上げますとともに、お子さま方の健やかなご成長をお祈り申し上げます。

#### 【英文表題・要約】

Fetal movement as physical touch between fetus and mother : Analysis of onomatopoeia which pregnant women used to express their baby's movement.

Yoriko OKAMOTO (Shohoku Collage)

How sense does a pregnant woman have at fetal movement? The present study examined how pregnant women (N=38) describe fetal movement in order to consider women's perceptions of and relationships with their fetuses. Especially, it focused on how onomatopoeia they use to express their sense at fetal movement. Participants kept a pregnancy diary about fetal movement. Analysis of the 1032 diary entries found out that pregnant women used very different kinds of idiomatic onomatopoeia, and also produced temporary onomatopoeia. Further, three periods (e.g., before 28<sup>th</sup> week, 29<sup>th</sup> – 34<sup>th</sup> week, and 35<sup>th</sup> – 40<sup>th</sup> week), each of which pregnant women have different sense. Finally, this paper discussed the meaning of the fetal movement as touch between fetus and mother.

【key words】 Fetal movement. Parental development. Mother-fetus touch. Maternal diary. Onomatopoeia.

# ベビーマッサージにおける 親子間のかかわりの発達的研究

篠沢 薫（早稲田大学大学院人間科学研究

科）

## 【目的】

ベビーマッサージとは、乳児へのマッサージのことで、身体接触による親子のふれあいを通じて絆を深めることを目的とするものである。ベビーマッサージは、この5年ほどの間に、現代社会の育児状況を反映し、一般家庭にも認知されるようになってきた。しかしながら、臨床場面で重要になると考えられる家庭での実践の実態や乳児の行動や反応といった側面については、詳細に検討した研究はほとんどみられない。先行研究の多くが、効果を検討するため数値化し、実験室的場面や比較的短期間における調査に偏重しているのが現状である。そこで、本研究では、ベビーマッサージ場面における親子間のかかわりの変容プロセスを発達的に明らかにする。特に、乳児の行動（ベビーマッサージ場面での乳児の快・不快反応や乳児の能動性）や親子間の調整の様相といった側面に焦点化し、発達的に検討する。

## 【方法】

**対象：**調査開始時に2ヵ月齢の乳児（低月齢群：YY/NY/TA）およびその母親3組と8ヵ月齢の乳児（高月齢群：MF/OK）およびその母親2組。母親の平均年齢は34.2歳。

**調査期間：**2005年1月～10月の10ヵ月間。ただし高月齢群に関しては8月までの8ヵ月間。

**調査方法：**月1回の割合で家庭訪問し、日常場面を20分ほど、ベビーマッサージ場面を15分ほど、デジタルビデオカメラにて撮影した。撮影終了後、母親にベビーマッサージ中の乳児の行動やベビーマッサージの感想、乳児の発達検査項目等を含むインタビューを行った。

**分析：**【1】ベビーマッサージ場面全体を行動分析し、乳児の快・不快反応を評定した。その後、構成要素（接触内容および乳児の反応形態とそれらの発達的变化）を検討した。【2】乳児の能動性が表れている場面を抽出し、質的に検討した。【3】ベビーマッサージ場面全体としての行動の変容過程を、ベビーマッサージの時間的変化・乳児の変化・親の変化の3点から分析した。

## 【結果および考察】

### 【1】ベビーマッサージ場面における乳児の快・不快反応

ベビーマッサージをどのように感じているのか、ということの指標として、快・不快反応場面を検討する。まず、ベビーマッサージ場面における乳児の快・不快反応がどのような身体部位で生起しているのかを知るために、身体部位別にその場面数を分析した。その後、快・不快反応場面について、身体部位の1要因で分散分析を行った結果、快反応時の身体部位において有意な差が認められた。さらに、この結果に対して、TukeyのHSD検定を行ったところ、5%水準で下肢・背中・臀部・上肢・腹側面連結部において、他の身体部位とは有意な差が認められた。これより、ベビーマッサージ場面において、快反応は下肢・背中・上肢・臀部・腹側面連結部において、より多く生起することが示された。

また、不快反応時に関しては、有意差は認められず、各人の分散が大きかったことから、個人差が大きく影響することが示唆された。個人差の大きな身体部位としては、頭部と上肢があった。頭部については、YYは10ヵ月間を通して不快反応を示し続けていたが、頭部への接触のあったほかの乳児ではまったく不快反応はみられなかった。上肢については、NY以外の4人では不快反応がみられることもあったが、NYは一度もみられなかった。

次に、乳児の快不快反応に基づく特定の身体部位（下肢・背中・臀部・上肢・腹側面連結部）の個々の特徴を述べる。まず、下肢についてだが、接触内容が多彩であることが大きな特徴である。また、乳児の快反応量が多くなることも多く、それはどの発達段階にもいえることである。接触内容としては、「遊び」「にぎる」「両手のひらですりあわせる」の反応量が乳児の発達にともない増えることも特徴的である。乳児の反応は「ひねりを加えてなでる」や「なでる」といった接触内容には沈静化するようなものが多いが、「遊び」に対しては活性化するようなものが多く、多様である。また、下肢で出現する反応の種類は、臀部と似ている。

臀部についてだが、この身体部位は「なでる」ことを誘発するようである。また、臀部の快反応量は、④歩行のための協応動作以降減り、不快反応量は⑤歩行の完成期で増えている（Figure 1）。これは、乳児がちょうど一人歩きができるようになる時期であり、よりいっそう外界への興味が増す時期でもある。この時期

の乳児にとっては、「臀部へのなで」は気持ちが沈静化というよりはせつかく動かせるようになった下肢の付け根を拘束されるというような位置づけなのではないだろうか。臀部の接触内容は、全運動発達段階を通じて「なでる」のみである。これは、乳児にとって「なでる」ということが沈静化の意味を成しているのではないだろうか。その根拠をさぐるため、下肢への接触内容とその反応を再度検討する。下肢も接触時の乳児の反応としては、臀部と同じ静的なものが多かったが、運動発達段階別に見ると、次第に動的なものが増えていた。これは、下肢の接触内容の変化に伴うものである。臀部の沈静化するような接触は乳児の発達とともに不要となっていくようである。

だが、同じ沈静化といっても、その色合いの濃い背中の場合は、全運動発達段階を通じて快反応が出ており、その量が発達と共に（特に歩行のための協応動作の時期に）増えていくのである（Figure 1）。すなわち、発達と共に快反応量が減り不快反応がみられるようになる臀部とまったく逆のことが起こっているわけである。接触内容としては、この身体部位のみでみられる「リズムカルにたたく」という手技があった。この手技は背中への接触全体（快反応が出ている）の7割弱を占めており、特に乳児が受動的な身体統制の時期にある頃には快反応はすべてこの手技でみられた。そして、発達と共に「なでる」という手技も乳児にとって快と感じられてくるわけだが、この「なでる」というのは、たいてい「リズムカルにたたく」という手技の後に引き続き行われているものであり、「リズムカルにたたく」の快感情の余韻であるという考え方もできる。また、このときの乳児の反応は、ベビーマッサージの心地よさにひたるような沈静化状態となる。この状態は、運動発達が進んで動きたい盛りのときにもみられ、他の身体部位ではほとんどみられない背中特有の現象である。

つぎに上肢だが、この身体部位の特徴は全運動発達段階を通じて快反応も不快反応も同時に引き起こすことである。上肢における快反応というのは、情動を活性化するようなものが多い。「発生・体動・表情」というカテゴリーはすなわち乳児が笑ってはしゃいでいることだが、その反応が4割近くもできるのは、上肢と腹側面連結部のみである。この共通点としては「遊び」が多いことである。上肢において「遊び」は7割も占める。その一方で「なでる」「にぎる」「親指で圧をかける」といった接触内容では不快反応を引き起こしている。不快反応については個人差が大きいので、一般化はできないが、このような圧をかけるような接触を上肢に行うと、乳児によっては不快反応を引き起こす可能性があるといえるだろう。このように上肢という身体部位は「遊び」は誘発するが、圧をかけるようないわゆるマッサージの手技らしい手技は回避する傾向にある身体部位であることがわかった。

最後に、腹側面連結部を考察する。この身体部位カテゴリーは他のものと異なり、各身体部位が連結した形である。目立って快反応量が多いわけではないが、全運動発達段階を通じて、1割ほど割合を占めている（Figure 1）。

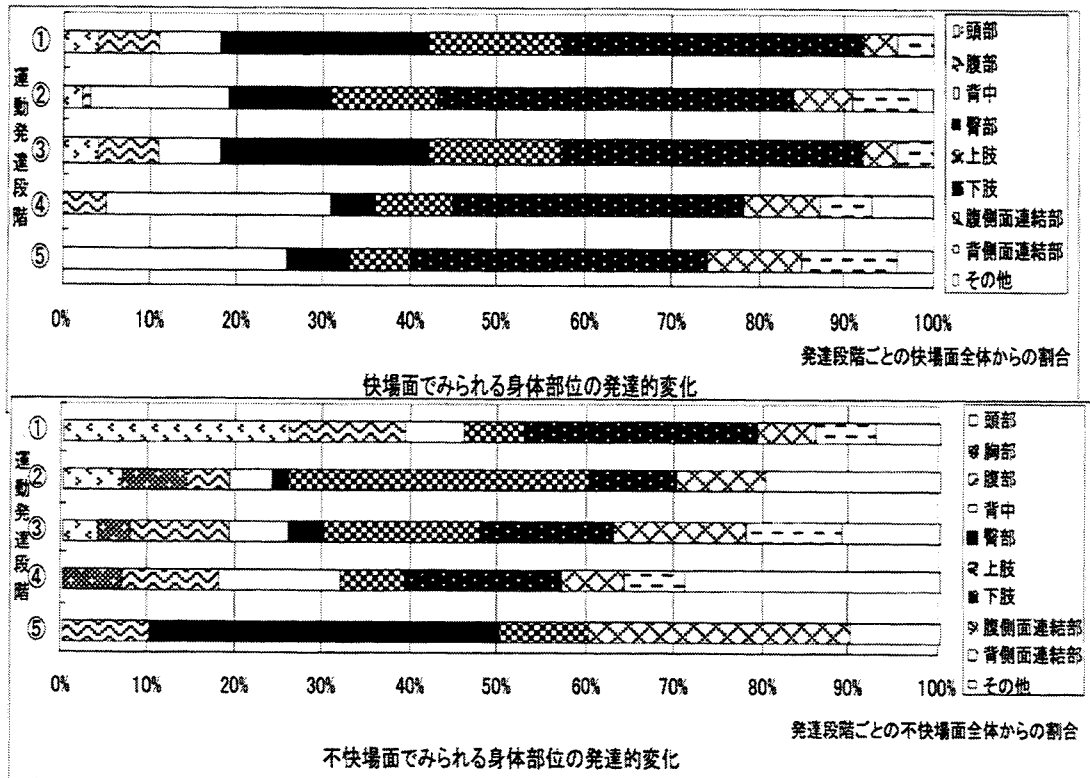


Figure 1 快・不快場面でみられる身体部位の発達の变化



この身体部位における乳児の快反応の様相は上肢とよく似ている。すなわち、上肢ほどではないが「遊び」が多い。ここでの遊びは、くすぐり遊びなど、母子が見つめあって行うものが多く、腹側面を親に向けるという姿勢がアフォードしているともいえるだろう。

最後に、【1】のまとめとして、時期的に2つに大別された、快反応量の多い身体部位の発達的变化を述べる。まず、受動的な身体統制—移動の努力の時期は、下肢や臀部を「なでる」といったゆっくりとしたもの（インターバル平均：1.1秒）が乳児に好まれる。上肢を使う「遊び」（多様な行動様式のためインターバルの算出はなし）に関しても寝かせた状態で行う「ちーちーばー」といったものが主流である。それが、歩行のための協応動作—歩行の完成の時期には、下肢をくすぐったりして「遊ぶ」や「両手のひらですり合わせる」、また背中を「リズムカルにたたく」といったテンポのはやいもの（インターバル平均：0.2秒・ただし「遊び」に関しては前述の理由により算出してない）が乳児に好まれるようになる。このように、マッサージ形態が calming なものから playful なものへと乳児の嗜好性が変化していることが示唆された。

## 【2】ベビーマッサージ場面における乳児の能動性

ベビーマッサージ場面でどのような能動性を乳児が示しているのかということの指標として、乳児の能動的なかわりをみることができた。ここでいう能動性とは、乳児が行動を起こすことによって場面が展開していくような状況をさす。したがって、親の行為に対する乳児の行動というのは「反応」と捉えるため、ここでの分析対象とはならない。分析の結果、大きく2つのパターンに分けられる16事例を抽出することができた。ひとつは「体を開放的な状態にして、母の手技を待つ」といった静的行動パターンで、8事例あった。もうひとつは「ある部位をさわる・ある行動を先取りする等、具体的に自分の要望を示す」といった動的行動パターンで、8事例あった。この2パターンの生起時期の特徴として、乳児の能動性の表現の移行期は積極的な身体統制であることが示唆された。また、この2パターンではそれぞれのベビーマッサージ場面内の生起時期が異なることがわかった。そのことを示したものが Figure 2 である。静的行動パターンはベビーマッサージ開始時に集中して生起している。このとき乳児は主に受動的な身体統制の時期にある。うまく意思を身体で表現できないため、ベビーマッサージがいったん始まると受動的な姿勢になっていることを示すものである。もちろん反応的な側面（例：自分の嫌いな接触をされたら泣く）のように意思表示しないことはないが、全体を通してみれば、親に主導権があると考えてよいだろう。動的行動パターンはベビーマッサージ時間全体を通して生起している。これは、どの部分で能動性がみられるかはそのときの乳児次第であるということを示している。動的な能動性の方がより乳児の意思を表現できていることはたしかであるが、静的な能動性は生後3ヵ月では確実にみられるのだから、わが子の様子をよくみてみると、いろいろなサインを見つけることができ、より楽しく交流できるだろう。

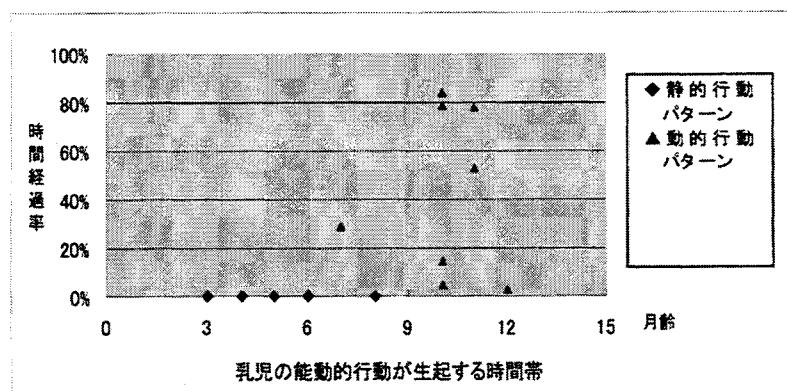


Figure 2 乳児の能動的行動が生起する時間帯

## 【3】親子間で調整されていくベビーマッサージ

ベビーマッサージ場面における親子の調整プロセスを明らかにするために、ベビーマッサージ場面全体を縦断的に分析した。その結果、ベビーマッサージというものは、乳児の運動発達段階に適合する形に変容していくものであることがわかった。具体的には、ベビーマッサージの時間的変化として、ベビーマッサージ時間とその頻度の減少がみられた。乳児の変化では乳児のベビーマッサージを受ける姿勢の多様化が、親の変化ではベビーマッサージに対する心境がポジティブなものだけでなくネガティブなものまでより広い範囲で変化することが、確認された。

### 【総合考察】

ベビーマッサージの親子間のかかわりの変容プロセス：ベビーマッサージ場面における親子間のかかわりの変容プロセスを示したのが、以下の Figure 3 である。結果【1】～【3】を総括すると、変容プロセスは、ケア的要素の強い基本期・各親子のオリジナルなものへと多様化する発展期・終了を迎える収束期の3つに分けられた。

まず、基本期だが、後半は少し様相が変わってくる前兆がみられるが、この基本期の大半は、いわゆるベビーマッサージらしいやりとりが展開される。乳児の運動発達段階が積極的身体統制以前で、まだ移動能力を獲得していないということも影響して、能動性の表現が静的であったり、姿勢も寝かせる体勢であり、乳児は受動的であるといえる。マッサージ形態はゆっくりとした calming なものが乳児に好まれる。親のペースで進められ、また乳児の快反応も多いことから、親の心境もポジティブなものとなる。ただ、この時期の後半になると、乳児が自分で動けるようになってくるので、(このことは、能動性の表現形態が移行期になることから示唆されるが)、快反応量が下がり始め、親の心境は「やりたいのに、今までのようにできない」と両価的な気持ちになる。

次の発展期は、各親子のオリジナルなものへと多様化していく段階である。この時期と前の基本期の境界あたりには、頻度減少ということがみられる。たしかに量的には減るが、質的には、次の遊びへの変容の前段階としての多様化があるわけで、基本的なベビーマッサージが発展するといえる。この時期は、乳児がハイハイなど、移動能力を獲得し始めるときに乳児の快反応量が減少し、不快反応量がそれを越えることもあるなど、ネガティブな要素が入る。また、親もそれを見て「あせる」というようにネガティブな心境となる。姿勢は乳児の好みによるようになり、乳児自身が主導するようになる。また、落ち着きのない乳児に親は困惑する。だが、次第に親が乳児に合わせるようになる。たとえば、ベビーマッサージを遊び道具のようにするなど、今までとは異なる位置づけとして調整する。マッサージ自体もテンポのよい playful なものが好まれる。そして、親の心境も「動くから大変だけど、逆に貴重で気持ちがいい・楽しい」というように、基本期とは異なるポジティブな気持ちとなる。

最後の収束期では、調整された各親子のベビーマッサージが終了する。また、マッサージに「遊び」の要素が多分に含まれている点がこの時期に特徴的である。この時期、乳児の快反応量はふたたび増加していく。これは今述べたようなことが要因といえるだろう。乳児の能動的表現も明確であり、姿勢も乳児が主導していくため、親は乳児の好みを把握しやすい。しかしながら、この時期には、親は乳児の外界への関心の高さや発達の状況から自分たちにとってのベビーマッサージの収束を察し、一步距離を置いたような心理となる。そして、日常生活の一部としては終了にいたる。その後もときおりなされることもあるが、その頃にはもう親も「点検のようなものですね」といった感じで、ニュートラルな心境となっている。

以上が変容プロセスである。

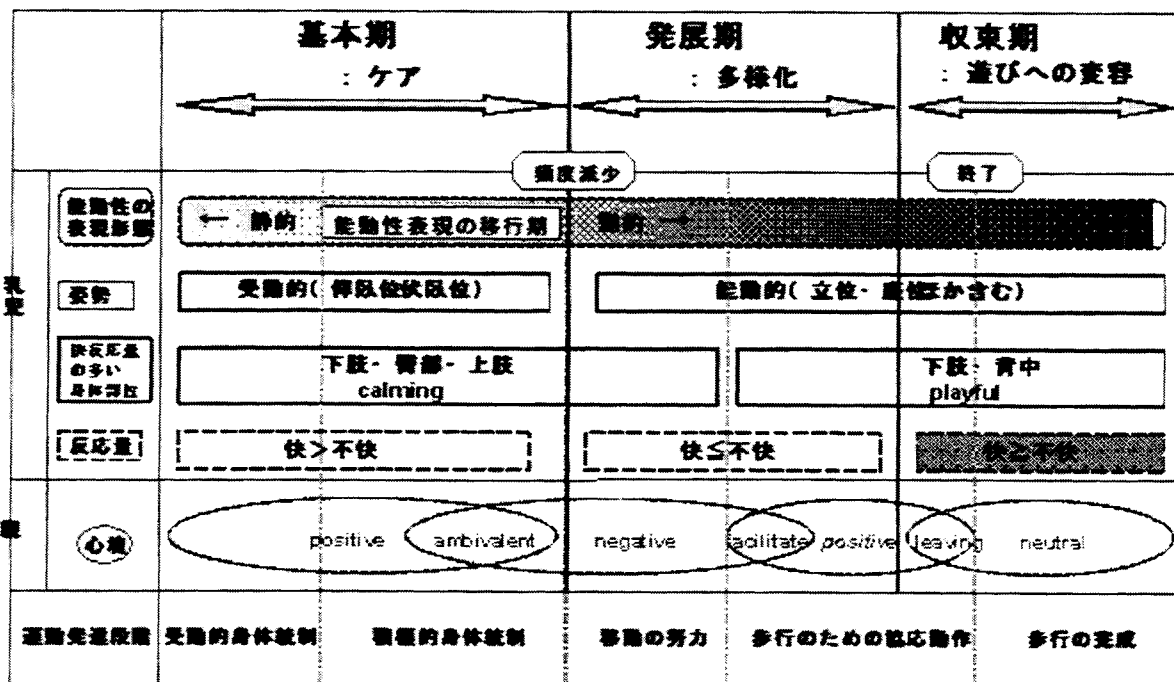


Figure3 ベビーマッサージにおける親子間のかかわりの変容プロセス

まとめ：本研究では、1. ベビーマッサージ場面における親子間のかかわりの変容プロセス、2. 家庭実践の

実態が明らかとなった。1 については、ベビーマッサージは、親子の相互作用により自己組織化する形で多様化し、収束していくことが示された。2 については、多くのマニュアルや先行研究はポジティブな面ばかりが強調されているが、ベビーマッサージにはネガティブな面も包括されているという実態が明らかとなった。むしろ、親子にとっては、ネガティブな部分が動因となり、親子間のかかわりを調整する力が引き出されることが示されたことから、この親子の相互作用こそがベビーマッサージを親子間の豊かなかかわりたらしめる所以となっていると考えられる。

### 【主要文献】

Field, T. (2001). *Touch*. Cambridge : MIT Press.

藤田 愛. (2002). 産後 3 ヶ月までの母親における気分：唾液中コルチゾールの変化からみたベビーマッサージの効果. *安田生命社会事業団研究助成論文集*, 38, 221-227

布施和枝. (2001). NICU でのタッチケア・ホールディング：聖路加国際病院の場合. *助産婦雑誌*, 55(2), 19-22.

橋本武夫. (2001). 総論：タッチケアへの流れとその理解. *助産婦雑誌*, 55(2), 9-13.

堀内 勤. (2003). デベロプメンタルケアの歴史的背景. *周産期医学*, 33(7), 807-811.

飯野孝一・遠藤宏子・丹澤真理子・前川喜平. (2001). ローリスク児に対するタッチケア. *小児保健研究*, 6(2), 177-178.

池本桂子. (2001). 神経科学からみたタッチ. *助産婦雑誌*, 55(3), 26-29

井村真澄. (2003). タッチケア. *周産期医学*, 33(7), 861-867.

岩村吉晃・井村真澄. (2001). 生理学からみたタッチ. *助産婦雑誌*, 55(3), 19-25.

中村(西川)晶子・根ヶ山光一. (2001). 「タッチケア」研究(1)予報. 日本発達心理学会第 13 回大会発表論文集, 103

根ヶ山光一. (2002). 発達行動学の視座：<個>の自立発達の人間科学的探究. 東京：金子書房.

根ヶ山光一・山口 創. (2005). 母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達. *小児保健研究*, 64(3), 451-460.

### 【謝辞】

本研究は筆者の修士論文であり、本研究を行うにあたり、ご指導いただきました根ヶ山光一教授に深く感謝いたします。また、修論全文の添削をしていただきました河原紀子氏・要旨の添削をしていただきました西條剛央氏・統計の指導をしていただきました清水武氏に深く感謝いたします。評定協力を引き受けてくださった山形悦子氏・赤ちゃんマッサージの世界に入るきっかけを作ってくくださった西川晶子氏に深く感謝いたします。さまざまな側面で大変お世話になりました根ヶ山ゼミの皆様にも深く感謝いたします。最後に、長期にわたる本研究の調査に協力してくださった 5 家庭のみなさま、及び、助産師のたつのゆりこ先生に深く感謝いたします。皆様のお力添えのおかげで、本研究は成り立つことができました。本当にありがとうございました。

# Development of interaction between parents and infants in baby massage

Kaoru SHINOZAWA

(Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

Baby massage is an interaction between parents and infants by bodily contact. It is made to build up an affectional bond between them. The purpose of this study is to describe developmental changes of the interaction, particularly focusing on the infants' behaviors showing pleasantness or unpleasantness and an attunement between parents and infants.

The results indicate that the process consists of three stages: the initial stage, the developing stage and the final stage. In the initial stage, typical interactions of the baby massage were seen. The infants were quiet and passive in a lying posture, and the parents played an active role. However, in the end of the stage, infants became active in their movement and were not passive any more. In the developing stage, the interaction became diversified. The parents were puzzled by their restless infant with locomotion. Then the parents began to use the massage as a tool to play with the infants. In the final stage, the massage became to contain many components of play. The infants became more and more curious about the surrounding environment, and the massage was stopped as a way of everyday interaction between the parents and the infants. In conclusion, the baby massage was divergent with various interactions between parents and infants including playful ones.

# 母子における抱きの発達と 抱きにくさに関する研究(1) — 双対尺度法を用いて —

○山形悦子 根ヶ山光一 山口創 京野尚子 西川晶子

(早稲田大学) (早稲田大学) (聖徳大学) (大妻女子短大) (戸板女子短大)

## 問題と目的

昨今、母子関係において肌と肌の触れ合いの重要性が再認識されてきており、抱きはそのもっとも基本的な姿といえる。つまりヒトのように抱いて授乳をする種においては、「抱く」ということは授乳につながり、生命の保持に関わる基本的な行為であるはずである。さらに初期の発達段階では、言語を介さないコミュニケーションの場となり得るなど、欠くことのできない母子関係の出発点のひとつと考えられる。

しかしながら近年、わが子でありながら「抱きにくさ」を感じる母親が多くなっているといわれている。そして「抱き」をめぐる違和感については、保育の現場から発せられた声や報告が少なくない。その中では、「抱き」に「違和感」を感じる母親や養育者が増加傾向にあることも憂慮されている(土谷, 2000; 京野, 2001)。その背景のひとつとしては、現代の育児をしにくい社会環境が考えられる。つまり、子育ては楽しい反面、専業主婦は閉塞感を感じ、有職者は育児と仕事の両立の板挟みとなる。このように、現代の育児環境では両価的な感情に苦しむ母親の姿が浮き彫りとなっている(たとえば菅原, 1999)。しかし「抱きにくさ」を扱う研究は母親や養育者といったおとなからの一方向的な見地でなされたものがみられ(たとえば汐見, 2000)、乳幼児からの働きかけの詳細な検討がほとんどされていない。「抱き」は母親からの一方向のみの行為ではなく、乳幼児も「抱き」の成立・維持に貢献しており、その行動は乳幼児の姿勢発達に伴い増加するという報告がある(西條・根ヶ山, 2001)。

そこで本研究はまず、母子の「抱き」発達を行動面から検証するところから始める。「抱き」を行動学的に扱った数少ない研究の中から西條・根ヶ山(2001)を参考に、抱きが母親の行動だけではなく、乳幼児の積極的な行動によって成立する相互作用的な現象であると位置づけ、研究を進める。そして乳幼児の成長に伴う「抱き」の発達と、その変化へ関与している母親の対応の過程を具体的に記述することから明らかにし、検討する必要があると考えた。

さらに、本研究では行動学的見地から分析を進めることから、母親が感じる「抱きにくさ」を検討する前段階といえる、評価者が観察した抱きの「ぎこちなさ」についても調べる。「ぎこちない抱き」の発生を、母親、乳幼児、そして双方向から検証し、それぞれの要因を探ることで円滑な抱きの成立を推測する手がかりのひとつになる可能性があると考えた。

## 方法

### 対象・期間・場所

生後3ヶ月から24ヶ月の乳幼児とその母親(45組)を対象に、それぞれ1回ずつ実験的観察を行った(Table 1)。抱きの発達を観察するという本研究の主旨から、すべて初産の母子に限定した。観察は2004年11月から2006年4月にかけて、神奈川県下3団体、および埼玉県下1団体の子育て支援サークルにおいて、室内で行った。観察にあたり、前もって母親へ研究についてのインフォームドコンセントを得て、協力してもらった。行動の記録に

デジタルビデオカメラを用いた。

Table 1 観察対象児の月齢別人数について

月齢	3. 4	5. 6	7. 8	9. 10	11. 12	13. 14	15. 16	17. 18	19. 20	21. 22	23. 24
人数	8	5	8	2	2	4	2	3	3	2	6

### 手続き

子育て支援サークルでは、通常の遊び時間の中から親子ひと組ずつ実験に参加してもらい、他の母子が遊んでいる同じ室内にて行い、緊張感の軽減に留意した。実験に先立ち、母親へ教示を行い「赤ちゃんを床に置いて、いったん離れてください、次に赤ちゃんを抱き上げ、2周歩いてください。最後にもう一度、赤ちゃんを床に置いてください」と伝えた。ビデオ撮影は、乳幼児を抱き、立って教示を受け始める母親の場面から開始し、最後に乳幼児を床に置いたところで終了した。動きの死角を防げること、「抱き」を360°撮影できること、また「歩行中」の「抱き」を観察できることから、母親には2周歩いてもらった。

さらに、課題行動観察の後、母親へは質問紙調査を行った。質問紙ではデモグラフィック要因として母親の年齢、乳幼児の年齢、性別、お座り・はいはいなどの運動発達状態など、また抱っこをするときの母親の感情や乳幼児の反応、抱きについての母親の考え方などを尋ねた（詳細は研究「その2」）。

### 分析

行動の記録に用いられたビデオテープから、チェックシート法による行動分析を行った。そのために課題行動を5つの行動場面に分け、チェックリストを作成した。その行動場面とは「実験開始前」、「乳幼児を降ろすとき」、「抱き上げるとき」、「2周歩くとき」、「最後に抱き上げるとき」である。さらに「実験開始前」の抱きを「立位」、「2周歩くとき」を「歩行中」の抱きとしてカテゴリー化した。

各行動場面では母子それぞれの「手の位置」、母親の「抱き替え」、乳幼児の「脚の抱え込み」（西條、根ヶ山、2001）、「体軸の向き」などを行動評定した。母親の「手の位置」では、「両手尻の下」、「片手背部+片手尻の下（背部+尻の下）」、「片手後頭部+片手尻の下（後頭部+尻の下）」、「片手脇の下+片手尻の下（脇の下+尻の下）」、「片手脚部+片手尻の下（脚部+尻の下）」、そして「片手胸部+片手下腹部」や「片手抱っこ」などは「その他」としてコード化した（Fig. 1）。「両手接触」は両の掌が母親の身体の一部に触れている・握っている、母親または自分の衣服に触れている・握っている、「片手接触」は片方の掌が母親または自分の衣服や体の一部に触れている・握っており、片方の掌はグーの形に握っている、開いて何も触れていない、だらりとしている、「両手非接触」は両手をグーの形に握っている、何も触れていない、だらりとしているとして分析した。

さらに母子のそれぞれに見られる「抱きのぎこちなさ」を検討した。母親の手首の使い方が不自然、肩に力が入っている、抱いた乳幼児の重心が不自然、抱くときのもたつきやぎこちなさ、また乳幼児が抱かれていることを嫌がっている、降りようとする、よく動くなどを「抱きのぎこちなさ」と評定した。またその評定の妥当性を確かめるために一致率を産出した。行動学の研究者1名に依頼し、撮影された全員の観察行動、全場面の映像について検討してもらった。その結果、一致率は90.0%となり当研究者の評価を妥当として採用した。

## 結 果

本研究では、抱きを一方からの働きかけだけではなく、母親と子どもの双方向から構成される“相互行為”と位置づけて（西條・根ヶ山、2001）、その発達を観察、検討した。



Figure 1 抱いている母親の手の位置

## 1. 母親の抱きの発達について

### 母親の手の位置

まず、抱きの発達を捉える指標のひとつとして母親の手の位置について検証した。Fig.2の①は撮影開始時の抱きでの母親の手の位置であり、自然場面での「立位」の抱きと考えた。②、③は抱き替えがあったもののみ記述し、②は1回目の抱き替え、③は2回目の抱き替えを全体に対するの百分率で示した。これで見ると「立位」の7、8ヶ月まで、母親は多様な手の使い方により乳幼児を抱いているのが分かる。しかし9ヶ月以降、概ね「両手尻の下」というひとつの抱き方に集約し、他の抱き方が出現しても合わせて2種類である。また抱き替えが行われるのは7、8ヶ月までで、それ以降は出現していない。それに比し、歩行中の「抱き」は高月齢においても母親の手の位置は多くのパターンが観察され、抱き替えも発生していた。

## 2. 乳幼児の抱きの発達について

### (1) 乳幼児の手の使い方

次に乳幼児の手の使い方を月齢毎にみてる(Fig.3)。生後7、8ヶ月まで、乳幼児は「両手非接触」、「両手接触」、「片手接触」とさまざまな手の使い方をしてるが、9ヶ月以降は「両手接触」または「片手接触」というように、常時手が接触していることがわかった。手がフリーの状態、何も触れていない、あるいは握っている「両手非接触」は7、8ヶ月以前の低月齢期だけに観察された。9ヶ月以降、11、12ヶ月、15、16ヶ月をピークとして片手のみの使用が顕著だが、それ以後、「両手接触」が増加している。そして、7、8ヶ月をターニングポイントとして、

それ以降「抱き」における手の使い方が集約してゆく様相は、母親の手の位置と同じ傾向がみられた。

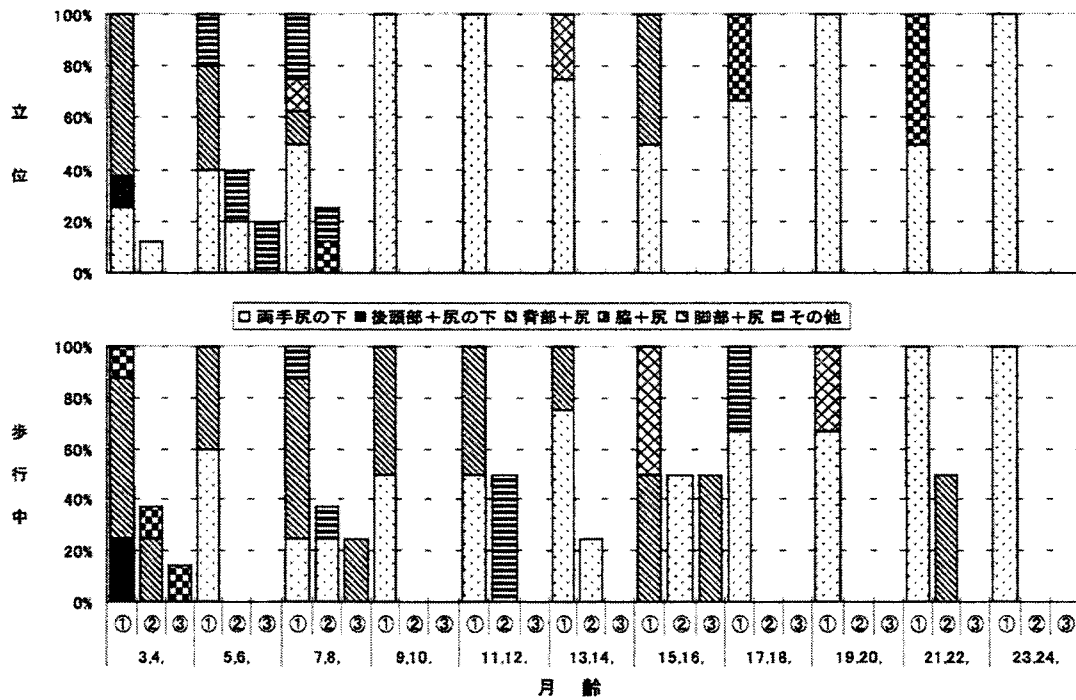


Figure 2 月齢別母親の抱き方(手の位置)

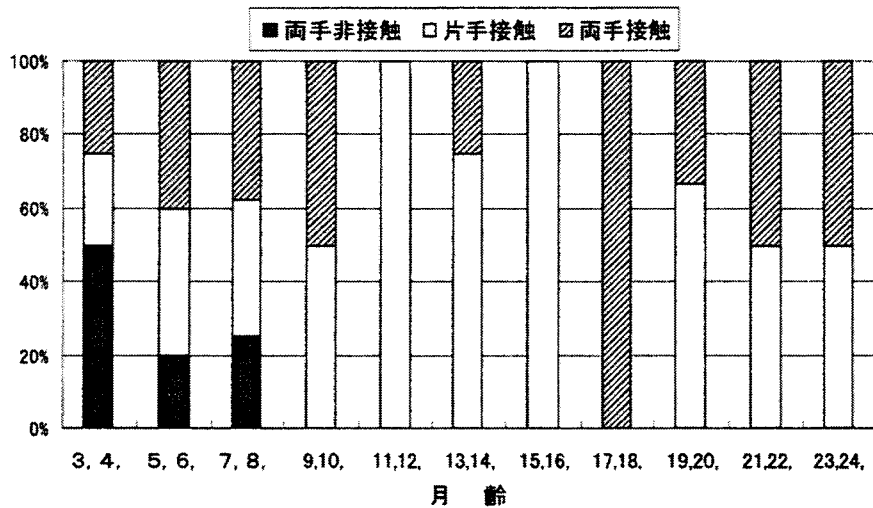


Figure 3 乳幼児の手の接触

(2) 「脚による抱え込み」について

同様に抱かれている乳幼児の「脚による抱え込み」を、月齢に沿って検証する(Fig. 4)。「脚による抱え込み」は5, 6ヶ月から出現し、それ以降段階的に増加している。そして1歳をピークに減少し、2歳近くで再び上昇している。これは「座り段階において急激に上昇し、その後直立段階において減少し、さらに安定歩行段階において再び上昇する」と示している西條・根ヶ山(2001)の研究を支持する結果が得られた。



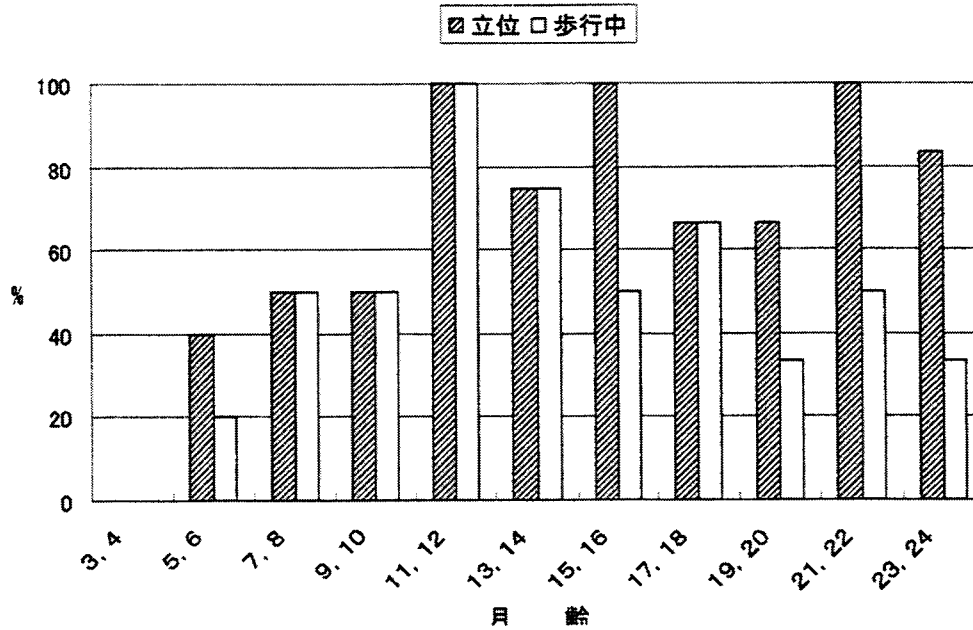


Figure 4 乳幼児の脚の抱え込み行動

### 3. 「抱きのぎこちなさ」について

最後に母子双方の「抱きのぎこちなさ」を発達の時期毎に検証する(Fig.5)。母親のみに「ぎこちない」抱きと評価されたものは、3～6ヶ月の低月齢では30.8%に及んでいるが、7～12ヶ月にはその3分の1以下の8.3%と急激に減少し、13ヶ月以降では観察されなかった。乳幼児のみに「ぎこちない」と評価された抱きは13ヶ月以降に観察された。母子双方に「ぎこちなさ」が認められた抱きは、3～6ヶ月、7～12ヶ月、13～24ヶ月の各時期にみられた。また全体から見た「ぎこちない」抱きの発生率は月齢が上がる毎に減少していた。

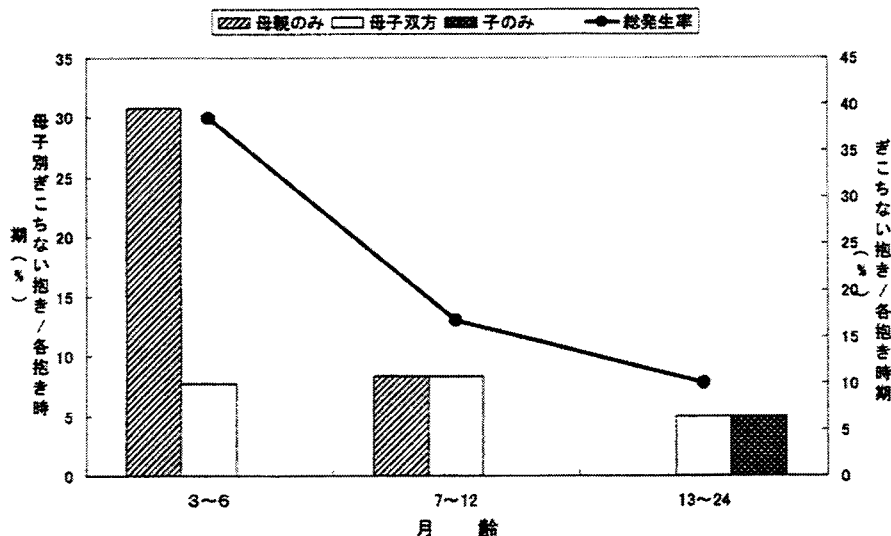


Figure 5 「ぎこちない」と評定された母子それぞれの抱きと発生率

### 4. 双対尺度法を用いた検証

次に多変量解析を用いてデータを解析した。ここでは「抱き」が母親のみにより行われる一方的な行為ではなく、母子双方向からのはたらきかけで維持、成立していると考えていることから、母子それぞれの抱きの発達を同時布置す

ることが可能な双対尺度法を採用し、その関連性を検討した。双対尺度法は質的データを数量化し(西里, 1982), データ行列の各セルについて、それぞれに最適化された重みを同時に求めることにより、二次元空間へ母子の発達をそれぞれ表示し、月齢に伴う発達の推移や関係を捉えることができるものである(大隈, 1989; 井上, 1993)。

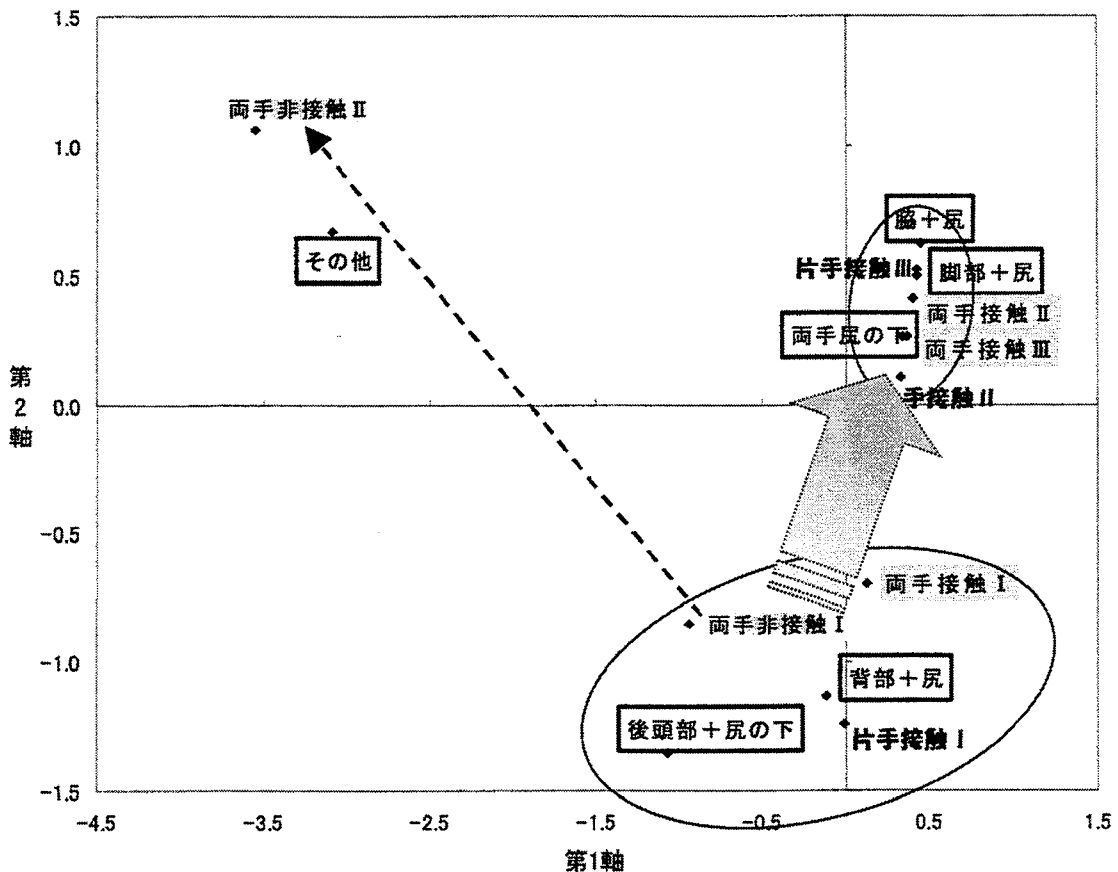
(1) 立位での母子の「抱き」の発達—手の位置—

Fig.6 では母親が立位で乳幼児を抱いているときの手の位置と、月齢による各時期で抱かれている乳幼児の手の使い方を、双対尺度法の分析によりひとつの平面上に布置した。このときの説明率は2軸を合わせ全分散の 82.4%であった。乳幼児のデータは月齢別に、3~6ヶ月をI期, 7~12ヶ月をII期, 13~24ヶ月をIII期と区分した。

乳幼児それぞれI期の両手接触, 片手接触, 両手非接触の近くに、母親の手の位置, 「後頭部+尻の下」, 「背部+尻の下」がプロットされていることから、これらは同じカテゴリーに含まれると考えられる。つまり「後頭部+尻の下」「背部+尻の下」という母親の手の使い方は、低月齢期の乳幼児を抱くときにみられるといえる。そして乳幼児II期の片手接触と両手接触, III期の片手接触と両手接触は、母親の手の位置, 「脇の下+尻の下」, 「脚部+尻の下」, 「両手尻の下」とともに近くに布置されている。それらは、I期の乳幼児にみられた手の使い方と母親の手の位置—「後頭部+尻の下」, 「背部+尻の下」—が大きな楕円の中に収まっているのに対して、II期からIII期のカテゴリーは図示された小さな円に収まるほどの範囲で、より原点の近くにプロットされている。双対尺度法は原点を重心とした重み付けをすることから、より原点に近いカテゴリーほど度数のバラツキが小さいといえる。従って、II期からIII期の抱きの型は低月齢(I期)の抱きに比べ、抱きが特定のパターンに集約され、安定した抱きが出現しているといえよう。

さらに、生後6ヶ月以下では半数にみられた乳幼児の両手非接触は、7ヶ月以降では外れ値となっている。そして、母親の抱き方の中で、「前向き抱っこ」や「片手抱っこ」を示す「その他」も外れ値である。これら「外れ値」はII期の7~12ヶ月にのみ出現し、他の時期では確認されなかった。

Figure 6 母子の抱きの発達 同時布置



(2) 乳幼児の抱きにおける姿勢の発達—体軸の向きと脚の抱え込み—

最後に乳幼児の抱きにおける姿勢の発達を、双対尺度法を用いて検証した。Fig. 6では抱かれている乳幼児の様態を、「対面」(母子の姿勢が対面+脚の抱え込みあり)、「体側に斜め」(母親の体側に斜め+脚の抱え込みあり)、「横抱き」(母親の身体に対し横向き抱き+脚の抱え込みあり)、「脚の抱え込み無し」の4つにコード化し(Fig. 7 参照)、その推移を記述した。月齢を表す数字を矢印で追うと、低月齢児は脚の抱え込みをしていない。乳児後期になると脚の抱え込みをしながら対面の姿勢をとっている。さらに、1歳前後以降は脚を抱え込みながら母親の体側に斜め、または横向きの姿勢をとっていることが分かった。

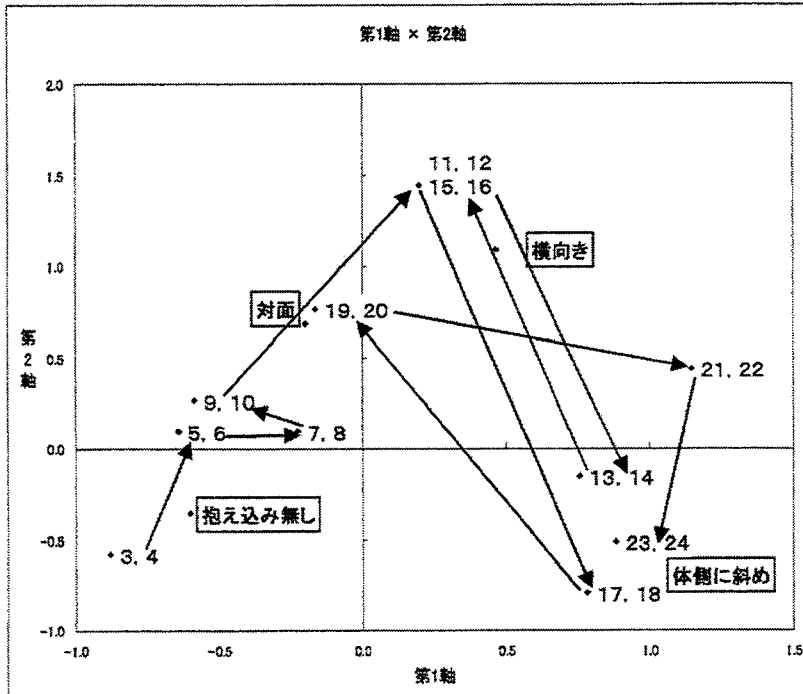


Figure 7 乳幼児の姿勢発達の同時布置



Figure 8 乳幼児の体軸の向きと脚の抱え込み

考 察

最初に、乳幼児を抱いたときの母親の手の位置から、母親の「抱き」の発達について考察する。「立位」の7、8ヶ月まで、母親は多様な手の使い方を呈して乳幼児を抱いているが、9ヶ月以降、概ね「両手尻の下」という形へ集約し、抱き替えも出現していない。それに比し、歩行中では乳幼児が高月齢でも母親の手の位置は多くのパターンが観察され、抱き替えも発生していた。これは身体支持が立位より歩行中は不安定といえ、それに対し母親が多様な抱き方で対応しているものと思われる。

次に、乳幼児の「抱き」の発達について考察する。まず手の使い方をみると、生後7、8ヶ月まで乳幼児は「両手非接触」、「両手接触」、「片手接触」とさまざまな手の使い方をしており、9ヶ月以降は「両手接触」または「片手接触」と、常時手が母親の身体または母親や自分の衣服に接触していることが分かった。また「両手非接触」は7、8ヶ月以前の低月齢期にのみ観察された。9ヶ月以降、11、12ヶ月、15、16ヶ月をピークとして片手のみの使用が顕著だが、それ以後、両手接触が増加している。また、7、8ヶ月をターニングポイントとして、それ以降「抱き」における手の使い方が集約してゆく様相は、母親の抱きにおける手の位置と同様の傾向がみられた。これは身体発達により上体の自立支持が可能となったことで、乳幼児は片手支持のみで抱きを成立させていることがうかがえ、安定した

抱きへの変化が推測される。3～6ヶ月の低月齢期では、母子ともに多様なパターンの抱きを展開しているが、7、8ヶ月を区切りとして集約していることから、母の抱き方は手の位置が「脇+尻の下」、「脚部+尻の下」、「両手尻の下」へ、乳幼児の手も片手または両手が接触しているのが定型である可能性が示唆された。

今回の観察では、例外的な抱きは7～12ヶ月の間にのみ出現していた。乳幼児の行動発達により6ヶ月をターニングポイントとして予測できない行動をするようになる(菅野, 2000), あるいは7ヶ月以降、乳幼児が抱かれながら自分の行動を展開している(松井, 2006)という報告があるように、乳児後期には思いがけない動きをするようである。しかし、7ヶ月以降こどもがごそごそする、降りたがるなど「抱きにくさ」を喚起すると思われる行動が見られたにもかかわらず、抱きのパターンが減少したのは、母親の抱きスキルの向上によるものと思われる。また自発的に動ける乳幼児の行動発達は、抱かれた居心地の悪さを自ら修正している能動的な行動と考えられ、月齢によるこどもの行動発達が抱きの成立に大きく関与し、母親はその多様性に柔軟な対応でこどもを抱いていることが推測される。また、本研究によると母子双方とも9ヶ月以降、限られたパターンに抱きの様態が集約していることから、「上手な抱き」であるとか「納まりの良い抱き」が存在する可能性が示唆された。つまり、乳幼児の様相は両手または片手が母親の身体や衣服に触れており、脚を抱え込みながら体軸は横向き、または母親の体側に対し斜めに向いている。そしてこのとき、母親は両手を乳幼児の尻の下で支える、あるいは片手は尻の下に入れ支えながら他方の手を乳幼児の脇の下に入れる、または脚部を持つというパターンであると考えられる。

さらに視覚の発達により周囲への関心が高まり、母親の身体へ密着するより上体を起こし、片手支持をすることで体軸を母親から離し、乳幼児がより大きな視野を獲得しようとしていることも考えられる。また1歳後半になると、乳幼児の精神的な発達に伴い、実験観察あるいは新奇な他人によるビデオ撮影という通常とは異なる状況を認識した緊張から、母親に寄り添い、母親の身体やそれぞれの衣服に触れるという行動で不安を調整しているという可能性が示唆された。

次に「脚による抱え込み」は5、6ヶ月から出現し、それ以降段階的に増加しているが、1歳をピークに減少し、2歳近くで再び上昇している。脚の抱え込み行動の発達と安定は、乳幼児の上肢のみならず、下肢も同様に発達し抱きを成立させていることが示されているといえる。しかし、本来立位より不安定である歩行中の方が脚の抱え込みが少ないのは、乳幼児が足を使うこと以外の何らかのスキルを使い、バランスを取っているものと推測される。

最後に母子双方の「抱きのぎこちなさ」を発達の時期毎に検証する。母親のみに「ぎこちなさ」と評価された抱きは、3～6ヶ月の低月齢には30.8%あったものが、7～12ヶ月にはその3分の1以下へと急激に減少し、13ヶ月以降では観察されなかった。乳幼児のみに「ぎこちなさ」がみられたのは13ヶ月以降であった。母子双方に「ぎこちなさ」が認められた抱きは、3～6ヶ月、7～12ヶ月、13～24ヶ月の各時期にみられた。また全体から見た「ぎこちなさ」抱きの発生率は月齢により減少していた。これらから乳幼児の月齢が進むに従い、母親は急速に抱きのスキルを獲得している可能性が示唆された。また乳幼児が身体の発達により積極的に動き回る、降りたがるなど抱きに対して反発的に行動しているにもかかわらず、13ヶ月以降母親には「ぎこちなさ」が評価されなかったのは、乳幼児のさまざまな動きに対して母親が多様に対応し、安定の良い体勢に抱きを調整していると思われる。母子双方に見られる「ぎこちなさ」からは、母親の抱きが未熟であることにより抱かれている乳幼児の居心地が悪いのか、あるいは動きすぎるなど乳幼児側に「ぎこちなさ」を誘発させる要因があるのか、いずれにしても母子双方のダイナミックやりとりの中で「抱き」がスムーズな様相へと調整されていることが推測される。

以上、本研究では母子双方の抱きの発達と、抱きのぎこちなさについて論じてきた。乳幼児の身体発達と母親の抱きスキルの向上により、母子が互いに関わり合うことで抱きが安定されることが推測される。そしてその母子における相互作用をさらに発展させ、抱きの成立を容易にし、そのことが「ぎこちなさ」抱きを減少させると考えられる。

## 文 献

- 井上裕光. (1993). 集計データの記述(1): データ記述法としての双対尺度法. 東京都立大学心理学研究, 3, 東京都立大学, 東京, 13-30.
- 川野健二・佐藤達哉・友田貴子. (1998). 短大入学時の環境移行: 気分の原因帰属を手がかりとしたモデル構築の試み. 発達心理学研究, 9 (1), 12-14.
- 京野尚子, (2001) 0, 1歳児をもつ母親と乳幼児にとっての“五感体験の意義について”. 家庭教育研究所紀要, 23, 141-157.
- 松井尚子. (2006), 母子間における「抱き」・「抱かれる」パターンの発達的变化—「抱き」場面における身体間コラボレーションの出現と発達—. 発達心理学第17回大会発表論文集, 670.
- 西條剛央・根ヶ山光一. (2001). 母子の「抱き」における母親の抱き方と乳幼児の「抱かれ行動」の発達—「姿勢」との関連を中心に—. 小児保健研究, 60, 82-90.
- 西里静彦. (1982). 質的データの数量化: 双対尺度法とその応用. 東京: 朝倉書店.
- 大隅 昇. (1989). 統計的データ解析とソフトウェア. 東京: 日本放送出版協会.
- 汐見稔幸, (1999) 乳幼児の「抱き」をめぐる「おかしき」についての調査—保育園の0歳児クラスを対象に 第46回小児保健学会講演集, 202-203.
- 菅野幸恵. (2000). こどもに対する母親の否定的感情と母親になるプロセス 初めてこどもを持つ女性を対象にした生後1年間の縦断的研究から. 家庭教育研究所紀要, 22, 66-75.
- 菅原ますみ, (1999) 子育てをめぐる母親の心理, 東洋・柏木恵子編, 流動する社会と科学1 社会と家族の心理学, ミネルヴァ書房, 47-79.
- 土谷みち子, (2000) 乳幼児の「抱き」をめぐる「おかしき」についてII—母親の育児意識と事例報告— 第47回小児保健学会講演集, 260-261.

(謝辞: この研究を遂行するにあたり, 観察を受け入れて下さった各子育て支援サークルに感謝申し上げます。)

Yamagata, Etsuko(Waseda University), Negayama, Koichi(Waseda University), Yamaguchi, Hajime(Seitoku University), Kyono, Naoko(Otsuna Women' s College) & Nishikawa, Akiko(Toita Women' s College)

The Study of Development and Uncomfortableness of Holding between Mother and Child.

This study investigated the shape of holding between mother and child (N=45) and its development (ages 3-24months). The mothers and children had many variations of shape of holding until age of 7 or 8 months, and they went small after 9 months. This result showed that the physical and behavioral development of children made holding stable. The mothers got skills of holding from experience for comfortableness about holding infant. Not only mothers but also children appeared to adjust to be held in spite of itself. The following factors developed the interaction between mother and infant about holding, and they helped it to be comfortable.

# 母子における抱きと抱きにくさに関する研究

## (2) 母親の抱きに対する意識と抱きにくさに関する質問紙分析

京野尚子 西川晶子 根ヶ山光一 山形悦子 山口創

(大妻女子短大) (戸板女子短大) (早稲田大学) (早稲田大学大学院人間科学研究科) (聖徳大学)

### 1. はじめに

母子関係において昨今、肌と肌の触れ合いの重要性が再認識されてきており、抱きは、その最も基本的な姿である。抱きは、母親が子どもを抱くという一方的な行為ではなく、母子が関与する相互的行為である(西条、根ヶ山 2001)と考えられる。また、近年、抱きにくさを訴える母親の増加(京野 2001)、あるいは、抱きに違和感をもつとされる養育者の増加(土谷 2000)など抱きをめぐる葛藤というものが指摘されている。

母子間の抱きは、単に親和的方向にのみ理解されるべきではなく、子どもの拒否的な行動や母親の抱きにくさといった一般的にはネガティブな現象と合わせて母子間のダイナミックな相互交渉として理解されるべきであろう(根ヶ山 2002)そこで本研究では、母親の抱きにくさについての意識を質問紙により明らかにすると共にその抱きにくさをもたらす要因を検討する。

### 2. 研究方法

#### <調査対象>

神奈川県茅ヶ崎市子育て支援センター、藤沢市子育て支援センター、鎌倉女子大学幼児教室、日立家庭教育研究所幼児教室、三鷹市総合保健センター、久喜市子育てサークルに通う親子3ヶ月から24ヶ月の乳幼児をもつ母親151名を対象とした。

#### <調査方法>

質問紙調査を実施した。(2004年7月～2006年4月)

Q3・母親の感受性について「こどもを抱っこしているとき以下の気持ちが起こることがありますか？」

回答項目

うれしい、うっとうしい、子どもに触れたい、子どもに触れられたくない、子どもがかわいい、疲れる  
安心する、不安だ、気持ちいい、重い 抱っこしにくい 面倒くさい 早くおろしたい

- ・ Q4. 抱っこ時の子どもの行動 「だっこのときのお子さんの行動についてもっともよくあてはまる行動をお応えください」

回答項目

うれしそうにする、身体をびったりつけてくる、身体をそらせる、身体全体でバランスをとっている  
身体の向きを変えたがる すぐ飽きる、子どもが母親の体に手や足をまわす すぐ降りたがる、周りを眺める、母親の顔や髪、衣服をいじる

以上の項目について いつもそうだ、ときどきそうだ、たまにそうだ そうでない、の4件法で母親に尋ねた。

### 3. 分析方法

質問紙に対する4件法を2つに分類して1つを抱きにくさを感じる、すなわち、いつもそうだ、時々そうだ、たまにそつだを(1)とし、そうでない、と回答したものを“抱きにくさを感じない(0)”という2つのカテゴリーに分類した。

分析は、第一時期を6ヶ月以下、第二時期を7ヶ月から12ヶ月、第三時期を13ヶ月から18ヶ月と半年区切りにしてすすめた。

#### <分析手順>

SPSS 12.0を用いて子どもの行動に関する質問項目(Q4)に探索的因子分析(重みなし最小2乗法、バリマックス回転)を行ない、子どもの行動に影響を与えている原因をまず探求した。(表1)次に子どもの行動に関する発達の傾向が見られるかの検討を分散分析でおこない、(図1)さらにTurkey法による多重比較の検討をおこなった。一方で個別の項目レベルでの検討として、母親の子どもへの感受性と子どもの抱きにくさに関する相関関係の検討をおこなった。最後に抱きにくさに関連している要因の検討をロジスティック解析にておこなった。

### 4. 結果

1) 因子分析: 4つの因子が抽出された。因子は、以下の項目から構成されていると考えられる。

因子1; 抱きに不満を表明する行動(身体をそらせる、身体の向きを変えたがる、すぐに飽きる、すぐに降りたがる)

因子2; 抱きに対する母親志向的な行動(うれしそうにする、身体をぴったりつけてくる、子どもが母親の体に手足をまわす、)

因子3; 抱きへのバランス保持行動(身体全体でバランスをとる)

因子4; 抱き以外への対象志向行動(周りをながめる、母親の顔や髪、衣服をいじる)

表1

回転後の因子行列\*

	因子			
	1	2	3	4
うれしそうにする(不明消去)	-.163	.459	.099	.190
身体をぴったりつけてくる(不明消去)	-.108	.492	.110	.034
身体をそらせる(不明消去)	.461	-.126	.007	.201
身体全体でバランスをとっている(不明消去)	.020	.243	.974	.037
身体の向きを変えたがる(不明消去)	.546	-.081	.123	.224
すぐ飽きる(不明消去)	.654	-.074	-.128	-.104
子供が母親の体に手や足を回す(不明消去)	.097	.790	.002	-.033
すぐに降りたがる(不明消去)	.628	.053	.016	-.152
まわりをながめる(不明消去)	.025	-.008	.239	.713
母親の顔や髪、衣服をいじる(不明消去)	.035	.170	-.167	.495

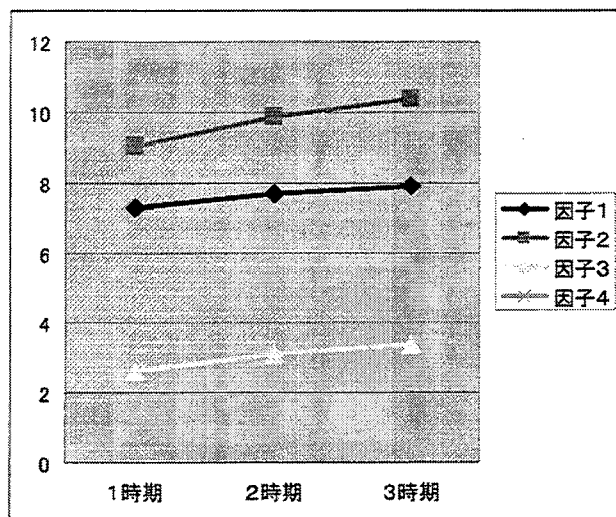
因子抽出法: 重みなし最小2乗法  
 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 5回の反復で回転が収束しました。

## 2) 分散分析：

上記の因子をもとに因子得点を抽出して、月齢ごとの因子得点に関して分散分析をおこない、(図1) 統計的に有意かどうかを判別した。

図1



この結果から因子2 ( $F(2, 72) = 3.24, p = 0.45$ ) と因子3 ( $F(2, 69) = 4.18, p = 0.019$ ) に関しては、時期による差が5%水準で有意といえる結果がでた。しかし、因子1と因子4に関しては、有意差は認められなかった。さらに Turkey 法による多重比較の結果、因子2については、第1時期と第3時期の差が、因子3についても1時期と3時期の差が5%水準で有意であった。

つまり、抱き行動において子どもがうれしそうにする、バランスをとるなどお互いが居心地よくいられるよう母子間の調整が発達的に行われているということである。母子が互いに共生しあうことが時期による発達が右上がりという図表からも伺える。

## 3) 個別の項目レベルとしておこなった母親の子どもへの感受性と子どもの行動についての相関分析：

母親がQ3の中で“子どもを抱きにくいと感じる”項目とQ4の中の“母親が抱くと子どもが反り返る”という項目についての相関分析を3つの時期の区分においておこなった。その結果、第2時期の7ヶ月から12ヶ月にかけて、0.541の正の相関が見られた。また、母親がQ3の“子どもを抱きにくいと感じる”とQ4の“子どもが向きを変えたがる”という項目についても、第2時期において0.422の正の相関が見られた。そのほかの項目については、無相関であった。

この相関分析と(1)の因子分析の中の項目の因子1についていずれもこの第2時期において抱きにくさとの相関が見られた。

このことは、抱きにくさを母親を感じる時期が第2時期、つまり7ヶ月から顕著に現れることを示唆している。次にこのだきにくさがどのような要因により生じているのか検討した。



#### 4) 抱きにくさに関連している要因の検討

先に抽出した子どもの行動について4因子を説明変数とし、“抱きにくさを感じる”(1)“抱きにくさを感じない”(0)を基準変数としたロジスティック回帰分析を行った。(表2)

回帰係数( $\beta$ )を見ると因子1と因子4が高いことがわかる。有意確率からも因子1は、5%水準で有意、因子4は、10%水準で有意という結果がでている。この結果から“抱きにくさ”をオッズ比でみると因子1と因子4がかかわっており、それぞれ5%と10%水準で有意という結果がでている。

つまり、因子1や因子4の得点が高くなれば、母親が抱きにくいと感じる可能性が高くなるといえる。

表2 母親の抱きにくさを基準変数としたロジスティック回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	標準誤差	Wald	有意確率	オッズ比
定数	-3.109	1.678	3.432	0.064	0.045
因子1	0.252	0.097	6.679	0.010	1.286
因子2	-0.059	0.128	0.213	0.644	0.943
因子3	-0.019	0.203	0.009	0.925	0.981
因子4	0.292	0.157	3.439	0.064	1.339

#### 5. 考察

本研究で明らかになったことは、

- ① 子供の側の母親に対する前向き肯定的な行動(因子2, 3)(うれしそうにする、バランスをとるなど)は、発達と関係しているということ
- ② 母親に対する否定的な動き(因子1)あるいはそれていく(diversion 因子4)に関しては、発達と関係なくいつでも現れる可能性があること
- ③ 母親の抱きにくさと子どもが実際に振り返るという関係において正の相関がみられたのが第二時期である7ヶ月であったことである。

以上の分析結果より、抱きに付随する意識や感情は子どものいくつかの行動要素によってもたらされかつ発達的に変化すること、また、因子1と4については、発達時期による変動が見られなかった変数であり、それが抱きにくいという印象とかかわっているということは、どの時期についても因子1と因子4も抱きにくさを引き起こす要因になるということになるのではないかと。

つまり、抱きにくさは、子どもの抱きに対する拒否や周囲への関心の広がりによってもたらされる可能性が示唆された。

ここで③について、なぜ第二時期において正の相関がみられたか検討した。

子どもの行動から因子1及び4という“抱きへの不満を表明する行動”や“抱き以外の対象志向行動”は生後のどの時期にも表れているにもかかわらず母親があえて生後7ヶ月を境に“抱きにくい”という否定的感情をもつという点で正の相関があったということは、子どもの側の能動性がはっきりとしてくる時期でもあり、同様に母親の否定的感受性が呼びさまされるのもこの7ヶ月ということではないだろうか。

母子における抱く、抱かれるパターンの発達的变化について松井、(2006)は、7ヶ月以降の乳児後期になると乳児は抱かれながら自分の行動を展開し、抱き場面に合わせて行動を変えていくことを示唆している。

今回の研究の行動分析その1では、母親の抱きの行動は、7, 8ヶ月を区切りとして9ヶ月以降集約されていくことが明らかになった。この生後9ヶ月の節目を指摘する乳児に関する研究としては、様々な学説がある。(注

1) (Travvarthen&Hubley (1978) Collis &Shaffer (1975) Stern(1985)

一方で、母親は、Winnicott.C.W. (1988) の指摘する原初的没頭によって産後から生後6か月まで、母子がいわば渾然一体の状態にあるといえるが、この7ヶ月を境に乳児の発達にともなって、母子が分離する経験をしていくといえる。

菅野 (2001) によれば、母親が子どもに対してもつ否定的な感情は生後6か月ころから芽生えるというのも、原初的没頭の後に母子が心的に分離して、個々の主体性の違いを感じはじめ、「抱きにくさ」を感じ始める、という。

抱きは、子育てにおける親と子の基本的な行動であるが、抱きがうまくできないと嘆く母親にとって親のスキル不足とだけいきれないのではないか。因子1や因子4がどの時期にも見られるのであれば、こどもの能動性は生後まもなくからすでに発達しはじめているといえるのかもしれない。

そしてそれが顕著にあらわれるのがこの第二時期であるのではないか。

生後7ヶ月は、母子ともに抱きにくさを感じはじめる重要な時期であり、それは、子どもの積極的な抱きへの関与がでてきて、母親の予測しえない動き方をするようになるということ、また、同時に、母親の感受性が高まり子どもへの否定的感情が芽生えることにより、子どもに対して母親の感情が身体を通して伝染していくいわば分離過程の端境期なのかもしれない。

さらに行動分析と総合すると母子の抱きに付随する意識や感情は子どものもつ能動性と母親の抱きのスキルアップにより発達的に変化することが明らかになった。

これは、7ヶ月ごろから、抱きにくいと感じる母親の思いとそれに合わせて抱きを調整しようとする子どもとの抱きへの身体的、精神的な共同作業がはじまっているといえるのではないだろうか。まさに間主観的な抱きへの相互作用がはじまっているのではないかと考える。

そして今後因子1、因子4といういわば子どもの母親への否定的行動、それていく行動が生後どの時期においても見られるということは、子ども自身の抱きへの能動性がそれ以前から生じてきているのかもしれない。そのことについての検討は、今後の課題である。

#### 参考・引用文献；

西條剛央・根ヶ山光一 母子の抱きにおける母親の抱き方と乳幼児の抱かれ行動の発達、小児保健研究 2001, 82-90

京野尚子 0, 1歳児をもつ母親と乳幼児にとっての“五感体験の意義について”. 家庭教育研究所紀要, 2001, 23, 141-157.

土谷みち子 乳幼児の「抱き」をめぐる「おかしき」についてII—母親の育児意識と事例報告— 第47回小児保健学会講演集, 2000, 260-261.

根ヶ山光一 発達行動学の視座 金子書房 2002

松井尚子. 母子間における「抱き」・「抱かれる」パターンの発達の变化—「抱き」場面における身体間コラボレーションの出現と発達—. 発達心理学第17回大会発表論文集, 2006, 670

注1)

Trevvarthen, C. & Hubley Confidence, Confiding and Acts Of Meaning In The First Year 1978

Academic Press New York

Collis & Shaffer Synchronization Of Visual Attention In The Mother-Child Pairs. Journal of Child Psychiatry 16 315-20

菅野幸恵 母親が子どもをイヤになること、発達心理学研究 12 号、1、12-23

Winnicott, D.W. Babies and their Mothers Free Association Books 1988

Stern, D. The Interpersonal World Of The Infant Basic Books, 1985

(謝辞：この研究を遂行するにあたり，観察を受け入れて下さった各子育て支援サークルに感謝申し上げます。)

The study of development and uncomfortableness of holding between mother and child.

Naoko kyouno (Otsuma Womens Junior College) Akiko Nisikawa (Toita Womens College) Koichi Negayama (Waseda University) Etsuko Yamagata (Graduate School Of Human Science, Waseda University) Hajime Yamaguchi (Seitoku University)

The purpose of this study is to investigate the factors when "uncomfortable holding" appears between mother and infant by the questionnaire. The correlation between a sensitivity of feeling of uncomfortable holding and infant's behavior is considered, according to groups classified by developmental periods : 0 to 6 months, 7 to 12 months, 13 to 18 months. The results show as follows; Infant's positive (delightness or keeping good balance with the mother) behavior toward the mother relates with infant's development. On the other hand, negative behavior (warping, rejecting) appears at every period, irrelevant to their development.

Consequently, positive correlation between mother's feeling of uncomfortable holding and infant's warping behavior was found at 7 to 12 months group. According to the behavior analysis, the sensitivity and emotion of feeling of uncomfortable holding changes developmentally with infants activity and mother's holding skill.

# 日英の母子における身体接触遊びの縦断的研究

根ヶ山 光一（早稲田大学）， Niki Powers (Edinburgh University)

## 目的

現代の対人関係においては、互いの身体やその接触を体験する機会が急速に減少し、それが心理面・行動面の深刻な不全性をもたらしている。本研究は、「身体接触」が対人関係を構築する際の基盤であるという前提に立ち、その重要性を生涯発達的に検討しようとする試みの一環である。

身体接触は、子どものストレスを軽減するとされる (Hallstrom, 1968 ; Stack, 1990)。それは身体接触が、子どもの保護に直結するからであろう。一方で、虐待も身体接触を伴う。つまり身体接触は、正 (愛)・負 (憎しみ) の両極にわたって強烈な情動を伴うのである。正の情動を伴う接触として、生まれたばかりの赤ん坊と母親のそれはその代表格である。

身体接触といっても、多様な行動があり、また多様な身体部位が関与する (根ヶ山・山口, 2005 ; 西條・根ヶ山2001 ; Tronick, 1995)。当然ながら母子間にも、様々な身体接触が見られる。それは抱きや哺乳といった子どもの生存に直結するようなものから、くすぐりやオツムテンテン、タカイタカイなど、親子の遊びにも、身体接触行動がさまざまな形で取り入れられているし、そこには同様にさまざまな身体部位が用いられている。母子の遊びにはその種類と量に発達的な変化が見られるとされ (Gustafson et al., 1979)、それは身体遊びも例外ではないと考えられる。

このように、身体接触のあり方は親子関係の根底を規定し、そこにおける身体接触のありかたは、その後の子どものさまざまな対人関係における身体接触の様態を基礎づける基本的重要性をもつであろう。またそれゆえに、そのあり方は文化によって大きく規定されるといえる。本研究では乳児期における母子の身体接触遊びに着目し、その発達の変化と文化差を明らかにする目的で、日英それぞれの同一の母子をその家庭において継続して反復観察する。

## 方法

研究協力者：日本（埼玉県および東京都）と英国（Edinburgh）において、観察開始時点で4か月齢の乳児各7名ずつ（ただし、日本の1事例は事情により分析対象から除外）。日本では、予めボランティアとして研究協力者リストに登録してくれた母親に、子どもが4か月齢未満の時期にあらためて接触し、研究の概要を説明した上で、文書にて同意が得られた家庭を対象とした。英国の観察協力者は、英国側の研究者（Niki Powers）が、日本側で作成された研究計画の英訳をもとにして、研究室の同様のリスト等を手がかりに交渉し、やはり説明に基づき文書で同意を得るという形で選出された。いずれも第一子であり、日本は7人中3人が、英国は7人中5人が、それぞれ男児であった。

観察手続き：4か月齢になった時点から開始し、12か月齢に至るまで2か月ごとに合計5回各家庭を研究者が訪問して、日中における（1）定常場面、（2）母子の身体接触遊び、（3）母親によるくすぐり遊び、（4）抱きをビデオ撮影した。訪問のタイミングとしては、眠気や空腹によって通常の行動が影響を受けない時間帯を選んだ。本報告はそのうちの（2）に関するものである。

観察の具体的な手続きとしては、日本では母親に、モノを使わないで、普段行っているような自然な感じで赤ん坊と体を触れ合って遊んでくれるように教示し、なるべく母子の行動に影響しないように配慮しながら、その一部始終を10分間にわた

ってビデオカメラで撮影した。やむを得ないときは途中で撮影を中断し、撮影が再び可能になった時点で再開した。それでも遊びが成立しないときは、観察を強行せずその時点で中止し、別の近接した日を選んで再訪した。それでもなお観察ができない場合は、その月齢での撮影を諦めた。日本で分析対象から除外された1事例とは、子どもの機嫌が悪いことが多く、これに該当するケースであった。英国も基本的に同様の手続きで撮影が行われたが、日本の場合よりもよりフレキシブルに状況に対応していた。いずれも撮影後に簡単なインタビューを行って、親子に関する基礎的情報を得た。

## 結果

観察時間中に母子は、研究者の求めに応じてさまざまな身体接触遊びを行ったが、なかには試行錯誤的に行われ、一瞬で終わるものもあった。したがって分析には、原則として10秒以上続くもののみを安定的な遊びとして、その対象とした。

母親は乳児に対して、さまざまな形で身体接触的な遊びかけを行った。そのうちのあるものは文化を超えて共通であり、あるものは文化による違いが顕著であった。さらに、遊びの中には発達的变化が顕著なものがあった。それらのことについて、母親の身体のどの部位が、子どもの身体のどの部位に接触するか、またそれはどういう行動として遊ばれるのか、といったことを分析の手がかりとしながら検討を加えよう。

### 母親の身体部位 (図1) :

研究の全期間を通じて、母親の「手」による遊びが両国ともに圧倒的に多かった。ただし、指先のみによる関わりは4か月齢に集中的に見られる遊びであった。一方「足」は、おおむね子どもを大腿部にのせて遊ぶという形でのみ用いられ、その遊び方は、英国よりも日本の母親により頻繁に観察された。

頭部では「口」が比較的好く用いられる部位であったが、その傾向はとくに英国の母親に顕著で、日本の母親は口をさほど頻繁に使用しなかった。他の部位としては、「頬」や「鼻」が発達の前半期にしばしば用いられた。

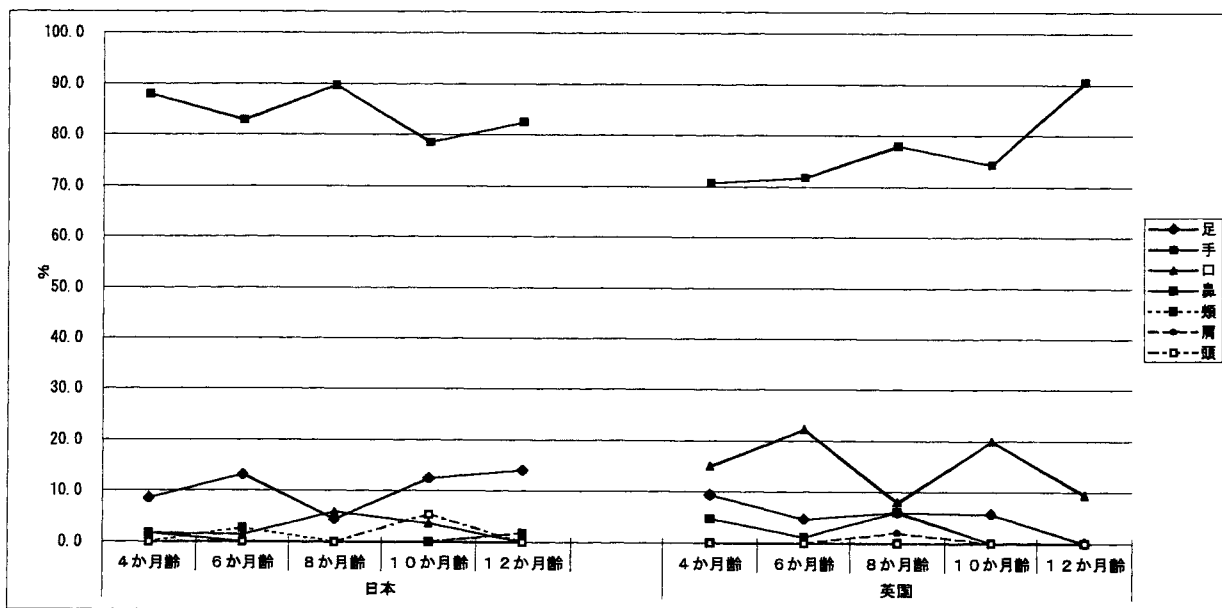


図1 母親が遊びに用いた自分の身体部位

それ以外としては子どもの「手」「足」が好んで選ばれた。ただし、両国ともそれは発達初期により多く、その後減少した。日本に比べて、英国の母親はより減少の度合いが強かった。

胴体、特に「腹部」「脇・わきの下」もよく対象とされる部位であったが、その増減傾向は日英で逆転しており、日本では減少し、逆に英国では増加していた。とくに英国では腹部への接触が多発するようになった。

一方、背中では相対的に関わられることが少なかった。また頭部の中では日英ともに「頬」が対象となることが多く、「額」もある程度選択された。英国の母親は手足同様、発達に伴いそれらの部位への関与を減じていった。

表1 接触遊びに用いられた子どもの身体部位 (%)

	日本					英国				
	4か月齢	6か月齢	8か月齢	10か月齢	12か月齢	4か月齢	6か月齢	8か月齢	10か月齢	12か月齢
全身	18.2	35.6	46.2	59.4	58.1	29.5	30.3	49.2	32.4	36.4
上体	3.0	3.8	1.1	0.0	1.6	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0
手	21.2	18.9	18.7	8.7	9.7	15.2	10.1	9.2	5.4	0.0
足	22.2	10.4	8.8	7.2	8.1	9.8	11.1	4.6	5.4	0.0
ひざ	1.0	0.9	0.0	0.0	1.6	1.5	3.0	0.0	0.0	0.0
腹	1.0	13.2	6.6	8.7	1.6	9.1	7.1	3.1	16.2	31.8
脇・わきの下	6.1	2.8	5.5	1.4	1.6	2.3	10.1	6.2	21.6	13.6
背中	2.0	0.0	4.4	0.0	3.2	3.0	1.0	3.1	2.7	9.1
肩	2.0	3.8	0.0	1.4	1.6	0.0	0.0	0.0	2.7	0.0
尻	0.0	0.0	1.1	5.8	1.6	0.0	0.0	3.1	0.0	0.0
胸	2.0	1.9	0.0	0.0	0.0	2.3	2.0	1.5	0.0	0.0
頬	15.2	2.8	5.5	0.0	3.2	9.1	8.1	10.8	10.8	0.0
額	2.0	2.8	0.0	4.3	3.2	3.8	3.0	0.0	0.0	9.1
首	1.0	0.9	0.0	0.0	1.6	1.5	2.0	0.0	0.0	0.0
首後ろ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	3.1	0.0	0.0
耳	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
顔	0.0	0.0	1.1	0.0	1.6	1.5	1.0	1.5	2.7	0.0
目	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0
口	3.0	0.9	0.0	1.4	0.0	1.5	3.0	0.0	0.0	0.0
鼻	0.0	0.0	1.1	1.4	1.6	6.8	5.1	4.6	0.0	0.0

遊びの内容 (図2) :

遊びの内容は多岐にわたっていたが、いくつかの共通項をもとに、次のような4つの主要カテゴリーに分類することが可能であった:

- (1) 「全身を揺する」「タカイタカイ遊びをする」「落下させる」「でんぐり返しする」「倒す」などにより平衡感覚に訴える
- (2) 「手足を回旋させる」「打ち合わせる」などにより四肢を運動させる
- (3) 「くすぐる」「なでる」「つつく」「軽くたたく」「キスをする」などにより皮膚を刺激する
- (4) 「立たせる」「歩かせる」「握らせる」などにより子自身の参与を誘発する

それらにより、遊びの種類が発達的にどのように推移したかを示したのが図2である。

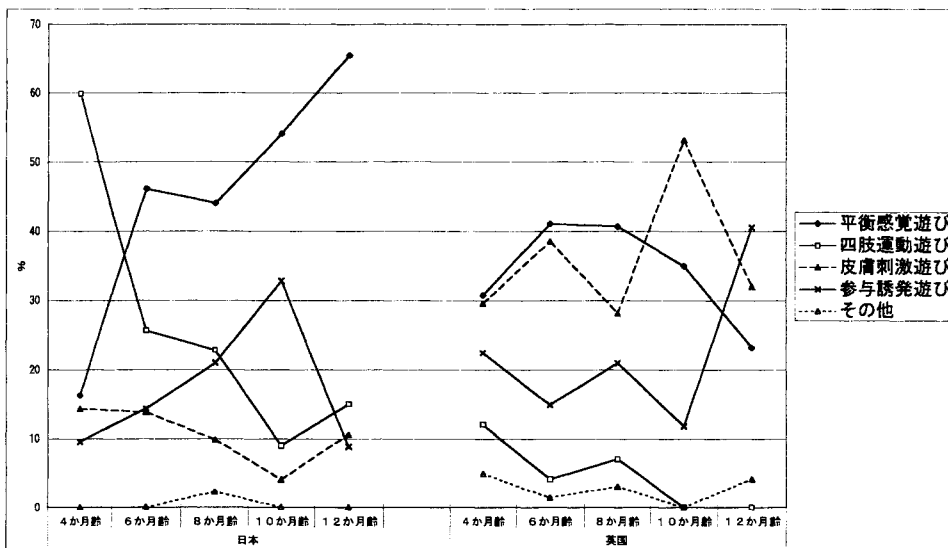


図2 遊びの種類ごとの増減傾向

両国とも、発達的变化が認められた。どちらも、発達初期にさまざまなタイプの遊びが積極的にみられ、後に収束していったが、その推移は、日本の母子により顕著であった。日本では、明白な変化として、四肢運動的な遊びが減り、平衡感覚遊びが増えていた。四肢運動的な遊びとは、子どもの手や足をもって屈伸させたり回旋させたりするもので、それは子どもに運動をさせているようでもあり、同時に、急に軌跡やスピードを変化させて意外性を作り出し、それで子どもを喜ばせるといった遊びであった。いずれにしても子どもはそこでは受け身であり、親が子どもの四肢を操作する形で遊びが構成されていた。

そういった四肢運動的な遊びは、4か月から6か月齢にかけて急速に減少した。それに替わって全身を使った平衡感覚遊びがその時期に急増し、日本の母子では、その傾向がその後も続いた。前半期には上体を起こしたり倒したりというシーソー的な動きや、抱きの状態から落とすような動きを利用して緩やかに平衡感覚を刺激することが多かったが、後半期には全身を抱いて振り回したり、あるいは抱きながら放り上げるような激しい動きを伴うことが多くなった。

それとともに、たとえば手を持って歩かせるとか、立ってピョンピョンと足を屈伸させるとか、子どもに自分の口などを触らせるとかといった、子どもの参与を誘発するような遊びが次第に増加した。この種類の遊びは、誘導するのは母親であるが、その成立にとっては子どもの積極的な関与が不可欠であり、その意味で子どものある一定の発達レベルが要求される遊びといえる。12か月齢で再び落ち込んだのは、平衡感覚遊びがそれを凌駕したためである。

それに比べると、英国の母子の場合は、発達的变化が日本ほど明確ではない。そのなかである程度明確なのは、四肢運動遊びの減少傾向である。参与誘発遊びが後半に増加していることも日本と基本的に一致した傾向であるが、さほど顕著ではない。一方、平衡感覚遊びにはっきりとした発達的变化が認められず、むしろ後半は減少すらかえらる点は、日本との大きな違いである。

英国と日本を比較すると、今の平衡感覚遊びも含めて、その類似性よりも差異性の方がより目につく。まず四肢運動遊びの少なさと、その裏返しとしての皮膚刺激遊びの多発である。先に述べたとおり、口での接触が英国に多いことと皮膚刺激遊びが多いことがつながっており、英国の母親が遊びにキスを取り入れていることの反映である。日本のように平衡感覚を刺激するような激しい遊びは後半少なくなり、子どもの参与を誘発するような比較的大人しい、あるいは消極的な遊びことごとくかわられている。

日本の母親においては、抱いて体の前面で濃密に関わることが多発したが、英国では母子の胴体間に間隙のあることも多かった。また英国では特に10、12か月齢において身体接触遊びの減少が著しかったが、くすぐり遊びに関しては例外的によく発現させていた。

日本の母親のもう一つの特徴は、子どもの能動的参加を促したり、遊びにおいて補佐的役割をとったりするということが相対的に多いという点に指摘できたが、その傾向は4か月齢ではまだ目立たなかった。

以上、日本における遊びは、1歳に至るまでその種類は推移させつつも母親が積極的に関与し続ける形で持続したが、英国の場合は相対的により消極的・非運動的・鎮静的な遊びへとシフトしていった。

### 遊びにおける母子の身体位置関係 (図3) :

身体接触遊びにおいて、母子はさまざまな身体位置関係をとっていたが、基本的には「対面」「同方向」「横向き」の3種類に分類された (図3)。

- (1) 対面 : 母子が正面を向き合う格好で正対する位置関係。母子の腹部同士が接触するタイプ (「前前」) と接触しないタイプ (「前・前」) とに分かれる。
- (2) 同方向 : 母子が同じ方向を並行して向いた位置関係。これも母の腹部と子どもの背部が接触するタイプ (「前背」) と接触しないタイプ (「前・背」) とに分かれる。
- (3) 横向き : 母子の体軸が直交し、母親の正面に子どもが体側部を向ける位置関係。これにも母の腹部と子どもの体側部が接触するタイプ (「前横」) と接触しないタイプ (「前・横」) がある。

一般的にみると「対面」が多いが、英国では4か月齢から一貫してそうであり、その後10、12か月齢で減少したの

に対し、日本では逆に4か月齢では極端に少なく、その後急増して筆頭の位置関係となった。

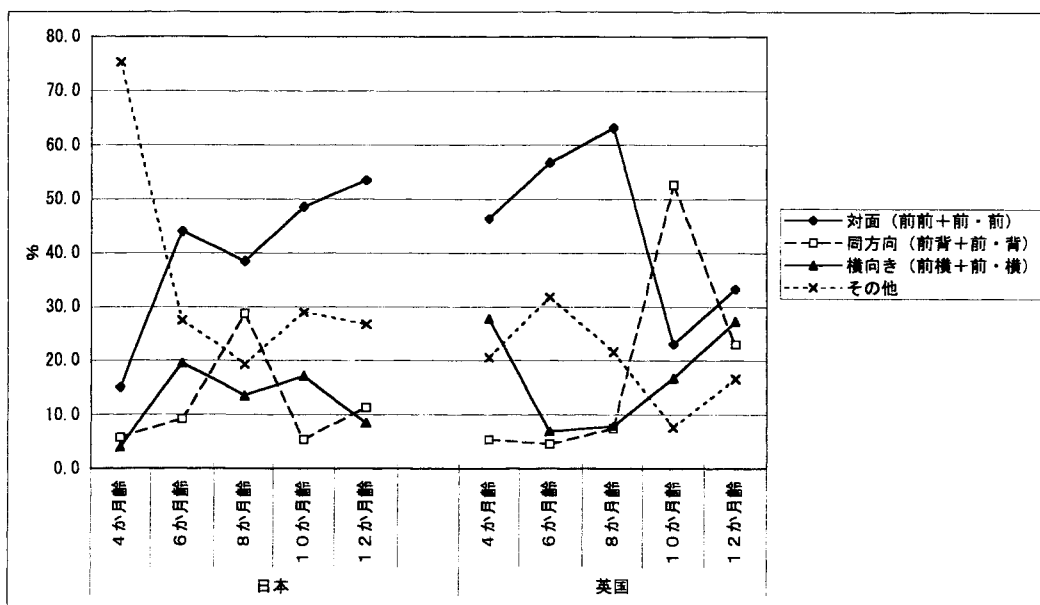


図3 接触遊びを行う母子の身体位置関係

日本では4か月齢で対面が少なく、圧倒的に「その他」が多かったが、これは横たわった子どもの手足をもって四肢運動遊びをしていたためであり、この時期の日本の正対を避けるような遊びの特徴が反映されたものである。英国にはこのような回避傾向は見られず、母親は当初から子どもを正立位置で保持して向き合っている。ところがその後、日本では四肢運動遊びが減少して平衡感覚遊びが増加するのに伴い、対面位置が「その他」を凌駕することとなる。

一方、英国の場合は、4か月齢時点から平衡感覚遊びが多発していた結果、対面位置が当初から多い。そして10か月齢時点以降、その座は「同方向」「横向き」に取って代わられた。その典型は、歩いて離れようとする子どもの手をもって、その歩行を補助しようとするとか、ハイハイして離れようとする子どもの足をつかんで引きずり戻そうとするような遊びであり、これは英国の母親が、子どもの自発的な行動に合わせる形で遊びかけていたことを意味する。この時期における英国の母子が、子どもの自律性を尊重し、母親が能動的に遊びかけることを控えている姿として捉えることができよう。一方日本の母親は、そのように子どもの個としての自主性を尊重して副次的役割に回るといえることがまだない状況であると見なすことができるのではないかと。また、この段階の英国の母子において、遊びが「モノ」を介した3項関係のなかで行われる傾向を強め、モノを介さない単なる間身体的遊びが遊びにくくなっていることの反映であるという可能性も考えられる。

図4は、そのような身体位置関係を、母子の腹部の接触の有無という観点に注目して整理し直したものである。

これをみると、英国の母親に比べて日本の母親は、特に発達の後半期に子どもと腹部で接触する傾向がより大きく、また母子が腹部同士で接触している頻度も高いことがわかる。それに比べると、英国の母親は、身体接触遊びの際に、自分の腹部を子どもに接触させず、腹部同士の接触もあまり見せていないという傾向が明らかである。



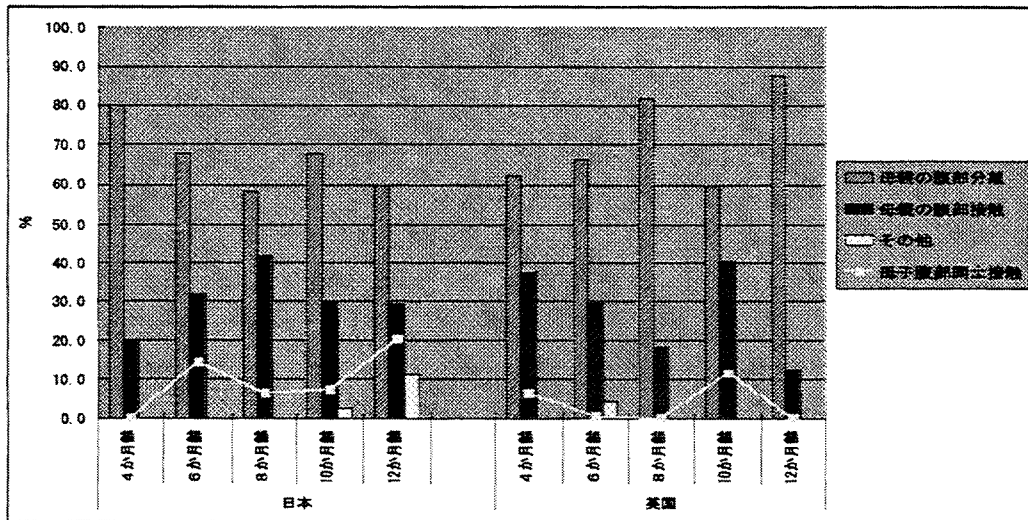


図4 母子の腹部接触

#### 考察

本研究では、日英の母子の身体接触遊びを4か月齢から12か月齢まで縦断的に、家庭において実験的場面でビデオ観察し、その発達的变化と文化差を調べた。その結果、おもに次のようなことが明らかとなった。

- (1) 多様な遊びが見られたが、全期間を通じて母親の「手」による遊びが両国ともに圧倒的に多かった。また子どもの全身を対象とする遊びがもっとも好んで行われた。それ以外には、場合によって口などが用いられ、腹や脇などを対象とすることもあった。
- (2) 身体接触遊びは、「平衡感覚に訴える」「四肢を運動させる」「皮膚を刺激する」「子自身の参与を誘発する」の4タイプに大別することが可能であった。
- (3) 日本では1歳まで身体接触遊びが、四肢運動遊びから平衡感覚遊びへと明瞭な発達的变化を示し、途中参与誘発遊びが一過的に増加したのに対し、英国ではそのような発達的变化が明瞭でなく、最後は参与誘発遊びの増加とともに身体接触の強度も減って、遊びが消費化した。

以上の結果から明らかなように、母子の身体接触遊びは発達初期の母子関係にとって、実に多様な形で展開される。それは、全身のどこでも作用体として用いることができ、相手の身体のものでそのターゲットとして定めることができるという、身体接触のコミュニケーションがもつ独自な特徴(根ヶ山, 2002)と不可分に関連する。母親の身体としては、手と口とがとくに、「むかう部位」(佐々木, 1987)として用いられる。大人の通常の対人関係ではよく用いられる背中や肩、頭などの部位ではなく、もっと敏感な場所や全身が対象とされているのは、乳児と母親との身体接触の独自性を意味するものであろう。その刺激作用の大きな身体部位同士による独自な接触を通じて、強い情動を伴わせつつ遊び、それを通じて重要なメッセージを交換・共有するのが発達初期の母子の姿であるといえよう。

手を用いるという点には文化差はないが、口に関しては日英差が指摘できた。英国の母親が口を比較的によく用いるのに対して日本の母親はそういったことはなかったが、これは明らかに「Kiss」というコミュニケーション行動を日常どの程度頻繁に用いるか、といったことと関係することであろう。また、子どもの対象部位としては、日英ともに、発達初期に四肢が好んでターゲットとされた。回旋したり、屈伸したり、と体操をするように動かされたが、そこでの子ども

は受動的役割をとり、母親主導の遊びとなっていた。両国ともに、子どもの参与を誘発する遊びがその後のどこかの段階で比較的増加した。子どもの参与を促すとは、たとえばその手をもって歩かせるとか、逃げる子どもを追いかける、足の上でピョンピョンとバウンドさせる、子どもに自分の顔を触らせるとかといった行動であり、いずれも母親の補助のもとで子どもが何らかの主体性を発揮しなければ成立しない遊びである。Gustafson, Green & West (1979)の知見のように、母子の遊びにおいて子どもの主体性がより大きな部分を占めるようになるという変化が、ここにも指摘できる。

日本では四肢運動遊びが全身を強く揺すり動かすような平衡感覚遊びに転じていったが、一方英国ではそういった平衡感覚を刺激する遊びが初期にすでに比較的多く、同時に対面型の位置関係を多くとっていた。そして英国ではその後、皮膚表面を刺激するような遊びや子どもの参与を惹起しようとする比較のおとなしい遊びに変化していった。また英国の母子は、母親の腹部が子どもの身体（特に腹部）に接触しない形の遊びが多くなり、また同方向や横向き位置関係となることが増えた。それは、身体接触遊びの消極性と捉えることができる変化であったが、それは母子間の遊びそのものの減退というよりも、モノを介在させる三項関係的な遊びへの志向性の増大と、子どもの個としての主体性・能動性の尊重の表れであるといえるのではなかろうか。4か月齢にすでに対面型の位置関係が多発していることも、英国の母親における子どもの個の尊重の表れではなかろうか。

一方において、日本では比較的単純に、初期の四肢運動的遊びの多発から平衡感覚的遊びへと移行がみられた。いずれも母親が主導的に子どもを刺激するタイプの遊びかけであり、子どもはいずれにしても受動的立場のままであって、そこで発達的に変化を見せているのは母親の主導性の示し方である。対面型の多さや母親の腹部での接触の多さなどは、遊びかける母親の関与度の高さを示唆しており、英国に比べてその身体的密着度は高い状態を維持し続けている。母子の個としての相互的な分離独立の進行はその姿からは認めにくく、むしろ子どもの成長に応じて、ますます子どもに激しい刺激作用を用いて関わっていくとする日本の母親の志向性の特徴が明瞭に認められる。

このように、身体接触遊びは、発達初期の子どもと母親の関係を理解するのに非常に有効な切り口であるといえる。発達初期の母子間における身体接触遊びは、さまざまな側面から後の子の発達を促進することにつながると考えられる。皮膚接触は参加者に並行的・相対的体験をもたらすものであり、それを遊びという楽しい雰囲気の中で共有することは、母子が交歓し絆を強めることに結びついているであろう。ここで見てきたように、その点においては日英に差がないが、それがどの身体部位を使ってどんな遊びとしてなされるか、そこに親子の主導性がどう反映されるか、あるいはその遊びがいつ頃減少して三項関係に移行するか、などには大きな文化差があった。そのような文化差の存在は、その後の相互の身体関係のあり方やそこでのモノや空間の介在のあり方などを規定し、それゆえに後の対人関係枠組みの発達に大きな影響を与えるものと推察される。

#### 引用文献

Gustafson, G.E., Green, J.A., & West, M.J. (1979) The infant's changing role in mother-infant games: The growth of social skills. *Infant Behavior and Development*, 2, 301-308.

Hallstrom, B.J. (1968) Contact comfort: Its application to immunization injections. *Nursing Research*, 17, 130-134.

根ヶ山光一 (2002) 発達行動学の視座：〈個〉の自立発達の人間科学的探究 金子書房

根ヶ山光一・山口創 (2005) 母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達 小児保健研究, 64, 451-460.

西條剛央・根ヶ山光一 (2001) 母子の「抱き」における母親の抱き方と乳幼児の「抱かれ行動」の発達：「姿勢」との関連を中心に 小児保健研究, 60, 82-90.

佐々木正人 (1987) からだ : 認識の原点 東京大学出版会

Stack, D.M. (1990) Tactile stimulation as a component of social interchange: New interpretation for the still-face effect. *British Journal of developmental Psychology*, 8, 131-145.

Tronick, E.Z. (1995) Touch in mother-infant interaction. In: T.M. field (Ed.) *Touch in early development*. Mahwah: Lawrence-Erlbaum, Pp.53-65.

## Longitudinal study of tactile play in Japanese and Scottish mothers and infants

Koichi Negayama (Waseda University) & Niki Powers (Edinburgh University)

Bodily contact is important in mother-infant relationship, and it is also true in a play interaction. Tactile play was longitudinally observed for 10 minutes in 6 Japanese and 7 Scottish mother-infant dyads bimonthly from 4 to 12 months of age. Throughout the study period, most of the contact was made by the mothers' hand(s), although tactile play by finger was limited in the 4-month observation. Legs were only used in a way to toss the infant on the thigh. Mouth was preferentially used in the Scottish mothers. Target areas of the infants' body in the play were divergent, but the whole body was constantly the most preferred one, of which the Japanese mothers increased the preference and the Scottish mothers finally lost it. The infants' extremities were chosen in the early stage of development in both countries. Belly, flank and armpit were also the areas to be targeted, where the preference increased and decreased in the Scottish and the Japanese mothers, respectively. Cheeks were preferred in the head, and the back was not to be chosen. The tactile play could be classified into 4 groups: vestibular play with a strong body movement, extremity exercise play with round or jerky movement of arms and/or legs, cutaneous stimulation play with, e.g., kiss and tickling, and participation-soliciting play like encouraging a hand-supported walk. The extremity exercise play was mainly observed in the initial stage of development, and was replaced by the vestibular play. The tendency was more remarkable in the Japanese dyads. Play that needs the infants' participation occurred in the middle stage of development. In comparison with the Japanese mothers, the Scottish mothers were less enthusiastic in the tactile play, particularly in the later stages, which suggests the stronger inclination of them to solicit the infants' active participation and/or the bigger preference of a triadic play with toys between them.

## **Vowel sounds and touch in rhythmic play**

Niki Powers (University of Edinburgh), Koichi Negayama (Waseda University)

### **Abstract**

It was hypothesised that acoustic features of infant and parent vowel sounds are utilised consistently as a medium through which emotions can be shared and are coordinated with temporal aspects of communication. A cross-cultural study was carried out to explore how acoustic features of mothers' voices are related to emotion, touch and movement and how this differs in two cultures (Japan and Scotland). Six mother-infant pairs were filmed in each country (mean age for Japanese mothers was 33.5 and for Scottish mothers was 32.3). 3 female and 3 male, first born infants were filmed in each country, at home when the infants were 4 months old. Pitch, intensity and duration of mothers' and infants' vowel sounds in communication were analysed and compared for four types of rhythmic play and in different emotional situations. Multivariate analysis confirmed that pitch was significantly higher for 'encouraging participation' play,  $F(3, 516)=22.414$ ,  $p=.0001$ , intensity was significantly higher during 'active movement' play,  $F(3, 516)=50.847$ ,  $p=.001$  and duration was significantly longer during 'active movement' play,  $F(3, 516)=10.035$ ,  $p=.0001$ . When acoustic features of vowel sounds were compared for emotional 'engagement' and 'disengagement' there was a significant difference for intensity (which was significantly higher for 'engaged' communication:  $F(1, 517)=32.842$ ,  $p=.0001$ ), and duration (which was significantly longer during 'engaged' communication,  $F(1, 517)=7.714$ ,  $p=.006$ ) but not for pitch. During the segments that were chosen for analysis, Japanese mothers were significantly less engaged than Scottish mothers ( $X^2=37.138$ ,  $df=1$ ,  $p=.0001$ ). When Japanese and Scottish vowel sounds were compared, Japanese vowels were significantly higher in pitch,  $F(1, 517)=5.462$ ,  $p=.020$  as was intensity,  $F(1, 517)=28.640$ ,  $p=.0001$ . The findings reported here suggest that there is a relationship between some acoustic features of vowel sounds and emotional expression suggesting that physical aspects of communication (sound and touch) provide a psychological measure of emotional meaning. The findings support the idea that non-verbal and tactile aspects of infant communication are coordinated to provide consistent emotional information and that this can be culturally specific.

### **Introduction**

One of the central complexities of theories of the development of communication is that we are as yet uncertain how discrete features of the sounds we hear in speech, such as vowels, are linked in to the overall perception of specific motivational or emotional messages. Researchers in the field of Linguistics have for many decades tried to link micro features of phonology to mental representation of intention and understanding. Studdert-Kennedy (2002) describes vowels as 'points of contrast' and suggests that they have very close evolutionary links to the human and primate ability to produce and imitate facial and vocal expression.

Trehub and Nakata (2002) suggest that features such as vowel elongation are musical in their character. They propose that acoustic features (such as intensity, intonation contour and rhythm) of communication have an emotional foundation..."Music begins its life-long journey as an emotive signal with clear emotional consequences.

From the earliest days of life, infants' waking hours are filled with music or music-like materials in the form of maternal vocalisations" (p37).

The theory of Communicative Musicality proposes a strong link between action and communication (Malloch et al 1997). There is evidence to suggest that there is a connection between emotional expression, communication and motor activity (Lee 1998). Research with deaf mothers and infants has revealed that aspects of communication such as rhythm are utilised for motor activity as well as for acoustic expression of emotion (Masataka 1992, Trehub and Nakata 2002). Deaf mothers sign to their infants in a style that is as distinctive as infant directed speech. Their sign language is more exaggerated and more repetitive. Trehub and Nakata (2002) describe this infant directed sign language as "dance-like" (p38).

Mirror neuron theories provide a strong link between action and perception and they suggest a mechanism that translates perception and action into psychological experience (Rizzolatti and Arbib 1998). A range of theories and research on mirror systems are beginning to come to light suggesting that neurons fire in the monkey and human brains in response to perceiving action and gestures (Rizzolatti et al 2001, Rizzolatti and Craighero 2004), when viewing faces (Tzourio-Mazoyer et al 2002) and when observing jaw movements that are key in recognition of movements of the mouth that are used for speech (Shibukawa et al 2003).

It's possible that vowel sounds could become represented in a similar way in the brain. Evidence suggests that some sounds cause neurons to fire in the brain. Kohler et al (2002) stimulated neurons in the pre-motor cortex of monkeys. They found a group of neurons that fired in response to actions that were related to specific sounds. These 'multimodal mirror neurons' fired when the monkeys saw the action being performed and also when they heard the associated sounds, even if these were presented separately. It is interesting and relevant that these 'multimodal mirror neurons' are found in the area of the monkey brain that is analogous to Broca's area in the human brain. Kohler et al state that "these neurons have the capacity to represent action contents: second they have the auditory access to these contents so characteristic of language" (p848).

This evidence adds weight to the idea that gesture and vocalisations are linked and shows that aspects of sound and movement are represented (in the monkey brain at least), in a holistic way – aspects of action and sound are represented as a combined unit, in which each part can be understood separately and will create a neuronal response on their own, or together.

The current research focuses on vowel sounds, as a feature of communication that has a central role to play in the expression, perception and mutual regulation of emotion between mothers and infants. However, the research also aims to reflect the importance of the combination of vocal and non-vocal aspects of communication. Prosodic features of vocal communication are created by coordination of a complex array of separate parts, none of which can produce the sensation of prosody on their own.

A prosodic phonological approach dictates that pitch; intonation, loudness, tempo, rhythm and tone of voice all have to be considered in combination when looking at

emotional expression in human communication (Crystal 1997). They are interconnected features intertwined in a complex dynamic dance, to promote an understanding between communicating partners.

However, a focused and more detailed analysis of vowel sounds can be useful when it is implanted within a wider description of all features and within the syllables in which vowels are embedded, as it may provide some clues as to which acoustic aspects are more salient during the communication of emotion. It is useful to consider specific acoustic features of communication and how these features relate to psychological understanding and representation in the brain, of what is being expressed.

It appears that parent-infant communication is greatly facilitated by the mutual co-ordination of rhythmical temporal patterning of vowel sounds. There are innate, communicative mechanisms, which facilitate the awareness of, and interactions with, other people (Trevvarthen 1999). These mechanisms coordinate around motivational, sensor motor and intersubjective systems and they operate within a cultural framework. It is possible that acoustic features of infant and parent vowel sounds are utilised to highlight emotional narratives and to coordinate temporal aspects of communication.

If communication is based on the expression, perception and regulation of affective state, it is important to realise that this occurs in a context. Environmental contexts are significant for the development of affective communication. Humans are differentiated by language and cultural traditions. Different cultures foster individual differences in socially preferred expression of particular emotions. For example, Artic Uktu people traditionally discourage their children from any outward expression of anger (Briggs 1970).

Geertz (2000) says that we make sense of the world by constructing stories or narratives about everything and that these are an expression of culture. He suggests that the mind and the culture it develops in are completely interwoven. It's not something that can be looked at separately. Our brains develop in a particular culture that then becomes an ingredient in the way the mind thinks – mind and culture are context dependent, 'complements' of each other.

Fogel et al (2000) carried out research with 6 and 12-month-old infants to look at smiling behaviour. They found that at 6 months, infants showed differential smiling in response to different parts of tickling and peek-a-boo games. These games are played within a narrative framework in that they have a period of setting up and a climax. Infant smiles appear to express discrete aspects of enjoyment that were dependent on the interpersonal context of the specific interaction. This demonstrates that emotional expression in infants is not a random or reflex reaction.

English and Japanese differ significantly in the placing of vowels within the syllable structure. Also syntax in grammar influences infants' listening and voicing by 6 months, leading them to identify distinctive features of language and intention (Kuhl 1998, Lecaneut et al 1996, Trevvarthen and Aitken 1994). Japanese mothers adopt a different attitude to their infants from Anglo-Saxon mothers, giving greater value to interpersonal aspects, and less attention to baby's interest in objects and events. They

talk about different things with their infants, and their vocal expression is different (Shimura and Imaizumi 1995, Bloom and Masataka 1996).

In Japanese society emotional cues are central to communication and there is a difference in how you relate to other people, depending on how well you know them, their social position and whether the interaction takes place in public or private. The same could be said for Scotland but in Japan there are social constraints on how emotion is expressed in specific settings. This is demonstrated by traditional Japanese concepts such as *Koroko*. This is a Japanese philosophy to explain the integrated meaning of human nature. It considers the mixture of heart and mind and a sense of knowing, differently to the dualism of western thinking. This traditional philosophy plays an important role in Japanese ideas about child rearing and has an effect on the ways in which emotional expression is communicated (Nakano 1997).

There are however, important similarities in Japanese and Scottish extension of pitch when talking to their infants. Masataka (1993) found that Japanese mothers used rising pitch contours when speaking to their infants and that there was a correlation between these contours and their communicative intention. It is still unclear however, how vowels are utilised by mothers in different cultures to express affect.

The current research theorised that vowels carry dynamic expressive information, they are perceptually attractive to infants from birth and that mothers and infants use vowels in coordination with touch and movement to communicate and express their motivational and affective states.

## Method

6 English-speaking and 6 Japanese-speaking mother-infant dyads (3 male and 3 female infants in each country) were recorded on digital TV and with digital audio in their own homes. Table 1 provides details about participants.

**Table 1: Participant information**

Infant ID Code	Infant Gender	Mother's description of Infant Nationality	Mother Age	Mother Marital Status	Mother Employment
S1	Female	British	30	3	1
S2	Female	British	38	2	1
S3	Female	Scottish	40	2	2
S4	Male	British	31	3	2
S5	Male	Scottish	23	2	3
S6	Male	British	32	2	3
J1	Female	Japanese	33	3	1
J2	Female	Japanese	29	3	3
J3	Female	Japanese	39	3	3
J4	Male	Japanese	32	3	3
J5	Male	Japanese	32	3	3
J6	Male	Japanese	36	3	3

<b>Marital Status Code</b>	<b>Employment Status Code</b>
1: Single and not living with partner,	1: Full time worker,
2: Living with current partner,	2: Part time worker,
3: Married and living with spouse,	3: At home with child full time,
4: Separated from spouse,	4: Student.
5: Divorced.	

Filming was arranged to suit the mother and her infant and so that at least 15 minutes uninterrupted communication was obtained while infants were alert. Mothers were asked to play with their infants as they normally do. Japanese infants were recruited by Koich Negayama.

A 30 second segment for each infant was chosen for detailed micro-analysis of vowels and emotional context based on the following criterion:

- The infant was alert,
- There was some rhythmical play or physical contact between mother and infant.

Sonic Foundry Sound Forge 6.0 professional digital audio computer software was used to produce WAV files suitable for acoustic analysis, of the segments chosen from the digital recordings for each mother infant pair. Acoustic analysis was applied the segments, using PRAAT phonetic analysis computer software to measure acoustic information for mother and infant vocalisations.

All vocalisations in each 30 second segment were analysed to establish the location of vowel sounds in the naturally occurring speech for each of the mothers. Vowels were identified using the following procedure:

- All vocalisations were listened to, to establish the location of the vowel sounds,
- Spectrograms for all vocalisations were viewed. The PRAAT program provides a visual description of frequency, pitch and intensity measurements. When a vowel was identified, the vowel nucleus and frequency information were the main identifier used to make a subjective decision about where the vowel began and where it ended. The sound was listened to again to make sure that the vowel had been isolated,
- Vowel length was measured in 0.000001 second time units and rounded up to 0.001 seconds for analysis.

The PRAAT program was then used to gain a precise measurement of duration, pitch and intensity for each of the identified vowel sounds. The program calculates the mean pitch and mean intensity for each vocalisation (in this case, vowel sound) that is selected. If pitch could not be calculated by the PRAAT program, because for example the vowels were spoken too quietly, then the vocalisation was disregarded from the analysis.

A vowel-length distribution analysis was carried out. Absolute duration was measured and then all mother vowel sounds were measured and categorised as follows:



- ‘Extended’ - over 250 milliseconds (ms),
- ‘Long’ - between 151 and 250 ms,
- ‘Short’ – between 50-150 ms.

Emotional context was measured by 2 Scottish raters (one of whom was blind to the purpose of the experiment) using the video data without sound. Inter-rater reliability was established and codings of ‘engagement’ and ‘disengagement’ were carried out using an intuitive measure. ‘Engagement’ was established when mother and infant shared intimate moments of close mutual awareness of each other or of a shared interest. ‘Disengagement’ was established when the infant’s attention moved away from the mother or from the communicative interaction.

Tactile play was categorised using the following definitions:

- ‘Active movement’: the mother swings the infant up, down or sideways,
- ‘Skin stimulation’: the mother strokes or rubs the infant,
- ‘Encouraging participation’: the mother holds her hands out to the infant, or helps the infant to make movements ,
- ‘Exercise play’: the mother exercises the infant’s limbs.

## Results

Pitch, intensity and duration of mothers’ and infants’ vowel sounds in communication were analysed and compared for four types of rhythmic play and in different emotional situations. Acoustic aspects of mothers’ vowel sounds were examined using a multivariate analysis to see if they were used differently in contrasting types of rhythmic/tactile play. Table 2 presents descriptive information for pitch, intensity and duration of mothers’ vowel sounds during each type of play. The figures suggest that pitch is highest during play that involves the mother encouraging her infant to participate. The intensity and duration of mothers’ vocalisations are highest during ‘active movement’ play where the mother is swinging, raising or lowering her infant. Multivariate analysis confirmed that pitch was significantly higher for ‘encouraging participation’ play,  $F(3, 516)=22.414, p=.0001$ , intensity was significantly higher during ‘active movement’ play,  $F(3, 516)=50.847, p=.001$  and duration was significantly longer during ‘active movement’ play,  $F(3, 516)=10.035, p=.0001$ .

**Table 2: Descriptive information for acoustic measures of mothers’ vowels during tactile play**

		<i>Tactile</i>	<i>Mean</i>	<i>Std. Deviation</i>
<b>Mothers</b>	<b>Pitch</b>	active movement	295.248	106.122
		skin stimulation	248.190	112.266
		encourage participation	369.443	156.448
		exercise play	360.895	108.368
	<b>Intensity</b>	active movement	71.307	6.313
		skin stimulation	62.292	6.227
		encourage participation	69.448	6.507
		exercise play	71.206	9.963
	<b>Duration</b>	active movement	.265	.207

<b>Infants</b>	<b>Pitch</b>	skin stimulation	.221	.158
		encourage participation	.206	.163
		exercise play	.209	.186
		active movement	337.693	110.122
	<b>Intensity</b>	skin stimulation	368.871	129.650
		encourage participation	384.913	90.235
		exercise play	326.683	37.487
		active movement	73.214	4.234
	<b>Duration</b>	skin stimulation	69.542	6.117
		encourage participation	58.268	3.291
		exercise play	74.738	5.286
		active movement	.455	.240
		skin stimulation	.462	.318
		encourage participation	.229	.125
		exercise play	.449	.207

When acoustic features of vowel sounds were compared for emotional ‘engagement’ and ‘disengagement’ there was a significant difference for intensity (which was significantly higher for ‘engaged’ communication:  $F(1, 517)=32.842, p=.0001$ ), and duration (which was significantly longer during ‘engaged’ communication,  $F(1, 517)=7.714, p=.006$ ) but not for pitch. During the segments that were chosen for analysis, Japanese mothers were significantly less engaged than Scottish mothers ( $X_{\text{J}}=37.138, df=1, p=.0001$ ).

Table 3 provides descriptive information for acoustic features of mothers’ and ‘infants’ vowel sounds. Multivariate analysis was used to compare Japanese and Scottish vowel sounds, Japanese vowels were significantly higher in pitch,  $F(1, 517)=5.462, p=.020$  as was intensity,  $F(1, 517)=28.640, p=.0001$ .

**Table 3: Acoustic features of mothers’ and infants’ vowels in cultural contexts**

		<i>Country</i>	<i>Mean</i>	<i>Std. Deviation</i>
<b>Mothers</b>	<b>Pitch</b>	Japan	311.514	116.100
		Scotland	275.090	137.138
	<b>Intensity</b>	Japan	67.768	8.491
		Scotland	64.603	8.457
	<b>Duration</b>	Japan	.201	.162
		Scotland	.247	.182
<b>Infants</b>	<b>Pitch</b>	Japan	356.575	91.570
		Scotland	349.045	131.439
	<b>Intensity</b>	Japan	72.155	5.676
		Scotland	70.385	6.211

	<b>Duration</b>	Japan	.449	.261
		Scotland	.447	.281

## Discussion

The results showed a significant relationship between acoustic features of vowel sounds for different levels of 'engagement' for mothers. Mothers' intensity and duration were higher for 'engaged' interactions with their infants. The concept of engagement here is based on Stern's (1985) theory of 'attunement'. Stern states that for attunement to occur, features of communication must be matched between mother and infant when they communicate. In his theory, attunement "is a performance of behaviours that express the quality of feeling of a *shared affect state...*" (p. 142, emphasis added). Two of the features that he lists as essential to attunement of expressions are intensity and duration, and this would correspond with the findings presented here and would support the idea that physical (acoustic) features of vocal communication are a principal means by which emotional meanings are shared and experienced in a psychological way between mothers and young infants.

Although not at a significant level, pitch was slightly higher in 'disengaged' interactions, perhaps because the mother is trying to engage the infant by increasing the 'urgency' of her voice. The findings presented here provide evidence that acoustic aspects of vowel sounds in particular are used in a systematic way to express meaning to infants – in this case, *emotional meaning*. Perhaps intensity and duration are used together as a 'medium' by means of which a level of emotional meaning can be maintained in communicative contexts, whereas pitch is used to attract attention (engagement) and excite. The context examined here was rhythmical play, and mothers were all actively trying to engage their infants in close, intimate contact and they clearly used their voices to help the infants.

Although acoustic features of mothers' vowel sounds were different during the periods when their infants were 'engaged' with them, there was no significant difference between acoustic features of infant vocalisations. It may be that the mothers are working harder (vocally) than their infants are, to maintain the infants' attention. Perhaps the infant's vocal response to a period of intimate engagement with their mother is consistently regulated in some expressive way, but that this regulation is not reflected in pitch, intensity or duration of vowel sounds and so is not measured in the method used for this research. Hobson (2007) describes how engagement in communication is brought about by the infant's ability to identify with physical (bodily) demonstrations of emotion expressed by their communicative partners. If mothers vary their voices consistently between different emotional environments, as found here, this would support an infant's ability to construe meaning from vocal and non-vocal gestures, even though the infants are not producing differentiated emotional messages themselves.

Differences were found in pitch, intensity and duration between Japanese and Scottish mothers, suggesting that mothers are using their voices in culturally specific ways. It was interesting that, again, there were no significant differences found for the

vocalisations of infants. This corresponds with research that shows infants do not become sensitive to language specific sounds, or imitate them consistently, until they are between the ages of 6 to 12 months (Werker and Tees, 1984; Jusczyk and Luce, 1994; Jusczyk, 1997; Jusczyk, 1998; Nazzi et al, 2000; Dehaene-Lambertz et al, 2006; Tsao et al, 2006). In the study presented here, Japanese and Scottish mothers and infants were found to systematically coordinate acoustic features of their vowel sounds. So at 4 months old infants from both cultures can participate in vocal exchanges and although they are not yet producing consistent changes in their voices they are involved. Mothers seem to provide an acoustic framework for the infant to model.

Werker et al (2007) found that vowel sounds in speech directed to Japanese and English-speaking infants contain distributional cues that they suggest serve several purposes; to attract the infant's attention, to share emotional states and to support learning of the infant's native language. The current study found that mothers in both countries varied acoustic features of their vowel sounds differently. The results here suggest that although this process occurs in both languages, there are language-specific ways that mothers use acoustic cues.

There were differences in 'engagement' between the cultures. In this study Scottish mothers and infants had more 'engaged' interactions. This finding is limited by the fact that this 'engagement' was coded by Scottish coders for both the Scottish and the Japanese recordings. Furthermore, a particular type of communication was chosen for analysis. However, during 'engaged' and 'disengaged' communication mothers and infants coordinated acoustic aspects of their vowel sounds differently in Japan and Scotland, suggesting that vocal sharing of emotion is culturally specific. In future research it would be interesting to get Japanese people to code 'engagement' and 'disengagement' as there may be some cultural differences in perception of this element of communication, and it would be interesting to extend analysis to a range of communicative situations, both private, in the dyad, and public in the sense of being part of a larger social group.

Some researchers may be uncomfortable with the use of an intuitive or 'subjective' measure of 'engagement'. However, there is evidence to show that people can make consistent judgments about emotional states and interpersonal purposes, which are difficult to measure 'objectively'. Issartell et al (2004) found that participants could consistently agree when assessing emotional state. When they watched a performance and simultaneously made intuitive judgments, judgments were consistent for participants. Later when they were asked to say what emotion was present from memory, their judgments varied.

This is similar to the findings presented here, at least for Scottish assessors, because acoustic segments were consistently rated in the same way by two coders. Evidence presented in the Introduction and in later chapters also supports the idea that people readily and consistently understand emotions in others, even though their recollections or *post hoc* verbal accounts may vary greatly.

There were differences for pitch in different types of tactile play (which was higher in 'encourage participation' play) and for intensity (which was higher in 'active movement' play) but not for duration. It is interesting that pitch is higher when mothers are trying to 'encourage' or 'invite' the infant to take part. This corresponds with findings presented here on pitch-use in 'engaged' interaction. Previous research has found that rhythmicity of vocal and other motor systems is coupled and that the vocal and gestural systems develop in parallel (Iverson et al, 2006). Increased intensity in one system will lead to an increase of intensity of the other and conversely the same connection is preserved to express slower and calmer rhythms in communication.

The intensity of infants' vowel sounds was significantly higher when the mother was exercising her infants' limbs. Viewing the non-verbal data on video, the infants do not appear to be excited during this type of play. They are often lying on their backs and relaxed. However, they often seemed to want to change from this type of play to something more exciting and it may be that the increase in their intensity is to signal a protest. Further analysis of non-verbal data would be required to come to a firm conclusion about this.

Overall, this study found that there was a systematic relationship between acoustic features of mothers' vowel sounds and that infants were beginning to show a similar pattern in their vowel sounds. Mothers and infants coordinated acoustic features of their vowel sounds and they did this differently (but consistently) during 'engaged' and 'disengaged' communication and depending on their culture. This does suggest that acoustic features of vowel sounds are an important medium through which emotional meaning is shared between mothers and their infants.

## References

- Bloom, K. and Masataka, N. (1996) Japanese and Canadian Impressions of Vocalising Infants. In: *International Journal of Behavioural Development*. 19 (1), pps 89-99.
- Briggs, J.L. (1970) *Never In Anger. Portrait of an Eskimo Family*. Harvard University Press, Cambridge.
- Crystal, D. (1997) *The Cambridge Encyclopedia of Language (Second Edition)*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Dehaene-Lambertz, G., Hertz-Pannier, L. and Dubois, J. (2006) Nature and nurture in language acquisition: anatomical and functional brain-imaging studies in infants. In: *Trends in Neurosciences*. Vol 29 (7), p267-373.
- Fogel, A., Nelson-Goens, G.C., Hsu, H.C. and Shapiro, A.F. (2000) Do Different Infant Smiles Reflect Different Positive Emotion? In *Social Development* 9 (4), pps 497-520.

- Geertz, C. (2000) *Available Light: Anthropological Reflections on Philosophical Topics*. Princeton University Press. New Jersey.
- Hobson, P. (2007) Communicative depth: Soundings from developmental psychology. In: *Infant Behaviour and Development*. Vol 30(2), p267-277.
- Issartel, J., Marin, L., Gayraud, J., Hauw, D., Mottet, D., and Cadopi, M. (2004). Nature of Motor Interaction in a Specific Dance Task: the Improvisation. *8<sup>th</sup> European Workshop on Ecological Psychology*. 26th-29<sup>th</sup>, June, 2004. Verona (Italy).
- Iverson, J.M., Hall, A.J., Nickel, L. and Wozniak, R.H. (2006) The Relationship between Reduplicated Babble Onset and Laterality Biases in Infant Rhythmic Arm Movements. In: *Brain and Language*.
- Jusczyk, P.W. and Luce, P.A. (1994) Infants' Sensitivity to Phonotactic Patterns in the Native Language. In: *Journal of Memory and Languages*. Vol 33 (5), p630-645.
- Jusczyk, P.W. (1997) The role of infant speech perception capacities in discovering the sound structure of the native language. In: *Journal of the Acoustical Society of America*. Vol 101 (5), p3192.
- Jusczyk, P.W. (1998) Developing sensitivity to native language sound patterns. In: *Journal of the Acoustical Society of America*. Vol 103 (5), p2931.
- Kohler, E., Keysers, C., Umiltà, M.A., Fogassi, L., Gallese, V. and Rizzolatti, G. (2002) Hearing Sounds, Understanding Actions: Action Representation in Mirror Neurons. In: *Science*, Vol 297, pps 846-848.
- Kuhl, P. K. (1998) Language, culture and intersubjectivity: The creation of shared perception. In S. Bråten (Ed). *Intersubjective Communication and Emotion in Early Ontogeny*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Lee, D.N. (1998) Guiding Movement by Coupling Taus. In: *Ecological Psychology*. Vol 10 (3-4), pps 221-250.
- Lecanuet, J.P., Fifer, W. P., Krasnegor, N. A. and Smotherman, W. P. (Eds), (1996) *Fetal Development: A Psychobiological Perspective*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Malloch, S., Sharp, D., Campbell, D. M., Campbell, A.M. & Trevarthen, C. (1997) Measuring the human voice: Analysing pitch, timing, loudness and voice quality. *Proc. Inst. Acoustics*, 19, 5 pps 495-500.
- Masataka, N. (1992) Motherese in a Signed Language. In: *Infant Behaviour and Development*. Volume 15, pps 453-460.
- Masataka, N. (1993) Relation Between Pitch Contour of Prelinguistic Vocalisations and Communicative Functions in Japanese Infants. In: *Infant Behaviour and Development*. 16 (3), pps 397-401.
- Nakano, S. (1997) Heart-to-Heart (Inter-Jo-) Resonance: A Concept of Intersubjectivity in Japanese Everyday Life. In: *Annual Report of Research and Clinical Centre of Child Development*. 19, pps 1-14.

- Nazzi, T., Jusczyk, P.W. and Johnson, E.K. (2000) Language Discrimination by English-Learning 5-Month-Olds: Effects of Rhythm and Familiarity. In: *Journal of Memory and Language*. Vol 43 (1), p. 1-19.
- Rizzolatti, G. and Arbib, M.A. (1998) Language Within our Grasp. In: *Trends in Neurosciences*. 21, pps 188-194.
- Rizzolatti, R., Fogassi, L. & Gallese, V. (2001) Neurophysiological Mechanisms Underlying the Understanding and Imitation of Action. In: *Nature Reviews Neuroscience*. Vol 2, pps 661 -670.
- Rizzolatti, G. and Craighero, L. (2004) The Mirror-Neuron System. In: *Annual Review of Neurosciences*. 27, pps 169 – 192.
- Shibukawa, Y., Shintani, M., Kumai, T., Kato, M., Suzuki, T., Zhang, Z., Jiang, T., Shimono, M., Ishikawa, T. and Nakamura, Y. (2003) *Jaw-Movements-Related Mirror Neuron System in Humans*. Poster presented at 81<sup>st</sup> General Session of the International Association for Dental Research. June 25-28<sup>th</sup>, Gothenborg, Sweden.
- Shimura, Y. and Imaizumi, S. (1996) Listener and Context Dependency in the Perception of Emotional Aspects of Infant Voice. In: *Acta Paediatrica Japonica*. Vol 38, pps 648-656.
- Stern, D.N. (1985) *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. New York, Basic Books.
- Studdert-Kennedy, M. (2002) Vocal Imitation, Facial Imitation, and the Gestural Origin of Linguistic Discrete Infinity. In *Evolution of Language, Fourth International Conference Plenary Talks*. Harvard University.
- Trehub, S. and Nakata, T. (2002) Emotion and Music in Infancy. In: *Musicae Scientiae*. Special Issue 2001-2002, pps 37-61.
- Trevarthen, C. and Aitken, K. (1994) Brain development, infant communication and empathy disorders: Intrinsic factors in child mental health. *Development and Psychopathology*, 6: pps 597-633.
- Trevarthen, C. (1999). Musicality and the Intrinsic Motive Pulse: Evidence from human psychobiology and infant communication. *Musicae Scientiae, Special Issue, 1999-2000*, pps 157-213.
- Tsao, F., Liu, H. and Kuhl, P. (2006) Perception of native and non-native affricate-fricative contrasts: Cross-language tests on adults and infants. In: *Journal of Acoustical Society of America*. Vol 120 (4).
- Tzourio-Mazoyer, N., De Schonen, S., Crivello, F., Reutter, B., Aujard, Y. and Mazoyer, B. (2002) Neural Correlates of Women Face Processing by 2-Month-Old Infants. In: *NeuroImage*. Vol 15, pps 454-461.
- Werker, J.F. and Tees, R. (1984) Cross-language speech perception: Evidence

for perceptual reorganisation during the first year of life. In: *Infant Behaviour and Development*. Vol 7 (1), p49-63.

Werker, J.F., Pons, F., Dietrich, C., Kajikawa, S., Fais, L. and Amano, S. (2007)  
Infant-directed speech supports phonetic category learning in English and Japanese. In: *International Journal of Cognitive Science*. Vol 103, p1-147.



# 子どもの共同注意に対する母親の抱き効果

大藪 泰（早稲田大学文学学術院）

太田裕香（早稲田大学大学院文学研究科 現所属：(株) 学習研究社）

子どもの共同注意は、母親の抱きによってどのような影響を受けるのだろうか。本研究では、9 か月児、12 か月児、15 か月児を対象に、プレイルームで2種類の抱き効果を検討した。研究1では、コミュニケーション遊びの中で母親が自然に児を抱く場面と、抱かない場面で見られる子どもの共同注意行動の出現時間を分析した。子どもを抱き上げた場面では抱かない場面より共同注意の出現が少なくなること、抱き上げた場面での共同注意の時間は9 か月から12 か月にかけて増加した。研究2では、母親が子どもの注意を遊びの途中で誘導し、対象物を共同注意する場面を設定した。この誘導時に抱き場面と非抱き場面を設け、研究1の非統制で自然発生的な抱き場面と非抱き場面での共同注意時間と比較した。子どもの注意を誘導した場合、研究1と2の抱き場面での共同注意の時間には差がなかったが、非抱き場面では研究2のほうで共同注意の時間が短くなった。抱きによる共同注意への効果は抱きが生じる文脈によって異なる可能性があるが、乳児の注意を切り替えて目標物に誘導する場面では共同注意時間の減少を防ぐ効果があることが示唆された。

【キー・ワード】抱き、共同注意、母子相互作用

## 問題と目的

乳児の共同注意の発達に対する関心は、過去10年の間に高まりを見せ、多くの研究が発表されるようになった。共同注意研究の主たる関心は、言語獲得に先行する活動としての検討 (Morales et al., 2000 など)、他者の意図理解や他者との意図共有の指標としての検討 (Tomasello et al., 2005 など)、子どもの心の理論の発達における重要な通過点としての検討 (熊谷, 2004 など) などである。また、共同注意行動自体の発達経過にも関心が注がれ、一般的には、共同注意の発現時期は生後8-9 か月、完成時期は生後11-12 か月頃とされている。しかし、乳児の共同注意の発現時期は、生後半年以内の二項関係期にまで遡る可能性が指摘されており (大藪, 2004; 熊谷, 2004 など)、近年、この主張を裏付けるような研究報告が増えてきている。(Amano et al., 2004; Striano & Stahl, 2005; Tremblay & Rovira, 2007 など)。

こうした研究が対象にする子どもの共同注意行動は、身体同士が離れた相手の視線や指差しを追跡して、目標物に視線を向けるという行動である。つまり、子どもと相手との間に物理的な距離が存在する共同注意を問題にしている。しかし、乳児の生活の中では母親に抱かれる場面がかなり多く出現する。例えば、授乳する際には必然的に抱かれなければならない。乳児の移動も、抱かれて始めて可能になる。欲しくても取れない玩具を取ってもらうために、自分から抱かれることを要求することもあるだろう。こうした母親に抱かれた場面でも、乳児は母親と対象物を共有する体験をするはずである。

不安になった乳児は、泣いて母親を呼び寄せ抱かれようとする。移動能力を獲得すれば、母親に自ら接近して抱かれることを要求する。身体的接触には子どもの不安をなだめるという精神的効果が存在するからである。そして、不安をなだめられた乳児は、注意散漫になって安逸をむさぼるわけではない。身体的接触にともなう情動的交流によって気持ちを立て直された乳児は、新たな探索行動に向かう心の体制作りを開始させるからである。身体接触にこうした精神的な効果があるとするなら、それは乳児の共同注意行動にも何らかの影響を及ぼす可能性がある。しかし、身体接触と共同注意との関係を説明する記述はあっても (やまだ, 2005 など)、身体接触が共同注意に与える実際の効果の程度は知

られていない。

本研究では、母親の抱きが乳児の共同注意におよぼす効果を検討することを目的にして、プレイルームにおいて2つの研究を行った。研究1では、母子のコミュニケーション遊びの中から抱き場面と非抱き場面をランダムに抽出し、この2つの場面における共同注意の出現様相の違いを検討することを目的にした。この研究では母親の抱き行動にまったく統制を加えていない。子どもの共同注意への抱き効果は、母親が自発的に行った抱きによるものである。それゆえ、この研究事態を「非統制事態」と命名する。研究2では、母親が乳児を抱きあげて動物の写真と一緒に見る場面と、プレイルームで遊んでいる乳児との身体接触をすることなく動物の写真と一緒に見る場面を設定した。この研究では母親に子どもの注意を対象物へ誘導する統制を明確に加えている。それゆえ、この研究事態を「誘導事態」と命名する。研究2の目的は、注意誘導を指示された場合の抱き場面と非抱き場面での共同注意時間を、研究1で得られた非統制事態での共同注意時間と比較し、抱きが共同注意に及ぼす効果を検討することを目的にした。

## 研究1

### <目的>

研究1では、1歳児（生後9～15か月）を対象にしたプレイルームでの母子のコミュニケーション遊びの中から、母親が子どもを抱く場面と、抱かない場面で見られる子どもの共同注意の出現時間を検討する。

### <方法>

**参加者** 東京都内およびその近郊在住の発達に遅れのない健康な9か月児13名（男児7名、女児6名）、12か月児13名（男児5名、女児8名）、15か月児13名（男児8名、女児5名）とその母親、計39組である。実験開始前に、母親に対して実験の内容を口頭で詳細に説明し理解を得るとともに、実験途中での参加拒否やビデオ映像の供覧条件などを記した「合意書」を取り交わした。



図1. 抱き場面の例(No.1111, 12mo, M)



図2. 非抱き場面の例(No.1091, 9mo, F)

**実験場所** 早稲田大学文学学術院発達心理学研究室プレイルーム（約5×4.3m）である。

**実験場面** 本研究とは別の研究目的で行われた母子コミュニケーションの7つのシーンのビデオ記録を用いた。この7シーンのテーマと内容は以下のとおりである。① “I Want”：子どもの手が届かない棚の上に3つの玩具があり、その玩具に対する獲得要請行動の観察ができる、② “Help Me”：子どもが一人で遊ぶには難しい玩具（シャボン玉、風船、鍵でドアを開ける家）を用い、子どもの援助要請行動の観察ができる、③ “Turn”：子どもと母親が玩具（ボール、ハンマー・ボール、輪投げ）を使って順番に遊ぶ行動が観察できる、④ “Music”：母親と楽器（ピアノ、鉄琴、マラカス）を使って遊ぶ行動が観察できる、⑤ “Whale”：鯨の縫いぐるみが籠から浮き上がり、やがて籠に戻って見えなくなる場面での子どもの行動が観察できる、⑥ “Bird”：棚に置かれたテープレコーダーから聞きなれない鳥の鳴き声が流れ、やがて聞こえなくなる場面での子どもの行動が観察できる。これら6シーンに、参加者がプレイルームに入室した直後の“Free Play”を加えた7シーンである。いずれのシーンも約5分間であった。

これら7シーンの中から、母親による抱きが少なくとも20秒間継続したものを選び出した（抱き場面；図1）。また、7シーンの中から抱きのない20秒間の母子の相互作用場面を無作為に選び出した（非抱き場面；図2）。両場面とも各参加児一場面を対象に分析した。

**コーディング** 子どもの共同注意行動として、次の3種類のコードに分類した。un (unengaged—無関心)：子どもは母親が視線を向ける対象物や母親の誘導に持続的に (3秒以上) 視線を向けることがない。sj (supported joint—支持的ジョイント)：子どもは母親が見たり、注意を誘導したりする対象物に持続的に視線を向けるが、母親へ視線を向けることはない。cj (coordinated joint—協応的ジョイント)：子どもは母親が見たり、注意を誘導したりする対象物に持続的に視線を向け、同時に母親へも注意配分をして視線を向ける。このコードの独立した観察者間の *Cohen* の信頼性係数は、抱き場面が  $\kappa=0.71$ 、非抱き場面が  $\kappa=0.75$  であった。

<結果>

抱き場面と非抱き場面の違いが子どもの共同注意の出現時間に及ぼす影響を検討するために、場面とコードを要因とする二元配置の分散分析を行った。その結果、un と cj の出現時間には場面による有意差 ( $p<0.05$ ) があった。Un (無関心)、すなわち子どもが母親の視線と同じ方向に視線を向けない状態は抱き条件で多く、また cj (協応的ジョイント)、すなわち子どもが母親の視線方向にある対象物と母親の顔へ視線を向けて注意を配分する状態は抱き場面で少なかった (図3)。他方、sj (支持的ジョイント)、すなわち母親への注意配分は視線の動きからは確認できないが、子どもが母親の視線方向にある対象物に持続的な視線を向ける状態は、抱き場面と非抱き場面で差がなかった。

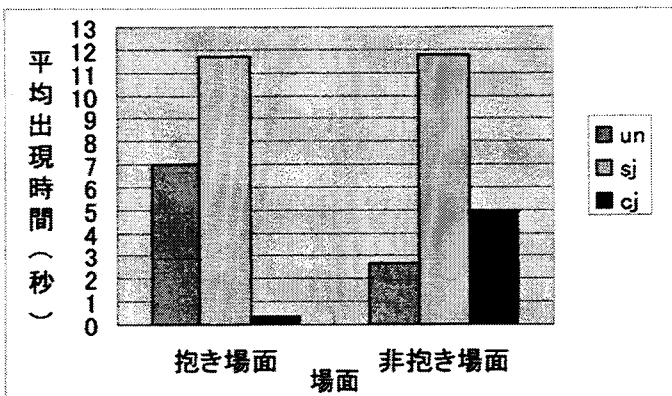


図3. 抱き場面と非抱き場面の共同注意時間(全月齢)

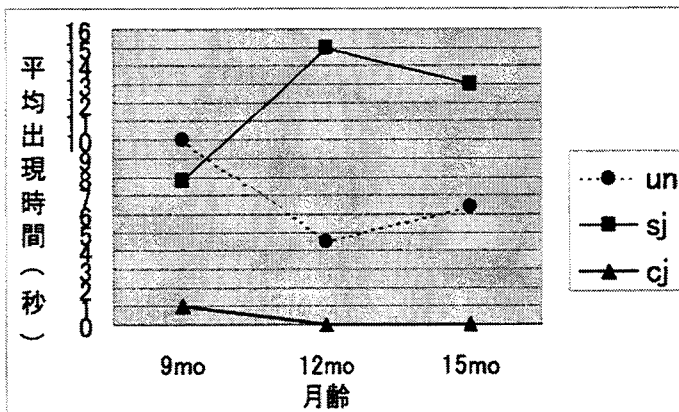


図4. 抱き場面の共同注意時間(月齢別)

次に、月齢の推移にともなう共同注意の出現時間を検討した。分散分析の結果、抱き場面においては、12か月時点での sj が 9か月時点のそれより有意 ( $p<0.05$ ) に多かった (図4)。しかし、こうした月齢差は非抱き条件では見られなかった。

<考察>

最初に、観察場面がプレイルームという制約はあるが、生後9~15か月の母子の遊び場面では、共同注意場面が多いことを指摘しておきたい。抱き条件でも非抱き条件でも、共同注意の出現時間は全観察時間の3分の2以上を占めている。この時期は、母子の視線が同一対象に向かって対象を共有する関係作りが優勢な時期であることが示唆されたといえるだろう。

抱き場面と非抱き場面の違いを見ると、抱き場面では un の出現時間が長い。母が子を抱きかかえて身体が密着している状態では、身体的な距離がある非抱き場面と比較して、相手の視線方向が読み取りにくくなり、相対的に共同注意が短くなるのかもしれない。身体接触を共有の基盤にできるがゆえに、母子には視覚的共有世界の必要性が弱くなる可能性も指摘できるだろう。抱き条件での un の出現時間の長さは、cj の出現時間の短さに対応している (図3)。これも抱き条件では身体的な距離がなく、乳児は母親の目に視線を向けにくい、あるいは身体接触による情報から視線情報の必要性が少なくなるためかもしれない。しかし、sj の出現時間はどちらの条件でもほぼ同じ水準にあり、母親は子どもの視線を読み取り、視覚的対象物の共有関係を支える足場作りをしようとしていると言えるだろう。

抱き条件での月齢推移に目を転じてみよう (図4)。9か月から12か月にかけて sj の出現時間が急増し、逆に un が

急減するのがわかる。最初の誕生日を迎え、言葉が出始める頃になると、子どもは抱かれていても母親との共同注意関係を保持しやすくなるのがわかる。生後 9 か月は他者の意図の理解が可能になる大きな発達の転機であるが (Tomasello, 1999)、身体接触場面における母子の視覚的な共有世界の様相も大きく変化する可能性が示唆される。他方、非抱き場面ではこうした発達の変化は観察されておらず、母子の自然な交流場面での子どもの共同注意は、抱き場面で変化が生じやすい特徴を備えているのかもしれない。

この研究 1 では、母親が意図的に子どもの注意を対象物に誘導する場合の共同注意行動に関しては不明である。母親が子どもの注意を切り替え、別の対象物に注意を誘導する場合には共同注意時間が短くなることを示唆する研究 (矢藤, 2000) が見られるが、抱き場面での検討は行われていない。次の研究 2 では、抱き場面での注意誘導が子どもの共同注意に与える効果を検討してみたい。

## 研究 2

### <目的>

研究 2 では、抱き場面と非抱き場面で、子どもの注意を対象物に誘導する事態での共同注意を測定し、研究 1 の課題遊び事態で自然に生じた抱き場面と非抱き場面での共同注意と比較することを目的とする。

### <方法>

**参加者** 東京都内およびその近郊在住の発達に遅れのない健康な 9 か月児 7 名 (男児 4 名、女児 3 名)、12 か月児 9 名 (男児 4 名、女児 5 名)、15 か月児 5 名 (男児 2 名、女児 3 名) とその母親、計 21 組である。母親に対しては、研究 1 と同様、実験開始前に実験内容の説明を行い、「合意書」を取り交わした。

**実験場所** 研究 1 と同様に早稲田大学文学学術院発達心理学研究室プレイルーム (約 5×4.3m) である。

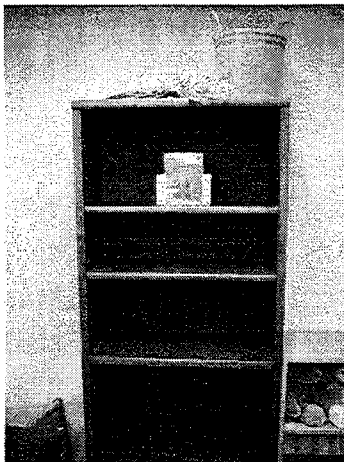


図5. 高い棚に置かれたゾウの写真

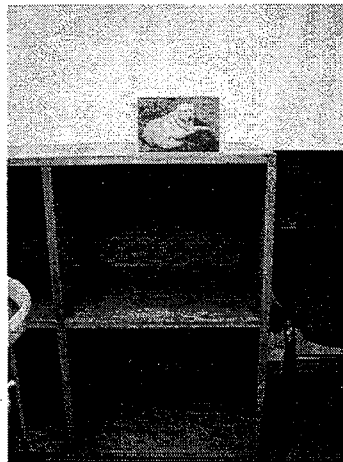


図6. 低い棚に置かれたイヌの写真

**実験場面** 母子は抱き場面と非抱き場面を含む以下の 5 種類の遊び課題場面に参加した。いずれの課題場面も 3 分~5 分程度である。①“Holding”：母親が子どもを抱き上げて子どもの注意を誘導し、高さ約 150cm の棚の上に置かれた動物の写真 (図 5) を一緒に見る (抱き場面)、②“Non-Holding”：母親が子どもを抱かないで子どもの注意を誘導し、高さ約 80cm の棚の上に置かれた動物の写真 (図 6) を一緒に見る (非抱き場面)、③“Whale”：研究 1 の“Whale”と同じ、④“Imitation”：ボタンを押すと内部の動物人形が回転する玩具を使い、例示者がボタンを額で押して見せる。子どもが模倣して額で押すかどうかを観察する、⑤“Mirror”：子どもの頬に赤い口紅をつけ、鏡像に対する反応を観察する。抱き場面 (“Holding”) と非抱き場面 (“Non-Holding”) の順番は参加者ごとにランダムに設定し、他の 3 種類の課題からランダムに選択した 2 種類の課題を両者の間に挿入した。また研究 1 と同様に、課題場面に先立って 5 分間の “Free Play” を設定した。

抱き場面でも非抱き場面でも、場面の開始時点では動物の写真は裏向きにされていた。遊びの開始後、子どもの遊びが中断した頃を見計らい、抱き場面では子どもを抱き上げ、非抱き場面では子どもに触れない状態で、動物の写真を表向きにして子どもの注意を誘導した。以降、母子ともに写真には手を触れないように教示された。

使用された動物の写真 (約 18×13 cm) はゾウとイヌであった。これらの動物が選択されたのは、子どもに人気があ

って注意を引きやすく、母子間で話題にしやすいと想定されたからである。またアニメキャラクターのように子どもによる興味のバイアスが強いことも考慮された。

**コーディング** 子どもの共同注意行動が研究1と同じコードを使って分析された。共同注意のコーディングは、写真を表向きにした母親の手が写真から離れた時点からの20秒間を対象に行われた。再度、コードのCohenの信頼性係数を独立した観察者間で検討したところ、抱き場面が  $\kappa=0.79$ 、非抱き場面が  $\kappa=0.78$  であった。

### <結果>

研究1の非統制事態でも、本研究の注意誘導事態でも、cj（協応的ジョイント）の出現時間は極めて少なかった。それゆえ、ここではsj（支持的ジョイント）とcjとを合算したものを共同注意時間とみなし算出した。次に、非統制事態と注意誘導事態における抱き場面での共同注意時間の比較、同様に非抱き場面での両事態の共同注意時間の比較を行うことにする。

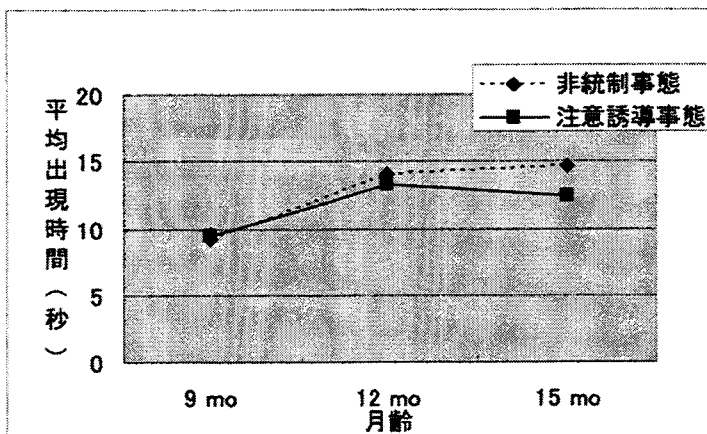


図7. 抱き場面での共同注意時間(事態別)

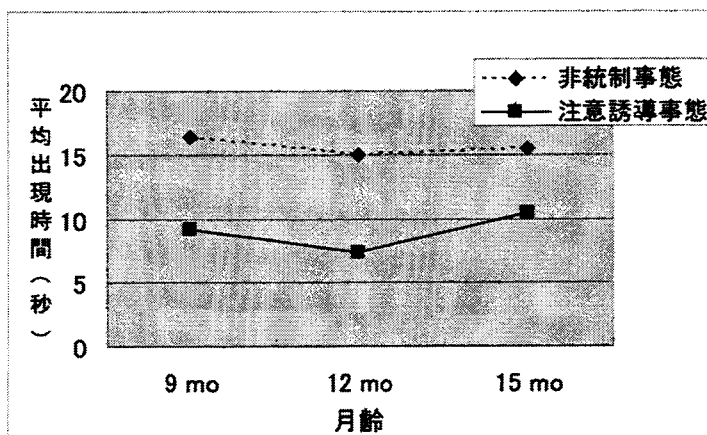


図8. 非抱き場面での共同注意時間(事態別)

抱き場面で観察された共同注意の平均時間の月齢推移を、非統制事態と注意誘導事態別に図7に示した。月齢と場面を二要因とする分散分析を行ったところ、月齢、場面ともに有意な主効果はなく、交互作用もみられなかった。抱き場面では、非統制で自然な事態と、母親が子どもの注意を意図的に誘導する事態との間で、子どもが見せる共同注意の時間には差が認められず、その違いのなさは生後9か月から15か月まで維持された。

非抱き場面でも同様な検討を行ったところ（図8）、この条件では事態に有意な主効果が認められた ( $p<.001$ )。非抱き場面では、注意誘導事態での共同注意時間が非統制事態のそれよりどの月齢でも短かった。

### <考察>

本研究では、乳児の注意を動物の写真に誘導すること、つまり注意の切り替えを母親に要請した。母親には乳児が遊びに注意を集中しなくなった場合を狙って、動物の写真への注意誘導を母親に依頼したが、非抱き条件では、注意誘導によって生じた共同注意の時間は短くなった（図8）。この結果は、注意切り替え場面では共同注意が短くなるという従来からの指摘（矢藤, 2000）を支持するデータだといえるだろう。

しかし、新たに導入された抱き場面では、これとは異なる傾向を示す結果が得られている。非統制

事態と注意誘導事態での共同注意時間に差が見られないからである（図7）。したがって、抱かれた場合には、母親が子どもの注意を切り替えて共同注意に誘導しても、子どもは母親が指示する新たな対象物への注意を向けやすい可能性が示唆される。そこには、抱くという態勢がもつ特有な働きがあるものと考えられる。例えば、子どもの注意方向を拘束しやすいという母親の側の要因、あるいは抱かれることにより母親の身体の動きや意図を感じやすくなるという乳児側の要因の関与が想定されるだろう。本研究では子どもが特定の遊びに熱中していない場面を狙って注意の切り替えを

行ったが、少なくともこうした場面では、抱きには1歳前後の子どもの共同注意を支える働きがあるのかもしれない。

最後に、抱き場面での共同注意時間は、非統制事態、注意誘導事態ともに、生後9か月から12か月で増加する傾向が図7から読み取れる。誕生日の頃になると他者の意図理解が増すが、研究1の考察でも触れたように、こうした子どもによる他者の意図理解の高まりが、自分を抱いた母親の意図に沿った共有世界の構築に寄与する可能性を指摘しておきたい。

## 総合考察

ほぼ半世紀前、Harlow & Harlow(1966)はアカゲザルの子どもを用いて、母親へのアタッチメント形成や外界への探索行動の活性化には、食欲求以上に接触慰安が重要であることを証明してみせた。霊長類の子どもは、誕生直後より母親に自らしがみつ、この身体接触欲求を充足させることが可能である。誕生直後のしがみつや移動能力を失った人間の乳児では、微笑や泣きといったシグナル行動を活性化させて母親の応答を促し、抱かれることでこの接触欲求を満たそうとする。移動能力を獲得してからは、自ら母親へ接近や後追いをし、しがみつくことで、アタッチメントと外界探索とのバランスを調整しようとする。このように他者との身体接触には、子どもの精神的安定感を支え、外界に対する能動的な注意を喚起させる機能が備えられている。

近年、人間の乳幼児を対象にして、こうした接触行動のもつ効果を実験的に検証しようとする研究が実施されるようになった。例えば、Stack & Muir(1992)は、静止した顔パラダイムを5か月児に適用し、母親がわざと無表情（静止した顔）にして対面すると、子どもはむずかり、顔をしかめ、視線回避や泣きといった反応を示し、その後、母親が普通の表情に戻っても否定的な情動を持続させること（負の持ち越し効果）を指摘した。しかし同時に、母親が子どもの身体の一部に触れている場合には、この負の持ち越し効果が軽減され、母親の表情が普通にすると微笑が出現しやすいことを見出している。うつ病の母親の子どもに静止した顔のパラダイムを適用した Palaez-Nogueras(1996)は、静止した顔をしながら子どもの身体に触れると、触れない場合より子どもの微笑や機嫌のよい発声が増えること、またこのタッチング効果はうつ病ではない母親の子どもより大きいことを報告している。さらに、母子の相互作用場面での母親から子どもへの身体接触は、子どもの機嫌をよくするだけでなく、対象物への注意を喚起させる働きがあることも知られている。

こうした研究は子どもの共同注意に対する抱きの効果を直接論じたものではない。しかし、身体接触には情動の安定を促し、対象物への注意を高める効果があることを示唆している。本研究結果は、子どもが抱かれると、共同注意の時間が減る場合（研究1）と、共同注意の出現を支える場合（研究2）があることを示している。研究1からは、自然に抱かれた場合には、抱かれない場合より共同注意以外の行動が多くなること。とりわけ、母親の顔への注意配分をとまなう協力的な共同注意が少なくなることが見出された。抱きという母子の身体接触場面では、相手の視線の方向を読み取るには距離が近くなりすぎるのかもしれない。特に、共同注意の対象物が曖昧な場合には、この傾向が強くなる可能性が高いと推測される。しかし、この困難さは発達のな変化をみせ、9か月児に比し12か月児や15か月児では共同注意の出現が増加する。最初の誕生日の頃には、子どもは相手の視線方向に対する鋭敏さを増し(Butterworth, 1995など)、母親のほうでも子どもの視線が意図性をより明確に表現するようになるため追いやさくなるのかもしれない。研究2では、共同注意の対象物が明確である場合には、抱きによる身体接触は、母親が子どもの注意を誘導するときには有効に働く可能性が示唆された。抱く人の側に乳児の注意をある対象物に誘導しようという意図が明確にある場合には、抱きという身体接触は、抱く側から抱かれる側にその意図を伝える有効な働きを備えているのであろう。この知見は、身体接触が母子間での共同注意に果たす役割をさらに検討する必要性を促している。

共同注意が子どもの精神発達にとって重要な役割を演じていることはよく知られるところとなった。それは他者との共有世界を獲得する根源的な活動であって、乳児の心が人間化の道程を歩むのに必要不可欠な行動というべきものである。それゆえ、人間の子どもの共同注意活動には、他者との関係形成に利用できるあらゆる感覚が用いられているはずである。ここで検討された抱き行動に含まれる接触感覚もまた、共同注意が生じる感覚なのである。なぜなら、盲であ

り聾でもある子どもが他者との間で共有世界を構築するためには、この接触感覚を共同注意の焦点にしなければ不可能だからである。しかし現在、大藪の聴覚的共同注意の研究（2004, 2006 など）を除き、共同注意の研究はそのすべてが joint visual attention、つまり共同注視の研究であるといつてよい。確かに、人間の心の発達の原点としての共同注意を共同注視の視点から検討し、その世界を論理的に解き明かすことは必要である。それによって共同注意が精神発達に果たす意義の多くが解き明かされることになるだろう。しかし、共同注意に聴覚や触覚が関与することが確実である以上、これらの感覚領域を研究する方法も工夫する必要がある。聴覚を用いた共同注意研究は、視覚的共同注意より難しく、触覚的共同注意の研究はそれよりさらに困難になるが、探求が必要な研究領域であることは間違いない。

### <引用文献>

- Amano, S., Kezuka, E., & Yamamoto, A. (2004). Infant shifting attention from an adult's face to an adult's hand: A precursor of joint attention. *Infant Behavior and Development*, 27, 64-80.
- Butterworth, G. (1995) Origins of mind in perception and action. In C. Moore & P. H. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development* (pp. 29-40). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Harlow, H. F., & Harlow, M. K. (1966) Learning to love. *American Scientist*, 54, 244-272.
- 熊谷高幸. (2004). 「心の理論」成立までの三項関係の発達に関する理論的考察—自閉症の諸症状と関連して 発達心理学研究 15, 77-88.
- Morales, M., Mundy, P., Delgado, C., Yale, M., Neal, R., & Schwartz, H. (2000). Gaze following, temperament, and language development in 6-month-olds: a replication and extension. *Infant Behavior and Development*, 23, 231-236.
- 大藪 泰. (2004). 共同注意—新生児から2歳6か月までの発達過程 東京：川島書店.
- Oyabu, Y. (2006). The Emergence of Joint Auditory Attention. *15th International Conference on Infant Studies, Program (CD-ROM)* 293-294.
- Pelaez-Nogueras, M., Field, T., Hossain, Z., & Pickens, J. (1996). Depressed mothers' touching increase infants' positive affect and attention in still-face interactions. *Child Development*, 67, 1780-1792.
- Stack, D. M., & Muir, D. W. (1992). Adult tactile stimulation during face-to-face interactions modulates five-month-olds' affect and attention. *Child Development*, 58, 1488-1495.
- Striano, T., & Stahl, D. (2005). Sensitivity to triadic attention in early infancy. *Developmental Science*, 8, 333-343.
- Tomasello, M., Carpenter, M., Call, Behne, T., & Moll, H. (2005). Understanding and sharing intentions: The origins of cultural cognition. *Behavioral and Brain Sciences*, 28, 675-691.
- Tremblay, H., & Rovira, K. (2007) Joint visual attention and social triangular engagement at 3 and 6 months. *Infant Behavior and Development*, 30, 366-379.
- やまだようこ. (2005). 共に見ること語ること—並ぶ関係と三項関係 北山修（編著） 共視論—母子像の心理学 (pp.73-87). 東京：講談社
- 矢藤優子 (2000). 子どもの注意を共有するための母親の注意喚起行動—おもちゃの遊び場面の分析から 発達心理学研究 11, 153-162.

### 付記

研究にご参加いただき、記録の公表にご同意いただいた参加者の皆様にお礼を申し上げます。なお、本研究は、文部科学省科学研究（課題番号：16203035, 代表者：根ヶ山光一早稲田大学人間科学学術院教授）と早稲田大学特定課題研究（課題番号：2006B-027, 代表者：大藪 泰）からの助成を受けて行われたものです。

### **The Influence of a Mother's Hold on the Joint Attention of Infants**

Oyabu, Yasushi (Waseda University, School of Letters, Arts and Sciences) & Ota, Yuka (Waseda University, Graduate School of Letters, Arts and Sciences)

This research investigated the influence of mother's hold on the joint attention of 9-, 12-, and 15-month-olds in a playroom of Waseda University. In Study 1, the emergence time of joint attention of infants was studied in a holding and a non-holding scene that appeared in several communicative play situations. The emergence time of joint attention was significantly greater in the non-holding scene than in the holding scene, and it showed an increase between 9 and 12 months of age. In Study 2, the mother directed her infant's attention to the target photo (a dog or an elephant) in order to form a joint attention in the holding and non-holding scenes. There was no difference between the emergence time of joint attention in the holding scenes of Studies 1 and 2. In the non-holding scenes, the emergence time of joint attention in Study 2 was shorter than in Study 1. These results suggested that the influence of a mother's hold might differ according to the contexts in which holding occurs, and that this hold plays a role in sustaining joint attention between a mother and her infant in a situation where the infant's attention is redirected by its mother to a target object.

**【Key Words】** Holding, Joint attention, Mother-infant interaction



# 乳幼児のオムツ交換場面における 子どもと保育者の対立と調整にみる 身体接触

村上八千世（アクトウェア研究所・早稲田大学人間総合研究センター）

## I. 問題と目的

これまでの乳幼児の排泄に関連した研究はもっぱら自立の時期やその過程・方法に言及したもの<sup>(1)(2)</sup>が多く、オムツ交換の問題にしても布オムツと紙オムツの性能比較や、子どもに与える影響を議論したもの<sup>(3)</sup>が目立ってきた。子どもの排泄の自立が遅ければ、親はそれだけ長く不快さと不自由さを強いられ、子ども連れでの外出にも大きな制約を受けることになるから研究者や保育者の関心が子どもの排泄の自立時期に向けられるのは大いに納得できる。

しかし排泄援助やオムツ交換をめぐる場面には、もっと豊かで複雑な子どもと保育者のやりとりが存在する。なぜなら子どもにとって、特に1～2歳は、意志を表現し始め、親の要求どおりにして喜ばせようとする一方で、親に逆らおうとするアンビバレントな気持ちを抱く時期であり、また保育者にとって排泄援助やオムツ交換は衛生・感覚上好ましくない「不快」の対象でありながら、かといって赤ん坊の排泄物を嫌悪して触れないままでは子育てはできない必須の親行動<sup>(4)</sup>だからである。保育者の自立させたい思惑と子どものまだ依存していたい気持ちが重なれば対立が起こりやすくなる。子どもの自立は一直線に進むものではなく、自立と依存の間を行きつ、戻りつなされていくのであり、親が自立を急いでも結局空回りになってしまうこともあるだろう。

本研究では保育者が行う子どものオムツやパンツの交換、トイレへの促し、それに伴う衣服の着脱までの一連の場面において、保育者と子どもの相互交渉を分析することを通し、次の点を明らかにする。まず、オムツ・パンツ交換場面において、子どもはどのようなパターンで抵抗を示し、また保育者は子どもの抵抗に対してどのような対策を行うのか、子どもの抵抗にはどんな意図が隠れているのか、そしてそれは子どもの発達に伴ってどのように変容するのか、分析を通じて子どもと保育者の対立と調整について考察し、繰り広げられる身体接触の意味を考える。さらにこれらを家庭と保育園で比較する。

## II. 方法

### 1. 観察対象

東京都、埼玉県、沖縄県の11箇所の保育園に通う乳幼児のうち、協力を得られた5～28ヶ月齢の24人とその保育者（親と保育士）。乳幼児たちの月齢と性別は表1に示した。

### 2. 観察期間

表1. 対象児のデータ

	幼児名	性別	撮影時	
			月齢	平均月齢
トイレ・トイレトレーニング中	YS	女	17	21.4
	AS	女	17	
	NI	女	17	
	TS	女	18	
	SN	女	19	
	KS	男	20	
	HS	男	20	
	HM	男	21	
	MM	女	23	
	MK	男	23	
	TK	男	24	
	NG	男	24	
	HNS	男	28	
KSS	女	28		
トイレ・トイレトレーニング前	MR	女	4	12.0
	WK	男	4	
	MY	女	5	
	YT	男	7	
	OM	男	11	
	ST	女	12	
	IT	男	17	
	YM	女	18	
	MS	男	19	
HJ	女	23		

2003年11月～2005年9月

### 3. 観察の手続き

観察者は各保育園と各家庭を訪問し、家庭では概ね午前中から昼食後にかけての平均4時間、保育所では概ね朝の登園時からお昼寝過ぎまでの平均5時間、対象児と保育者の様子をビデオカメラで連続撮影した。

### 4. 分析の方法

保育者が子どものオムツ・パンツを交換する場面をひとつのエピソードとして捉え分析を行った。オムツ・パンツ交換場面は、保育者が子どもに対して交換を促し始めてから、衣服を着せ終わるまでの一連の行動をエピソードの単位とした。ズボンその他の衣服の着脱、排泄行為（オマル、トイレの使用）を伴う場合はそれも含めた。エピソードの総数は家庭が49、保育園が57であった。またトイレ、オマル、布パンツを使用し始めている子どもはトイレット・トレーニング中であるとみなして、トイレット・トレーニング前（以下、トレーニング前）とトイレット・トレーニング中（以下、トレーニング中）の2つの群に分けて分析を行った。トレーニング前の平均月齢は12.0ヶ月でトレーニング中の平均月齢は21.4ヶ月であった。

映像分析ソフトはMivurix（荒川, 2005）を用いて、量的・質的分析を行った。

## III. 結果と考察

### 1. オムツ・パンツ交換時の子どもの反応

各エピソードで保育者が子どもにオムツやパンツの交換を促したときに子どもが示す反応を次の4つに分類した。

- ① 束縛に対して抵抗する：仰向けにされたり、オムツ交換中にじっとしていることに対して抵抗する。
- ② 促しに対して抵抗する：保育者がオムツを交換することを促しても、他の事に夢中になって無視したり、逃れたりして抵抗する。
- ③ ふざけながら抵抗する：保育者の促しに対してふざけ、からかいで対応する。
- ④ 抵抗しない：保育者の促しに素直に従う。

各エピソードにおいて一度でも認められたものは1回とし、複数の反応が認められた場合はそれぞれを1回ずつカウントした。

表2. オムツ・パンツ交換時の子どもの反応（%）

		束縛に対して 抵抗する	促がしに対し て抵抗する	ふざけなが ら抵抗する	抵抗しない
トレーニング前 (n=10)	家庭	10.0	0.0	20.0	80.0
	保育園	20.0	20.0	0.0	80.0
トレーニング中 (n=14)	家庭	0	78.6	57.1	35.7
	保育園	7.1	64.3	0.0	64.3
トレーニング前 (n=10)	男児 (n=5)	20.0	20.0	20.0	80.0
	女児 (n=5)	20.0	20.0	0.0	80.0
トレーニング中 (n=14)	男児 (n=7)	14.3	85.7	71.4	85.7
	女児 (n=7)	0	100.0	42.9	71.4

分析の結果を表2にまとめた。トレーニング前は家庭と保育園のどちらも、また男女とも「抵抗しない」が約8割を占めた。トレーニング中は保育園と比べ家庭で抵抗が多く、特に「ふざけながら抵抗する」は家庭のみで認められた。これらの結果は子どもが保育園では家庭よりも聞き分けが良いことを示しており、子どもが家庭と保育園で対応を変えていることがわかった。泣きや食事場面での家庭と保育園の比較研究からも同様の結果がわかっている<sup>(6)(7)</sup>。またトレーニング中は「促しに対して抵抗する」が男女とも高い割合を示したが、「ふざけながら抵抗する」のように保育者がかまってくれることを期待するような抵抗は男児によく現れるパターンであった。

次に、家庭でのみ見られた「ふざけながら抵抗する」が含まれるエピソードには、多様で複雑な親子の対立と調整が示されており、子どもが排泄やオムツ交換のタイミングを利用して親をからかったり、コントロールしようとする意図がうかがわれた。特徴的なエピソードをEp. 1に引用した。

#### 【Ep. 1 MK 男児 家庭 23ヶ月齢 トイレット・トレーニング中】

- ①(前半省略)母がMKに紙パンツを履かせるために座らせようとするが、MKは笑いながら母の体にもたれかかるようにしてねそべる。——(抵抗を楽しむ)
- ②母がMKを立たせてパンツを引き上げようとするが、MKは身体をだらりとさせたまま立とうとしない。「はいて、自分で、はいてよー」と母が言うが、MKは笑ったままだらりとしている——(抵抗を楽しむ)
- ③母は「やなの? やなの? じゃいいや」といって話題を食事のことに変えて、テーブルの上の食事を片付けようとする。MKは「う〜ん〜」といってぐずりだす。——(母の関心を引き止める)
- ④母はねそべっているMKの紙パンツをひきあげるが、MKは笑いながらそれをひきさげる。——(抵抗を楽しむ)
- ⑤母があきらめて立ち上がろうとすると、MKはさらにぐずりながら、母のひざに頭をのせる。——(母の関心を引き止める)
- ⑥MKは母に「『いないいないばー』やって」と頼み、母はそれに付き合う。母のひざまわりで「いない、いない、ばー」であそぶ。MKは機嫌がよい。——(母と遊ぶ)
- ⑦母が「早く服着て、ブロックやろうよ」とパンツをあげようとする、「ん〜、ん〜」とぐずりながらさげふ。母が立ち上がると、MKは手足をバタバタさせて痾癢をおこす。——(母の関心を引き止める)
- ⑧母は一旦別の部屋へ去るが、MKはまだ寝そべったままじっとしている。母が戻ってくるとMKはにこりと笑うがすぐに再び足をバタバタさせる。——(母の関心を引き止める)
- ⑨母がMKの身体をくすぐって、「いそげ、はやくしないと、はやくしないと」と言いながら無理にMKのパンツをあげると、MKは笑いながら抵抗を緩める。——(母と遊ぶ)
- ⑩母は一気に上着をきせ、ズボンも着せる。MKは自分で立ち上がって機嫌よく玄関のほうへ歩いて行く。——(やりとり終了)

①から⑩までのように、子どもは親への抵抗を楽しみ、親の関心を引きとめようとぐずり、母と一緒に遊ぶ。これらを何度も繰り返しながらようやく紙パンツをはき、その他の衣服も身につけた。子どもは母親とのやりとりをできるだけ長引かせて、交渉を楽しんでいた。一方、母親は時には子どもの誘いに載って関わり、時にはあきらめたふりをして子どもを放置し、母親自身の目的を達成するチャンスをうかがい、親子で駆け引きを繰り広げていた。オムツやパンツの交換は、親にとって放置しておけない作業であり、子どもが抵抗したからといって簡単に譲ることのできない作業である。さらにこの時期の子どもはパンツや衣服の着脱が自分でもある程度できるようになっており、親は子どもの能動性を尊重しながら目的を達成したいと試みる。子どもはそういった親の意図を敏感に察知し、抵抗の度合いやぐずりのタイミングを見計らっていると考えられる。子どもはふざけることで、親の子への接触を誘発させ、またそうなることを期待していることがやりとりから読み取れる。

また、子どもは親の関心を得たいときに、「おしっこ」や「うんち」の言葉を用いることがある。Ep. 2はその特徴的な事例である。

#### 【Ep. 2 TK 男児 家庭 24ヶ月齢 トイレット・トレーニング中】

TKは両親の近くでひとりで遊んでいる。父親はTKのすぐ横で新聞を読み、母親はTKに背を向けてテーブルに座って真剣に用事をしている。TKは両親のほうに視線を向けながら、子ども用の椅子を倒して大きな音を立てる。しかし両親はまったくTKのほうへ関心を示さない。TKは何かぼそぼそとつぶやくが、両親はやはり反応しない。次にTKは「おしっこでちゃった」とつぶやく。その途端に、両親は同時にTKのほうに身体を向けて問いかける。母は「でちゃった？ トイレいこうか？」と、父は「よしいこう」と言ってトイレまで一緒に行く。しかし、TKは実際はおしっこをしていない。トイレで父がTKを便座に座らせて排尿を促すが、TKは「おしっこでない、おしまい」「おしっこでない、でない、でなない！」と大きな声で叫ぶ。・・・父が便座からTKをおろしてパンツをはかせる。TKは鼻歌を歌いながらパンツをはき、居間に戻る。

子どもは排泄にまつわる言動が親の気を引くために大変有効であることを経験上知っていて、強力な武器として、「おしっこ」や「うんち」の言葉を使っているように思える。この言葉を発すれば、どんなときでもすぐに保育者は駆け寄ってきてくれるという確信を持っているように感じられ、うまく大人を操作して、関心を引きつけたことに満足しているかのように思われた。これは裏返せば、親が子どもの排泄に関心が高いからこそ成り立つ現象でもある。

## 2. 子どもの抵抗に対する保育者の対策パターン

子どもの抵抗に対して、オムツやパンツ交換の間おとなしく従ってくれるように保育者が子どもに行う対策には次の7種類が認められた。

- ① 子の気を紛らわせる：子どもにオモチャなどモノを持たせる、テレビを見せる、保育者が歌や、「びちょ、びちょ、びちょ、びちょ」のような擬態語や子どもの名前を発声し、子どもの気を紛らわせる方法。
- ② 子の身体を押さえる：オムツ交換の間じっとしてられない子どもを身体的に押さえる方法。
- ③ いいきかせる：「ぱっちいね」や「あーはずかしいねー」などの説得、「換えたら公園に行こうね」などの条件や見通し、「気持ち悪いねー、出たのー？」など子どもの意見を求めるような言葉かけで子どもに説明する方法。
- ④ 課題を与える・おだてる：子どもに「自分でできるかな？」と課題を与えたり、ウルトラマンなどのキャラクターを利用して関心を引いたり、「かっこいいなあー」「やったねー」などおだてて子どもをその気にさせる方法。
- ⑤ おどかす・放置する：「おしり隠さないとムシムシがくるよ」などとおどかしたり、子どもを放置・無視することで不安をあおる方法。
- ⑥ 遊びを利用する：子どもの身体をマッサージしたり、くすぐったり、笑わせたり、子どもの遊びに参加してチャンスをうかがう方法。
- ⑦ 対策なし：抵抗がないために対策する必要がない場合。

各エピソードで一度でも確認されたものは1回としてカウントし、複数の対策が見られた場合はそれぞれを1回ずつカウントした。対策は子どもの抵抗が起こる前に行われることもあり、事前の対策も含めて分析している。

分析の結果を表3に示した。トレーニング前は家庭と保育園で同じような傾向を示しており、「子の気を紛らわす」方法がよく用いられていた。この方法はあらかじめ対策されることが多く、子どもの抵抗が起こる、起こらないにかかわらず行われていた。表2で示したように、トレーニング前の子どもは「抵抗しない」が多かったが、事前対策として「子の気を紛らわす」方法が行われていることが多く、効果も高かった。「子の気を紛らわす」方法で子どもの抵抗が収まらない場合には「子の身体を押さえる」など他の方法を組み合わせることが多かった。トレーニング中は家庭でも

保育園でも「言い聞かせる」「課題を与える・おだてる」方法が頻繁に行われていた。子どもは1歳ごろから言葉を獲得し始め<sup>(8)</sup>、2歳ごろからは急速に会話が上手になり始めるため<sup>(9)</sup>、早くしつけをしたい保育者は言語的な対策を用いて言い聞かせると考えられる。またこの時期の子どもは親の要求どおりにして喜ばせようとする一方で、親に逆らおうという相反する気持ちを持っている<sup>(10)</sup>。「課題を与える・おだてる」方法はこういった子どもの性質を利用して保育者が用いていると考えられる。家庭におけるトレーニング中の子どもは保育園に比べ複数種類の対策がとられており、中でも「おどかさ・放置する」や「遊びを利用する」方法は家庭で多く見られた。これらの対策は他の対策で子どもが従わない場合に示されることが多かった。子どもの抵抗がエスカレートし、長引くのは子どもが親とのコミュニケーションや接触を引き出すための方略であり、親は早くオムツやパンツの交換を済ませたいがためにあの手この手を使って対策しようとしていると考えられる。保育者はトレーニング前と後を通して、男児に対しては「遊びを利用する」対策をよくつかっており、表2の「ふざけながら抵抗する」が男児に多いことと対応している。この対策もやはり子どもが親とのやりとりを長引かせようと頑固に抵抗を示す場合に用いられており、親子間の駆け引きや、お互いをコントロールするための手段として用いられていた。

表3. 子どもの抵抗に対する保育者の対策 (%)

		子の気を紛ら わせる	子の身体を押 さえる	言い聞かせる	課題を与え る・おだてる	おどかさ・放 置する	遊びを利用す る	対策なし
トレーニング前(n=10)	家庭(n=10)	80.0	20.0	30.0	20.0	10.0	20.0	10.0
	保育園(n=10)	80.0	30.0	50.0	30.0	0.0	10.0	10.0
トレーニング中(n=14)	家庭(n=14)	57.1	42.9	78.6	92.9	64.3	42.9	0.0
	保育園(n=14)	57.1	28.6	92.9	92.9	7.1	7.1	0.0
トレーニング前(n=10)	男児(n=5)	100.0	40.0	60.0	40.0	20.0	60.0	40.0
	女児(n=5)	100.0	40.0	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0
トレーニング中(n=14)	男児(n=7)	100.0	57.1	100.0	100.0	85.7	71.4	0.0
	女児(n=7)	57.1	71.4	100.0	100.0	57.1	14.3	0.0

#### IV. 総合考察

トレーニング前の子どもはオムツ・パンツ交換時に抵抗を示すことが少ないが、トレーニング中の子どもは家庭においてよく抵抗を示した。特に「ふざけながら抵抗する」ことが家庭に特有で、親子のやり取りの豊かさを示している。トレーニング中の子どもは家庭に比べ保育園で聞き分けがよく、この時期において既に家庭と保育園での態度の示し方を使い分けしているといえる。

家庭での親子の対立と調整は実に豊かで、子どもはオムツ交換場面で抵抗を試みることによって、親との身体接触の機会を増加させたり、やりとりを長引かせることを楽しみ、同時に大人を操作して、思い通りに動かすことで満足感を得ていた。子どもが発する「おしっこ」「うんこ」などの排泄にまつわることは、親子のやり取りの中で、親をコントロールすることにおいて、相当に強力な効果をもっていた。子どもはこれを行って意図も簡単に親たちを思い通りにできることを楽しんでた。トイレット・トレーニングの時期にある子どもは、既に食事場面など他の生活面では概ね自立を遂げていることが多く、排泄は自立の最終段階に当たるといえる。子どもは何でも自分でできるようになれるうれしさと、まだまだ親に依存して甘えていたい気持ち、親から離れていく不安を入り混じって抱えているといえる。

男児とのやりとりに「ふざけながら抵抗する」が多く、「遊びを利用する」という対策を保育者がとるのは、先行研究でも明らかにされている性差の問題が現れているからだと考えられる。特に母親は男児の自己主張的行動を容認する

傾向があり<sup>(11)</sup>、男児との情緒的調和を重視するために不調和や対立に特に注意を払う傾向があるとされている<sup>(12)</sup>。子どもは親を操作すると共に親の自分への愛情を確かめているのかもしれない。オムツ・パンツ交換場面での子どもの抵抗に対する保育者の対策は子どもがトレーニング前とトレーニング中では示され方が異なっており、子どもの発達に伴って対策も変容すると考えることができる。トレーニング前のまだ子どもの抵抗が少ない時期には、事前対策として「子の気を紛らわせる」方法が用いられ、子どもの言語発達が進むに従って「言い聞かせる」方法が示され、子どもの意志がはっきり現れてくるに従って「課題を与える・おだてる」方法で、子供の意欲をかき立てながらコントロールし、子どもが強固に抵抗を示すようになると「おどかす・放置する」や「遊びを利用する」方法を用いるようになり、保育者と子どもとの駆け引きが盛んになって行くと考えられる。子どもの生活面での自立が進むと、自ずと親との接触機会も減少してゆく。子どもは減少した接触機会を取り戻そうとしているのかもしれない。

このように排泄やオムツ・パンツ交換をめぐる場面には、子どもの健康や衛生面の問題だけでなく、親子の絆を確かなものにするための重要なやりとりが存在する。排泄の自立をむやみに早く望むのではなく、こういったやりとりの意味を改めて考え直し、この貴重な時間を大いに楽しむべきである。

## 引用文献

- (1) 帆足英一 (1995) トイレトレーニング. 二木武・帆足英一・川井尚・庄司順一 (編) 小児の発達栄養行動: 接触から排泄まで——生理・心理・臨床 新版. 医歯薬出版. pp. 215-235
- (2) 矢倉紀子・広江かおり・笠置綱清 (1993) 乳幼児の排泄自立に関する要因の検討——三歳児の排便トラブルについて. 小児保健研究. 52, 599-602
- (3) 帆足英一 (1986) 紙オムツの排泄生理・生活リズムに及ぼす影響について (第2報)——卵性双生児における紙・布オムツの比較使用. 小児保健研究. 45, No. 2 p. 133
- (4) 根ヶ山光一 (2003) 食べる・排泄する. 根ヶ山光一・川野健二 (編) 身体から発達を問う 衣食住のなかのからだところ. 新曜社. pp. 21-36
- (5) 根ヶ山光一 (2001) 子どもの身体から発せられるものへの親による嫌悪の発達の变化. ヒューマンサイエンス. Vol. 13
- (6) 根ヶ山光一・河原紀子・福川須美・土谷みち子 (2005) 家庭と保育園で1歳児の行動はどう切り替わるか: (1) 定常場面における泣き. 日本保育学会大会発表論文集
- (7) 河原紀子・根ヶ山光一・福川須美・土谷みち子 (2005) 家庭と保育園で1歳児の行動はどう切り替わるか: (2) 食事場面における拒否・泣き・制止. 日本保育学会大会発表論文集
- (8) ブルーナー, J.S./寺田晃・本郷一夫 (訳) (1988) 乳幼児の話しことば——コミュニケーションの学習. 新曜社
- (9) 岡本夏木 (1999) 言語発達研究を問い直す. 中島誠・岡本夏木・村井潤一 ことばと認知の発達 シリーズ人間の発達 7. 東京大学出版会. pp. 140-198
- (10) 牛島定信 (2000) 現代精神分析学. 放送大学教育振興会
- (11) Hinde, R., & Steavenson-Hinde, J. (1987) Implications of a relationships approach for the study of gender differences. *Infant Mental Health Journal*, 8, 221-236
- (12) Biringer, Z., Ende, R.N., Brown, D., Lowe, L., Myers, S., & Nelson, D. (1999). Emotional availability and emotion communication in naturalistic mother-infant interactions: Evidence for gender relations. *Journal of Social Behavior and Personality*, 14, 463-478

## 付記

本研究は、日本発達心理学会第18回大会(2007.3)にて発表され、保育学研究 2007年 第45巻 第2号に採択された(印刷中)。本報告は「保育学研究」への掲載論文を元に作成したものである。

## 謝辞

本研究の観察にご協力いただいた子どもたちとご家族、保育園の先生方に心からお礼申し上げます。

## <英文要旨>

### Toddlers' Refusal Behaviors and Caregivers' Intervention and bodily touch in the scene of exchanging diaper

So far the focus has been on research of toddler's excretion independence time and diaper performance. But there has been little research that pays attention to communication between toddler and caretaker at the scene of changing diaper. This research analyzed exchange scene in the nursery school and the home by video pictures. When exchanging it, toddlers more resisted their caretakers in the home than the nursery school. The caregivers were using more various measures for their toddler in the home. Toddlers may use the time of diaper change to control parents. Toddlers are using the attitude to their parents and child care person in the nursery school properly. Since toddlers who in the time of toilet training can almost support themselves on the daily scene, for example eating, walking etc., chance of bodily touch with caregivers was gradually decreasing. Toddlers may try to get back the chance by refusal behavior in the scene of exchanging diaper.

# 日英の保育園における寝かしつけ時の身体接触の比較

根ヶ山光一（早稲田大学人間科学学術院）・河原紀子（共立女子大学  
家政学部），広瀬美和（早稲田大学人間科学研究科），  
Niki Powers（Edinburgh大学心理学科）

## 目 的

母子関係において、身体接触が重要な役割を担っていることは言うまでもない。それは、アタッチメントが母性的人物に対する接近・接触の維持を志向する傾向であるということに如実に示されている。そしてそれは、子どもを鎮静させたり安定させたりする効果がある（Hallstrom, 1968; Stack, 1990）という身体接触のもつ機能と深く関係する。その相手を安心させるという機能は、握手や抱きしめなどの挨拶・和解行動として身体接触が用いられていること（deWaal 1989）とも無関係ではない。

そういった身体接触の機能は、これまで覚醒時の子どもの行動から指摘されてきたが、むしろそれは、睡眠時あるいはその導入段階である入眠時にこそ発揮されるものかもしれない。ところが、睡眠が長時間にわたる安定した分離をもたらす重要な行動である（根ヶ山, 2002）という認識にたてば、養育者は子どもが寝てくれることによって自分の時間を確保することを望むであろう。したがって子どもに眠気の兆しが認められれば、養育者は早く寝つかせて子どものそばから離れようとするかもしれない。そして早く寝つかせるための方略として、身体接触を多用するかもしれない。一方、子どもは寝つくことで休息をえるが、同時にそれは養育者との分離をもたらす事態として、アンビバレントな意味を帯びているかもしれない。そうだとすると、寝かしつけ時の身体接触には、複雑な意味が交錯することも考えられる。

西欧で、子どもは夜間に親から離されて別室で寝かされることが多い。子どもはそれに抵抗して泣き、親と同じベッドで寝ることを勝ち得ることもある。co-sleeping とか bed-sharing といわれる親子の「共寝」の問題は、最近になって乳幼児突然死症候群（SIDS）の問題が小児科領域でクローズアップされるにつれて注目されてきているが、（Willinger, Ko, Hoffman, Kessler, & Corwin, 2003），それは実は夜間就寝時における子どもの身体接触の問題でもあるのである。分離就寝を強いられた子どもがそれに泣いて抗議し、親が根負けして子どもを自分たちのもとに連れて来るということ（Keller & Goldberg, 2004），あるいはイスラエルのキブツで、最近子どもが夜間には親の元に返されてそこで就寝するようになったということ（Aviezer, Van Ijzendoorn, Sagi, & Schuengel, 1994; Sagi, van Ijzendoorn, Aviezer, Donnell, & Maysel, 1994）それらはいずれも、就寝時の子どもが養育者とくに親との身体接触を強く求めることの傍証であろう。

本研究は、このように複雑で両価的な入眠時の養育者と子どもの身体接触を、保育園の午睡場を舞台にして研究する。午睡時の寝かしつけにおいて子どもがいかに保育士と身体接触を求めるか否か、またそれを保育士が充足させるか否か、が注目される。本研究ではとくに、その場面を日英で並行して観察し、そこにいかなる文化差があるか、を明らかにすることも主たる目的の一つである。そして、それを通じて、子どもの就寝とその導入における養育者と子どもの関係から、子どもの自立過程とその文化差を検討する。なおこの研究は、本論文の執筆者が数年にわたって共同で行ってきている「家庭と保育園間での子どもの場面移行」に関する共同研究の一部でもある。



## 方 法

研究協力者 (表1) : 日本 (埼玉県・東京都・沖縄県) と英国 (Edinburgh) において保育園に通う乳幼児それぞれ8名と11名。日本の8名の月齢は17.13±2.80ヵ月で、そのうち第1子であるものが5名であった。性別は男女児ともに4名。一方英国の11名の月齢は17.09±6.33ヵ月で、そのうち第1子であるものが8名であった。性別は男児が8名、女児が3名。

表1 観察対象児

	観察時点での月齢	性	出生順位
英国1	23	m	1
英国2	16	m	2
英国3	6	f	2
英国4	25	m	1
英国5	10	m	3
英国6	19	m	1
英国7	18	m	1
英国8	13	m	1
英国9	17	f	1
英国10	29	f	1
英国11	18	m	1(双生児)
日本1	17	m	2
日本2	11	m	1
日本3	20	m	1
日本4	17	f	4
日本5	18	f	1
日本6	19	f	1
日本7	19	m	1
日本8	16	f	1

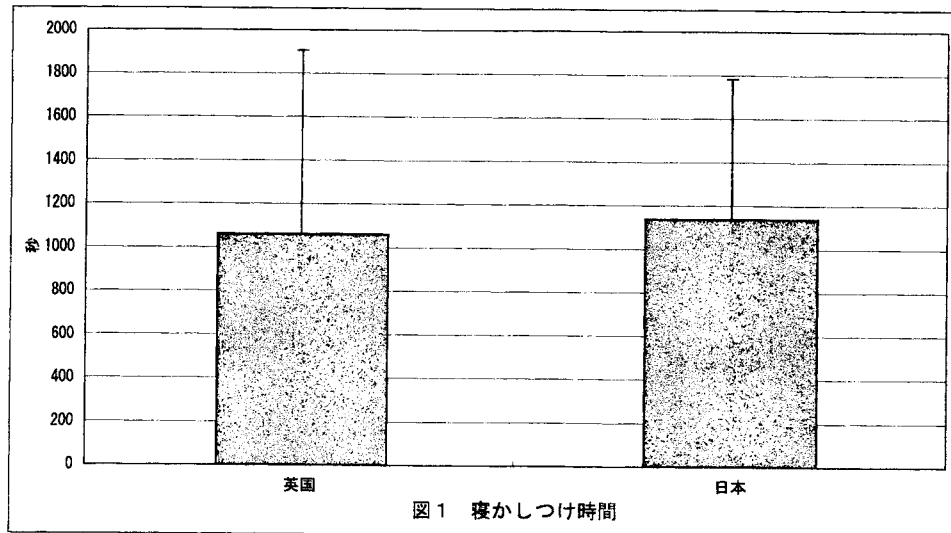
先述の通り本研究は、家庭と保育園間の場面移行の研究を部分的に兼ねており、その目的のために保育園が選ばれ、そこで園を通じて接触し、こちらからの依頼を受け容れて同意書を提出してくれた親の園児が観察対象とされた。日本・英国ともに標記の園児数以上の子どもが観察されたが、午睡が保育園で観察されなかったケースもあり、また日本の園児に関しては分析未了のケースも含まれ、本稿の段階では合計19名に留まっていることを断っておく。

観察手続き : 上記の通り家庭と保育園を比較するという目的で、保育園において朝の登園時から最長で夕方の降園時まで (最短で午睡の入眠完了時まで)、子どもをビデオカメラによって連続撮影した。撮影時、撮影者はなるべく目立たないようにふるまい、子どもの普段の様子をありのまま撮影することをこころがけた。一部の園児については、その観察と近接した別の日の同じ時間帯に家庭も訪問し、同様の撮影を行ったが、それについては機会を改めて報告することとし、本報告では保育園での午睡の場面だけを分析した。

寝かしつけの開始から終了までが本分析の対象である。寝かしつけとは、布団やベッド・バギーへの子どもの横たわり、もしくは保育士によるそれを志向した抱き揺すり、といった睡眠に直接関係する行動の開始をそのスタートとし、単に布団を敷いたりカーテンを引いたり消灯したり、もしくは着替えたりといった行動は、必ずしも睡眠に直結しないということでその開始とはしなかった。ただし、一旦寝かしつけが開始されても、結局子どもが寝入らなかったケースは、入眠の分析からも除外した。上記の分析対象者数は、全観察事例のうちそれらの条件をクリアしたものの数 (日本に関しては前述の通り、未分析資料有り) である。

## 結果と考察

寝かしつけは、必ずしも園児が眠気を催したその瞬間から開始されるというものではなかった。眠気を催しても直ちに寝かしつけられるものではなかったし、また保育園という状況では一定のルーティンの流れのなかで午睡が設定されており、それにしたがって寝かしつけが実行されていた。



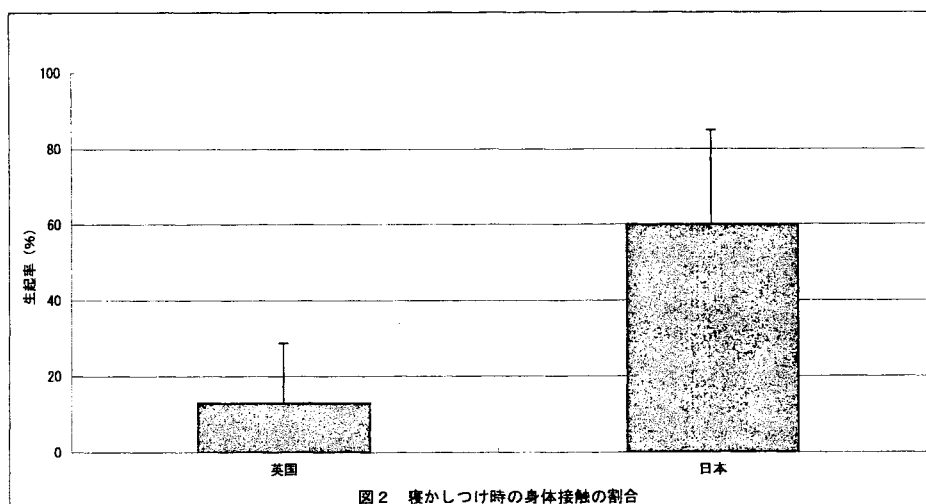
観察手続きのところでも述べたとおり、保育士が午睡の準備態勢に入っても子どもは必ずしも寝入りに容易には導かれず、遊びに興ずることもあった。それは、遊ぶ場所と就寝の場所が重複していて、その場に布団を延べることが午睡の場面への移行となる日本の保育園においてしばしば見られたことであった。他方英国の保育園では、「ベッドルーム」に当たるベッドが並べられた部屋が独立にあり、ある程度以上の月齢の子どもは午睡時その部屋のベッドに入れられた。年少の子どもは午睡時にバギーに入れられ、施設内もしくは施設の園庭に一人で置かれた。それらの場面は、遊びの継続が可能な日本の保育園とは異質な場面であった。

上記のような操作的定義で切り取られた寝かしつけ時間の長さには、個体差は大きかったが、日英で有意な差はなかった(図1)。英国では必ず、そして日本ではその多くで、保育士が睡眠への導入を助けていた。しかし同時に日本では、子ども自ら布団に横たわるなどして、自主的に眠りに入る様子もしばしば見られた。

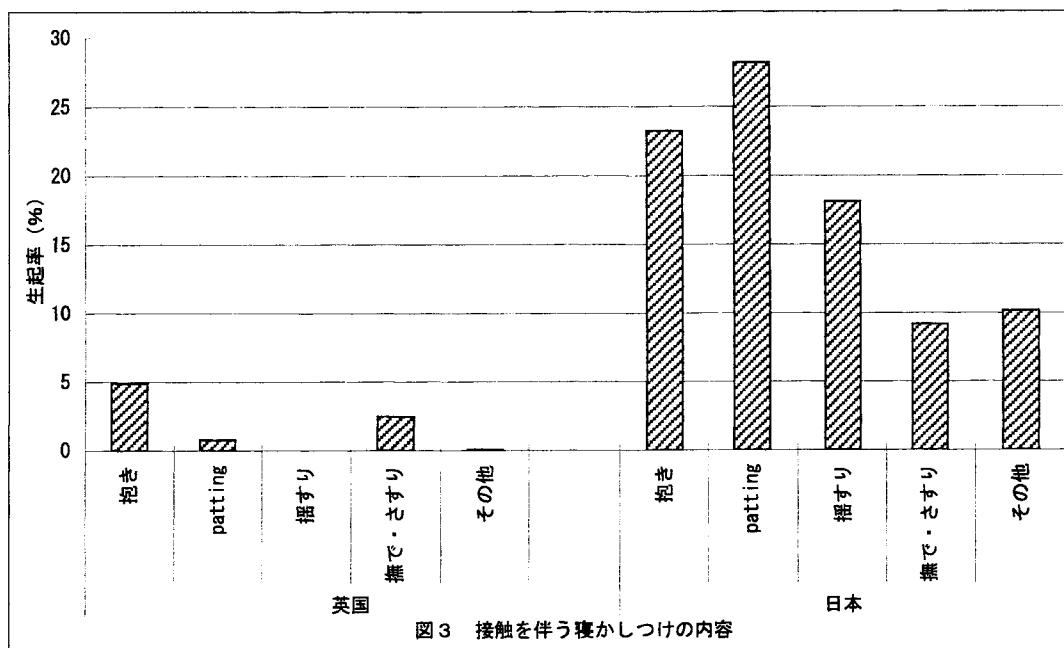
ところが、その寝かしつけにおいて、保育士がどの程度子どもと身体接触をとっていたかを日英で比較してみたところ、両国には明らかな差が見られた(図2)。ここで言う生起率とは、まず寝かしつけが行われた時間内での、身体接触を伴う寝かしつけ行動の比率を各園児毎に求め、それをもとに国別に平均値を算出したものである。寝かしつけ時間が園児によって大きくばらついているため、そのようにすることで特異な個体の特徴が全体の傾向を歪めることをなるべく排除した。そうして比較したところ、日本の保育士の方が子どもの午睡時により多くの身体接触を与えていた(Mann-Whitney  $U = 84$ ,  $P = .001$ )。また英国の保育士には、子どもが寝入る前に子どものそばを離れるという行動がしばしば見られた。

身体接触を伴う寝かしつけが多いということは、日本の保育士がその時間帯において、他の用事をしないで子どもに付きっきりになりがちであるということの意味する。その一つの便法として、両手を用いて一度に2人の子どもに同時に身体接触を与えつつ寝かしつけることが日本の保育士に特徴的に見られていた。それはルーティンとして「午睡」の時間が設けられ、皆一斉に寝かしつけ

られるという日本の保育事情と関係していた。逆にいうと、英国の保育は齊一化が希薄で、保育士は子どもとの密着度が低く、その分だけ子ども以外のことに時間を割いていて、相対的に保育士本位の行動をより強くとしている可能性がある。なお英国においては、出生順位が低い（出生が遅い）ほど接触率が高いという傾向が指摘できた ( $r = .667, P = .033$ )。



身体接触的コミュニケーションの一つの大きな特徴として、全身のどの部位を用いても行えるし、また相手の全身のどの部位をも対象化できる、という点がある（根ヶ山，2002）。その結果として身体接触には、多種多様な行動パターンが生み出される。実際に本研究で観察された寝かしつけの場面でも、さまざまな身体接触行動がみられた（図3）。図の生起率の算出方法は、先と同じである。



身体接触の頻度自体が英国では少ないものの、抱きの相対的な多さは両国に共通に見られた傾向であった。日本ではそれ以外に patting と揺すりが頻発していたが、英国ではそういう多発傾向は認められなかった。日本の場合、揺すりについては必ず、そして patting についてもその大半が、抱きともなっていて行われていて、身体接触の程度が強かった。一方、英国の抱きにはそれらの行動は随伴せず、それどころか揺すりについては発現自体が皆無であった。Patting も、ベッドに横臥した子どもに対して向けられていて、身体接触は相対的にわずかだった。また英国では抱き以外に撫で・さすりがある程度の頻度で見られ、その一部は指の背側で爪によってなされた。日本でも撫で・さすり行動は見られたが、他の接触行動と比べて相対的に少なかった。また日本でのもう一つの特徴は、抱きと patting と揺すりとがセットで発現する頻度の高かったことがあげられる。

さらに、「その他」の頻度にも大きな文化差が見られ、英国ではそれがほとんど発現しなかったのに対し、日本では「搔く」「髪をくしけずる」「さする」「手を置く」「シーソー遊びをする」「オンブする」などさまざまに多様な行動が見られた。それらの多くについても、抱きに伴って発現した。

これらの身体接触行動は、抱きという保持行動を除いて、その多くが手によって子どもの身体を一定のテンポで反復的に刺激したり振動させたりするという要素をもっていることを共通の特徴としていた。このような行動の反復性は、子どもの睡眠を誘発する上で重要な機能をもっているに相違なく、そのテンポを行動学的に解明することはきわめて興味深いテーマである。

それらの身体接触行動は、どこにでもランダムに向けられるのではなく、行動ごとによく向けられる身体部位というものが指摘できた。

「抱き」や「揺すり」は、その行動からして自ずと全身が対象となるが、「patting」と「撫で・さすり」は子どもの身体の一部に選択的に向けられた。もちろん、「搔く」「髪をくしけずる」「さする」「手を置く」などといった行動も限られた部位を対象に発現したが、ここでは発現頻度の高かったそれら二つの行動に限って、対象部位を検討する。

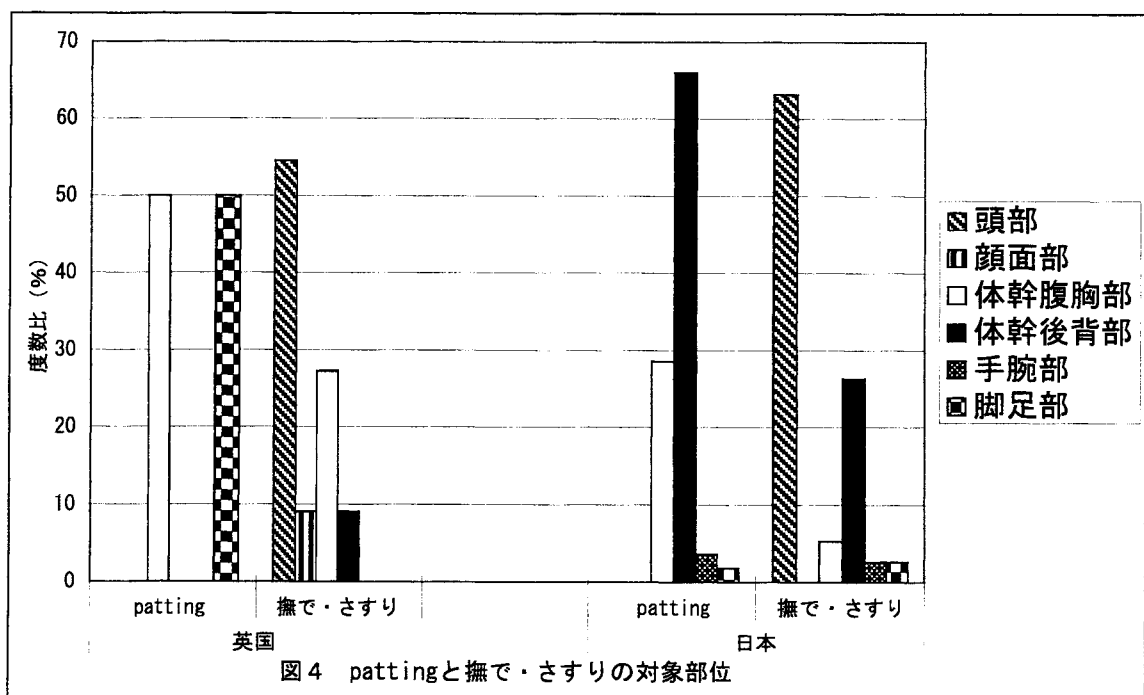
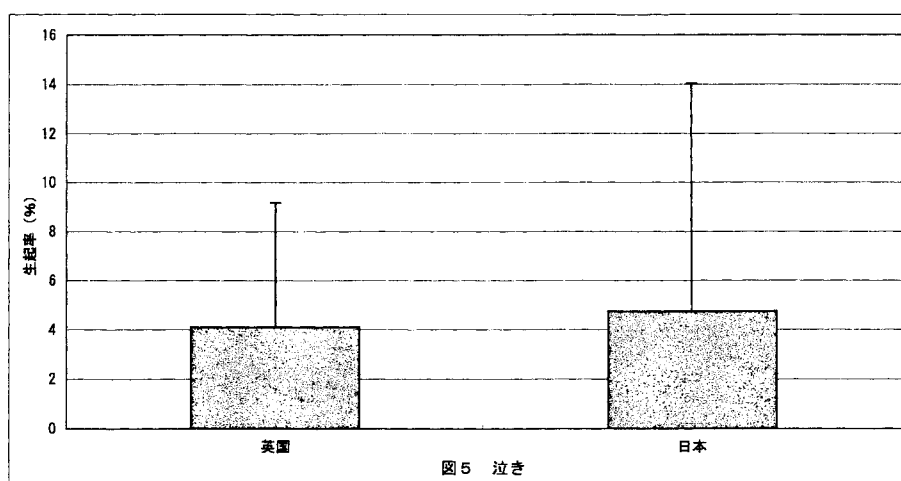


図4は、それら2種類の行動に関して、日英別にそれぞれの行動の対象部位の内訳を、その持続時間の長短は無視し発現バウト数の割合として、頭部、顔面部・体幹腹胸部・体幹後背部（臀部含む）・手腕部・脚足部に分けてパーセンテージで示したものである。

まず撫で・さすりは、日英ともに頭部に圧倒的に多く向けられていた。その一方で、日本ではそれが体幹後背部にもある程度の頻度で発現したのに対して、英国ではむしろ腹胸部に多く見られた。日本では patting も後背部に向けられることが多く、背中が寝かしつけの反復的刺激のターゲットとしてよく用いられていることを示していた。ところが英国では、同じ体幹でも後背部よりも腹胸部が接触行動の対象とされることが多かった。なお、四肢は寝かしつけの接触行動の対象としては明らかに選ばれにくい部位であった。その一つの理由として考えられるのは、手足が身体の可動部であり、そこに身体接触を向けることは行動の単調な反復を損ねるという可能性である。それ以外に、手足は背中や体幹部と違って形状が複雑であり、掌による単純な撫で・さすりや patting になじみにくいという可能性もある。



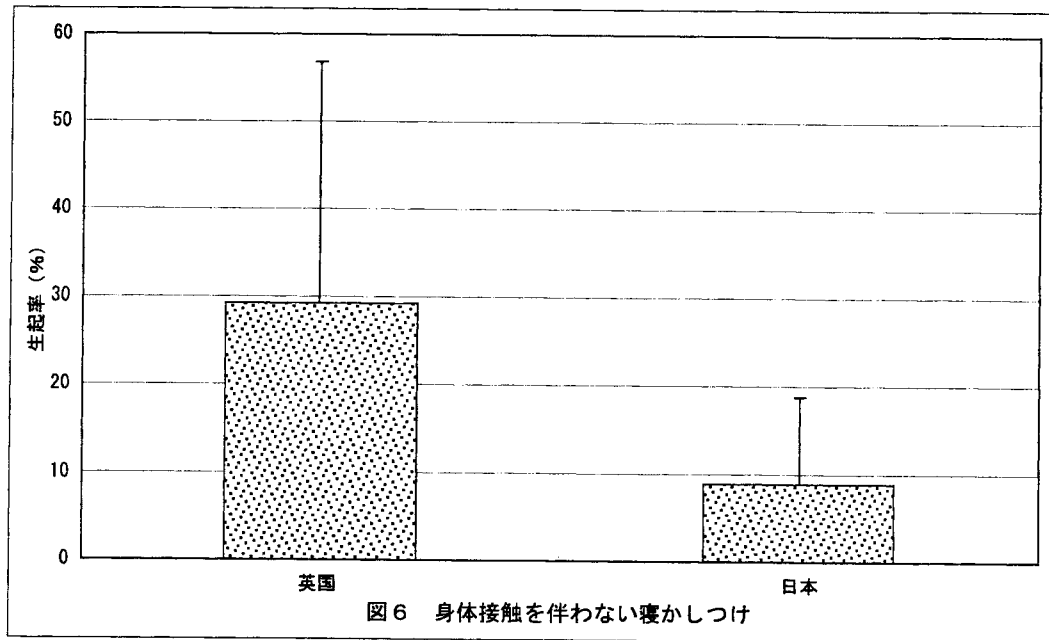
このようにして寝かしつけられる際に、子どもはしばしば泣いた。眠気を催すということ自体が子どもにとって不快であるという可能性もあるが、それ以外に、就寝が保育士等との分離や行動の制限など、不快なことを強いられるためという可能性も大きく、その学習による行動とも考えられる。

寝かしつけ時の保育士による身体接触は、そういった不快を軽減させ、安心して入眠させる効果をねらってなされていると考えられる。とすれば、保育士がそのために自分に寄り添ってくれている日本の状況の方が、子どもは泣きにくいのではないかと。

そのようなことを想定して、寝かしつけ時における泣きの生起率を2国間で比較した(図5)。その結果は、やはり個体差が大きかったが、予想に反して統計的にはその差は有意でなかった(Mann-Whitney U = 41, NS)。

そのことを理解する上で興味深い文化差が、観察から指摘できた。身体接触的寝かしつけ方略を相対的にとりにくい英国の保育士は、だからといって子どもを放置しているわけではなく、非接触による寝かしつけを多発させていたのである(Mann-Whitney U = 70, P < .05, 図6)。この寝かしつけ行動は具体的には、子どもをバギーもしくはベッドに入れ、そのバギーやベッドを反復的に揺するというものであった。つまり、そういった「モノ」を介在させ、それらのモノを揺ることによって、間接的に子どもに反復的な振動を与えていたのである。この事実は、子どもへの間身体的親

け行動は具体的には、子どもをバギーもしくはベッドに入れ、そのバギーやベッドを反復的に揺するというものであった。つまり、そういった「モノ」を介在させ、それらのモノを揺ることによって、間接的に子どもに反復的な振動を与えていたのである。この事実は、子どもへの間身体的親密度における日英の文化差の存在と、子どもの入眠における単調な反復的身体刺激のきわめて高い有効性とを、ともに示すものである。子どもには、入眠時に身体をあるテンポで単調に刺激されることへの強い欲求があるらしいことが、このことによってもあらためて示唆される。



家庭の観察から根ヶ山は、英国では日常的に、生後6か月以降の子どもが入眠時に覚醒したままベッドに入れられて一人でおかれるのに対し、日本では1歳を過ぎても寝入ってしまうまで親が身体接触を与え続けることを見いだした(根ヶ山, 1997)。また西欧の家庭に比べて日本の家庭では、同室就寝が発達的に長い期間にわたって続く(Caudhil & Plath, 1966)という知見も、夜間の睡眠と親子の身体接触における文化差の存在を示唆している。そのような親子間での入眠・就寝の文化差と平行した差違が、保育園における午睡時の保育士と園児間にも見られたことになる。

冒頭にも述べたとおり、子どもの睡眠は養育者にとって長時間持続する分離を生む。ここで見られたような文化差は、子どものもつ生物学的な身体性を基盤としつつも、保育士と園児間の睡眠と身体接触、そしてそれが関与する養育者と子どもの寝かしつけをめぐる主導性のせめぎ合いの文化差であり、それはひいてはその後の養育者と子どもの関係、あるいは子どもの自立発達の様態とも関連することであろうと考えられる。

身体接触は、養育者による子どもの保護の典型的なスタイルである。しかし同時に、それはそれを与える養育者にとって自らの手を中心とした身体を子どもに差し出すことであり、また子どももそのことによって動きが拘束されることでもある。つまりそれは、お互いにとって行動の自由度を奪われることでもあるのである。子どもが幼いときはそのことを両者とも甘受するが、子どもが大きくなるにつれてその矛盾が増大する。寝かしつけ時に、日本で大きくなった子どもに身体接触を与え続けることは、養育者自身の行動の自律性と時間を犠牲にして子どもに奉仕することとも言えるし、子どもも自律性を捨てて親の保護を受容することを意味する。それは「個」としての分離性

を部分化して、互いの関係性を維持しようとする態度の行動的表れであるとも考えられるのではな  
かろうか。日本と英国の保育士の行動は、そういった養育性の文化差の存在を教えてくれている。  
今後はそのような観点から、さらに寝かしつけと身体接触、もしくは介在するモノ・ヒト環境の検  
討を進め、上記のような解釈の可能性を確認する必要がある。



図7 英国の保育士による非接触的寝かしつけとしてのベッド揺すり行動

#### 引用文献

Aviezer, O., Van Ijzendoorn, M.H., Sagi, A., & Schuengel, C. (1994). "Children of the dream" revisited: 70 years of collective early child care in Israeli Kibbutzim. *Psychological Bulletin*, 116: 9-116.

Caudill, W., & Plath, D.W. (1966). Who sleeps by whom? Parent-child involvement in urban Japanese families. *Psychiatry*, 29, 344-366.

De Waal, F.B.M. (1989). *Peacemaking among primates*. William Morris. 西利貞・榎本知郎（訳）「仲直り戦術」どうぶつ社(1993).

Hallstrom, B.J. (1968) Contact comfort: Its application to immunization injections. *Nursing Research*, 17,130-134.

Keller, M.A. & Goldberg, W.A. (2004). Co-sleeping: Help or hindrance for young children's independence? *Infant and Child Development*, 13:369-388.

根ヶ山光一 (1997). 親子関係と自立：日英比較を中心に 柏木恵子・北山忍・東洋編「文化心理学」東京大学出版会 160-179.

根ヶ山光一 (2002) 発達行動学の視座 金子書房

Sagi, A., van Ijzendoorn, M.H., Aviezer, O., Donnell, F., & Mayseless, O. (1994). Sleeping out of home in a Kibbutz communal arrangement: It makes a difference for infant-mother attachment. *Child Development*, 65:992-1004.

Stack, D.M. & Muir, D.W. (1990) Tactile stimulation as a component of social interchange: New interpretation for the still-face effect. *British Journal of developmental Psychology*, 8, 131-145.

Willinger, M., Ko, C-W., Hoffman, H.J., Kessler, R.C., & Corwan, M.J. (2003). Trends in infant bed sharing in the United States, 1993-2000. *Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine*, 157: 43-49.

### 謝 辞

本研究を含む一連の研究を行うにあたり、東京都世田谷区松沢保育園・八幡山保育園、東京都大田区美原保育園、東京都和光市新倉保育園、埼玉県所沢市あかね保育園・おおぎ第2保育園・松井保育園、能島典子保育室、鈴木道子保育室、沖縄県八重山郡与那国町祖納保育所・久部良保育所の各施設の皆様、および英国 Edinburgh の Cowgate Under 5's Centre 及び同 Grassmarket Nursery School の園児・保育士・保護者の皆様のご理解とご協力を得ました。また、資料収集に際しては、早稲田大学人間科学学術院発達行動学研究室の学生の皆さん、および東横学園女子短期大学（当時）土谷みち子氏のご協力を得ました。ここに記して感謝します。

### Abstract

#### Cross-cultural comparison of nursery staff's tactics to put children into sleep between Japan and Scotland with a special emphasis on bodily contact

Negayama, K. (Waseda University), Kawahara, N. (Kyoritsu Women's University), Hirose, M. (Waseda University) & Powers, N. (University of Edinburgh)

Children's sleep could cause a conflict between them and their caregivers because it releases the caregivers from the children for some time and the children resist to be left alone. Thus tactics used by the caregivers and the children's reactions to them are good cues to understand the caregiver-child relationships. The present study is to compare those in day-care settings between Japan and Scotland. Napping of 11 Scottish and 8 Japanese children (mean age (SD) = 17.13 (2.80) and 17.46 (5.05) months, respectively) was filmed in the nursery from the start. The Japanese nursery staff frequently used various tactile behaviors such as holding, rocking, patting, and stroking in order to put the children to sleep. In contrast to this, tactile behaviors by the Scottish nursery staff were significantly less frequent. Even in rocking, the caregivers did not hold the children and shook a baby bed or a buggy instead. They also had a tendency to leave the children when they were still awake, while the Japanese staff seldom did so. However, it is noteworthy that there was an almost significant negative correlation between the children's age and the caregiver-child contact ratio among the Scottish subjects ( $r = -.596, P = .052$ ). In spite of these differences, the time required for the children to get asleep and the occurrence ratio of crying/fussing were not different between the two countries.



# 幼児の社会化における身体接触

Touch behavior in socialization of preschool children

広瀬美和 (早稲田大学大学院)

HIROSE, Miwa (Waseda University)

根ヶ山光一 早稲田大学

NEGAYAMA, Koichi (Waseda University)

本研究では、保育園の自然場面において、社会的相互交渉である子どものいざこざの解決場面の観察を行い、特にそこで子どもが行なう身体接触到注目して検討を行った。その結果、子ども同士がいざこざの解決の際に用いる身体接触には、慰撫的な意味以外に、謝意を提示したり、情報を伝え合ったりするなど、多様な意味があることが推察された。また、エピソードの比較から、その導入の仕方は、年長になるほど戦略的になり、また接触による情報のやりとりが的確にできるようになる様子が伺われた。身体的な交渉がまだ重要な役割を果たす幼児期における、身体接触の更なる検討が求められる。

Social conflicts involve a factor that facilitates development of children's social skills. There are factors that help to settle down our emotion in touche behaviors. Preschool children's touch behavior has a role to resolve peer social conflict. This study explored preschool children's touch behavior as reconciliatory strategy by naturalistic observation. The result implies that there might be a variety of sense in preschool children's touch behavior that we could see in regulation of their relationships. And the older they became the more skilful they could use their touch in their conflict resolution. Future study is needed to examine observational data on their touch behavior.

## 問題と目的

### 保育園における調整・仲直り行動について

けんかやいざこざ等、子どもの社会的な葛藤を論じた研究では、これらの社会的葛藤が、子どもの社会性の発達に寄与していることを、近年明らかにしてきている(荻野, 1986; 斉藤, 1992)。特にいざこざについて論じた研究に焦点を当ててみると、子どもがいざこざ場面におかれた際には、自らが持つ社会的スキルを用いながら、いざこざの解決を志向することが明らかになっている(Shantz, 1987; Sackin & Thelen, 1984)。以上のような知見の含意するところは、子どもの葛藤解決の経験が、子ども自身の社会的スキルの発達を促す要因のひとつであるという点であるといえよう。

乳幼児初期の子どもと大人との交渉では、子どもに対する大人側の配慮が働くため、社会的葛藤が生じる場面に子ども自身が直面することは多くない。ところが、保育園や幼稚園における子ども同士の関係においては、互いに相手の考えや心情、パーソナリティを理解できないことで社会的葛藤が生じるとともに、このような問題解決もまた経験するといえよう。

しかし保育現場や幼稚園教育現場のような実際の場面では、いざこざへの介入の仕方について未だ十分に明ら

かにされてはいない。子どもの集団をケアしたり教育したりする現場は、種々の状況や場所、参加者によって相互作用の様相が異なる複雑な場であり、保育士にはそれぞれの文脈に応じた柔軟な対応が求められる。そのため、いざこざへの介入の仕方も多様なものとなる。

### 幼児の身体接触

Morris (1971) や Argyle (1988) は、人間の感覚や人間関係において身体接触が重要であることを指摘している。特に母子間では、母子の相互作用を促し親子関係の絆を形成する上で重要である (Klaus & Kennell, 1982)、あるいは乳幼児期の周囲の人間からの身体接触は自然の鎮静剤の役割を果たす (鈴木, 1995) という指摘もある。そういった身体接触の重要性への着目から、カンガルー・ケアやタッチ・ケアといった母子の発達を促す支援も行なわれている (菅野, 2003)。

さらに、根ヶ山(2002)は、母子間の身体接触が子に安心感を与えることに加え、くすぐり遊びなどの身体遊びに見られる情動の共有や、身体の共振をとりあげ、身体接触の重要性を再評価する必要性を主張している。また根ヶ山 (2002) は、親子間の身体接触の重要性に加えて、仲間間の身体接触についても述べている。特に身体遊びを取上げ、仲間間で身体接触を交えつつ楽しく遊ぶことが、社会性の発達に重大な意味を持つとも述べている。

それでは、3歳以上の幼児における身体接触とはどのようなもので、どのような意味を持つのだろうか。前述したように、3歳以降は、それまでの大人との関係を中心にしてきた生活とは異なり、同年齢の子ども達と仲間関係を形成し、維持しながら生活していくことになる。

そのような仲間関係で営まれる生活のなかでは、無藤 (1997) が述べているように、ことばだけでやりとりすることは少なく、身体がことばの代わりや細くとして機能している。

### 身体接触による調整・仲直り

保育場面における身体接触は、いざこざを含む遊びの場面で最も多く発生している (塚崎・無藤, 2004)。子どもの遊びには、レスリングのような身体遊びが含まれることが多いためだろうか。それでは、いざこざが解決される関係調整や仲直りの場面ではどうだろうか。

山口 (2004) は、保育園児のなかで、問題行動を起こすとされている子どもに対して、友達同士で手をつないで輪になったり、大人が肩や手によく触れる遊びを取り入れたりするなどの実験を行っている。その結果、実験群では有意に望ましくない行動が低減したことを報告している。接触の欲求が満たされることで幼少期の子どもの心が穏やかになることを主張しているのである。

葛藤の調整や解消に関する研究では、サルや類人猿の集団での和解行動として身体接触が用いられていることが指摘されている。そのなかでは約4割が葛藤後に互いの身体を接触しあっていることが報告され、キス、抱擁、毛繕い、優位者の口に指を入れるといった身体接触行動が調整の役割を果たしていることが示唆されている (De Waal, 1993)。

幼児の仲間葛藤の平和的で協同的な解決についての行動学的な検討を行った Sackin と Thelen (1984) は次のように報告している。まず、就学前児の間での葛藤の31%が連合的・親和的な結果へとつながっていた。その和解的な行動の中には玩具の提供、協同的提案、実質的な謝罪とともに、手をつなぐ、なでる、キスをする、抱擁するといった、友好的あるいは援助的な様式で接触する身体的な接触行動が含まれていた。身体接触は特に社会的な攻撃性を緩和するのに効果があるようだ。

一方で、身体的な遊びと攻撃とは非常に区別しにくい特性を持っている。そのような激しい身体的な遊びは、Rough and Tumble play (Smith, 1997) として扱われてきた。実際、保育園等の子どもの間では、レスリングや相撲といった、身体的な接触を伴う遊びが多く見られる。いざこざの場面に身体接触がより頻繁に見られるのはこ

のためであろう。しかし広瀬（2004）の観察では、いざこざの延長のように身体を接触させて取っ組み合いをしていた子どもたちのやり取りが、次第にレスリング遊びに移行していく事例が観察されている。幼児期の子どもたちは、一見第三者からは攻撃と判断されるような激しいやりとりの中で、当事者同士では遊びを成立させている。小山（2003）によれば、当事者間では身体接触中に交わされる筋肉の緊張と弛緩のなかに遊びを伝える要素があるのだ。

前述の根ヶ山（2002）もまた、くすぐりに含まれる接触の快と不快のコンフリクトが、遊びを実現させるとして、単に快感を与えるのみでない接触の感覚の意味について述べている。以上のように、身体接触には、個体の気持ちに慰撫的に働くだけでなく、相手の怒りの状態を計ったり、またその状態によってはその接触自体を遊びにしたり、また遊びへの移行することに利用する側面もあるのかもしれない。

以上のように、多様な意味を含んでいると考えられる幼児の身体接触が、幼児の社会的な相互作用の中でどのように現れ、どのように機能しているのかを検討することを本研究の目的としたい。そこで、幼児の社会化を示す行動特徴の一つとして、いざこざの調整・仲直り行動における身体接触の様相に注目し、自然観察的研究法で検討する。3歳～5歳の幼児を対象に自由遊び時間のビデオ撮影とフィールド・ノートによる自然観察から、横断的比較検討と各エピソードの質的検討を行う。

## 方法

### 観察期間：

2004年5月～2005年3月までの間（合計観察時間約49.5時間）。

**観察対象：**T市内のA保育園の3歳～5歳児クラスの園児65名（男児32名、女児33名）。

**観察手続き：**A保育園では、自由遊び場面やおやつ場面を中心に降園までデジタルビデオカメラで記録した。対象クラス内で2名以上の集団を形成している子どもの相互交渉を中心に、いざこざの発生から終結までの記録を行なった。原則として同一対象の観察は1回あたり20分程度とするが、いざこざを記録している状況では、一連のいざこざ収束を対象児変更の基準とした。

**分析手順：**収集された映像データは、ビデオデータ質的分析支援ソフト mivurix（荒川，2002）を用いて分析を行った。mivurixによる分析の手順は以下のとおりである。まず、対象とする映像を、デジタル化してコンピュータ内に蓄積した。その上で、デジタル化された映像について「カットアップ」と呼ばれる、タグ付けを行った。この作業を行なうことで、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967/1996）における「情報の断片化」と同様の処理が行なわれたことになる。次に切り取った映像に仮の名前をつけた。この作業はKJ法でいうところの「最初の見出し」と同様の位置づけとなる（荒川，2005）。さらに、タグ付けした映像を繰り返し視聴して方略を分類をした。

方略については、同じ子どもが同じエピソードのなかで繰り返し同じ働きかけを行なった場合には、まとめてタグ付けしたが、別の働きかけを行なった場合にはそれぞれについてタグをつけた。たとえば、同じ子どもが肩に手を置いた後、頭を撫でるなどした場合には、それぞれについてタグをつけた。

## 結果および考察

観察の結果、3歳児ではいざこざが23例、4歳児では13例、5歳児では14例観察された。そのうち、仲直りや関係調整に身体接触が用いられたものはTable 1のようになった。ただし、当事者間での身体接触と、他児からの身体接触の両方が含まれる事例については、重複して計数されている。

Table1 調整や仲直りで身体接触が見られた例数

	3歳児	4歳児	5歳児
当事者間	3	3	3
他児	4	2	4

次に、身体接触の実際の行動を Table 2 に示した。これも、同じ子どもが異なる身体接触で働きかけた場合には、それぞれを計数している。Table 1 を見ると、どの年齢でも当事者間、他児からのものと両方の身体接触が発現している。さらに、Table 2 を見ると、撫でたり、身体の一部に手を置いたりといった慰撫的な働きかけが第三者である他児から多くなされている。先行研究において述べられている、鎮静的、親和的な機能を持つものとして、比較的冷静である他児が、当事者達の攻撃を鎮めたり関係を調整したりすることに身体接触が導入されているのだろう。

Table2 身体接触の種類と例数

		3歳児	4歳児	5歳児
当事者間	撫でる	1	0	2
	手を置く	1	1	1
	手をつなぐ	0	1	0
	軽打	2	1	1
他児	撫でる	2	2	4
	手を置く	1	1	3
	手を引く(誘導)	1	0	0

他児からの身体接触的な働きかけが、実際にどのように用いられ、どのような機能を果たしているのかを、次のエピソード1を示し、説明する。

エピソード1 (5歳児)

おやつテーブルの下で、男児カズが足を伸ばし、コウキの足にぶつかった。コウキは泣きながら足を押し返した。カズも立ち上がって泣き出した。同じテーブルで食べていた女児マヒロが立ちあがり、二人の間に立ち、コウキに話しかけた。さらに、別のテーブルにいた女児マイが近づき、コウキの肩に手を置き頭を撫でながら①、理由を尋ねると、コウキは「カズが足をこう(押し出しながら)やったから嫌だったの!」と泣きながら言った。泣き止んだカズは椅子に座ってうつむいた。マイはコウキに「謝って」と言うが、「だってカズが」と泣き続けた。マイはカズのひざに手を置き、ひざを撫でながら②、「コウキに謝って」と言うと、カズはうつむいたまま「ごめん」と謝った。その後、カズはコウキの方を見ながらおやつ席を離れ、園庭に遊びに出たが、しばらくすると部屋に戻ってきてロッカーの前に座った。コウキがおやつを終え、おやつ道具を片付けにロッカーに近づくと、カズはコウキの頭と肩に触れ③、「外行くよ」と誘い、コウキもついていった。

いざこざには直接関係のなかった女児マイが、二人の身体に接触しながら(下線部①)原因を聞きだし、さらに、身体を撫でながら謝罪を促し(下線部②)、当事者であるカズから謝罪のことばを引き出すことに成功している。マイの働きかけによって怒りが沈静化され、謝罪することができたようだ。それだけでは二人で遊び始められるほどには回復はしていないが、当事者のカズもまたコウキに対して身体に触れながら遊びへの誘導(下線部③)をすることで和解が成立している。マイの接触がカズを落ち着かせ、親和的な行動をとる事につながったのではないだろうか。

このように、マイはただ口で謝罪を促すだけでなく、盛んに身体に触れ、なだめるように撫でながら和解を促している。幼児間でも、また社会的な関係調整の場面でも、身体接触が方略的に用いられているということがわ

かる。

また、3歳児でも4歳児でも他児が泣いたり、攻撃を受けてうつむいたりしている当事者に対して慰めるように撫でたり身体に手を置いたりする例は見られている。しかし、観察されたのは全てどちらか一方に対して接触したものであった。エピソード1のマイのように、双方に接触しながらなだめ、和解を促す例は見られなかった。5歳児の他の例でも、接触は一方であるものの、他方に対してもなだめることばかけをしている例が1例、泣いてはいないが、興奮して叫んでいる方の子どもを撫でて抗議をやめさせる例が1例見られた。

低年齢のうち、他児からの接触は、被攻撃児を慰撫するという意味が大きいのもかもしれない。5歳児のマイのように、子ども自身が悪化した関係の沈静化に利用するようになるまでには、より長い集団生活と関係調整の経験が必要なのだろう。

### 当事者間の「慰撫的な接触」行動の意味

霊長類の関係調整行動研究のヒトへの応用可能性について論じた沓掛（2002）によると、第三者個体が葛藤解決に参与する唯一の類人猿であるチンパンジーでは、当事者間では慰め行動は見られない。「慰め行動」は被攻撃個体と第三者個体の間の社会交渉なのであるため、葛藤解決行動とは分けてとらえられているのである。実際本研究で観察された例のなかにも、第三者である他児が、たとえば身体的攻撃をうけたり、泣いたりしているなど、ダメージを受けたと思われる被攻撃児に対して、「撫でる」という慰撫的働きかけを行なっている例がある。ところが同時に、どの年齢でも半数程度は、当事者間でも「撫でる」という慰撫的な働きかけがとられている。ここで取られている当事者間の「撫でる」という慰撫的な接触行動の意味を考えるために、次のエピソードを提示す

#### エピソード2（5歳児）

ドッジボールをしていた男児タクが、ボールをよけようとして男児ケイにぶつかり、ケイがしりもちをついた。タクは振り返ってケイを助け起こそうとしたが、「痛いよ！」とケイがタクの手を振り払った。ケイは立ち上がり泣きべそをかき始めた。タクは近づき、ケイの背中を撫でたり、ズボンについた砂を払ったりした①。女児アオバやアオイが近づき、「どうしたの？」といいながらタクの背中に手を置き、撫でた②。ケイが「タクが後もみないでさがつたんだよ！」と泣き止まずにいると保育士が近づいてくる。タクはケイの背中をさすり続けている。ゲームなので仕方がないと保育士はケイをなだめ、タクには、謝罪したのかどうかを訊ねると、タクは保育士の顔を見ながらさらにケイの背中を撫でた③。さらに保育士が「ごめんは？」と訊ねるとタクはケイをさすりながら「ごめん」と言った。その後、二人ともボールを当てられて外野に出たが、タクは自分がとったボールをケイに渡して投げさせ、ケイは内野に戻る事ができた。

る。

ドッジボールが白熱し、後にいたケイに気付かずに、タクはケイを倒してしまった。するとすぐにタクはケイを助け起こそうとしているし、盛んに砂を払ってやったり背中を撫でたりしている（下線部①）他児も近づき、ケイの背中を撫でる（下線部②）が、ケイは泣いて抗議することをやめない。泣いて訴えるケイに、ゲームだから仕方がないとケイをなだめつつも、保育士はタクにも謝罪を促す。保育士に謝罪をしたかどうかを問われたタクは、ことばでは答えずに保育士の顔を見ながらケイの身体をさらにさすっている（下線部③）。謝罪としてケイをさすっていると訴えたのだと思われる。つまり、相手の体をさすことはタクにとっては謝罪の意味を持つのだろう。

この例にみられるように、当事者間の慰撫的な身体接触は、攻撃児から被攻撃児に対しての、謝意や和解の意思を提示するものとして用いられていると考えられる。あるいは、周囲に対し自分の関係調整の意思や正当性をアピールする手段としても用いられているようだ。かつて自分が身体接触によって鎮静化させられた経験や、握

手や撫でる、肩を抱くといった、文化的に親和性をもつ交渉という認識から、こういった行動を方略的に用いているのかもしれない。

このような当事者間の慰撫的な身体接触の働きかけは、3歳児の間でも見られている。以下に3歳女児同士のエピソードを示す。

### エピソード3（3歳児）

机と跳び箱が照らすに並べておいてあり、女児ミチコとカホが机の上で「おうちごっこ」をしていた。仲間に入りたがっているリナがそばに立っていた。跳び箱の上には上らないように保育士から指示されているが、カホが跳び箱の上に乗って上に座った。リナがカホに向かって「乗っちゃいけないんだよ！」と叫んだ。カホは顔をゆがめ、すぐに飛び箱から机に移動した。さらに手前にいたミチコの前を跨ぎ、リナから離れた机の端まで移動した。リナは机に上ると、カホに近づき、カホの腕を握った①。さらに、カホの隣に座り、肩を抱くように手を置き、撫でた②。さらにリナは、カホの背中を3回軽くトントンとたたいた③。カホの表情が緩み、「おうちごっこ」が再開された。

リナは、自分が攻撃した当事者でありながら、自分の抗議によって顔をゆがめて劣位性を示したカホを見ると、即座にカホに近づきカホの腕に触れている。さらに肩を抱くようにカホの肩に触れるという働きかけを行なっている。リナの抗議を受けてリナから一度待避したカホも、リナの働きかけを受けると表情を弛緩させ、また一緒に遊ぶことができるようになっていく。リナはダメージを与えすぎたことを補うために親和的に接触し、カホは、それを和解の提案として受け取り、仲直りが成立したと考えられる。

このように、年齢に関係なく当事者間の慰撫的な接触は起こっている。ただし、低年齢児の仲直りの接触は、リナのように、単に一緒に遊びたいから接近し、接触しているのかもしれない。エピソード2のタクが保育士に示したように、自分の謝意や、正当性をアピールするという機能は含まれていないようだ。

### 状態を測る接触

当事者間の接触では、「撫でる」の他に、身体の一部に「手を置く」ものや、痛みを感じないような強さで「軽打」するものが見られた。ただ抗議をしたり、ことばで何かを促すだけでなく、相手の身体に接触したり、軽く叩きながら働きかけることで、相手の攻撃を中断させたり、要求を通すことに成功した例がどの年齢にも見られた。それらの接触を含むエピソードを以下に示す。

### エピソード4（3歳児）

男児ナオトが車のおもちゃを独り占めして放さなかった。男児シュンが何度も「ねえ、ナーオートー」と呼びかけながらおもちゃを渡すように頼むが、シュンをかわしながらナオトは逃げ続ける。シュンはナオトの正面に立ち、ナオトの肩を2回ポンポンと叩きながら、再度「ねえ、ナーオートー」と言うと、ナオトは、持っていた車の1台をシュンに渡した。シュンはそれを持ってそこで遊び始めた。

ナオトは初めのうち、シュンの要求をのりくらくらとかわしていたが、シュンが正面に立ち、肩を叩きながら抗議すると、おもちゃを渡している。シュンは身体を接触して刺激することで、注意を自分の方に向け、ナオトに話を聞かせることに成功している。

### エピソード5（4歳児）

男児コウタは、男児ヒカリとホールで遊ぶ約束をしていたが、ヒカリは他の子どもと4歳児クラスの部屋で遊んで動こうとせずにいた。コウタがホールから部屋に戻り、コウタはヒカリの頭を軽く叩きながら①「ホール行けー」と話しかけるが、ヒカリは動かず、一緒にいたリュウから、「これを（ブロック）ホールでやるんだよ！、俺が、作ってから！」と言り返される。コウタは再びヒカリの頭と肩を、ゆすったり軽く叩きながら②、「早くー」

と言うと、ヒカリは「今考えてるんだよ」と言いながら、立ち上がり、ホールの方に移動した。

次の例でも、初めのうち真剣に取り合っていなかったヒカリは、コウタが自分の身体に接触しながら抗議し始めた(下線部①②)ことで、自分の行動を説明し始めたり、立ち上がってコウタの要求どおりに動き始めている。ここでも接触刺激によって、注意を促すことに成功している。

同時に、シュンやコウタは、自分の状態や相手の状態を伝え合っていることにもなるのではないだろうか。接触することは相手に接触するだけでなく、相手からも触れられているという双方向性を持つ(根ヶ山, 2002)。二人は、接触して相手に刺激を一方向的に与えただけでなく、相手の状態を受け取り、同時に自分の怒りや、おもちゃ遊びといったそのときの問題への深刻さを伝えている。同時にナオトやヒカリは、身体でシュンやコウタの手に触れ、自分達の状態を伝え、同じように相手の深刻さを受け取っているのではないだろうか。その情報のやりとりが機能して、ことば以上に意思や意図が伝わり、関係調整に成功しているのではないだろうか。

レスリングなどの子ども同士の身体的な遊びは、見ている大人よりもそれに参加する子どもの方が遊びであるかケンカであるかの判断が的確にできる特徴を持っている(Smith, 1997)。小山(2003)によれば、子ども同士は接近し接触しながら、相手の表情や筋肉の弛緩によって識別しながら遊んでいるのである。子ども同士には、接触しながらその圧の強さや、相手の弛緩の程度を情報としてやりとりしあう、交渉の戦略があるのかもしれない。

ところで、3歳児、4歳児とも、2例ずつ、レスリングやこづきあいなどの身体遊びが、エスカレートしていざござに発展した例が見られた。しかし5歳児では、身体遊びからいざござに発展した例は見られなかった。かといって、5歳児が身体遊びをしていないわけではなく、男児はレスリング遊びやヒーローごっこなどを頻繁に行っていたし、女児同士で手をつないだり身体の一部を接触させたりしながら遊ぶ様子はよく見られた。

前述したように、子どもは、身体を接触させながら、相手の怒りの状態を認識しあっている(たとえば小山, 2003)。さらに、社会的な関係形成の苦手な子どもほど、いざござか遊びかの判断も苦手である(Smith, 1997)。相手の身体に接触し、その感触で相手の状態を判断したり、力の加減をしたりすることが、幼児期の前半では、まだ難しく、失敗することもあるが、5歳児になるとよりの確にできるようになるのかもしれない。そのため、いざござにならずに、適度に調整しながら激しい身体遊びをすることができているのかもしれない。

## まとめ

幼児同士の、特にいざござが解決される調整・仲直りという社会的な場面において見られる幼児同士の身体接触がどのようなものであるのかを検討した。自然場面の観察では、頻度によって特性を検討する事例数は得にくいため、主にエピソードの中での身体接触の意味や、年齢による違いを検討した。

その結果、幼児同士の身体接触には、いざござ状態を沈静化するために、ただ慰撫的であるだけでなく、それによって謝意をアピールすることで関係調整に用いられていることが推察された。また、年長になると、第三者である他児が、当事者双方に接触しながら関係を調整しようとするようになることがわかった。

さらに、身体接触には、慰撫的な役割だけでなく、刺激を与えて注意を促したり、怒りや深刻さといった相手の状態を伝え合ったり測りあったりする情報をやりとりする媒体としても、関係調整の中に導入されている様子が見られた。またこの情報のやりとりは、年長になるほどの確にできるようになるようだ。さらに身体接触や身体遊びの場面についてのデータを追加し、詳細に検討していかなくてはならない。

以上のように、幼児同士の社会的な交渉の中には身体接触が多様な意味を持ちつつ、また重要な機能を果たしながら導入されているということが示唆された。まだことばだけのやりとりではコミュニケーションが成立しにくい幼児期にこそ、この行動の意味や機能についてより詳細な検討が求められる。

## 文献

- 荒川歩 (2002) .Mivurix. <http://www.k2dion.ne.jp/~kokoro/mivurix/> (情報取得 2003/5/3).
- 荒川歩 (2005) . 映像データの質的分析の可能性 質的心理学研究, 4, 66-74.
- Argyle, M, (1988) *Bodily Communication* (2<sup>nd</sup> ed.) London : Methuen.
- De Waal, F.B.M, (1993) . 仲直り戦術：霊長類は平和な暮らしをどのように実現しているか (西田利貞・榎本知郎, 訳) 東京：どうぶつ社( De Waal, F. B. M (1989) *Peacemaking among primates* London : Penguin Books).
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L, (1996) . データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳) 東京：新曜社 (Glaser, B.G & Strauss, A.L (1967) . *The discovery of grounded theory : strategies for qualitative research*. Chicago : Aldin) .
- 広瀬美和 (2004) . 子どもの調整・仲直り行動の発達の研究：保育園での自然観察的研究 早稲田大学大学院修士論文.
- 広瀬美和 (2006) . 子どもの調整・仲直り行動の構造：保育園でのいざこざ場面の自然観察的検討 乳幼児教育学研究 15, 13-23.
- Klaus, M.H., & Kennel, K.H. (1982) . *Parent-infant bonding*, 竹内徹・柏木哲夫・横尾京子 (訳), 親と子のきずな 東京：医学書院.
- 小山高正 (2003) . 遊び・ケンカ 根ヶ山光一, 川野健治 (編著) 身体から発達を問う：衣食住のなかのからだところ (pp218-220) 東京：新曜社.
- 杵掛展之. (2002). 動物における葛藤解決行動と人間研究への応用可能性. 生物化学, 54 (1), 31-39.
- Morris, D, (1971) . *Intimate behavior*. Jonathan Cape (石川弘義 (訳), ふれあい 愛のコミュニケーション 東京：平凡社) .
- 無藤隆 (1997) . 協同するからだとことば—幼児の相互作用の質的分析 東京：金子書房.
- 根ヶ山光一 (2002) . 発達行動学の視座—(個) の自立発達の人間科学的探求 東京：金子書房.
- 荻野美佐子 (1986) . 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ(編), 子ども時代を豊かに(pp.18-58) 東京：学文社.
- Sackin, S., & Thelen, E, (1984) . An Ethological study of peaceful associative outcomes to conflict in preschool children. *Child Development*, 55, 1098-1102.
- Shantz, C.U, (1987) . Conflict between children. *Child Development*, 58, 283-305.
- Smith, P.K., (1997) . Play fighting and real fighting : Perspectives on their relationship In : A Schmitt et al (Eds.) . *New Aspects of Human Ethology*. New York Plenum Press.
- 菅野幸恵 (2003) . 触れる・離れる 根ヶ山光一, 川野健治 (編著) 身体から発達を問う：衣食住のなかのからだところ (pp141-154) 東京：新曜社.
- 鈴木晶夫 (1995) . 身体と子別れ 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著), 子別れの心理学 東京：福村出版.
- 塚崎京子・無藤隆 (2004) . 保育現場における3歳児の身体接触の変容 乳幼児教育学研究 13, 13-25.
- 山口創 (2003) . 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響 健康心理学研究, 16, (2)60-67.
- 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある 東京：光文社.

## 謝辞

保育場面のビデオ撮影のご許可をくださった、A保育園の園児と保護者の皆様、保育士の先生方に深く感謝いたします。



# 自閉症幼児の身体接触遊び

## ：くすぐり遊びの分析から

河原 紀子

(共立女子大学)

### 目 的

人間の皮膚には、くすぐったさを感知する器官はないにもかかわらず、くすぐったさを感じるのは、皮膚表面の刺激やくすぐる人との関係、その人の触刺激の変化などの複合的要素によるという(山口, 2003)。このようなくすぐったさは、健常児の場合、生後 7, 8 か月頃から見られ始め、このくすぐったさの発現が「他者性」の認識を示すものとして重要であると言われている(根ヶ山・山口, 2005)。

また、伊藤(1998)は、くすぐりや揺さぶりなど身体と身体、肌と肌を触れ合わせるような身体接触遊びを、「情動的交流遊び」と位置づけ、情動の伝染を媒介としておとなと子どもが楽しさを共有することが自閉症児のコミュニケーション発達を促すうえで重要であると指摘している。

本研究では、自閉症幼児のくすぐり遊びにはどのような特徴があるのか、接触のタイプとそれへの子どもの反応およびそれらの発達的变化について、他の対人コミュニケーション行動との関連から明らかにすることを目的とする。

### 方 法

対象児： 東京都 H 市の障害児通園施設に通う自閉症幼児 2 名。

A 児：男児、第 2 子(3 人きょうだい)。1 歳 7 か月時に痙攣発作があったが、継続的なものではなかった。2 歳 9 か月から当施設への通園を開始した。

B 児：男児、第 2 子(2 人きょうだい)。痙攣発作などの既往はなかった。3 歳 11 か月から当施設への通園を開始した。

観察期間： A 児は 4 歳 4 か月から 6 歳 8 か月まで、B 児は 5 歳 6 か月～6 歳 10 か月まで。

手続き： 本観察実施前に、3 回の予備観察を行い、対象児の様子や療育活動の流れを把握した。その後、原則として 1～2 ヶ月に 1 度、対象児が所属する療育グループの午前の活動に、身体接触遊び(くすぐり)を設定してもらい、その場面を含む午前の活動から昼食後までの療育場面をデジタルビデオカメラで撮影した。対象児に対する身体接触遊びはその日の担当保育者が行った。

また、対象児の全般的発達特徴を把握するために、およそ半年に 1 度、個別に新版 K 式発達検査を実施した。その際、担当保育者が同席することもあった。

分析の視点： くすぐり遊びについては、1)保育者が子どもの身体のどの部位に、どのような接触を行うか、2)その際の子どもの反応、3)くすぐり遊び中のアイコンタクトの有無、に着目した。

くすぐり遊びは、歌に合わせて定型的な身体接触がなされるものであった。具体的には、「キャベツ」と「東京都」の二種類のくすぐり遊びが実施された。

くすぐり遊び「キャベツ」における保育者の接触の種類は、以下の 5 種類であった。

- 接触 1：お腹や脇腹を指を屈伸させ触れる。
- 接触 2：主としてお腹を握りこぶしで軽く叩く。
- 接触 3：主としてお腹を二本指を屈伸させて触れる。
- 接触 4：額を平手でなでる。
- 接触 5：お腹や脇腹などを指を速く屈伸させて触れる。

「キャベツ」の歌詞と接触の種類を、Table1 に示した。5 種類の接触はほぼ時系列的に推移し、接触 5 がこのくすぐり遊びにおけるクライマックス場面であった。

Table1 くすぐり遊び「キャベツ」の歌詞と接触の種類との対応

キャベツはキャンキャンキャツ →	きゅうりはキュッキュッキュツ →	トマトはトントントン →	れんこんコンコンコン →
接触1	接触1	接触2	接触2
レタスはバリッバリッバリッ →	にんじんニンニンニン →	たまねぎエーン →	もやしはモジャモジャモジャー(終了)
接触1	接触3	接触4	接触5

くすぐり遊び「東京都」における保育者の接触の種類は、以下 7 種類であった。

- 接触 A：平手でなでる。
- 接触 B：二本指を寝かせてなでる。
- 接触 C：二本指を速く屈伸させて触れる。
- 接触 D：平手で軽く叩く。
- 接触 E：指先で接触部位をつまむ(つねる)。
- 接触 F：お腹や脇腹に向かって(下から上へ)指を屈伸させて触れる。
- 接触 G：お腹や脇腹などを指を速く屈伸させて触れる。

Table2 くすぐり遊び「東京都」の歌詞と接触の種類との対応

東京都 →	日本橋 →	がりがり山の →	パン屋さんの →
接触A	接触B	接触C	接触D
つねこさんが →	階段上って →	こちょこちょこちょこちょー(終了)	
接触E	接触F	接触G	

上記の「キャベツ」と同様に、「東京都」の歌詞と接触の種類を、Table2 に示した。7 種類の接触は時系列的に推移し、接触 G がこのくすぐり遊びにおけるクライマックス場面であった。「東京都」は、「キャベツ」と異なり、子どもの接触部位に制限がなかったが、保育者は子どもの「手」「足」などを接触対象とすることも多かった。ただし、開始時の接触部位(接触 A)がいずれの場合でもクライマックス場面(接触 F,G)では、腹部や脇腹への接触が行われた。

2つのくすぐり遊びには、その特徴から次のような違いが見られた。一つは、「キャベツ」では接触 1 から、すなわち遊びの開始から腹部や脇腹への接触がなされるのに対し、「東京都」では手や足など身体の末端から開始されるということ、もう一つは、「キャベツ」では遊びの開始から指を屈伸させて触れるのに対し、「東京都」ではなでるという接触で、接触刺激が相対的に柔らかなものであった。

2つのくすぐり遊びの各接触に対する子どもの反応が、根ヶ山・山口(2005)を参考に、以下の 6 つに分類された。

- 強いくすぐったがり：笑いながら身体をよじったり、手足をとおざけるといった、回避的要素と遊び的要素が合わさった強い情動性を伴う反応が明確なもの。
- 弱いくすぐったがり：笑いながら身体をよじったり、手足をとおざけるといった、回避的要素と遊び的要素が合わさった強い情動性を伴う反応が微弱なもの。
- 遊び・微笑：微笑、足をばたつかせるなどの快反応および高揚反応。

ニュートラル：特に表情を変えず、身体的な動きがほとんど見られない反応。

回避：しかめ面・身体によじりなどの不快や遠ざかる反応。

その他：上記以外の反応。

さらに、対人コミュニケーション行動の特徴については、療育場面での指さしの有無、要求・自己主張行動の特徴や変化および発達検査の指さし課題（「絵指示」）の結果を参考にした。「絵指示」課題とは、6つのモノ（犬、車、人形、くつ、はさみ、鉛筆）が書かれたA3の1枚の図版を子どもに見せ、「犬はどれ？」などと書かれたものを順に尋ね、それに対し子どもが指さしで応じるかどうかをみるものである。

### 結果

2名の対象児は、その発達過程において異なる特徴を示した。A児は、くすぐり遊びおよび対人コミュニケーション行動に顕著な発達の変化が見られた。一方、B児は、それらにおける変化は微視的であった。以下、事例ごとにその特徴を述べる。

#### 1. A児の結果

##### (1) くすぐり遊びに対する反応の発達的变化

A児のくすぐり遊びにおける反応の特徴から、4歳4か月～6歳9か月（以下、4:04～6:09と記す）までの観察期間を以下の4つの時期に区分した。各時期の特徴をくすぐり遊びごとに記述した。

##### ①「キャベツ」

第1期から第4期までのくすぐり遊び「キャベツ」の反応をFigure1に示した。

<第1期>（4:04～5:00） くすぐり遊びの開始時でもある接触1では、微笑を見せることが多く、接触3にな

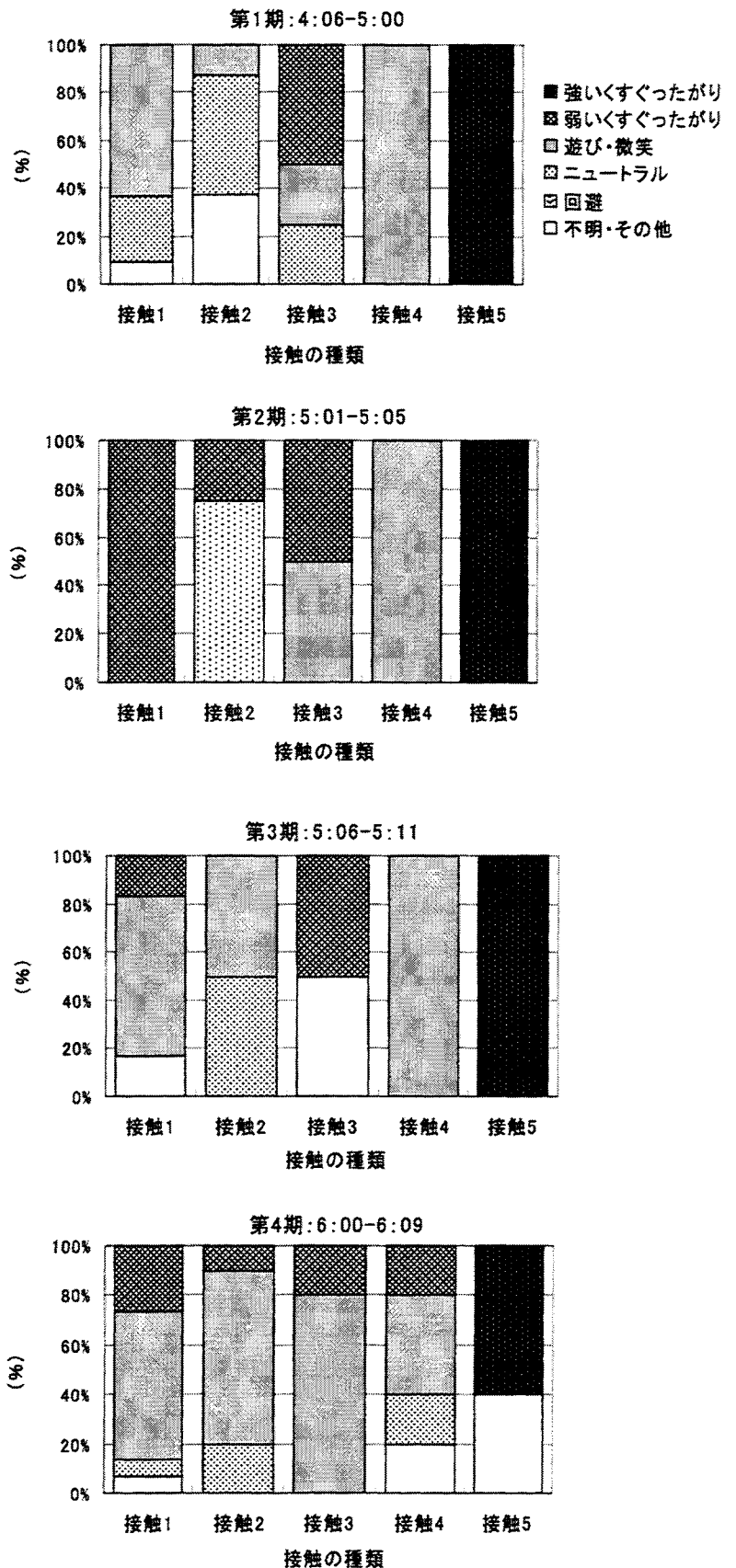


Figure 1 接触の種類別に見たA児の反応の変化（「キャベツ」）

ると「弱いくすぐったがり」が時々見られた。また、接触5では「強いくすぐったがり」が毎回見られた。しかし、保育者とのアイコンタクトがあるのは接触5のみであった。

＜第2期＞（5：01-5：05） くすぐり遊びの開始（接触1）から毎回、「弱いくすぐったがり」反応が見られ、接触2、3では時々「弱いくすぐったがり」が見られ、接触5では「強いくすぐったがり」が毎回見られた。さらに、接触1～5すべてにおいて保育者とのアイコンタクトが見られたことが特徴であった。

＜第3期＞（5：06-5：11） 接触1、2、4で「遊び」が多くなり、接触5になると、保育者を振り返りながら笑顔で逃げ出し、追いかけてもらいたいという様子が見られるようになった。

＜第4期＞（6：00-6：09） 第3期よりもさらに「遊び」の割合が多くなり、接触5の前に、追いかけてもらうことを期待して逃げ出したり、くすぐり遊びの最中に保育を見ながら保育者の手を持って、遊びを自ら主導するような行動が見られるようになった。

以上、第1期から4期までのうち、第2期と第3期がくすぐり反応の出現がより顕著な時期と言える。また、接触の種類については、観察期間を通して、クライマックス場面でのお腹や脇腹などを指を速く屈伸させて触れられる（接触5）とA児は強いくすぐったがり反応を示し、「にんじんにんにんにん」とお腹を二本指を屈伸させて触れられる（接触3）と、「弱いくすぐったがり」や「微笑・遊び」反応を示すことが特徴であった。一方、「トマトはとんとんとん」などのお腹を握りこぶして軽く叩くという接触（接触2）に対しては、「ニュートラル」反応を見せることが多かった。

## ②「東京都」

第1期から第4期までのくすぐり遊び「東京都」の反応をFigure2に示した。

＜第1期＞（4：04-5：00） くすぐり遊びの開始時である接触Aでは、「ニュートラル」が多く、その後、クライマックスの直前の接触B～Eは「微笑・遊び」が多かった。「階段登って」というクライマックス直前の接触Fから「弱いくすぐったがり」反応が見られ、接触Gでは「強いくすぐったがり」も多く見られた。「キャベツ」と同様に、この時期すでにくすぐったがり反応は見られていたが、アイコンタクトは見られないということは共通した特徴であった。また、「キャベツ」とは異なり、「東京都」の接触C～Fでは「回避」が見られ、一方それに続く接触Gでは強いくすぐったがり反応が見られるというように、1回のくすぐり遊びの中に混在した反応が見られることがあった。

＜第2期＞（5：01-5：05） 「回避」が見られなくなり、遊び開始初期から「弱いくすぐったがり」が見られるようになった。特に、保育者がA児に接触していないにもかかわらず、微笑したり、期待して身構えたりするようになったことが大きな変化であった。また、クライマックスの直前の接触Fから、毎回くすぐったがり反応が見られた。この時期のアイコンタクトについては、それが見られることもあったが、身体をよじるなどのくすぐたがり反応が強くなったためか、「キャベツ」よりは見られにくかった。アイコンタクトに関しては、この時期以降、同様の特徴であった。

＜第3期＞（5：06-5：11） 遊び開始時の接触Aから、「弱いくすぐったがり」や笑顔で保育者の手を押えたり、身体を引くなどの反応が見られ、接触C（「がりがり山の」）でより大きな声で笑いながら「強いくすぐったがり」反応を示したことが特徴であった。この時期には、1回のくすぐり遊び（歌の開始から終了）が終わると、A児から保育者にさらに要求して遊びが繰り返されるなど、くすぐり遊びに対するA児の積極性が示された。

<第4期> (6:00-6:09) この時期になると、「強くすぐったがり」は、接触Gのクライマックス場面に限定されてくる一方で、「キャベツ」と同様に、保育者の手を押えたり、一緒に持ったり、あるいは自分の服をめくっておなかを出すなど、遊びの中でA児のさまざまな主導性が発揮されるようになった。

以上、第1期から4期までのうち、「東京都」においても、第2期と第3期がくすぐり反応の出現がより顕著な時期であった。また、接触の種類については、観察期間を通して、クライマックス場面での接触G(お腹や脇腹などを指を速く屈伸させて触られる)は、「キャベツ」の接触5(クライマックス場面)と共通の接触パターンであり、A児はそれに対して強くすぐったがり反応を示した。また、「がりがり山の」と二本指を速く屈伸させて触れる接触Cに対しても、他の接触よりもくすぐったがることが多く、声を立てて笑うという反応が特徴であった。これも、「キャベツ」の接触3と類似した接触パターンと言える。

一方、「東京都」は「キャベツ」と比較して、くすぐり遊びの開始時は身体の末端部での相対的に柔らかな刺激で接触することが特徴であった。そのため、「キャベツ」では第2期から、遊びの開始時にくすぐったがり反応が見られたのに対し、「東京都」では第2期では「ニュートラル」が多く、第3期になるとくすぐったがり反応が見られるようになるという違いが見られた。

(2) 対人コミュニケーション行動の特徴  
くすぐり遊びの反応から区分された、4つの時期ごとにA児の対人コミュニケーション行動の特徴をまとめた。

<第1期> (4:04-5:00) 初めて実施した発達検査で、A児は、はめ板(発達年

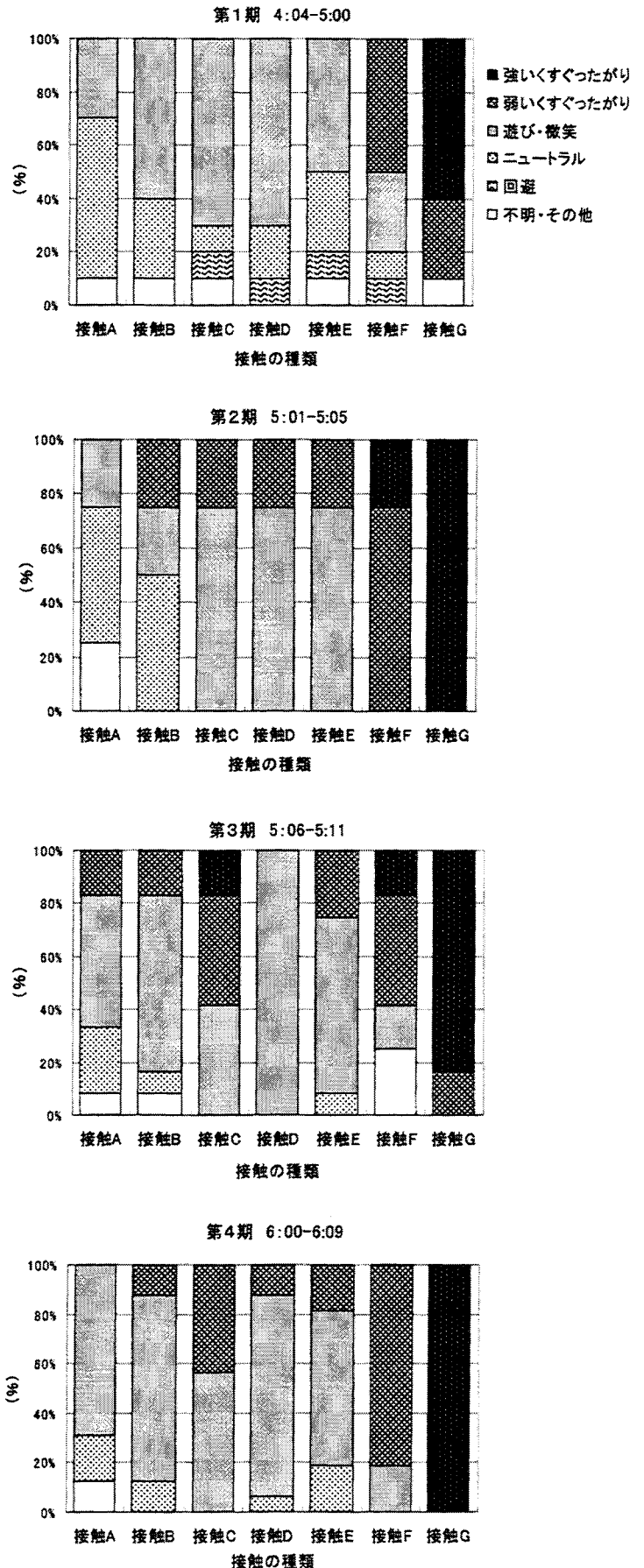


Figure 2 接触の種類別に見たA児の反応の変化(「東京都」)

齢1：03-1:09に該当)のみ応じたが、その他の課題は検査に応じず実施できなかった。A児は療育場面でにこやかな表情を見せていたが、それは一人で絵本を見ているときなどが多く、その際に独り言(単語)を話すこともあった。また、給食の時間に、保育者からどれが欲しいかと食べ物を提示されてもA児は応える様子が見られなかった。

<第2期>(5:01-5:05) この時期は、年度が変わり、担任や教室も変わったことがきっかけとなり、A児は以前の保育者、以前のクラス(場所)へ執着するような行動が見られると同時に、それまで独り言のような単語を発していたのが、要求の二語文(～シタイ)を話すようになった。また、発達検査においても、一通りの課題に応じられるという対人コミュニケーションにおける変化が見られた。しかし、検査時も療育場面でも指さしは観察されなかった。

<第3期>(5:06-5:11) この時期は、療育場面で指さしが見られるようになったことが注目すべき変化であった。それは、給食場面で、保育者にどれが欲しいか食べ物を提示され、A児が指さして応えるというものであった。ただし、発達検査では指さしの課題には応じられなかった。

<第4期>(6:00-6:09) この時期、50音表の文字を理解し始め、自分の名前を順に指さしたり、ある文字を指さしそれを保育者に言ってもらいたがるというように、劇的な変化が見られた。発達検査でも、A児が検査道具を乱暴に扱ったことを保育者から注意されると、わざと検査道具を投げて保育者を見るなど、他者の感情を伺うような行動が見られるようになったことが特徴であった。この時期、「絵指示」の課題がすべて可能になった。

以上のように、A児は第1期から第4期の間に、検査の成立そのものが困難な時期から、それが成立するだけでなく、指さしおよび文字を介したコミュニケーションが可能になるという顕著な変化が見られた。

## 2. B児の結果

### (1) くすぐり遊びに対する反応の発達的变化

B児のくすぐり遊びにおける反応の特徴から、5歳6か月～6歳10か月までの観察期間を以下の3つの時期に区分した。ただし、「キャベツ」は、6歳9か月までしか実施されなかったため、第2期までの特徴を記述した。以下、各時期の特徴をくすぐり遊びごとに述べる。

#### ① 「キャベツ」

第1期、第2期のくすぐり遊び「キャベツ」の反応をFigure3に示した。

<第1期>(5:06-5:11) すべての接触で「回避」が多いが、同時に接触1,5では「強いくすぐったがり」も見られ、相反する反応が混在していた。接触部位が腰であればくすぐったがり反応を示しているようだった。また、アイコンタクトはいずれの接触でもほとんど見られなかった。

<第2期>(6:02-6:09) 接触1～4で回避が減少し、主要な反応は「ニュートラル」で、それに時々「遊び」が見られた。しかし、接触5では、第1期と同様に、「回避」と「弱いくすぐったがり」の相反する反応が混在していた。

以上、第1期、第2期ともにB児の反応は「回避」や「ニュートラル」が多く、接触5以外は接触の種類による反応の違いはほとんど見られなかった。

## ②「東京都」

第1期から第3期までのくすぐり遊び「東京都」の反応をFigure4に示した。B児は、このくすぐり遊びで、1回の接触Gに対し、「回避」と「くすぐったがり」の両方を示すことが特徴であった。そこで、Figure4には、「回避+くすぐったがり」を新たなカテゴリーとして設けた。

<第1期> (5:06-5:11) 接触A～Eまではほとんど「ニュートラル」で、

接触FGで、「回避」と「強くすぐったがり」および「回避+くすぐったがり」反応を示した。また、くすぐり遊びが終わった後、B児から再度要求するような行動が見られたが、そのときの反応は「ニュートラル」と「回避」であった。

<第2期> (6:02-6:09) 第1期と同様に、接触A～Eまではほとんど「

ニュートラル」だが、接触Gで「回避」が多く、苦痛な表情を示すようになったことが特徴である。

<第3期> (6:10) この時期は、観察の最終回(くすぐり遊び3回分)に該当する。この回では「回避+くすぐったがり」反応も見られるが、これまでと異なり、全体として「微笑・遊び」が増えたことが注目すべき変化であった。

「東京都」は「キャベツ」と比較して、くすぐり遊びの開始時は身体の末端部での相対的に柔らかな刺激で接触することが特徴であった。そのため、B児の反応は「キャベツ」よりも「ニュートラル」が多く、そのことは特に第1期で顕著であった。

### (2) 対人コミュニケーション行動の特徴

A児と同様に、くすぐり遊びの反応から区分された、3つの時期ごとに対人コミュニケーション行動の特徴をまとめた。

<第1期> (5:06-5:11) 初めて発達検査で、B児は一通りの課題に応じることができるだけの対人コミュニケーションは可能であった。指さし(絵指示)の課題では、「自動車どれ?」には応じないが、保育者が「ママのくるまは?」と言うと、なんとなく車のあたりを触るといった反応が見られた。療育場面でも指さしは見られなかった。

<第2期> (6:02-6:09) この時期の指さしの課題では、立ち去ってしまいがたく応じなかった。

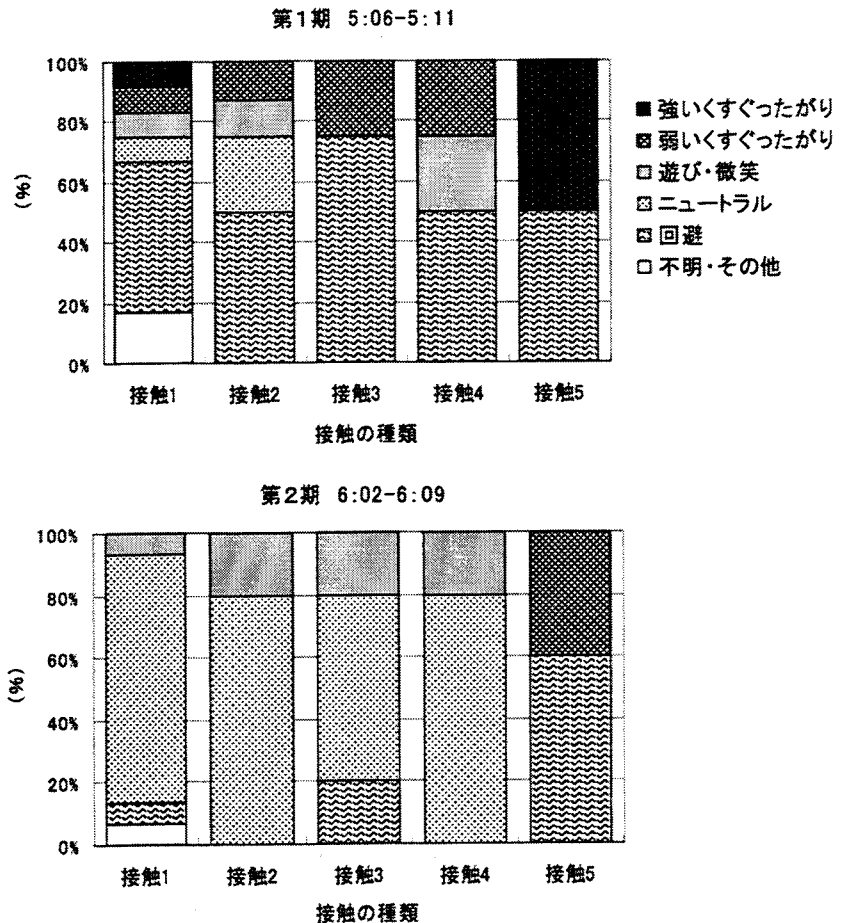


Figure 3 接触の種類別に見たB児の反応の変化(「キャベツ」)

第1期、第2期通じて、B児は表情の変化が乏しく、要求表出も見られにくく、また嫌なことであっても従属的に受け容れてしまうなどの傾向が見られた。しかし、B児は描画活動を好み、観察開始時点で、すでに顔や果物などの絵を描いていた。

<第3期> (6:10) この時期になると、療育場面でも発達検査場面でも、これまでとは異なるにこやかな表情が見られるようになったことが特徴であった。

以上のように、B児は第1期、第2期ともに対人コミュニケーションにおいて顕著な変化が見られなかったが、第3期に変化の兆しが見られ始めた。

### 考 察

以上の結果から、自閉症幼児のくすぐり遊びに対する反応は、発達的に変化すること、そしてその発達過程は事例によって異なることが明らかにされた。

A児の場合は、第1期のくすぐり遊びに対する消極的・受動的快から、第2・3期の積極的・能動的快、さらにくすぐり遊びという枠を超えた遊び（追いかけっこ）へと展開し、第3・4期には、くすぐり遊びを主導するプロセスが明らかにされた。健常児の乳幼児期における遊びの発達過程について検討した伊藤(1998)は、

くすぐり遊びや揺さぶり遊びとい

った情動交流的遊びの次の段階として、追いかけっこやいないいないばー遊びなどの役割交替遊びへと発展すると指摘している。本研究の結果から、自閉症児も同様のプロセスを示すことが示唆される。

一方、B児の場合は、第1期のくすぐり遊びに対する「回避・ニュートラル」反応から、第2期の「ニュートラル・回避」反応へと変化し、さらに、第3期の「遊び・微笑」反応へと変化することが示唆された。この変化の過程では、出現の大小に違いはあるが、いずれの時期にもくすぐり」と回

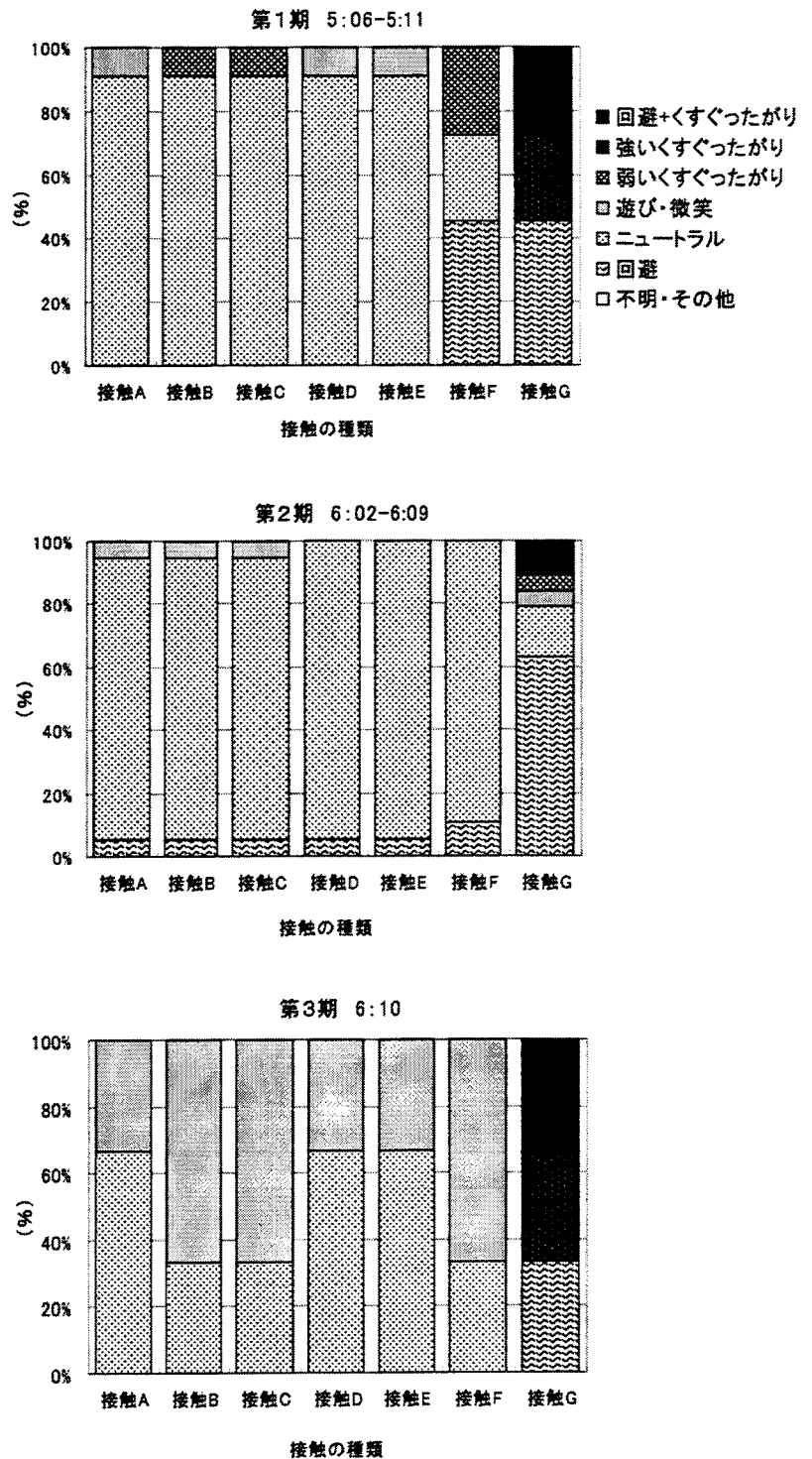


Figure 4 接触の種類別に見たB児の反応の変化 (「東京都」)



避が混在するアンビヴァレントな反応が見られたことが特徴であった。

また、くすぐり遊びに対する反応と対人コミュニケーション行動には、発達の関連があることが示唆された。コミュニケーションにおける自閉症特有困難さとして、「共同注意」や「焦点の共有」が挙げられる (Trevarthen, Atken, Papoudi, & Rpberts, 1998 など)。彼らは、他者の注意を受けとめたり、それを方向付けることが難しく、また指さしやジェスチャーによって他者と事象を共有することが難しい (Jordan, 1993)。一方、自閉症の子どもたちの中でも、他者と注意の共有ができる場合には言葉の使用や理解において優れているという (Mundy, Sigman, & Kasari, 1990)。本研究の結果から、A 児は観察期間を通じて、共同注意等が困難な時期から、それらが可能になり、さらに指さしなどのジェスチャーによるコミュニケーションが可能になるというプロセスを示したのに対し、B 児は他者の注意を受けとめることは可能であるが、他者の注意を方向付けることが難しく、指さしも見られなかった。この 2 事例の対人コミュニケーション行動とくすぐり遊びにおける反応の変化を比較検討すると、自閉症児のくすぐり遊びでは、単に「くすぐったがり」反応が生起するだけでなく、くすぐる人とのアイコンタクトやくすぐろうとすることや人への期待が重要であると考えられる。B 児の場合は、「くすぐったがり」と「回避」が混在するアンビヴァレントな反応が見られたが、それは、身体的に快な部分へは「くすぐったがり」が、不快な部分へは「回避」が見られたのではないかと解釈できる。つまり、B 児の「くすぐったがり」反応は、他者にくすぐられることへの期待を伴う「くすぐったさ」とは異なるものと思われる。

根ヶ山・山口 (2005) によれば、健常児の場合、くすぐったさの発現は「他者性」の認識の発達を示すものとされている。しかし、自閉症児の場合、身体的な自他分化が「くすぐったがり反応」にはつながっても、両者が身体的に共振するような一体感にはつながらないことを本研究の結果は示している。くすぐり遊びは、身体的な自他分化や自分ではない「他者」の身体接触に応じるだけでなく、触ろうとする他者の意図を期待し、それを受け入れ、共有することによって成立しているのではないかと考えられる。

自閉症児のコミュニケーションについて、間主観性の意識とスキルを強めるサポートの必要性が指摘されている (Trevarthen, Atken, Papoudi, & Rpberts, 1998)。くすぐり遊びは、それ自体としても、またそれを大人と子どもが交互にし合うことによってさらに、間主観性の意識を強める重要な役割を果たすのではないかと考えられる。

さいごに、今後の課題について述べておく。本研究では、くすぐり遊びに対する子ども側の変化を明らかにしたが、保育者の側も子どもの反応に呼応して変化していた。今後は、双方向の変化を視野に入れた分析を行うこと必要がある。

また、Wallon (1983) によれば、情動的交流遊びから役割交替遊びへ発展すると、おいかけっこやいないいないばーなど、他者との間でその遊びを「する-される」関係が成立するとされている。しかし、今回の観察では、A 児が他者にくすぐる側や追いかける側になることは見られなかった。この結果が自閉症の特徴なのか、本事例の特徴なのかについては今後検討していかなければならない。

## 文 献

Jordan, R. (1993). 'The nature of linguistic and communication difficulties of children with autism' In D. J. Messer & G. J. Turner (Eds.) *Critical Influences on Child Language Acquisition and Development*. New York: St. Martin's Press.

- 伊藤良子. (1998). 遊び. 松野豊・茂木俊彦 (編), *障害児心理学*, (pp. 66-88). 東京: 全障研出版部.
- Mundy, P., Sigman, M., & Kasari, C. (1990). 'A Longitudinal study of joint attention and language development in autistic children'. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 115-129.
- 根ヶ山光一・山口 創. (2005). 母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達. *小児保健研究*, 64, 451-46
- Trevarthen, C., Atken, K., Papoudi, D., & Rpberts, J. (2005). *自閉症の子どもたち: 間主観性の発達心理学からのアプローチ* (中野 茂・伊藤良子・近藤清美, 監訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Trevarthen, C., Atken, K., Papoudi, D., & Rpberts, J. (1998.) *Children with autism: diagnosis and interventions to meet their needs*. 2ed. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Wallon, A. (1983). 子どもにおける社会性の発達. 身体・自我・社会. (浜田寿美男 訳編). 京都: ミネルヴァ書房. (pp. 73-103). (Wallon, A. (1952). *Les etapes de la sociabilite chez l'enfant. L'Ecole Libree.*)
- 山口 創. (2003). *愛撫・人の心に触れる力*. 東京: 日本放送出版会.

#### 謝辞

本研究の観察には、東京都H市の障害児通園施設の子どもたちと保育者、保護者の方々にご協力いただきました。ここに記して深く感謝いたします。

Kawahara, Noriko (Kyoritsu Women's University). *Tactile Play in Autistic children: Analysis of Tickling Play*. The purpose of the present study was to investigate the development of ticking play in autistic children. Ticking play of 2 children and their caregivers was videotaped once in one or two months at an institution for children with disability. Type of caregiver's touch, children's reaction to bodily touch, and children's communication toward person were analyzed. Several different touches corresponded to the song for ticking play. Change of 2 children's reaction to tickling showed different developmental processes. The reaction of one child changed from passive feeling of enjoyment to active pleasure. Strong ticklishness was evident in tickling toward armpit and flank at start to observation, and became apparent without touch. On the other hand, the reaction of another child consistently showed ambivalent reaction to tickling. His face looked both aversive and pleasant particularly in tickling toward armpit and flank. It was important for autistic children that they eye-contacted with caregiver and expected to touch in tickling play, comparing between development processes of two children. These finding was discussed from viewpoint of development in communication toward person.

【Key words】 Tactile play, Ticking play, Autistic children, Bodily touch, Communication

# 幼児・児童虐待事例における身体接触エピソードの事例検討

早稲田大学人間科学学術院教授

菅野 純

## 1. 問題

殴打や火傷など身体に加えられた虐待など子どもにとって負の身体接触体験を頻回に受けると、子どもは感覚過敏と感覚鈍麻が混在し独特の感覚行動を示すようになるとよく指摘される。被虐待児の「無表情」「暗い表情」「凍りついたような目」といったノンバーバル表出面での特徴やヘッドバンギングや顔面への引っ掻き、リストカットなどの自傷行為は、こうした感覚鈍麻と関連する現象であることが推測される。さらにトラウマを想起させる状態に対し、かゆみや痛みの出現や身体感覚の違和感などの解離が見られることも指摘されている。Gil, E(1991)は身体的虐待が子どもに与える影響について多くの研究を概観し、①他者の行動に対する過敏反応傾向、②社会的接触の際の防衛の高さ、③対人関係における両価性、④同年齢の子どもたちとかかわる社会的技術の欠如、⑤学習性無力感、⑥対象永続性および対象恒常性の欠如ほかをあげている。虐待を受けた子どもが成長が進むにつれて①引きこもり症状、②抑鬱症状、③原因が特定できない恐怖症、④退行症状、⑤摂食障害などの症状に陥りやすいことを考慮に入れば、虐待の早期発見とともに、虐待がもたらすさまざまな症状や問題行動へ治療的対応が必要なことはいままでもない。

幼児や児童への心理療法は、カウンセリングなど言語による方法よりも遊びを通したプレイセラピーが有効であることはよく知られている。Gil, E(1991)は虐待の子どもの心理療法に先立つ心理的アセスメントのポイントとして①虐待が生じた時の子ども年齢、②虐待の期間の長さ、③虐待の重度性、④虐待者と子どもとの関係、⑤子どもへの脅威の程度、⑥子どもの家族の情緒的環境、⑦子どもの精神的および情緒的健康度、⑧子どもの罪悪感、⑨子どもの性別、⑩子どもが被害を受けたことへの両親の反応、などをあげている。彼女は、そうしたアセスメントにもとづいて被虐待児の心理療法ではセラピストが子どもと「安全で、適切で、肯定的な相互関係をもち」「非侵襲的なセラピー」を行なわねばならないと説く。

ところで子どもが虐待によっていかなるダメージを受けたかは子どもの行動観察に頼らざるを得ない。無理な言語化は虐待を受けた子どもの心を強く侵襲することになるからである。

本研究では、①被虐待児の身体接触行動に注目することで虐待が子どもの心にもたらす影響を推し量る可能性を検証する。同時に②プレイセラピーでの負の身体接触体験から正の身体接触体験へのプロセスが、被虐待児の人間への基本的信頼感獲得と被虐待体験がもたらすさまざまな問題行動や症状への回復の手がかりとなる可能性を検証したい。

## 2. 方法

### (1) 対象

首都圏にある児童養護施設(A施設)の入所児童(本報告では2歳から18歳までを「児童」よぶことにする)、および首都圏の教育相談機関(B施設)に虐待を含む問題で来所している児童。

A施設は入所定員100名、2歳から18歳までの子どもが入所しており、施設内に教舎設置されている定員16名の寮舎に、年齢の異なる子どもたちが児童指導員および保育士とともに暮らしている。寮舎内では一部屋につき2～4名が男女別に就寝している。入所児童は近隣の幼稚園および学校に通学し、週末や学校の長期休みには、一時帰宅する児童と施設内で過ごす児童に分かれる。入所児童約4名につき1名の職員が配置されている。またスタッフとして常勤心理職1名と非常勤心理職2名(いずれも臨床心理士)がおり、施設内のセラピー室でプレイセラピーやカウンセリングを行なっている。

B施設は、教育委員会設置の公立の教育相談室である。2歳から18歳までと教育相談室としては相談対象は広く、常勤および非常勤カウンセラーがカウンセリング、プレイセラピー、箱庭療法、絵画療法、発達障害への療育訓練などさまざまな方法で保護者および子どもの相談にあっている。

本調査の対象児童は身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待いずれかを過去に経験しているが、その程度や持続期間その他の情報は十分開示されていない。

### (2) 調査方法

A施設およびB施設において実際に子どものプレイセラピーを行なっている心理職およびカウンセラーからの行動観察についての聞き取り調査、および筆者が直接あるいはスーパービジョンを通じて間接的にかかわっている事例の行動観察と報告の中から、身体接触に関するエピソードを抽出し、心理療法の立場から事例検討を行なった。

### (3) 期間

2005年1月より2007年3月

### 3. 結果

(1) 児童養護施設(A施設)におけるプレイセラピー場面および寮生活での身体接触に関するエピソード

#### (1) - 1 プレイルーム場面

##### エピソード1: 身体接触への葛藤

5歳男子。本当はセラピストの膝の上に乗りたいのだが、遠目に見ている。身体接触したいという気持ちを素直に出せない。

##### エピソード2: 身体接触のきっかけがわからない

同上男子。身体接触をどうしてよいかわからない。身体接触のきっかけをうまく作ることが出来ず「おいで」などと促されると言われるがままに膝に乗る。

##### エピソード3: 身体接触への緊張

同上男子。身体接触時に身体をこわばらせる緊張が長く続く。

##### エピソード4: 身体接触への慣れと不安定さの持続

同上男子。セラピストが本児を幼稚園に送り迎えする際(A施設では心理職であるセラピストも子どもたちの生活場面にかかわる)、自転車の前補助席に乗せ身体を挟むようにしたりして徐々に慣れさせた結果、子どもの方も自転車の揺れの中で自分から接触を求めてくるようになる。しかし身体接触に慣れてきても、適度な身体接触は難しく、セラピストとの身体を使つてのプレイの中で突然興奮して暴れたり、際限なく身体接触を求めてきたり、しばらくは不安定な身体接触が続く。

##### エピソード5: 物(この場合には絵の具)を媒介して間接的身体接触から直接的な身体接触に発展

小学5年男子。本児の生育歴には明らかなネグレクトが見られる。ふだん自分からは身体接触をまったく行なわない。こちらからされることには拒否はしない。言葉も一方的で、対話が成り立たない。学校では他児と交流せずいつも一人であるという。寮でも一人遊び、一人でぼつんという。朝礼の時一人でふらふらとホールに入ってくる。

絵が好きでプレイではおばけが泣いている絵ばかり描く。セラピストは遊びをリードせず、一緒に絵を描くことで共に過ごす。ある時、フーセンに粘土を張りつけ目鼻を作ろうとするがうまくいかず、突然自分の顔に絵の具で塗り始める。その後、セラピストとの顔に絵の具を塗り始める。これが自分から行なった初めてのセラピストへの身体接触だった。

「本児なりのコミュニケーション」とセラピストはされるままになっていたが、以後、本児自身からの直接的な身体接触が増え、身体接触を介したプレイがはじまる。

##### エピソード6: 身体接触を積極的に求めてくる

小学3年男子。母親からは虐待を受けたが父親とは心的つながりのある男児。プレイセラ

ピー場面では膝に乗ると足をくっつけてくるなどセラピスト（男性）に積極的に身体接触を求めてくる。

## (1) - 2 施設での生活場面

### エピソード7: 自己接触—サッキング

児童期に入っても指をくわえて歩く子どもがいる。

### エピソード8: 身体接触をとまなう養育行動を自分からは求めない

寮生活では衣服の着脱も子どもが自分で行なう方針だが、自力でやれない場合に、職員に「出来ない」「やって」と訴えたり求めたりせず、そのまま服を着ずに立ちすくむことがある。

### エピソード9: 物を媒介とした身体接触

寝癖を直すために蒸しタオルを髪にあてたり、髪をとかしてあげるなど、養育行動の中で物を媒介とした間接的身体接触だと、ふだん身体接触を自分から求めず、身体接触に緊張しがちな子どもでも心地よさそうにされるがままになっている。

### エピソード10: 年齢にそぐわない感じの身体接触

小学6年男子。女子大学生のボランティアに「手をつなぎたがる」「接近し過ぎる」など、強く身体接触を求めたりする。

### エピソード11: 身体接触の欲求と周囲からの牽制

幼児期女子。稚園生活場面で、職員にぴたっと張りつき離れない女兒が複数いる。しかしそうした行為に対しては他の女兒から「ズルイ」と非難を浴びることもあり、身体接触を思うように行なうことが出来ないことも多い。

### エピソード12: 子ども同士の身体接触

寮内では子ども同士の身体接触はあまり見られない。

### エピソード13: 身体接触に対する被害的過敏さ

他児からの身体接触を、故意に攻撃されたと感じ、トラブルになる例がよく見られる。

### エピソード14: 気分の波

身体接触にまつわる同じことでも、日によって子ども同士のトラブルになる時とならない時がある。

### エピソード15: 身体接触の加減

身体接触を伴う遊びで力の加減がわからない。「そこまでしなくてもよいのに」と思うような強すぎる身体接触行動が見られることがある。

### エピソード16: 身体接触を通じてアピール

小学6年女子。男子学生ボランティアに「腕を組む」など身体接触を通して親密さをアピールする。

### エピソード17: 面倒をみる身体接触

中学生が小さい子の面倒をよくみる。年長者が年少者の身体接触をよくしてあげている。

<後から抱き抱える><肩車する><おんぶする>など。やってあげている方も身体接触を求めているかもしれない。してもらえなかったことをしているとも考えられる。

#### エピソード18: 思春期になってから求め始める身体接触

思春期女子。それまでは他の幼い子どもたちへの“お姉ちゃん役”としてしっかりしており格別に身体接触を求めてくることはなかったが、思春期に入った頃からこれまでの身体接触不足を取り戻すかのように身体接触が増えてくる。「ベタベタしてくる」という職員の印象。

#### エピソード19: 性的逸脱

思春期女子。女子では思春期になり性的な問題を起こす子もいる。性を媒介として人とつながろうとする。同じ寮の男子と家出する例もある。

### (2) 教育相談室(B施設)におけるプレイセラピー場面での身体接触に関するエピソード

#### エピソード20: 身体接触から攻撃的行動へ

小学3年男子。母親からの明らかな心理的虐待、ネグレクト、身体的虐待がある。

小学2年のある日、母親に親猿が子猿を抱いている写真を持ってきて「こういうふうに抱いて」と言ったことがあった。母親は「なに馬鹿なことを言っているの!」と叱った。また真剣な面持ちで「ぼく女になっちゃった。ぼくの髪輪ゴムでゆわえてみて」と言いに来たこともあった。母親はいらだちのあまり家から締め出したという。

その後、飼っていた金魚のヒレをはさみで切り取る、可愛がっている小鳥をひもで巻き殺す、といった小動物への残虐行為が見られるようになり、まるで幼児に戻ったかのような退行症状とささいなことで怯える恐怖症状が始まり来室した。

プレイセラピーでははじめ若い女性セラピストに幼児がえりしたかのようにべたべたと身体接触を求めてきた。しかしプレイセラピーが数回経過したあと、攻撃的行動が増えていき、セラピストをプラスチックの刀で容赦なく叩く、セラピスト目がけて玩具を投げ付ける、「てめえ、あっちに行け!死んでしまえ!」などの暴言、など激しい攻撃行動が始まった。怒りの爆発はしばらく続いたが、プレイの中に制限を入れながら、受容と言語化を繰り返していくうちに攻撃行動はルールのあるゲームなどに転化してゆき、同時に恐怖症状も消失していった。

#### エピソード21: ファンタジープレイから身体接触プレイへ

小学2年男子。義母による心理的虐待と身体的虐待がある。相談室には家出、徘徊を主訴に父親と共に来室。夕方から深夜にかけて盗んだ自転車でひたすら国道を走っているところを毎回保護される。本人は家出の理由を「夕方になると『あの自転車に乗ってS町(20キロ程離れた繁華街)に行け』という声が聞こえて来るんだよ」と説明。S町には亡くなった実母の母(祖母)が住んでいたが、父親の再婚後すでに他界している。

父親の話では、はじめ義母は男児とのスキンシップをごく普通に行なっていたが、妊娠によりお腹が大きくなるにつれて男児を極端に汚がるようになり、近くに寄せ付けぬようになったという。男児が夫婦の寝室へ入ることを禁止し、やがてリビングへの立ち入りまで禁止し、男児の家出・徘徊が頻回に起こるようになった頃には、玄関脇の子ども部屋以外には立ち入り禁止状態だった。“約束”を破った時には、叩く、蹴るといった身体的虐待もあった。男性セラピストとのプレイセラピー場面では、空想力と豊かな言葉によるファンタジープレイ(架空の町へ探険に行く、など)が中心だが、相撲やプロレスごっこといった身体を使うプレイでは「するりするり」とかわし続けることが多く、セラピストは男子と身体接触した実感がほとんどなかった。ある時、相撲でやや強引に四つに組んだ時、男子の身体が非常に緊張していることに気づいた。無理に身体接触をせぬよう配慮しながら徐々に身体接触を増やしていく方針のもとにセラピーを続けているうちに、少しずつ身体接触への慣れがみられるようになった。



### 3. 考察

#### (1) 身体接触を媒介とした心理アセスメント

子どもが受けた虐待の種類と程度によって心に残るダメージの質と重さも異なることが予想された。今回得たエピソードからは、セラピストや施設職員との身体接触行動は以下の特徴が見られた。

##### ① 身体接触への過度の防衛

セラピストや職員が「抱く」「触る」「膝に乗せる」などの身体接触を行おうとすると、体をこわばらせ、過緊張状態になってしまう子どもがいる(エピソード3)。このことは Gil, E(1991)が身体的虐待の影響として指摘する「社会的防衛の高さ」の一表現と考えられる。そうした身体の過度の防衛が見られる子どもの場合、身体的虐待の可能性を考慮に入れてプレイしていくことが必要である。また身体的虐待の事実確認と期間、程度など虐待に関する情報把握も行う必要があるだろう。

##### ② 身体接触への消極さ

子どもたちの行動でよく見られるのが身体接触への消極さである(エピソード2、5、8、12)。身体接触をするための導入方法が未学習とも考えられるし、身体接触についての無力感やあきらめがこれまでの生育歴の中で形成されてしまったとも考えられる。しかし①と異なり身体的虐待などの負の身体接触体験は比較的軽微か、もしくは少なかったと考えられる。こちらのかかわりの工夫によって徐々に積極さが見られるようになる子どももいる(エピソード4、5、21)。

##### ③ 身体接触への葛藤と両価的(アンビバレントな)感情

エピソード1や5には身体接触への葛藤とアンビバレンスが見られる。こうした葛藤やアンビバレンスを一般には「素直でない」「可愛げがない」というレベルでとらえられ、そのように処遇されることも少なくない。事実エピソード5の小学5年男児の小学校学級担任はそのような言葉でこの男児を表現している。しかしセラピストはこうした一見「素直でない」「可愛げがない」行動の背後にある葛藤と両価的(アンビバレントな)感情を深く理解することで子どもへのセラピーがより促進されると理解しなければならない。

##### ④ 身体接触への<慣れ>のプロセス

セラピストが被虐待児の行動の背後にある心的外傷や感情を理解し、身体接触への心理的抵抗を和らげながら徐々に身体接触に慣れさせようと試みても、そのプロセスは決して平坦ではない。むしろ時には度を過ぎた接触を求めてきたり(エピソード4、10、15)、身体接触欲求を満たしてくれる人を独占しようとしたり、他児からの牽制にあったり(エピソード11)と不安定なものである。こうした身体接触への<慣れ>のプロセスで生じる振幅が少しずつ小さくなっていくことが被虐待児の心の回復の指標となるのではないだろうか。

## ⑤ 直接的身体接触と間接的身体接触

子どもの中には他者と直接的な身体接触に慣れる前に、間接的身体接触行動が生じる場合がある。プレイセラピー場面で生じたエピソード 5 はまさにそうした例である。この場合セラピストがセラピストの顔への絵の具での落書きを「本児なりのコミュニケーション」ととらえするがままにさせたことが、それ以後の直接的身体接触につながっている。「自分の顔に絵の具を塗った後、セラピストの顔にも塗る」という行為は、自分と他者が連続上に存在していることを確かめ、また他者は自分を脅かす存在ではなく受け入れる存在であることを確認する機会となったのではないだろうか。

## ⑥ 自己接触行動

児童期にいたっても指しゃぶりなどの自己接触行動が続く子どももいる。そうした子どもが他者とはどのような身体接触行動をとるのか把握することで、子どもの「身体接触の現在」を理解することにつながるだろう。

## ⑦ 発達軸でとらえた身体接触

発達過程で身体接触行動をとらえる視点も重要である。子どもは成長とともに直接的に他者に身体接触を求めなくなる。しかし形を変えた身体接触が見られることがある。エピソード 17 は、子どもが成長しそれだけ養育的行動が出来るようになった、というとらえ方も出来るが、一方で年齢的に許されなくなった身体接触行動を「他児にしてあげる」という形で行っているとも考えられる。またこれまで我慢していた身体接触欲求が思春期になってから出始めることもある。女子に多く見られる。こうした取り戻し現象が身体接触にはよく見られるのである。問題行動としての「退行症状」はその例とも言えよう。

## ⑧ 性的逸脱問題

性行為には身体接触を伴う。身体接触の機会に恵まれなかった子どもが、年齢にそぐわない性的行動に走る例は思春期カウンセリングでは少なからず見られることである。エピソード 19 は、性非行といった問題を身体接触の視点からとらえなおす必要性を示している。

## (2) 身体接触を媒介としたプレイセラピー

### ① 被虐待と攻撃性の蓄積

虐待経験を持つ子どもの攻撃性についてはプレイセラピー事例の中でよく見られる。虐待を受け続けているうちに子どもの体の中に攻撃性が蓄積され、また虐待行為が子どもの行動モデルとなり、次世代に受け継がれてしまうのである。エピソード 20 に見られるプレイのプロセスは虐待に耐えられなかった子どもが、日常生活やプレイセラピーの中で虐待をなぞり、心の中に蓄積された怒りや攻撃性を吐き出す事によって心を回復させるプロセスといえる。負の身体接触から正の身体接触へのプロセスをプレイセラピーで歩むのである。

### ② 現実性の獲得としての身体接触

エピソード 21 に見られる子どもは被虐待の結果、空想の世界に入り込むことを覚えた事例である。空想の世界に入りこむ代償として現実世界での不適応行動が続いている。こう

した子どもが示す「するりとかわす身体接触」は、ある時期まで身体接触のよさを体験していたということが基盤にあることで生じることかもしれない。子どもの中には身体接触に対し被害的な過敏さを示す子どももいるからである（エピソード13）。空想世界にいる子どもが現実性を獲得するために、身体接触行動が媒介となった事例といえる。

## 文献

Gil, E(1991). *The healing power of play*. NY : The Guilford Press. (邦題: エリアナ・ギルー著 1997 虐待を受けた子どものプレイセラピー 西澤哲訳 誠信書房)

# 思春期における身体接触が 不安に及ぼす影響

山口 創（聖徳大学人文学部）

## 目的

身体接触に関する研究は、これまで主に母子関係を中心に、カウンセリングや看護・介護、対人コミュニケーションの分野で検討されてきた。その多くは、母子の絆を強める (Klaus & Kennell, 1982)、カウンセリングで自己開示を促進する (Patterson, 1973)、クライアントの不安を低減させる (Field, Seligman, Scafidi & Schanberg, 1996)、親密感や魅力を高める (Boderman, Freed & Kinnucan, 1972) というように、多くの肯定的な結果が得られている。しかし少数ではあるが、否定的な結果が得られているのも事実である。たとえば初対面の異性との身体接触は、不安や不快感を高めたり (Walker & Bragg, 1981)、エンカウンターグループで、身体接触の有無による、共感や信頼感の差はなかったとする研究もある (Clarke, 1971)。これらの諸々の研究を概観すると、どのような人間関係において、どのような接触をする場合に肯定的あるいは否定的な影響が出るのか、といった統一的な見解は未だないのが現状である。

では身体接触をする際、どのような条件で肯定的あるいは否定的な影響が表れるのだろうか。これまでは主に、性差や地位の差というように、身体接触をする者を取り巻く外的な条件が検討されてきた。しかし、身体接触の影響は、外的な条件ばかりではなく、当人の認知的な判断にも大きく依存するとも考えられる。なぜなら、同一の条件下で身体接触をしたとしても、触れる側の者も個性としての独自の雰囲気や、触れる際の微妙な態度などが、触れられる側の受け取り方に多大な影響を与えるであろうことは、容易に想像できるからである。身体接触は強烈でかつ微妙なコミュニケーション手段であるため、実験的に外的な条件をすべて統制することは極めて困難であると考えられる。その場合、むしろ認知的判断のような内的状態に着目することが、身体接触の影響を予測するためには有効ではないかと考えられる。つまり、外的な条件が如何なるものであったとしても、そのときの内的状態を捉えることができれば、身体接触の影響をある程度正確に予測できるであろうと考えられる。

本研究では内的状態の中で、身体接触への抵抗感に焦点をあてる。それに関して坂部 (1983) は、触れることは、単なる感覚による知覚ではなく、その展開として相手のより深くへと侵入し、我々のもっとも深い層に触れるためにあるのだ、と述べている。また原口 (1990) は、“触れる”体験の相互性が欠如した場での“触れる”行為は、“触れる”ではなく“さわる”ことになってしまう、とし、時には“触れないでおく”ことがカウンセラーの態度として大切であると述べている。身体接触への抵抗感は、“触れないでほしい”という内奥の心理状態の反映であるといえ、身体接触は、それをする者とされる者の両者にとって、単なる感覚に還元できない、深い内的な経験であるといえる。それゆえ、外的な条件の記述のみでは十分に理解されたとはいえないのではないだろうか。

次に、身体接触への抵抗感の、発達の变化についてである。鈴木・春木 (1997) は、大学生を対象にしたアンケート調査により、過去の対人関係における身体接触量の発達の变化について検討している。それによると、生後ずっと両親との身体接触が多かったのが、思春期を境に、友人との身体接触に移行することを示した。このように思春期は、身体接触の過渡期であると考えられる。また思春期における友人との身体接触の重要性は、精神分析の Erikson, E. H. が心理社会的発達理論の中で、この時期における発達課題を、親密性と孤立の葛藤というように対立的に示した点から推察される。この課題を身体接触の視点から捉えれば、身体接触への抵抗感とも密接に関連していると考えられる。つまり、

身体接触は強烈な情動を喚起させるコミュニケーション手段であるため、他者との関係性の発展あるいは崩壊の契機となる手段であり、他者との身体接触への抵抗感が低い者は、親密な人間関係を容易に築くことが可能で、逆に抵抗感が高い者は孤立が優位になるという関係にあると考えられる。

本研究では、思春期の身体接触への抵抗感に焦点をあて、それを触覚抵抗と定義することにする。では触覚抵抗はいかなる心理的側面と関連があるだろうか。まず触覚抵抗は、相手との関係性から生じる内的感覚であることから、自己と相手との心理的距離を反映していると考えられる。つまり相手と親密な関係にあれば、その間にある心理的距離は狭く、触れることに抵抗があれば、それは広いだろう。心理的距離とは、心理学では“パーソナルスペース” (personal space; 以下 PS) の問題として検討されてきた。PS は“自我が皮膚を抜け出て外部に延長したものである”と考えられており、自我防衛の機能をもつと考えられている (Sommer, 1959)。実際、人に触れる頻度が多い者ほど、PS が小さいという関連があることから (山口, 2003)、触覚抵抗の高さと PS は、密接な関連のある概念であるといえよう。本研究では、触覚抵抗を測定するための尺度を開発し (以下、触覚抵抗尺度とする)、信頼性と妥当性を検討する。PS は、触覚抵抗尺度と関連があると考えられるため、妥当性の検討に用いることにした。

次に、触覚抵抗と身体接触との関連についてである。行為としての身体接触を徹視的にみると、それはほとんどの場合、相手に能動的に触れる場合と (能動触とする)、受身的に他者から触れられる場合に分けられる (受動触とする)。先行研究では、受動触の場合の心理的変化を検討した実験がほとんどで、能動触について検討した研究は皆無である。しかし、“触れる”ことは同時に相手の身体に“触れられる”ことにもなるという特徴を有するため、特に友人関係のような対等な対人関係においては、触れる者の心理的変化も同様に検討すべきであり、受動触のみの検討では不十分であると考えられる。そこで、本研究ではこれらを比較検討することとした。

さらに、身体接触の結果として影響を受ける情動状態として、不安や困惑、緊張といった否定的なもの、喜びや共感といった肯定的なものがあげられるが、本研究では特に不安について検討することとした。それはカウンセリング場面やグループワークあるいは看護や介護場面では、患者の不安を低下させるために身体接触が用いられるが、前述のように逆に不安を高めてしまう可能性も指摘されている。このように不安は、肯定的あるいは否定的な影響を一元的に測定できるメリットがある。また、不安を低下させる身体接触は、社会的地位の上位の者が下位の者に触れる場合に限られ、その逆の場合はかえって不安が上昇するともいわれている (Walker & Bragg, 1981)。本研究では、そのような条件を統制するため、思春期における社会的地位に差のない者同士の接触をとりあげ検討することとした。このとき、さらに統制群であるセルフタッチをする群と比較することとした。セルフタッチは、不安が高い場面で頻繁に観察され、不安を低減させる効果があると考えられている (山口, 2003)。このことから、単純な皮膚への刺激に不安低減の効果があるとすれば、能動触、受動触、セルフタッチの3群間に差はないと考えられる。

## 研究1

触覚抵抗を測定するための尺度を開発する。そのために、まず触覚抵抗の特徴を収集し項目を作成し、その構造を明らかにする。また尺度の信頼性と妥当性も検討する。

### 方法

項目の準備 触覚抵抗を測定する項目を収集するため、Ayres (1979) 及び感覚統合療法の触覚防衛について述べられている著書 (坂本・花熊, 1997) を参考に、身体接触と関連のある項目を収集した<sup>付記1)</sup>。項目の選定の目安は、

---

付記1 触覚防衛とは、何らかの対象に触れたり、あるいは人に触れられることに極度の不快感をもつ特徴を示す。感覚統合療法の創始者 Ayres (1965) は、特異的発達障害児者や広汎性発達障害児者の症状と、彼らの触覚に対する過敏さとの間には密接な関係がある、と考えている。そして彼らの触覚的な特徴を触覚防衛とよんだ。

思春期の健常者でも普段の生活の中で起こり得ることを基準として選択した。こうして合計 20 項目からなる尺度を作成した。回答の方式は、“全く当てはまらない(1)”、“やや当てはまらない(2)”、“どちらとも言えない(3)”、“やや当てはまる(4)”、“とても当てはまる(5)”の 5 件法で回答を求めた。

**被調査者** 青森県の県立高校生および首都圏の 4 年制私立大学学生計 400 名（男性 76 名、女性 324 名）であった。

平均年齢は 19.0 歳（範囲 18 - 25 歳、SD=1.43）であった。有効回答率は 99.0%であった。

**調査日時** 2005 年 6 月から 7 月にかけて行った。

#### 調査測度

**PS の測定：** 触覚抵抗の基準関連妥当性を検討するために用いた。天貝（1996）が用いた方法で、“10cm の線分の左端に被験者がいると想定し、父親、母親、同性の友人、恋人のそれぞれが線分上のどの距離にいるか”、という指示によって、それぞれの人物の位置にチェックを入れ、被験者との距離を測定するという投影的な方法によるものである。各々の対象者が存在しない場合は、位置をチェックしないよう求めた。評定は 0~100mm までの数値で測定した。

**その他の触覚抵抗測定項目** この他に、内容的妥当性を検討するために、総合的な自己評価の指標として、“人に触れることに抵抗がある”、“人に触れられることに抵抗がある”の 2 項目についても上記と同様の 5 件法で回答を求めた。

**手続き** 心理学の授業を利用し、授業開始時に上記の質問紙を配布し、その場で記入を求め、全員の記入が終了した後、回収した。なお、回答は無記名で行われた。

#### 結果と考察

**分析の流れ** まず、触覚抵抗尺度の 20 項目を得点化し、学年差及び性差を検討したが、いずれの項目においても有意差はみられなかったため、以降の分析ではすべてのデータをもとに行うこととした。次に I T 相関分析によって、0.30 未満の 4 項目を除いた。次に残りの項目に対して主因子法による因子分析を行い、共通性 0.40 未満の項目を除いた。その後、プロマックス回転を行い、因子負荷量 0.35 未満の 4 項目及び、2 重負荷のある 1 項目を除いた。最終的に残された項目に対して再度因子分析（主因子法）を行った。その結果、1 因子構造を有することが確認された（Table 1 参照）。その内容は、受動触への抵抗感、特に予期せずに触れられることであった。 $\alpha$  係数は .85 であった。以上のことから、因子構造の明確さと信頼性の高さは確認されたといえよう。

#### PS 及びその他の触覚抵抗項目との関連

まず、基準関連妥当性について検討するため、触覚抵抗尺度の因子得点を算出し、それと 4 名の対象者の PS の長さとの相関分析を行った。その結果、有意な相関係数は、友人 ( $r=.20, p<.01$ )、恋人 ( $r=.24, p<.01$ ) との間にみられた。青年期は両親と触れることは少なくなり、友人や恋人との接触が多くなることから（鈴木・春木, 1989）、触覚抵抗と友人や恋人との間に相関がみられたことは妥当な結果であると考えられる。

ただし、本尺度が測定している概念について、若干の問題が含まれていることも付記しておかなければならない。それは、触覚抵抗との相関係数は“人に触れられることに抵抗がある ( $r=.70$ )”、“人に触れることに抵抗がある ( $r=.18$ )”であったことである。このことから触覚抵抗は、特に受動的に“触れられる”ことへの抵抗を測定している概念であるといえよう。受動触は自らの予期に反して相手に“触れられる”ことで抵抗感を生じるのに対して、能動触ではこのようなことは通常起こらない。また受動触と能動触は、脳内での情報処理過程もまったく異なるといわれており（坂本・花熊, 1997）、これらは質的に異なる事象であるのかもしれない。いずれにしても、本尺度の項目作成の段階で、触れられることへの過敏性を特徴とする触覚防衛を参考に項目を集めたことから生じた問題であるが、“触れる”ことへの

抵抗感がまとまった因子として抽出されなかったことから、身体接触への抵抗感は、受動触への抵抗感と同義であると考えられる。

この点については、今後さらに整理して検討すべき課題である。

## 研究2

身体接触による不安の変化を、触覚抵抗との関連で検討する。実験では、2人ペアを組み、触れる者（能動触）と触れられる者（受動触）、各々の影響を検討する実験群と、単純な皮膚刺激の影響をみるため、セルフタッチをする統制群とを比較検討する。

### 方法

**被験者** 関東の4年制女子大学の1年生141名を対象にした。このうち、実験群は48組（能動触・受動触、各々24名）、統制群は66名であった。

### 調査用紙

**触覚抵抗尺度** 研究1で作成したもの

**STAI日本語版** 清水・今栄（1981）によるSpilberger et al（1970）のSTAI（状態-特性不安検査）日本語版のうち、状態不安を測定する20項目を用いた。各々の項目について、“まったくそうではない（1）”～“まったくそうである（4）”の4件法で評定された。

**ペアの関係の評定** ペアを組んだ相手との関係について、“初対面である（1）”、“顔は知っているが話したことはない（2）”、“話したことはあるがさほど仲良くはない（3）”、“まあまあ仲がよい（4）”、“とても仲がよい（5）”、“仲が悪い（6）”の6件法で回答を求めた。

**手続き** 心理学の授業時間を利用し、簡単な実験を行うことを伝え、学生同士なるべく知らない相手とペアになるよう求めた。また実験に協力できない学生は参加しなくてよい旨を伝えた。

**実験群** 以下の手順で実験を行った。ペアのうち向かって右側の者が能動触、左側の者が受動触になるよう、恣意的に役割を決めた。次に、STAIと触覚抵抗尺度に記入を求めた。全員の回答後、原口（1990）を参考に、初対面の2者でも比較的触れやすく、肯定的な効果が表れやすいとされる触れ方を用いた。具体的には能動触をする者が相手の肩に背後から10秒間手（手の平部分）をおくことを指示した。実験後、再度STAIに回答を求め、実験終了とした。

**統制群** 実験群と同様の不安レベルにするため、実験群と同様の手続きでペアを組ませ、同様の調査用紙に回答を求めた。全員の回答後、自分の左肩に右手を10秒間おくことを指示した。実験後、再度STAIに回答を求め、実験終了とした。

## 結果

まず、ペアを組んだ相手との関係性の評定について、人数の偏りを調整するため、再度分類を行った。具体的には、“初対面である”、はそのまま“初対面（N=41）”とし、“顔は知っているが話したことはない”と“話したことはあるがさほど仲良くはない”を“半知り（N=29）”とし、“まあまあ仲がよい”と“とても仲がよい”を“親密（N=17）”の3つの類型に区分し直した。“半知り”とは親や兄弟のような親密な関係と、まったくの他人の間の中間的な存在をさす（笠原，1977）。彼によれば、同一学校の生徒同士や近隣の住人のように、顔は既知であるのに関わらず名前を知らないなどの間柄で、対人恐怖の者が苦手とする関係だという。なお、“仲が悪い”を選択した者はいなかった。

次に、触覚抵抗の中央値（M=30.00）によって2群に分割し、触覚抵抗（高・低）×身体接触方法（能動触・受動

触・自己接触) × 実験前後 (身体接触前・後) を要因とした、3元配置分散分析を行った。触覚抵抗と身体接触方法は被験者間要因、実験前後は被験者内要因であった。その結果、実験前後と身体接触方法の交互作用に有意傾向がみられた ( $F(2, 134)=2.60, p<.1$ )。そこで下位検定を行ったところ、Figure 1 に示したように、統制群と能動触は実験前後で不安レベルに変化がみられなかったのに対して ( $F(1, 52)=.57, ns$ ;  $F(1, 43)=.28, ns$ )、受動触のみ実験後に不安の有意な低減がみられた ( $F(1, 42)=10.66, p<.01$ )。このことから、他者に触れられることによるのみ不安が低下するといえよう。

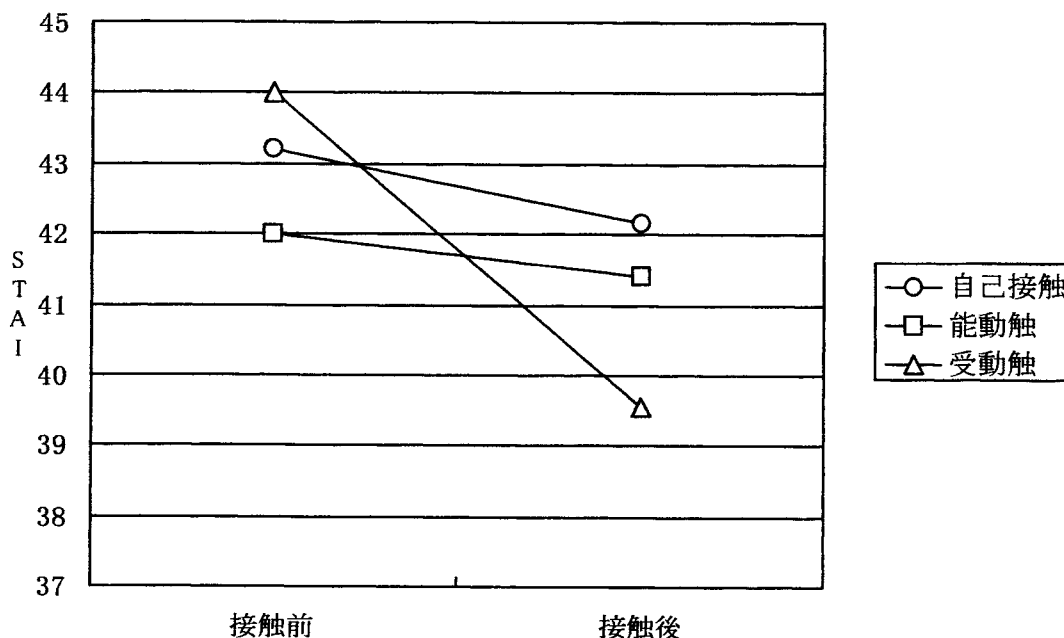


Figure 1 各接触条件別の不安の変化

次に、触覚抵抗 (高・低) × 関係性 (初対面・半知り・親密) × 実験前後 (身体接触前・後) を要因とした、3元配置分散分析を行った。ただしこの分析では、関係性の要因も検討されるため、統制群の被験者は除いて分析を行った。分析の結果、2次の交互作用が有意だった ( $F(2, 81)=7.42, p<.01$ )。そこで、3つの関係性ごとに、触覚抵抗 × 実験前後の分散分析を行った。その結果を Figure 2 に示した。それによると初対面と半知りでは実験前後の主効果のみが有意であったのに対して ( $F(1, 39)=5.71, p<.05$ ;  $F(1, 27)=3.83, p<.05$ )、親密では交互作用が有意だった ( $F(1, 15)=8.99, p<.01$ )。つまり、親密な関係性にある場合のみ、触覚抵抗が高い被験者は接触によって不安が高まることがわかった。その他の関係性では、触覚抵抗の高低に関わらず、不安は低下していた。



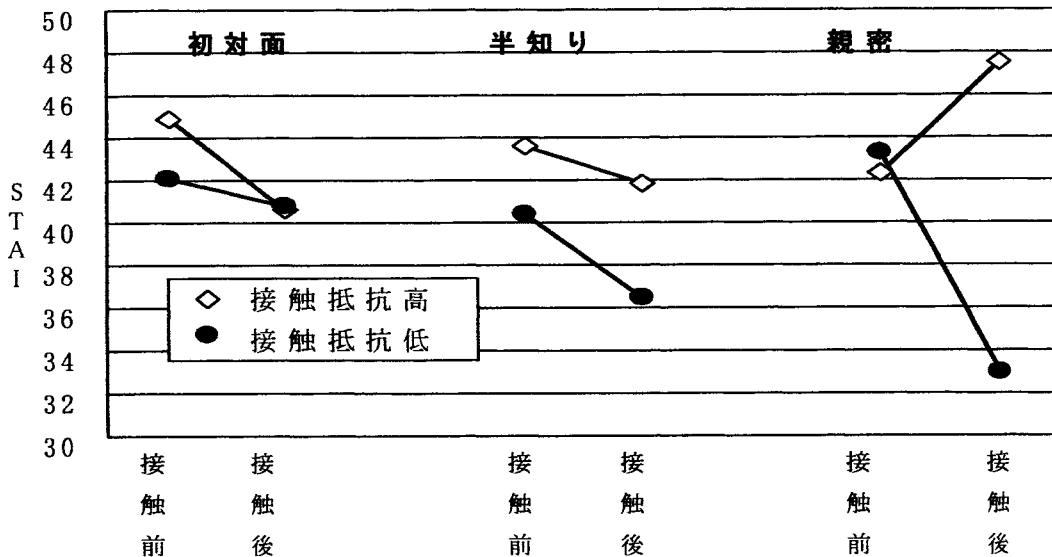


Figure 2 各対人関係における触覚抵抗による不安の変化

そこで、十分な被験者数を対象とした分析ではないが、親密な関係性の被験者のみを対象として、再度、触覚抵抗(高・低) × 身体接触方法(能動触・受動触) × 実験前後(身体接触前・後)を要因とした、3元配置分散分析を行った。その結果、触覚抵抗と実験前後の交互作用が有意だった( $F(1, 13)=7.95, p<.01$ )。それによると、親密な関係性にある場合のみ、触覚抵抗が高い被験者は接触によって不安が高まる、という上記の結果は、身体接触方法とは無関係であることが示唆された (Figure 3)。

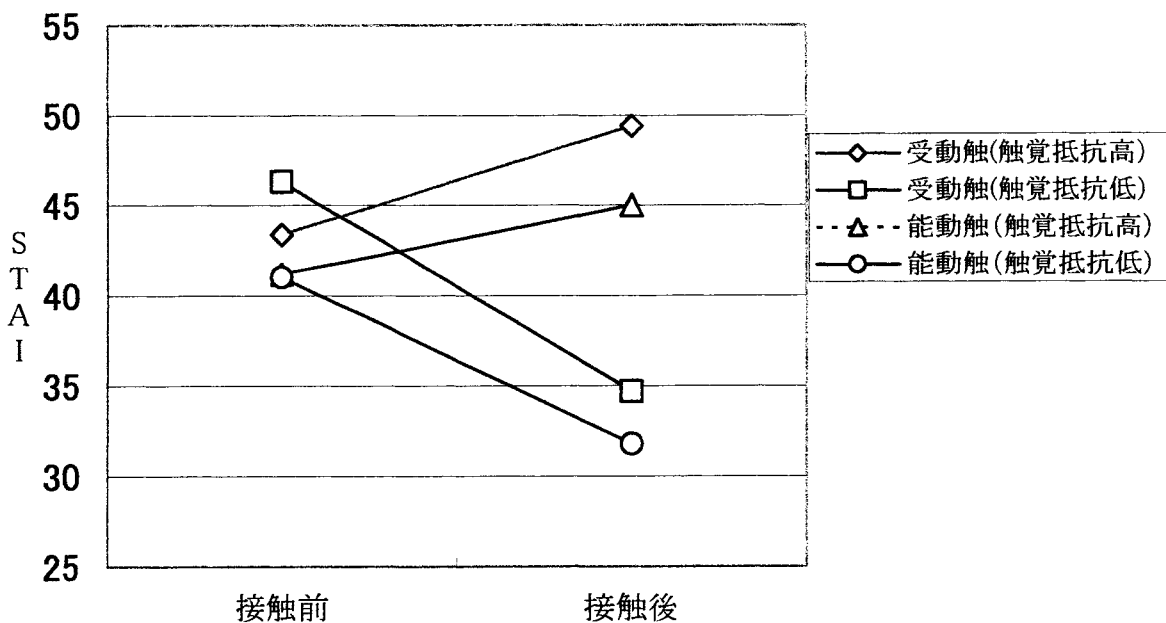


Figure 3 身体接触方法と触覚抵抗による不安の変化

## 考察

まず、自己接触及び能動触では不安が低減しなかった理由についてである。特に自己接触は、不安が喚起される場面で頻度が高まるとされ、不安を低減させる役割をもつ行動であると考えられてきた(山口, 2003)。しかし本研究で自己接触をさせても不安の低減効果がみられなかったのは、身体接触するペアは学生同士であり、不安を低減させる必要性が高まるほどには喚起されなかったと考えられる。あるいは、恣意的に自己接触を強制しても不安の低減効果がないのかもしれない。今後の検討課題である。

次に本研究の結果、初対面と半知りの関係にある2者においては、“触れられる”ことによって不安が低減するのに対して、親密な関係にある2者においては、触覚抵抗によって身体接触の影響が異なることがわかった。つまり、親密な関係にある場合、触覚抵抗が低い者は身体接触により不安が低下したのに対して、触覚抵抗が高い者は逆に高まった。それらの理由について2つの観点から考察する。

本研究の場合、初対面や半知りの関係では、互いに対する防衛意識が高く、親密さは低かったと思われる。そして親密さを高める接触をすることによって、防衛意識が低下し、その結果不安が低下したのだろうと考えられる。Fisher(1973)によれば、心理的に皮膚は自我防衛の機能をもつ器官であるとされる。また身体接触は両者を心理的に近づける融合化作用があるともいわれる(山口, 2003)。そこで、自我防衛をもつ皮膚に接触することは、他者と心理的なつながりを築き、自我防衛を低下させることにつながるのだろうと推測できる。初対面や半知りの場合、防衛意識が高いため、身体接触の融合化作用が機能するが、親密な関係にある場合は、そのような機能が作用しなかったのかもしれない。しかも不安の低下は、“触れられる”場合のみであったことは、興味深い。日常場面で、本研究で用いた触れ方、すなわち相手の肩に手をおくような触れ方というのは、触れる者にとっては、相手を慰めようとする際の触れ方であり、そのようなメッセージを送っていることになるだろう。それとは逆に、そのように触れられるという経験は、慰められる場合であり、そのようなメッセージを受け取っていると考えられる。そのようなメッセージの受け渡しによって、“触れられる”場合のみ、不安が低減したと考えられる。それに対して初対面や半知りの場合、そのようなメッセージのやり取りがなされても、不安がそれほど高くない状況では、別のメッセージがやり取りされている可能性もあろう。今後、さらに検討すべき課題である。

もう1つは、親密葛藤理論(Argyle & Dean, 1965)からの考察である。親密葛藤理論は、相互作用する2者において、親密さをある一定水準に維持したいという欲求が存在し、もしも相互作用によって親密さに変化が起きると、それを一定の水準に戻そうとする行動をとらせるというものである。たとえば、近い距離での相互作用は、互いの親密さが必要以上に高まるため、視線を逸らすなどの手段で、親密さを一定レベルに維持しようとするわけである。

ここで、初対面や半知りの関係性と、親密な関係性の違いは、実験前と実験後の関係性の有無によるものであるとも解釈できる。つまり、初対面や半知りの場合、実験前はほとんど関係をもったことはなく、実験によって一時的に親密さは高まったとしても、実験後には再びそのような関係性に戻るであろうと考えられる。一方、親密な関係にある2者の場合、初対面や半知りの関係と異なり、実験前からある程度関係が維持されており、また実験後もそのような関係を維持していく必要があるだろう。そのとき、身体接触という親密さの高いモダリティによる急速な関係性の構築は、本人たちにとって、過度に高い親密さを要求される事態と捉えていた可能性がある。このとき、触覚抵抗の高い者は低い者に比べ、相手との距離(P S)をより遠くにおいておきたいという欲求があろう。そのため、過度に高い親密さを要求される身体接触を否定的に捉えてしまった可能性がある。

ただし、本研究で用いた触れ方は、相手の肩に手で触れるという、肯定的な影響が表れやすいものであった。たとえば、指先だけで軽く触れるなどの場合は、否定的な影響が表れるとも考えられる。また相手のどの身体部位に触れるか、

という問題も含めて、慎重に検討しなければならない問題である。

### 全体的考察と今後の展望

本研究ではまず、触覚抵抗を測定するための尺度を作成し、妥当性と信頼性を確認した。さらに実験によって、初対面と半知りの関係にある2者においては、“触れられる”ことで不安が低減するのに対して、親密な関係にある2者においては、触覚抵抗によって身体接触の影響が異なることがわかった。つまり、親密な関係にある場合、触覚抵抗が高い者は接触により不安が高まるというものだった。

本研究の結果は、思春期特有の時期における限定的なものであると考えられるが、ここでは発達段階を追って、母子関係に当てはめて考えることにする。まず京野・西川(2007)の研究から、生後7～8ヶ月の時期においてすでに、行動レベルからみれば、子の側からの主張や、抱っこによる拘束への反発といった行動が出現していることが示唆されている。つまり、親密な母子関係であっても、この時期の年齢ですでに、子の側の身体接触への抵抗がすでに芽生えている可能性があり、それにも関わらず、親の側の親密さの表現ばかりが優勢になって、子を一方的に抱っこしたり触れたりすることは、幼児にとって不安や不快感を生むことになるであろう。

さらに自我が発達し、第1次反抗期といわれる2～3歳の時期は、Eriksonが、自立性と恥・疑惑が葛藤する時期としている。この課題を身体接触の視点から考えれば、“自分で何でもやりたい”という自立性の欲求は、身体接触への抵抗を意味し、それができないで恥・疑惑が優位になる場合、身体接触を渴望するというように、捉えられるかもしれない。幼児期と思春期という、自我の発達が顕著になる2つの時期において、身体接触の欲求と抵抗の葛藤が顕著になる可能性があるだろう。

そして身体接触はさらに8歳ごろを境に激減し、それまでの養育的な身体接触から、親密さを高める身体接触が優勢になるように変化を遂げることが示唆されている(根ヶ山, 2007)。この段階では、身体接触の対象は同一でも、子の側の心身の発達に呼応して、親の側が身体接触の質、量ともに変化させていると考えられる。さらに思春期を境に、身体接触の対象自体が、親子関係から友人や恋人に移行する。思春期は、親密さを高める機能としての身体接触という点ではそれまでの母子における身体接触と類似したものとしても、その対象が異なれば、身体接触の内容も質的な変化を遂げるのかもしれない。その過渡期にある思春期は、同性の友人同士であっても、友人として親密さを高める身体接触を十分に経験していないのだともいえる。その段階で、本実験のように、いわば身体接触を強制することは、戸惑いや一種のシャイネスのような感情を生じ、それが抵抗感を高めた、とも考えられる。ただし、このような推測は裏付けのあるデータに基づいたものではない。今後さらに検討すべき課題であろう。

引用文献

- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感の関係 カウンセリング研究, 29, 130-134.
- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation. Sociometry, 28, 289-304.
- Ayres, A.J. 1965 Patterns of perceptual-motor dysfunction in children. A factor analytic study. Perceptual and Motor Skills, 20, 335-368.
- Ayres, A.J. 1979 Sensory integration and the child. Western psychological service, L.A. (エアーズ, A.J. 佐藤剛 (監訳) 1983 子どもの発達と感覚統合 協同医書出版社)
- Boderman, A., Freed, D.W., & Kinnucan, M.J. 1972 Touch me, like me: Testing an encounter group assumption. Journal of Applied Behavioral Science, 8, 527-533.
- Clarke, J.F. 1971 Some effects of nonverbal activities and group discussion on interpersonal trust development in small groups. Unpublished doctoral dissertation, Arizona State University.
- Field, T.M., Seligman, S., Scafidi, F., and Schanberg, S. 1996 Alleviating posttraumatic stress in children following Hurricane Andrew. Journal of Applied Developmental Psychology, 17, 37-50.
- Fisher, S. 1973 Body consciousness- You are what you feel Prentice-Hall Inc., Englewood cliffs, New Jersey, U.S.A (フィッシャー, S. 村山久美子・小松啓 (訳) 1979 身体の意識 誠信書房)
- 笠原嘉 1977 青年期 中公新書
- 原口芳明 1990 心理臨床における<ふれる>体験について 愛知教育大学研究報告, 39, 179-191.
- Klaus, M., and Kennell, J. 1982 Parent-Infant Bonding, St.Louis: Mosby.
- Patterson, M.L. 1973 Compensation in nonverbal immediacy behavior: A review. Sociometry, 36, 237-252.
- 坂部恵 1983 「ふれる」ことの哲学 - 人称的世界とその根底 岩波書店
- 坂本龍生・花熊暁 1997 新・感覚等合法の理論と実践 学習研究社
- Sommer, R. 1959 Studies in personal space. Sociometry, 22, 247-260.
- 鈴木晶夫・春木豊 1989 対人接触に関する試験的研究 早稲田心理学年報, 21, 93-98.
- Walker, M.B., & Bragg, B.W. 1981 On testing the equilibrium model of intimacy. Italian Journal of Psychology, 8, 133-147.
- 山口創 2003 愛撫・人の心に触れる力 NHK出版

## **Abstract**

Effect of touch on one's anxiety- hesitation on touching

In this study, we investigated the effect of touch on one's anxiety. In Study 1, a scale for hesitation on touching was developed. Referring to the research on Sensory Integration Therapy, we collected items on hesitation on touching. Factorial validity, internal consistency, and criterion-related validity of the scale were demonstrated. In Study 2, we made 24 pairs of female college students, and in each pairs, one touched the other (experimental condition). And the group of 66 students touched themselves (control group). In both groups, STAI was administered before and after these touching. The results were as follows; (1) Only those touched subjects decreased their anxiety. (2) In pairs of stranger and of not intimate, those touched subjects decreased their anxiety. On the contrary, in intimate pairs, those high in hesitation on touching increased their anxiety. The indication of these results to encounter group and counseling setting was discussed.

# 日本の親子の“スキンシップ”： 親による自由記述から読み解く発達的变化

根ヶ山多嘉子（跡見学園女子大学）

根ヶ山光一（早稲田大学）

## 問題と目的

子が特定の人物に対する接近や接触を求める傾向を重要な発達の始源とする視点は、児童精神科医 Bowlby (1982) がアタッチメント理論において主張するところであり、自律性において無力で生まれる人間の子どもにおける“安全調整システム”の所産として生物学的機能との関連が強調されている。一方でたとえば乳児をぐるぐる巻きにして育てる“スウォドリング”という育児文化に関する研究は、それが乳児の離乳を促し、次の出産までの期間を短縮するという繁殖戦略としての意味があることを示唆し、親密な皮膚接触を媒介とした親子関係が「人類にとってひとつの典型ではあっても、必ずしも唯一“本来的な”関係ではない」との指摘を行っている（正高、1997）。また、親子の関係性について発達行動学的視点からアプローチする根ヶ山（2006a、2006b）は、子の成長・自律と親の自律・繁殖との相補的な協働性の達成は、子の愛着行動やそれを補足する親の養育行動、およびその他の遊びや有和などさまざまな親和行動による親子間の親和性と、離乳や子の自己主張、親の負担感などによる心理的反発性に基づく親子間の身体的分離とのダイナミックな関係モデルによって捉えることが重要であると指摘している。いずれにせよ、親と子の身体を介した関係性——身体関係は、生存と繁殖という生物学的究極因への視点を抜きにして捉えることはできない。

人類学者 Montagu (1971) は、人間の皮膚接触に関する彼の古典的著作において、「コンピューター世代に忘れられた人と人の親密な皮膚接触が、身体の維持にとって不可欠な全脊椎動物の一連の基礎的欲求の一つであり、かつ誕生の瞬間から基本的な人間的意味が賦与される感覚として時代や文化によって欲求の表れ方と充足の仕方が異なって来るものでもある」ことを強調している。それはたとえばアングロサクソン系の「非接触的生活様式をもつ文化」と、その対極をなすラテン系の「接触性をフルに発揮する文化」とでは、そこで育つ幼児の皮膚経験に大きな違いをもたらすということであり、文化に固有な身体接触のパターンと、その文化での子どもの育ちとの間に密接な関連性があると言うことである。大学生を対象に言語的、非言語的コミュニケーション・スタイルの日米比較を行った Barnlund (1973) も、非言語的コミュニケーション、特に身体的接触行動の量においてアメリカ人は日本人のほぼ2倍という顕著な差があることに関して、「幼年時代以降身体的親密さが急激に減少し、内面の気持ちを表現する方法として接触行為に頼ることが少なくなる」日本人と、「(幼年期以降) 引き続き身体的自己表現を保ち、接触が自分の態度を表す重要な方法として続く」アメリカ人という、文化による社会化の過程の違いによって説明されるのではないかとの考察を行っている。

このような発達過程における子どもと社会・文化をつなぐ準拠枠としては Bronfenbrenner (1979) が提唱した4つのレベルのシステムから成る「生態学的環境」や文化人類学者 Super & Harkness (1986) が提唱した「発達のニッチ（生活の物理的・社会的セッティングや育児習慣、親の信条などを含んだ生態学的地位）」などの概念が有効であり、現実の生活の中で生きていく子どもの発達に影響を与える環境要因として文化を位置づけていくことの重要性が指摘されている。

このように、親子間の身体関係は生物学的、心理学的、社会文化的な諸要因間の複雑な相互作用に基づく現象であり、その人間的意味の理解は、生活体としての人間の生涯発達の变化の道筋の個人的、文化的普遍性と多様性に関する知見の蓄積によって明らかになっていくと思われる。それはまた、現代における人間身体の特異性（根ヶ山・川野、2003；波平、2005）がもたらすさまざまな問題を理解するための手がかりの一つを得ることにもなると言えよう。

本研究は、以上のような知見を踏まえ、親子間のスキンシップに焦点化して収集した親の自由記述を主な手がかりとして、日本の親子における身体関係の発達の变化の様相およびその過程に影響を及ぼしていると考えられる育児慣行や親の信条を横断的に捉えること、そしてそれらの過程にかかわる生物学的、文化的要因について考察することなどを目的として行ったものである。

## 方 法

さまざまな年齢の子を持つ親を対象に親子間のスキンシップに関する質問紙調査を実施した。「スキンシップ」は皮膚 (skin) に由来する和製英語であり、英語としてはタッチング (touching) が同義である (糸魚川、1995) が、日本社会で日常的に使われている点を考慮して、「人が相互に親密な身体接触をとること」であると明記して使用することにした。

質問紙は、協力者の年齢、性別、職業、子の年齢、性別など属性に関する質問、親子の日常生活における近接性の指標としての「一緒に食事」「一緒に入浴」および「同室就寝」の生起頻度に関する質問などの他、予めリストアップした子への接触行動 20 項目について最近 1 ヶ月の生起頻度を 4 段階（「ほぼ毎日」「1 週間に 1 度くらい」「1 ヶ月に 1 度くらい」「なし」）で問う項目、さらに、「子が求めた」「子が嫌がった」「親が求めた」「親が嫌に思った」という 4 つのスキンシップ・パターンに該当するものとして特に印象に残っている最近 1 ヶ月のエピソードを記述する項目、親子間のスキンシップについて個人的な思いや考えを自由に記述することを求める項目、などから構成された。

調査期間 : 2006 年 10 月～12 月

調査協力者 : 東京都、埼玉県、新潟県、兵庫県在住の保護者約 400 組に保育、教育関係者を通じて質問紙を配布し、郵送法により回収した。母親 92 名、父親 45 名から有効回答を得た。調査協力者の年齢および就業形態は表 1 に示した通りである。本研究で「子」とは親と同居する第 1 子のことである。子を年齢によって 5 つのグループ (1～3 歳、4～6 歳、7～9 歳、10～12 歳、13～17 歳) に分けたが、人数や性別に関するグループ間の統制はできなかった (表 2)。

表 1 調査協力者

協力者	人数	平均年齢	就業形態 (%)				
			常勤	パート	自営業	主婦専業	その他
母親	92	36.5	10.7	31.5	2.2	48.9	6.5
父親	46	38.5	97.8	0	2.2	0	0

表 2 調査協力者の第 1 子 (人数)

		年 齢				
		1～3	4～6	7～9	10～12	13～17
母親の第 1 子	(女)	14	10	14	12	4
	(男)	11	14	4	3	6
父親の第 1 子	(女)	4	5	7	8	3
	(男)	7	10	1	0	1

## 結果と考察

### 1. 日常の家庭生活における親子の近接性

日本の日常的な家庭生活における親子の近接性を見るために、「一緒に食事をする」「一緒に入浴する」「同室で就寝する」といった生活行動に関して、母親と子および父親と子それぞれの間の生起率を子の年齢グループ別に求めた (図 1)。その結果、食事に関しては子が 10～12 歳までの母親のほとんどが「1 日 1 回以上」子と一緒に食事をとっているのに対して、父親は全般的に「ときどき」一緒に食事するとの回答も多かった。入浴に関しては、4～6 歳までの子の母親のほとんど、7～9 歳の子の母親でもおよそ 1/3 が「いつも」一緒に入浴し、ほとんどが「なし」と回答す

るのは子の年齢が13～17歳になってであった。父親は子が7～9歳までは「ときどき」、それ以上は「なし」と回答する場合が多かった。また、同室就寝は母親、父親ともに子が7～9歳までは「いつも」との回答が多く、子が10～12歳でも母親の約6割、父親の約4割が「いつも」と回答していた。「一緒に食事」や「一緒に入浴」に関する母親と父親の頻度の差は、両者の就業形態の違いによる在宅時間の差異によって規定される側面が大きいことが自由記述から推察された。

子の誕生から思春期に至るまでの親子の「同室就寝」や「一緒に入浴」が非常に特徴的な日本の育児習慣であるとして、そのような習慣のないアメリカの研究者たちによって注目されたのは30～40年も前である(Caudill & Plath, 1966; Montagu, 1971)。本研究においても長期にわたる親子間の「同室就寝」や「一緒に入浴」が確認されたということは、それが家庭的日常として連綿と続いている日本の子育て習慣であると言ってよいであろう。

## 2. 子への接触頻度

日常的な観察から得られた親による子への接触行動20項目のうち有効な回答が得られた11項目について子の年齢グループ別の生起頻度(最頻値)を求め、親による子への身体接触量の横断的变化を見た(図2)。

親による子への接触行動は身体ケア(図2の1、2)、遊び(3、4、5)、情緒的接触(6～11)

の3つのカテゴリーに分類された。いずれにおいても子の年齢の上昇にともなう接触頻度の減少が認められたが、減少のパターンは接触行動によって異なっていた。たとえば情緒的接触として分類したもののうち「抱っこ」という全身的接触は、母親の場合、子が4～6歳以降激減するが、「手を握る」「肩や背中にタッチする」といった末梢的接触は、子が13～17歳であっても消失することはなかった。父親の場合、母親に比べて全体的に接触頻度が低く、減少も早い。前項で述べたように就業形態による在宅時間の短さに規定されている側面もあることが推察される。

## 3. 親子間スキンシップが生起した状況

最近1ヵ月の親子間のスキンシップに関して1)子が親に求めた、2)子が嫌がった、3)親が子に求めた、4)親が嫌に思った、の4つのパターンごとに特に印象に残っているエピソードについて、具体的な状況と接触行動を記述してもらった。状況または行動のみ記述されているケースも含めて、収集されたエピソード数はパターン1)76、2)20、3)51、4)36であった。それぞれのパターンのスキンシップがどのような状況で生じたかについて検討するため

図1 親と子の日常的近接性

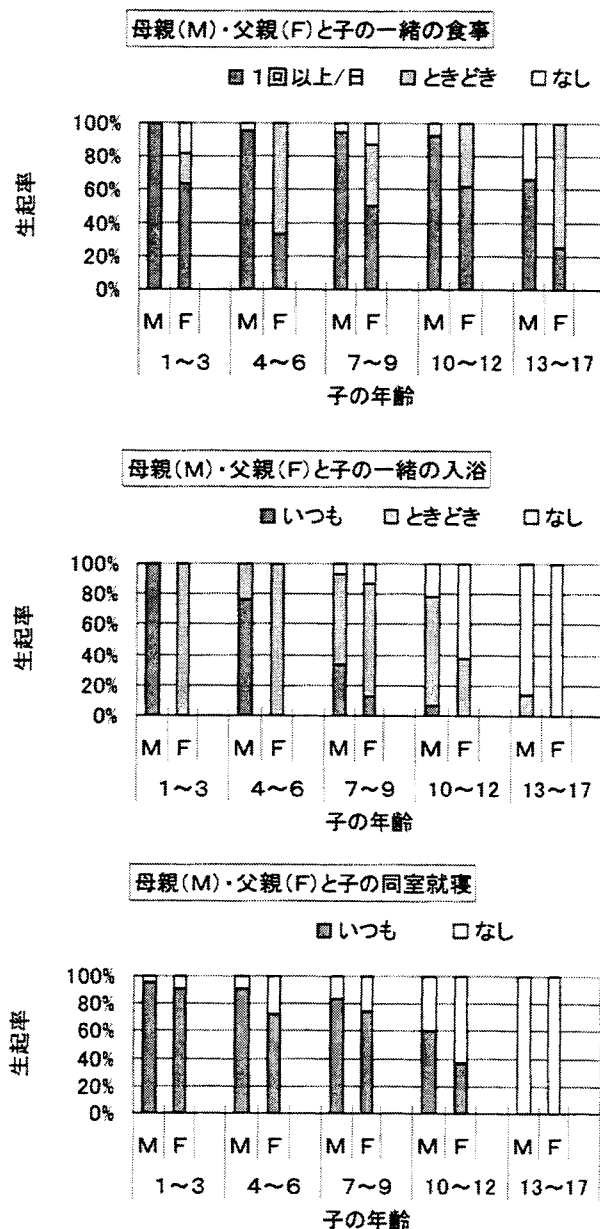
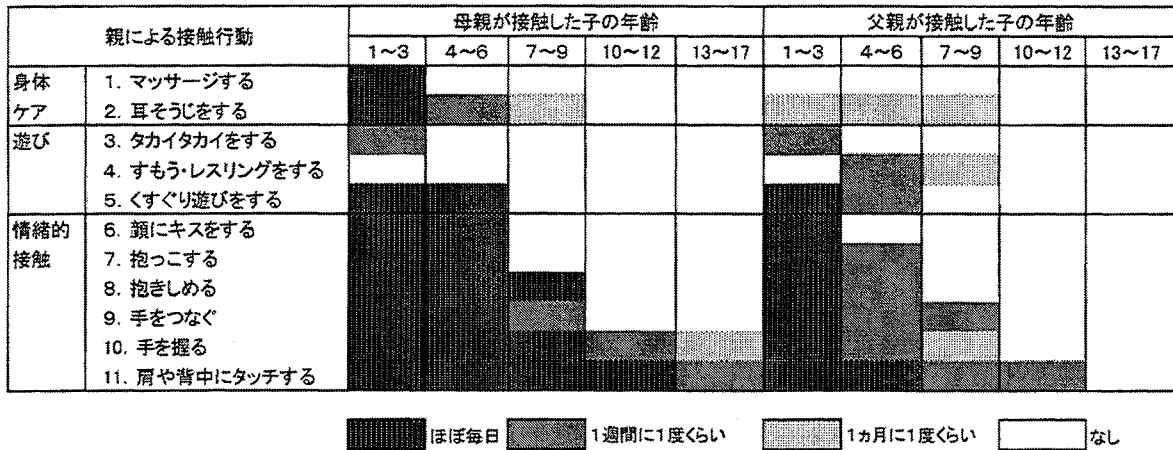




図2 子への接触頻度(最頻値)



に、状況を表示する主な語彙を手がかりにしてエピソードの分類を試みた。さらに分類されたカテゴリーごとに、類似の記述が見られた子の年齢グループをチェックすることによって発達的変化の概要を見た。

### 1) 子が親にスキンシップを求めたとき (表3-1)

「子が親にスキンシップを求めたとき」に関する76のエピソードは、時系列や場所、子の心身の状態、他者との関係性などを表すことばを手がかりに、13のカテゴリーに分類された。その結果、4~6歳までの子に関してのみ記述された状況は、家庭での日常性としての接触や、親の不在による不安状況などであった。体調不良時や家庭と保育園・幼稚園・学校間の移行に伴う不安状況、そして友達、きょうだい、親などとの葛藤に惹起された状況などでは7~9歳の子の場合も親へのスキンシップを求めていた。特にきょうだいとの葛藤として分類された記述が全エピソードの約1/4を占めていたが、多くの場合、親と第2子など他のきょうだいとの親密なスキンシップを見て第1子が嫉妬から同じようなスキンシップを親に求めると解釈された状況であった。起床時や就寝時に関するエピソードは子が10~12歳くらいまで見られたが、図1で示されたような長期にわたる親子の同室就寝の実態を反映した結果であろうと推測される。また、子が親に何らかのスキンシップを求めた状況を「甘えたいとき」と説明した回答が、数は多くないが1歳から17歳までの広範囲の年齢の子の親に認められた点が注目された。

### 2) 子がスキンシップを嫌がったとき (表3-2)

「子が(親からの)スキンシップを嫌がったとき」についてのエピソードは1)で述べた「求めたとき」に比べて記述数(20)、状況の多様性(5カテゴリー)ともに少なかった。エピソードは主に7~9歳までの子の親によって記述され、「親に叱られた後」のような親子間の葛藤状況、「遊びなどに熱中しているとき」「不機嫌なとき」など、親の接触が子の意思や自律感を阻害するような状況などに関してであったと解釈された。また、子が「人前(友達や客人の前)での接触」を嫌がったという特徴的なエピソードが7~9歳までの子に関して4例記述されていた。

### 3) 親が子にスキンシップをしたとき (表3-3)

「親が子にスキンシップをしたとき」の具体的状況に関して回答された51のエピソードは11のカテゴリーに分類された。その結果、4~6歳までの子に関してのみ記述されていたのは「子からの短期分離の後」「子の不安等への共感」など親自身の子への共感的不安によるスキンシップであった。また、「子の起床・就寝のとき」や「日常的」なスキンシップなど、子との物理的・心理的場の共有に伴った情緒的スキンシップは7~9歳までの子の親によって記述

表3-1 子が親にスキンシップを求めたとき

状況のカテゴリー	具体例	子の年齢				
		1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 日常的(4)	「普段いつも、よっかかってくる」(6f)	○●	○			
2 情動(恐怖、喜び)の表現(3)	「テレビが怖いと抱っこをせがむ」(2m)/「嬉しいことがあったとき、飛びついて抱きついてくる」(6m)	○●	○			
3 母親の短期不在の後(3)	「私(母親)が出掛けている、帰ってきたとき」(6m)	○	○			
4 父親の多忙による不在宅(1)	「主人の仕事が忙しくてなかなか子供と遊ぶ時間がもてないので、さみしい思いをしている分、母親の私にスキンシップを求める」(5m)		○			
5 体調不良のとき(6)	「具合悪いとき、やたらに耳や腕を触ってくる」(6f)/「風邪をひいた時、ずっとくっついてくる」(6f)	○	○	○		
6 登園(校)前/帰園(校)後(6)	「朝、幼稚園に行く前に抱っこしてと言う」(5m)/「学校から帰ってきた後『ダッコシテ』と言われたことがある」(9f)	○	○	○		
7 友達とのケンカの後(2)	「幼稚園で友達とケンカしたり叩かれたりしたとき、抱っこを求めてくることもある」(5m)		○			
8 きょうだい間の葛藤(17)	「第2子が抱っこなどを求めてきたときに、ジェラシーを抱いてか、同様のスキンシップを求めてくる」(3m)	○●	○	○●		
9 親に叱られた後(6)	「わがままを言いおこられたとき、抱きついてきた」(6f)	○	○●	○		
10 親の休業日など(7)	「土・日など夕食後(父親の)ひざの上に乗ってくる」(6m)		●	●		
11 テレビを見ているとき(4)	「夕食後くつろいでテレビを見ているときそばにくっついてきた」(10f)		○	●	○●	
12 起床/就寝のとき(11)	「朝起きてすぐに『ダッコシテ』と言う」(2f)/「眠たくなったりするとくっついてくるので一緒に寝る」(8f)/「眠れないとき、マッサージして、と」(12f)	○	○	○	○	
13 甘えたいとき(6)	「甘えたいとき『アッコ(ダッコ)』と言って両手を上げてくっついてきます」(1f)/「子が落ち込んで甘えたい気分するとき」(15f)	○		○	○	○

注1: ( )内数字はエピソード数  
注2: ( )内数字は子の年齢、f:女の子 m:男の子  
注3: ○母親による記述 ●父親による記述

表3-2 子がスキンシップを嫌がったとき

状況のカテゴリー	具体例	子の年齢				
		1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 母親(父親)への固着(2)	「ママがいいとき」(2m)/「痛かったとき父親を求めて泣いたとき」(3m)	○●				
2 親に叱られた後(3)	「しかられた後、感情が納まらない様子の時」(1f)	○	○			
3 遊びなどに熱中しているとき(6)	「頬を触ることを嫌がることがあった。絵を描いたり遊んだりしているときだったのでわずらわしかったのかもかもしれません」(6f)	○	○	○		
4 友達や客人の前での接触(4)	「友達の前だと嫌がる」(6m)/「客人が来ていておはようと言おうとしたときに避けられた」(8m)	○	○	○		
5 子が不機嫌なとき(5)	「機嫌の悪いときにダッコをいやがった」(3m)/「機嫌が悪いとき、触られるのを嫌がった」(12f)	○●			○	

注1: ( )内数字はエピソード数  
注2: ( )内数字は子の年齢、f:女の子 m:男の子  
注3: ○母親による記述 ●父親による記述

表3-3 親が子にスキンシップをしたとき

状況のカテゴリー	具体例	子の年齢				
		1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 子からの短期分離の後(2)	「(略)たまに休みの日(略)出かけて帰ってきた時、急に恋しくなります」(6m)	○	○			
2 子の不安等への共感(6)	「子がストレスをためている時、不安そうにしている時、抱きしめたくなった」(3m)	○●	○			
3 子の起床/就寝のとき(6)	「朝起きたとき、毎日」(1f)/「寝る前、手を握りお話しをする」(9f)	○	○●	○		
4 日常的(4)	「毎日顔を合わすたびに、タカイタカイやタッチをしてスキンシップをとっています」(3f)	○●	○	●		
5 子への愛おしさを感じたとき(7)	「かわいさと感じたときは、いつも抱きしめたいと思う」(6m)	○●	○●	○	○	
6 子を叱った後の宥和(5)	「強くしかり過ぎた後、言い過ぎたことをあやまり抱きしめた」(12f)	○	○	○	○	
7 子の安全への配慮(4)	「道を歩くとき、危ないので手をつなぐ」(2f)/「学校帰りに迎えに行き(女児で誘拐の心配のため)(略)頭をポンポンとなでたり手をつないだりして帰る」(6f)	○	○●		○	
8 教育上の配慮(3)	「教育上(スキンシップする)」(2m)/「子どもがゲームばかりしているときに、こちょこちょしたりおひざに『おいで!』と言って座らせる」(11f)	●			○	●
9 子の行動の賞賛・奨励(3)	「寝る前に良かった点を誉め、抱きしめてあげる」(6m)/「(略)毎日夜中まで勉強して疲れても頑張っているとき、励まして肩をもんであげる」(13m)		●	○		○
10 親自身の元気づけ(5)	「いろいろ考え事をしていて不安になったとき(略)子どもをギュッと抱きしめると落ちつけます。頑張ろうという気持ちが復活してきます」(1f)	○●		○		●
11 親がリラックスしているとき(7)	「自分自身に余裕があり、子どもとのんびりした時間がとれたとき」(3f)	○	●	○●	○●	○

注1: ( )内数字はエピソード数  
注2: ( )内数字は子の年齢、f:女の子 m:男の子  
注3: ○母親による記述 ●父親による記述

表3-4 親がスキンシップを嫌に思ったとき

状況のカテゴリー	具体例	子の年齢				
		1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 夜間授乳・頻回授乳(3)	「おっぱいがないと昼も夜も寝ないため、親の睡眠も短くなり疲れることがある」(1f)	○				
2 子の不服従(4)	「(親の)言うことを聞かなくてほんとに困り果てたり、うんざりしたとき」(1f)	○	○	○		
3 心身の不調の時(15)	「(生理前で)イライラしているときに(略)うしろから抱きしめられたとき」(6f)/「疲れているとき近づかれたくなかった。そっとして欲しかった」(3m)	○●	○	○		
4 忙しいとき(9)	「朝の忙しいときにまとわりつかれる」(8f)	○	○	○		
5 集中したいことがあるとき(5)	「作業をしているとき」(2m)/「趣味のダンスをしているときまとわりつかれる」(12f)	●	○	○	○	○

注1: ( )内数字はエピソード数  
注2: ( )内数字は子の年齢、f:女の子 m:男の子  
注3: ○母親による記述 ●父親による記述

されていた。それに対して、「子の安全への配慮」「教育上の配慮」「子への賞賛・奨励」などとして分類された道具的スキンシップや「親自身の元気づけ」「リラックスしているとき」のような親の自己投資的スキンシップは、年少の子の親のみならず10～12歳や13～17歳の年長の子の親によっても記述されていた。

#### 4) 親がスキンシップを嫌に思ったとき (表3-4)

「親が(子からの)スキンシップを嫌に思ったとき」に関する36のエピソードは5つのカテゴリーに分けられた。そのほとんどが7～9歳までの子の親による記述であった。授乳は人生最初の親子間スキンシップと言えるが、頻回であったり夜間であったりすると母親の拒否的感情を引き出すことがあることが分かる。そして「子が言うことを聞かないとき」のような親子間の葛藤や、親が「イライラしているとき」「疲れているとき」「忙しいとき」「集中したいことがあるとき」など、親の意思や自律感が子の身体接触によって妨害されるような状況が、「子とのスキンシップを嫌に思うとき」であることが示されていた。

#### 4. 親子間スキンシップにおける接触行動

接触行動のパターンは、状況とともに親子間スキンシップの重要な構成要素である。エピソードに記述された親あるいは子の接触行動について、パターンおよびそれが記述された子の年齢グループとの関連についてまとめてみた。

表4-1 子が親に求めた接触行動

接触行動	子の年齢				
	1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 肌の密着(2)	○				
2 抱っこ(抱きつき、ハグ)(30)	○●	○●	○		
3 きょうだいと同じスキンシップ(11)	○●	○	○●		
4 親のひざ・からだに乗る(6)	○	○●	○●		
5 親の耳・腕・脚などを触る(5)		○			
6 一緒に遊ぶ(3)		●			
7 一緒に風呂に入る(2)		●	●		
8 くすぐり(2)			○		
9 からだをくっつける・寄りかかる(10)		○	○	○●	○
10 身体ケア(マッサージ、耳そうじ)(2)					○

注1:( )内数字はエピソード数 注2:○母親による記述●父親による記述

表4-2 子が嫌がった親の接触行動

接触行動	子の年齢				
	1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 執拗な接触/一方的な接触(5)	○●	○●			
2 顔にキス(7)	○	○●	○	○	
3 髪をなでる(2)					●

注1:( )内数字はエピソード数 注2:○母親による記述●父親による記述

##### 1) 子が親に求めた接触行動 (表4-1)

主として7～9歳までの子を持つ親によって、9パターン接触行動が記述されていた。最も多く記述されていたのはさまざまな状況で子が「抱っこ(「抱きつき」「HUG」を含む)」を求めた」エピソードであった。また、表3-1に示したように子が親にスキンシップを求める状況としてきょうだいとの葛藤に関する記述が多かったが、そのような状況で子は、「親が他のきょうだいにしているのと同じ接触行動を求める」傾向があることが記されていた。

「(親に) からだをくっつける・寄りかかる」行動は、10～12歳、13～17歳の子に関しても記述されており、年少の子のみならず年長の子においても表出される接触行動であることが分かる。さらに「マッサージや耳そうじのような身体ケアを求める」ことが年長の子(10～12歳)の親によって少数ではあるが記述されている。状況に関する詳細な記述はなかったが、「眠れないときにマッサージをして欲しいと言った」「毎週のように耳そうじをして一と言ってきた

表4-3 親が子にした接触行動

接触行動	子の年齢				
	1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 抱っこする(4)		○●	○		
2 抱きしめる(18)	○●	○●	○●	○	
3 くすぐる(8)	○	○●		○	
4 手をつなぐ(8)	○	○●	●	○	
5 くっついて寝る(2)		○		○	
6 頭をなでる(7)	●	○●	○		●
7 身体ケア(肩をもむ・マッサージ)(2)					○●

注1:( )内数字はエピソード数 注2:○母親による記述●父親による記述

表4-4 親が嫌に思った子の接触行動

接触行動	子の年齢				
	1~3	4~6	7~9	10~12	13~17
1 執拗な接触(2)	○	○			

注1:( )内数字はエピソード数 注2:○母親による記述

ます」との記述から、これらも身体的なケアそのものの要求というより年長の子における親への親密な身体接触のパターンであると考えられる。

### 2) 子が嫌がった親の接触行動 (表4-2)

このように子はさまざまな状況で親からのさまざまな接触を求めるが、子が嫌がった接触行動も少数(14例)ながら記述されていた。親による「執拗な接触や(望んでいないにもかかわらず)一方的な接触」は子の意思や自律性を阻害するものであると考えられる。また、「キスを嫌がった」との記述が全エピソードの半分(年少子から年長子までの7例)を占めており、「キス」の行動的特異性が顕著であった。さらに親が「髪をなでる」のを嫌がったとの2例の記述は13~17歳の女子の父親によるものであり、思春期における親への性的身体的反発性が推測された。

### 3) 親が子にした接触行動 (表4-3)

親が子にした親密な接触行動には7つのパターンが見られたが、「抱っこ」以外は年長の子(10~12歳、13~17歳)の親によっても記述されていた。子への「身体ケア(肩をもむ・マッサージ)」行動が13~17歳の子の親2例に見られたが、「毎日夜中まで勉強して疲れても頑張っている子の肩をもんで励ましてあげます(13歳男子の母親)」、あるいは「スポーツ時の(子の)足・腰のマッサージは体調管理と親子の共通認識の醸成に役立つ(17歳男子の父親)」という具体的記述から、身体ケア行動が、親と年長の子との親密性維持の手段になる場合があることが推測された。

### 4) 親が嫌に思った子の接触行動 (表4-4)

親が嫌に思った子の接触行動としては、子による「執拗な接触」つまり親の自律感を妨害するような過度な身体接触への拒否感が年少の子の親によって2例記述されていた。

## 5. 親のスキンシップ観

「親子間のスキンシップについて思うこと」に関して86名の親から88の自由記述回答を得た。その中で使われていたいくつかのことばをキー・ワードとして、親のスキンシップ観を読み解くことを試みた。

#### 「ごく自然に」「衣食住を共にする」と「抱きしめられる感覚」

##### 【7歳女子の父親】

特に意識しなくても、一緒に寝る、食べる、遊ぶ等、衣食住を共にすれば自然とスキンシップはとっていると思うので、特別になにかをすることはないかと思います。

##### 【6歳男子の母親】

やっぱり小さい頃から親子のスキンシップはとても大切だと思います。あの抱きしめられた感覚は、大人になっても忘れません。とても気持ちよく、心が安らぐのを覚えています。それが体験できている子といない子ではやはり成長していく過程で人とのかかわりに大きく影響していくと思います。

先に述べたように、「スキンシップ」ということばは創られた“英語”であるが、日本でしか通用しないという意味で“日本語”である。しかしそれが具体的にどのようなことを意味しているかについて、特に子育て中の親が持っているスキンシップ観とはどのようなものかについて検討してみる必要はある。上記の2つの例に見るように、少なくとも本研究の協力者におけるスキンシップ観としては、上の例のように「特に意識せず」「ごく自然に」「衣食住を共にする」日常生活そのものであるとする見方と、下の例に記述された「抱きしめられる感覚」ということばに凝縮されているように、「ことばで説明しなくても理解し合える」「より強く結び合っていることを分かり合える」ような具体的な身体感覚を伴った経験であるとする見方があった。

また、次の例のように、子から親へのあるいは親から子への一方的な行動としてのみならず、まさに親子間の双方向性が大事だとする感じ方についても多く言及されていた。

**【6歳男子の母親】**

親子のスキンシップは、子どもが甘えてくるだけでも、子どもが満足するだけでもなく、それを受け入れている親もほっとして心がなごみ、元気をもらっているのだと思います。親がいとおしさで抱きしめたりすることで子どもは愛されているという安心感が出て、のびのびと育つのではないかなあとと思います。これは我が子と6年間生きてきて思うことです。

**「ベタベタする」「甘える」「甘えさせる」**

**【5歳男子の母親】**

男の子は甘えん坊に感じる。いつでもベタベタしていたらいい。小学校5年生ぐらいまでは甘えさせたいと思っている。その方が中学生ぐらいになり、自立が早いのではないかと考えています。

**【8歳女子の母親】**

第3子が生まれてから（第1子が）とてもお姉さんに見えて、あまりスキンシップを私の方がしなくなったらいじけた。まだ子どもなんだと思い、下の子たちと同じようにベタベタスキンシップを心がけるようにしたら、すごくいい子になった（戻った）。

お互いに「直接肌が触れあえる」「身体が密着する」「肌のぬくもりを感じる」ような関わり合いに対して、しばしば「ベタベタする」「甘える」「甘えさせる」という表現が用いられていた。つまり愛されていることを確認することによって安心感を得る子どもの接触行動が「甘える」「ベタベタする」、それを受けとめる親の行動が「甘えさせる」と表現されていたと言える。したがって次の例が示すように、年長の子に対しても、親との身体接触で愛情を確認し安心感を得たいようなときは「甘える」「甘えさせる」ことに寛容である様子がうかがえた。

**【10歳男子の母親】**

私から触れたりすることはあまりありませんが、子供が触れてきた時は嫌だと言わずになるべくベタベタさせています。そういうときは何かあって甘えたい時とか、安心するかなと思っています。

**「嫌がる」ことと「成長する」こと**

**【6歳男子の母親】**

小さい頃は抵抗なく（スキンシップ）できたが、大きくなるにつれて子どもが嫌がるようになったことが寂しい反面、子の成長を感じ、嬉しくも思う。

**【10歳女子の母親】**

子供が成長すれば自然と体がふれ合うスキンシップがなくなるのは普通かなと思う。いつまでもベタベタしているより、少し距離をおいたりする事も成長する上で必要かなと思う。

「子どものうち」「小さい頃」は「自然に」「抵抗なく」「積極的に」「ベタベタ」していたスキンシップが「減ってきた」「なくなってきた」といった親子間スキンシップの減少について言及する記述は、6歳以上の子の親に見られた。そのような変化は、子の年齢的要素（「大きくなったから」「小学生の2年だと」「小学生ともなると」「思春期に差しかわり」「もう12歳」「中学生なので」など）に基づく子の変化（「嫌がるようになった」「はずかしそうにする」「求めることがなくなった」）や親子相互の変化（「小学生ともなると親も子も照れてしまう」「年齢を重ねるごとにお互いに回数が減る」など）であり、「自然」なこととして捉えられていた。したがってそのような親子間スキンシップの減少を「子の成長の証」として喜びかつ尊重し、寂しくもあるが「愛情の表現としてやりたいと思ってもやらないほうがいい」「嫌がられない程度のスキンシップを図っていく」といった親側の抑制によって対応している様子が記されていた。

## 「会話する」そして「見守る」

### 【11歳女子の父親】

日本人なのでスキンシップが絶対大事とは思わない。それより「ことば」をかけてやる方が大事だと思う。

これは、「日本人なので」という文化的背景と絡めて身体接触を相対化した唯一の記述例であるが、スキンシップを相対化する規定因に関して言及する例は他にも見られた。たとえば、「(3人の子の)性格(気質?)によってスキンシップの度合いも違った。いろいろな形があつていい。スキンシップが多ければ親子間の信頼関係も深くなるとは思わない」という17歳男子の母親など、年長の子の親による体験的実感に基づく見解が述べられていたと言える。

「話を聞く」「会話する」など、「ことば」による親子間のコミュニケーションの重要性については、上記の記述例に限らずさまざまに言及されていた。特にスキンシップが減少ないし消失した後の親子間の「信頼関係」や「絆」の維持にとって有効だと考えられていることが理解された。

さらに、次の記述例が示すように、「身体的な触れ合い」でも「ことばによるコミュニケーション」でもない、「見守る」という、親子の身体関係のもう一つの様態に関する言及が年長の子の親によってなされていた。つまり「見守る」ということばによって表現されていたのは親と年長の子の“親密な遠隔化”という身体関係であったと言えよう。

### 【12歳女子の母親】

今は中学生なので、子供と大人の気持を両方持ち、スキンシップより見守ると言う感じが強いです。

### 【13歳女子の母親】

スキンシップというと触れ合うことを思いがちですが、見つめているだけ、見守っているよという思いが伝わるだけでも、子どもにはわかるのではないかと思えるようになりました。心と心のふれあいも1つのスキンシップだと思います。

## 総合考察

### 家庭における親子の近接性の文化的パターン

1960年代半ばの日本の親子の就寝スタイルについて調査したCaudill & Plath (1966)は、子が10歳くらいになるまではほとんどの親子が同室就寝をしていること、それは狭い家屋であるが故の必要に迫られてというより、むしろ家族によって好まれ歓迎されたものであることなどについて明らかにしている。

また、このような就寝慣行と同じくらい重要なものとして言及されるのが日本の入浴慣行である(Montagu, 1971)。家庭や近隣の公衆浴場の深い浴槽で母親か他の大人が腕の中に幼児を抱いて一緒に入浴すること、しかもこの共同入浴の型は子どもが10歳頃になるまであるいはそれ以上になっても続けられることなど、そのような習慣のないアメリカの親子との対照性が強調されている。このような入浴スタイルもまた、たとえば多田(1983)が述べているように「日本人にとって風呂に入ることは、西洋人のように単なる医療衛生上の行為ではなく、湯につかってゆつくりと肌の解放をする楽しみのものである」とあり、親子一緒の入浴は親密な身体的ふれあいの場として好まれるという文化的な背景を抜きにしては理解できないであろう。

本研究においても少なくとも8歳前後まで続く親子の「同室就寝」や「一緒の入浴」が確認されており、日本の育児文化において好まれ選択された社会的セッティングとして発達環境を構成する要素になっていると言えるかもしれない。ただし、Caudillらが主張したように「親子別々に眠るアメリカの家庭では子の自立心が助長され、共寝という日本の親子の眠りの形は、各個人の分離よりも相互依存を強調し家族的結合をすすめる」といった単純な文化的パターン化によって、現代日本の、あるいはアメリカの親子あるいは家族の関係性がどの程度説明されるのかについてはもう少し議論を深める必要がある。たとえば日本の青年たちの家庭満足度は欧米の青年たちに比べて低いという最近の調査結果などもある(内閣府、2004)。

### スキンシップ・パターンの二重性

親子間のスキンシップは、さまざまな家族差を含みつつも、思春期前後以降非常に少なくなっていた。その背景としては、思春期前後の子による親への性的身体的反発——近親婚の回避という生物学的機能によって説明される——およびそれに対する親の配慮などが読み取れた。

一方で8歳前後までの年少の子が親からのスキンシップを嫌がる状況についても、親子間スキンシップ減少の背景として注目された。それに関しては「親の接触が子の意思や自律感を阻害するようなとき」として分類されるような状況以外に、親が身体接触を「人前（友達や客人の前）でするとき、子が嫌がる」という興味深い回答がいくつかあった。これは、家庭「内」では親に「甘えて」スキンシップを求めるが、人前、つまり「外」では「甘え」を出すことを恥ずかしく感じ自立性をアピールするといった、いわばスキンシップ・パターンの二重性を示すようになるということであろう。

「甘え」や「内と外」という概念は、一般に日本文化において特に顕著とされる意識構造を表現するものとしてさまざまな議論がなされてきた（土居、1971）。年少の子の接触行動に関する記述の中にすでにこのような概念に対応する語彙が見られたと言うことは、スキンシップ・パターンの二重性もやはり文化的背景との関連で説明される現象であるのかもしれない。いずれにせよ他の文化に関する比較研究などによるさらなる検討が必要である。

### 社会的グルーミングとしての身体ケア行動

子の成長に伴う親子間スキンシップの行動パターンの変化として特に注目されるのは、スキンシップが減退した思春期前後以降の子と親との間に少数ながら見られた身体ケア行動を介したやりとりである。そこには、「毎週のように耳そうじして一と言ってきます」「毎日夜中まで勉強して疲れても頑張っている子を励まして肩をもんであげる」「スポーツ時の（子の）足・腰のマッサージは体調管理と共通認識の醸成に役立つ」といった記述が示すように、「耳そうじ」「肩もみ」「マッサージ」といった身体ケア行動が必ずしも身体ケアのみをゴールとしてなされているわけではないという特徴が認められる。

先にも述べたように、日本人は身体接触による非言語的コミュニケーションによって自己の意図を伝達することが少ないと言われている（Barnlund, 1973）。もともと、現在の日本社会はさまざまな文化をもつ人びとの映像に接したり実際に交流したりする機会が当時と比べて飛躍的に増大し、そのことが特に若年層におけるコミュニケーション行動にさまざまな影響を与えていると思われる。本研究で収集された回答文の中にも、“kiss”や“hug”など英語表記の行動表現も見られ、たとえば「kissは嫌がります」「（1歳児が）hugを求めた」などの記述が見られたことでも分かる。それでもやはり、たとえば握手やハグ、キスなど、身体接触行動が多くの人びとの間で日常的に交わされるということは少ない。したがって親と子、特に身体接触減退期である思春期前後以降の子との身体ケア行動を介したやりとりは、親密な身体接触によるパターン化された意思伝達の選択肢を持たない文化的背景にあって、「肩こり」や「筋肉痛」に対するケアという“本来の機能”をもった「肩もみ」や「マッサージ」行動が、それとは違った“もうひとつの機能”、すなわち親子間の親密性の伝達という機能を増幅させていることを示唆するものであろう。

ヒトと他の動物種とを区別する特徴である言語の起源について“社会脳仮説（マキャベリの知能仮説）”を主張しているDunbar(1997)も、言語は社会行動についての情報を比較的抽象的な形で伝えるのには非常に優れたメカニズムであるが、親密な個人的関係を維持するためには不適切であり、そこでは「われわれ霊長類の古い習慣」、つまり社会的グルーミングや直接的な身体接触を「頼りにする」ことになる」と述べている。

親の記述の中に見られた年長の子との身体ケア行動を介したやりとりは、このような“言語と置換した”、親密性維持のための社会的グルーミングであると考えられる。予備調査で収集した回答のなかに、「第1子はもう成人（20歳男子）なのでスキンシップということはありませんが、ときどきお互いに肩たたきをしあったりはします」という母親の記述があったが、身体ケア行動が成人した子と親の間で親密感の表現として機能する様子を表していると思われる。

## 親子間スキンシップの進化と文化

本研究の協力者は、圧倒的にフルタイムの被雇用者が多い父親と、多くがパートタイマーないし主婦専業である母親であった。実際、多くの父親による記述および少数ながらフルタイムの被雇用者である母親による記述が、「仕事が忙しくて十分に子どもとのスキンシップが取れない」ことに触れられており、母親あるいは父親と子とのスキンシップ頻度に差異をもたらす要因として結果に影響していたと思われる。さらに、「子が親にスキンシップを求める」のは、「(土・日などの) 休業日や仕事から早く帰ってきたとき」であるとの回答も父親が目立った。また、前述したようにこのような背景は親子の「一緒に食事」や「一緒に入浴」の頻度にも現れており、Bronfenbrenner (1979) の言う「発達の生態学的環境」としてのエクソシステムおよびマクロシステムの問題を改めて認識させられる。

一方で、親和的であるにせよ反発的であるにせよ母親あるいは父親と子との間に生じたスキンシップの状況には多くの類似点があったことも重要である。母親も父親も、子の平安時のみならずさまざまな不安・葛藤時において身体接触を求められるが、子の自律感を阻害するような身体接触は忌避される。また、母親も父親も子に愛おしさや安全上、教育上の必要性を感じたとき、そして自分自身の元気や安らぎのためにも子を抱き寄せるが、心身不調のときや自身の諸活動を優先したいときは子を退ける。身体を介した親子の利害は一致するときもあるし、一致しないときもあるということであろう。こうした親和性と反発性のダイナミックな関わり合いを繰り返しながら、親と子は“親密な遠隔性”を獲得し、子は自立してゆく。親は、子の養育や教育、次の繁殖、親自身の健康や人生の充実そしてなによりも生活の成り立ちのために日々の具体的状況の中で生じるさまざまな質と量のトレード・オフに直面し、人生の限られた時間やエネルギーを配分していく (Hrdy, 1999)。

以上のように、「子が生活する物理的・社会的セッティングや子育て習慣、養育者の信条などの文化的要因を含んだより大きな生態学的環境におけるさまざまな相互作用の広がり」という発達への視点と、「人間の歴史が始まって以来連綿と繰り返されてきた生存と繁殖のための努力」という進化的発想への視点との接面において、親子間スキンシップの発達の变化、ひいては親子の身体関係の発達の变化に関する人間的な意味の理解が深まると言えよう。

## 今後の課題

一般に人と人との身体接触の様態は、年齢、性別、文化などさまざまな要因によって規定される複雑な現象であることが分かっている。本研究は親子間のスキンシップの発達の变化およびその過程に関する生物学的、文化的規定要因について鳥瞰することを目的としたものであるが、今後さらに、生涯発達の、比較文化的視点に立った体系的な調査・観察を行い、文化間および家族間あるいはジェンダー間の普遍性と多様性を明らかにして、身体疎外の今日的課題への手がかりを探っていきたい。

## 謝辞

本調査の実施にご協力くださいました恵泉学園大学大日向雅美先生、西宮子どもセンター職員のみなさま、所沢市の小学校、幼稚園、保育園の先生方、そして調査に回答していただきましたお父様さま方、お母様さま方に、深く感謝の意を表します。

## 文 献

- Barnlund, D.C. (1973). *Public and Private Self in Japan and the United States*.  
(西山 千・佐野雅子. (訳). (1979). *日本人の表現構造* 東京: サイマル出版会)
- Bowlby, J. (1982). *Attachment and Loss, vol. I Attachment* London: Hogarth Press. (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一. (訳). (1991). *母子関係の理論 I 愛着行動* 東京: 岩崎学術出版社)
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.



- (磯貝芳郎・福富 護. (訳). (1996). *人間発達の生態学* 東京：川島書店)
- Caudill, W., and Plath, D. (1966). "Who Sleeps by Whom? Parent-child Involvement in Urban Japanese Families," *Psychiatry*, 29, 344-366.
- 土居健郎. (1971). *甘えの構造* 東京：弘文堂
- Dunbar, R. I. M. (1997). 言語の起源. *科学*, 67, 289-296.
- Hrdy, S. B., (1999). *Mother Nature* New York: Pantheon Books. (塩原通緒. (訳). (2005). *マザー・ネイチャー* 東京：早川書房)
- 糸魚川直祐. (1995). スキンシップ (岡本夏木・清水御代明・村井潤一. (監修). *発達心理学辞典* 京都：ミネルヴァ書房. 371.)
- 正高信男. (1997). 繁殖戦略としての人類の育児文化. *科学*, 67, 305-312.
- Montagu, A, (1971). *Touching : The Human Significance of the Skin* New York: Harper & Row.  
(佐藤信行・佐藤方代. (訳). (1977). *タッチング・親と子のふれあい* 東京：平凡社)
- 内閣府政策統括官 (編). (2004). *第7回世界青年意識調査* 東京：国立印刷局
- 波平恵美子. (2005). *からだの文化人類学：変貌する日本人の身体観* 東京：大修館書店
- 根ヶ山光一・川野健治 (編著). (2003). *身体から発達を問う* 東京：新曜社
- 根ヶ山光一. (2006a). <子別れ>としての子育て 東京：日本放送出版協会
- 根ヶ山光一. (2006b). 発達行動学の立場から. *そだちの科学*, 7, 18-23.
- Super, C. M., and Harleness, S. (1986). The Developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 545-569.
- 多田道太郎. (1983). *しぐさの日本文化* 東京：角川書店

Takako Negayama (Atomi Women's University) & Koichi Negayama (Waseda University).

*"Skinship (Bodily contact and proximity)" between a parent and a child in Japan : Reading the developmental change in free description by Mothers and Fathers.*

Parents of the first child aged from 1 to 17, were requested to describe "skinship (bodily contact and proximity)" with their child in everyday life. The results were : 1) from infancy to early childhood, both mothers and fathers showed co-sleeping everyday, and co-bathing and co-eating were reported to be done everyday in mothers, but almost once a week in fathers, 2) the frequency of parental contact for care and play decreased around age 5, and for emotional contact, around 8, 3) as the child grew, some of the situations and behavior patterns of parent-child sympathetic or antipathetic bodily contact remained and some others not, and 4) parental belief about the development of "Skinship" was diverse, and changed with the children's growth. The parents tended to think that the children's change to avoid the contact was assign of growth, and accepted it with grief. However, they remained to accept the contact only in a context of "Amae". In sum, the findings indicate an important developmental change of intimate distancing between parent and child.

**[key words]** "Skinship (bodily contact and proximity)", free description, bodily relationship between a parent and a child in Japan

# ロボット介在活動にみる高齢者の接触

川野健治（国立精神・神経センター精神保健研究所）

## 問題

身体接触は、認知機能や ADL の低下した高齢者とのコミュニケーション手段として重要な要素のひとつと考えられる（江口・西片,2005）。その一つの実践例として、高齢者介護施設でのケアとしてのアニマルセラピーの導入が挙げられよう。効果としては（1）生理的効果（血圧などバイタルサインの向上）、（2）心理的効果（リラクセス、気力を高める）、（3）社会的効果（施設利用者同士、あるいは職員と利用者のコミュニケーションをひろげる）の3つが指摘されている。

しかし、アニマルセラピーは動物を管理する負担（セラピーに参加するための訓練、飼育等）のみならず、動物自身にかかる負担も大きい。そこでその代替案として、ロボット介助活動（以後 RAA）が提案されている。

本研究は、この RAA をフィールドとして、高齢者における身体接触の意味について検討するものである。

## 予備研究

### 目的

加藤ら（2004）は、犬型ロボット AIBO による RAA を実験的に導入し、そのことが施設内に「異質性」を生成しあらたな「集合的行動」を生み出す様子を記述している。ただし、加藤らの成果は、AIBO の特性に負う可能性も大きい。そこで本研究では、パーソナルロボットとして、喜びやリラクセスといったメンタルな効果を生むことを期待して作られたアザラシ型ロボット「パロ」（Shibata,2004）を老人保健施設に導入したケースを検討する（図 1）。本節では生成されるコミュニケーションを類型化し、加藤らの報告との比較を試みることで、RAA の可能性について探ることを目的とする。

### 方法

老人保健施設 1 施設での RAA の様子をビデオ撮影し、コミュニケーション場面を抽出した。カテゴリーとして、ロボットの（頭、前足）の動き、参加者同士の会話、高齢者からロボットへの接触（なでる、かるくたたく、抱く、触れる）、参加者からロボットへの視線、呼びかけ、を想定した連続記録法を用いたが、それ以外の行動にも、適宜注意を払った。なお、ロボットの発声は、録音状況から特定できなかったため、今回は観察カテゴリーには含まなかった。

【参加者・活動状況】週 2 回、毎回 1 時間程度、10 数名のお年寄りと数名の施設職員、および研究スタッフがビデオ係として参加した。施設内の多目的ホールに長机をつなぎ、その上に二台のパロを乗せて周りをお年寄りが囲み、パロと少し交流しては次へ送る、という形で進行した。初期のころは、年齢が 77 歳から 98 歳、長谷川式スケールでは、認知症の無い方 1 名、軽度 4 名、中程度 5 名、やや重度 3 名という構成であった。ただし、老人保健施設であるため、参加メンバーは少しずつ変化した。

【ロボット】パロは白い毛に覆われた堅琴あざらしの赤ちゃんを模して作られている。重量は 2.7kg、体調 60cm、発声、頭、前足、後ろ足が動くが、自力で移動はできない。自発的行動、反応的行動、終日リズムでの行動パターンがある。



図1 あざらし型ロボットパロ

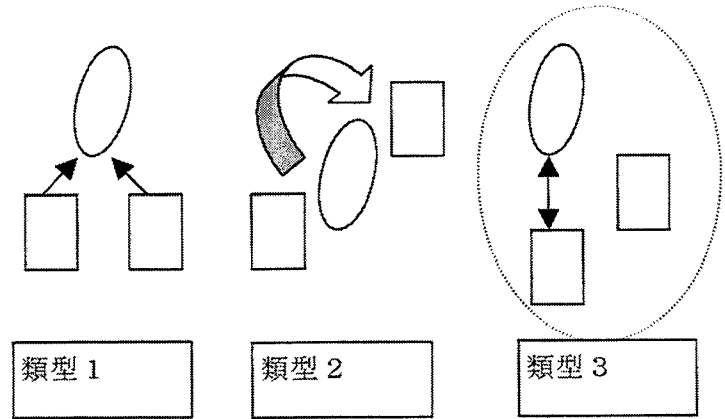


図2 3つのコミュニケーション類型

### 結果と考察

3つのコミュニケーション類型が抽出された(図2)。類型1「共同での物語生成」:パロの動きを複数で解釈していくコミュニケーションで、加藤ら(2004)の報告したものと同じである。類型2「交流権の委譲」:パロの台数に対してお年寄りが多いため、交流機会を譲り合うことになる。具体的には、お年寄り自身は車椅子等で動きにくく、机上のパロを次の人に押しやることに関わるコミュニケーションで、自発的応答として移動する AIBO では起こりにくいコミュニケーションと考えられる。類型3「集合としての連動」:パロと一対一で触れ合っている場面では、一見パロの動作とお年寄りが一体化しているように見えるが、周囲のお年寄りの見守りや動きとの間で連動している。完全な個(自分とパロ)の世界ではなく、開かれた系である(いわば、システム化している)。

これらのコミュニケーションにおいて、ロボットのどのような特性が関連したのだろうか。類型1は、ロボットの Agentivity を媒介にした、いわば三項関係的な物語生成によるコミュニケーションである。加藤らと同様のコミュニケーションが、本ケースにおいても観察された。複数の参加者による今日の RAA において、このロボットの「心」をめぐる共同生成は、他のケースでも確認される可能性は高いだろう。

一方、類型2は、むしろロボットの非生命性(モノ性)が可能した「押しやり」が媒介している。例えば、世代間交流の場面やおそらく多くの AAA においても、お年寄りが命あるものを台の上で押しすべらせて他の人に権利を譲る、という行為は起こりにくいはずである。また、AIBO と比べてすべりやすく、また自力では動かないパロの特性も関連している。

類型3は、ロボットの Agentivity と接触アフォーダンスが特定のお年寄りとの二項関係を形成している。ただし、完全に自分たちだけの世界に「入って」しまうのではなく、他者と同席がお年寄りのロボットへの関わりを変化させているという複雑な状況である。逆にパロの「なでやすさ」は、他者と同席する際に、ある種の安心を与えているのかも知れない。

このように、ロボットの特性に応じ RAA でのコミュニケーションは多様であることから、その社会的効果も異なることが考察された。いずれにせよ、パロが生命体のように Agentivity を示し、接触を誘発すること、さらに(動物とは異なり)高齢者の接触等を回避せず、安定して存在しつづけることが、この多様なコミュニケーションの背景にあると考えられる。

### 研究1

#### 目的

本研究では、先の予備的研究を受け、実際に閉じられた高齢者のグループで、接触を誘発するロボット「パロ」を介した活動を実施し、参加者への心理的効果（認知機能、日常生活での心理、行動面）を検討することを目的とした。

#### 方 法

【対象者】特別養護老人ホームで生活する高齢者 8 名（年齢  $83 \pm 8.30$  歳（平均  $\pm$  SD）。グループ 1（MMSE  $6.25 \pm 5.68$  点）は介護度がより高いフロアで生活する男性 2 名、女性 2 名で、4 人とも車イスであり、グループ 2（MMSE  $8.38 \pm 6.46$  点）は介護度がより低いフロアで生活する女性 4 名であった。

【指標】(1) QOL：生活や体調に関する主観的な満足感を知るために、「ホームで暮らして楽しいですか」など全 6 項目について、7 件法で尋ねた。(2) MMSE (Folstein, et al., 1975)：認知機能を評価するスクリーニング検査で、言語性と動作性からなる全 11 項目で構成される。(1)と(2)は、活動導入の前後に参加者との個別面接を行った。(3) 高齢者用行動評価表（中里ら, 1991）：ADL, 活動性, 痴呆, 対人関係, 問題行動の 5 下位尺度からなる 51 項目で構成され、肯定的な側面も含めた日常生活への適応状況を観察によって測定する。担当職員に記入を依頼し、面接を実施した。(4) PAFED（本多ら, 2001）：デイケア等のプログラムの評価のために開発され、「笑顔をみせる」など 4 場面の 6 つの表情について、2 件法で回答する。実験者が評定した。(1) - (3) は活動の pre-post で測定し、(4) は 6 回の各セッション終了ごとに、観察者が評定した。

【ロボット】予備研究と同じ。

【手続き】期間は 2006 年 2-3 月であった。まず、目的や倫理面での配慮を担当者らと協議の上、参加者を選定した。グループごとに週 2 回、計 6 セッション（1 セッション 4-50 分）の活動を、施設内の一室で行った。ロボットを置いた机を囲んで参加者 4 名と毎回同一の施設職員 1 名が座席につき、実験者 1 名はそばで見守った。参加職員には、事前に、参加者の自発性にまかせながら、ロボットを触ることや抱くこと、話しかけることなどを視野に入れたかかわりを教示した。なお、セッション中には、ビデオ撮影、および、一部の対象者の心拍測定を行ったが、研究 2 で報告する。

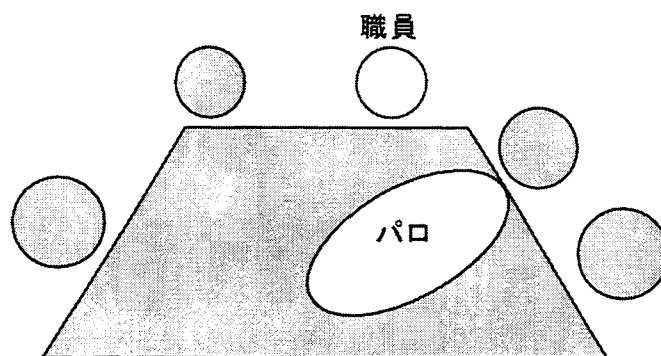


図 3 本研究におけるロボット介在活動の配置

#### 結果と考察

6 セッションを通じて、個人差はあったが、予備研究と同様に、「なでる」など一連の接触行動が観察された。

活動の効果をみるために、指標 (1) から (3) について、<時期>を被験者内、<グループ>を被験者間要因として、2 要因混合計画の分散分析を行ったところ、(1) QOL について、(2) MMSE について、(3) 高齢者用行動評価表の合計得点については、主効果、交互作用ともに有意差は見出されなかつた。

った ( $F(1,6)=1.80, n.s.$ ;  $F(1,4)=4.57, n.s.$ ;  $F(1,6)=1.14, n.s.$ )。また、(3) 高齢者用行動評価表の下位尺度ごとの得点について、「ADL」( $F(1,6)=3.56, n.s.$ )、「活動性」( $F(1,6)=1.74, n.s.$ )、「対人関係」( $F(1,6)=0.72, n.s.$ )は有意差が見出されず、「痴呆」については主効果が5%水準で有意( $F(1,6)=7.95, p<.05$ )、「問題行動」については、交互作用が5%で有意であった( $F(1,6)=12.79, p<.05$ )。よって、QOL や認知機能、日常生活における「活動性」、「対人関係」については変化が見出されなかったが、「痴呆」については活動前に比べて活動後のほうが状態がよくなったこと、「問題行動」については、グループによって活動前後の変化のパターンが異なり、グループ1では状態が悪化、グループ2では状態が改善されたこと(図4)が示された。

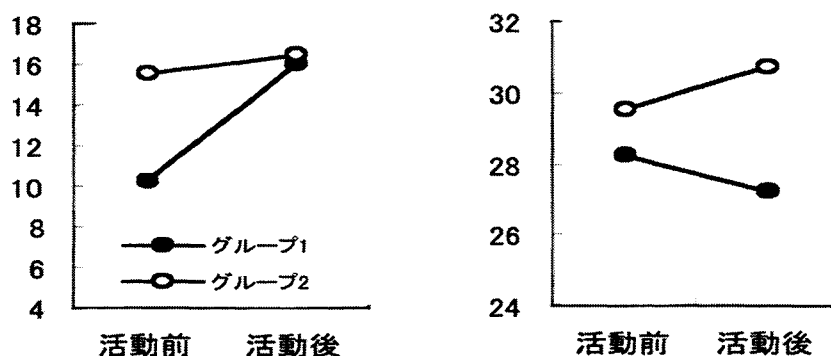


図4 「痴呆」得点・「問題行動」得点の変化

次に、参加者の表情の様子の推移をみるために、(4) PAFEDについて、<セッション>を被験者内、<グループ>を被験者間要因として、2 要因混合計画の分散分析を行ったところ、セッションの主効果が5%水準で有意であったため( $F(1,5)=7.99, p<.05$ )、Dunnetの方法で第1セッションを基準とした多重比較の結果、第1セッションに比べ、第4, 5, 6セッションにおいて、1%水準で有意な差が見出された。よって、グループにかかわらず、初回セッションに比べて第4セッション以降、他参加者への視線や笑顔がより豊かに表現されるようになったことが示された。

本研究では、特に介護度が高いグループに認知的機能の向上がみられるとともに、問題行動も見出された。ここでのロボット介在活動は、ある認知レベルの高齢者に対しては一定の刺激になったが、一部の参加者には、むしろ強すぎる刺激であったのかも知れない。

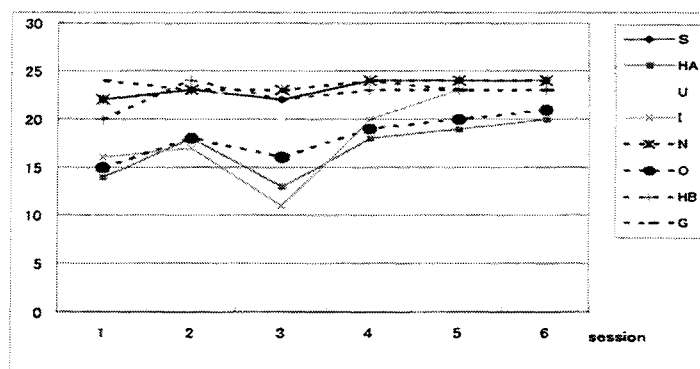


図5 参加者のPAFED得点

ただし、それは単純にロボットへの「接触」の効果というよりも、定期的集い、寮母や実験者、また参加者間での相互作用と楽しい雰囲気を感じたことなどが総合的に影響したものと考えられる。ロボットの存在は、予備研究で見出されたように、そのような相互作用を支えるものと考えべきで

ある。

ところで、PAFED の結果は、活動そのものには参加者全員が関心をもって参加できたことを示している。それが、「変化が小さすぎたために」捉えられなかったのか、あるいは天井効果によって捉えられなかったのかは明確ではない。しかし、介護度の低い方のグループにも、本研究の認知指標等では捉えられなかった「変化」が起こっていた可能性はある。

## 研究 2

### 目的

研究 1 では、ロボット介在活動の効果をいくつかの心理指標によって測定した。研究 2 では、具体的な効果が見られなかった介護度の低いグループでの変化を捉え、パロによる RAA について改めて評価することを目的とする。そこで、研究 1 のような「効果」ではなく、直接的にロボット介在活動自体の変化を捉えることを試みる。その手がかりとしては、特にパロが誘発していた「接触」行動の変化過程を検討する。

### 方 法

【対象者】研究 1 と同様。ただし、本報告においては、介護度の低かったグループ 2 (MMSE8.38±6.46 点) のデータを分析した。

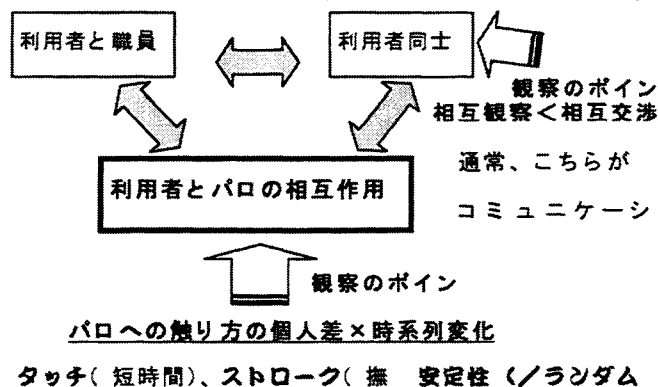
【指標】(1) ビデオデータ：6 回セッションすべてにおいて、二台のカメラを角度を変えてセットし、参加者の行動が撮影できるようにした。また、カメラのマイクとは別に IC レコーダーによって録音した。(2) 心拍計：第 1 回、4 回、6 回目には、二人の参加者に心拍計をつけた。

【ロボット】予備研究・研究 1 と同じ。

【手続き】研究 1 と同じ

【分析の視点】本研究でのセッションでは、利用者とロボット、利用者と職員、そして利用者間での相互作用を観察することができる。利用者とパロの相互作用は、予備研究でも観察されたように、利用者間との相互作用と影響を与え合っている。本研究でも、その双方に注目しながら分析をすすめた。なお、利用者と職員の相互作用も無関係ではないが、他の二つの相互作用を促進する目的をもって職員が関わっているものであり、ここでは補助的な情報として位置づけた (図 6)。

利用者とパロの相互作用のうち「接触」については、タッチ (短時間で触る行為)、ストローク (持続的な接触)、タッピング (タッチの連続したもの) の各カテゴリーを準備した。2 名の評定者がビデオデータを分析し、これらの触り方が 6 回のセッションの中でどのように変わったかについて整理した。但し、ストロークはデータを整理するなかで、さらに二つに分類した。



## 図6 RAAにおける相互作用

### 結果と考察

パロとの相互作用において対照的な変化を示した参加者 HB さんと N さんに注目した。HB さんは、初回セッションにおいて、職員からパロを「なでる」ように薦められたとき、「だめだあ」と拒否している。その前後の利用者 G さんや職員との相互のやりとりから、HB さんはパロを「生きている」と考えており、「接触」することの危険（噛みつかれるなど）を予測していたと思われる。一方、N さんはパロに関心を示し、触ってみたり、軽くつついたり、またパロの首の動きにあわせて自分も首を上下に動かしたり、多様な相互作用を行っていた。その様子を眺めていた HB さんは職員に「この人は、しょっちゅう（パロを）触っているのか」と質問していた。

二回目以降、両者のパロとの相互作用は違いが大きくなっていった。HB さんは、徐々にパロに接触するようになり、気持ちをこめた撫で方（「よしよし」等といいながら、可愛がるように丁寧に撫でる：以後伝達ストローク）を増やしていった。一方、N さんは可愛がるというよりは、反応を確かめるように撫で、さらに初回から行っていた、突付くような接触（以後タッチ）を増やしていった。6 回のセッションを通して、両者の接触の仕方はその代表的な接触行動に収斂していった。つまり、最終的には HB さんは伝達ストローク、N さんはタッチを主たる接触方法とした（図7, 8）。特に N さんは、6 回目のセッションではかなり強くたたいており、それを見た HB さんや G さんは、N さんに注意し止めさせようとしていた。

ただし毎回のセッション開始時に職員が「ここに来たのははじめて?」「これ（パロのこと）覚えている?」と聞くと、両者ともに「はじめて来た」「はじめて見た」と答えた。つまり、いわゆる「記憶」としてパロを「撫でて気持ちよい」「たたいてよい」等と意味づけた上での、接触行動の収斂ではなかった可能性が高い。

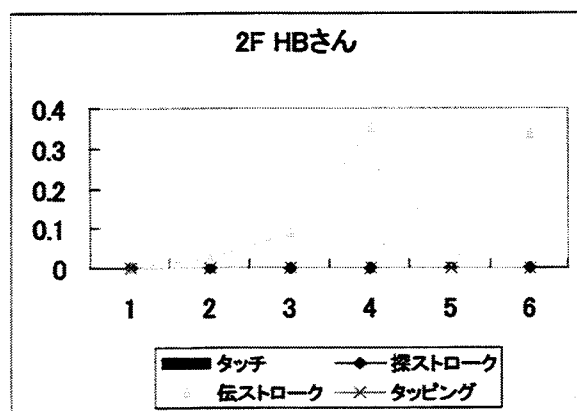


図7 HB さんの接触行動の変化

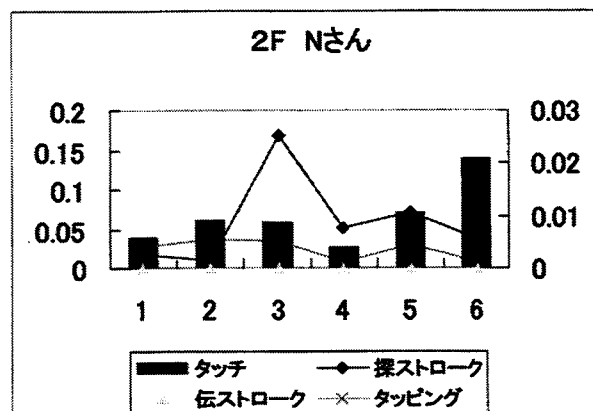


図8 N さんの接触行動の変化

このような変化過程を支えたのは、予備研究でも指摘したように、パロが接触を誘発し、かつ安定した反応性を持つためであろう。例えば、撫でると時には痛い、たたくとパロが逃げる・反撃するようであれば、このような変化は起こらないと考えられる。

一方、参加者側からは、パロとの相互作用が能動的な経験であったことも指摘できる。表1には、第6セッションで(1) N さんがパロを叩いている場面、(2) HB さんがパロを撫でている場面を選び、そのときの両者の心拍変動から LF/HF 比を算出し、交感神経/副交感神経活動を検討した。(1) の場面では N さんが、(2) の場面では HB さんが交感神経優位となっており、パロとの接触による相互作用に両者が能動的に関わり刺激を得ていたことが推測された。これは、パロと参加者の相互作用において、パロが接触を誘発・安定させたという現象とコインの裏表にあるといってよいだろう。

表1 心拍変動から推測した、交感神経系/副交感神経系の優位性

	最終回(1) たたく		最終回(2) なでる
HBさん	0.744 副交感神経系	<	2.016 交感神経系
Nさん	3.009 交感神経系	>	1.467 副交感神経系

さらに上述したように HB さんは、N さんを観察し自らとパロの関係を位置付けていたが、N さんも同様であった。例えば職員や HB さんになぜ叩くのかを問われ「わざと」と答えている。このパロをめぐる対象的な構図が、双方の変化過程の収斂に関わった可能性も考えられた。

なお、他の二名の参加者の接触行動も、それぞれ収斂していた(図9,10)。すなわち、同じ場所で、同じロボットを介したプログラムへの参加者は、それぞれ独自の接触行動のパターンを安定させていたといえる。

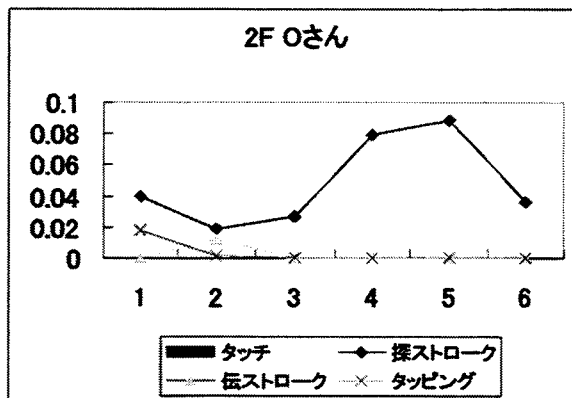


図9 Oさんの接触行動の変化

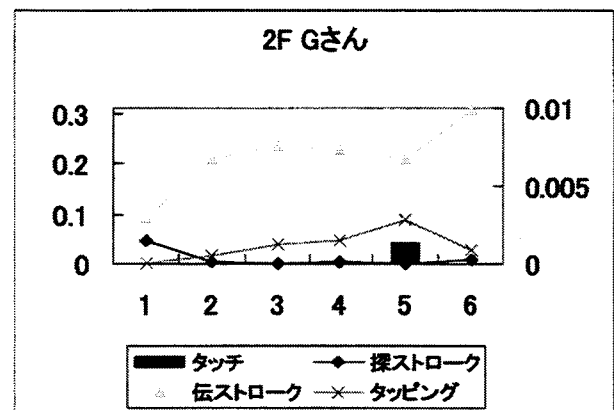


図10 Gさんの接触行動の変化

#### 総合考察

ここまで、アザラン型ロボットパロを用いた RAA で観察される行為・変化を、3つの研究を通して検討した。予備研究では、ロボットと参加者が関わるコミュニケーションのバリエーションが見られ、それが3つの類型に整理できると指摘した。そこで重要な指摘は、パロが接触を誘発し、継続させる特徴を備えていることが、コミュニケーションの背景にあるという点であった。

研究1では、集中的な RAA のプログラムを計画・実施した。予備研究と同様に、ロボットと参加者のコミュニケーションが成立し、6回のセッションを通じて場面へのコミットメントが高まり、一部の参加者に認知機能の向上がみられた。

研究2では、認知機能の変化がなかった参加者のビデオデータを解析した。研究1では準備した測定による認知機能の変化がみられなかった参加者も、接触行動そのものが、独自に収斂していく様子は観察された。

ここで見出されたコミュニケーション、心理的効果、そして接触行動の因果関係は明らかではない。例えば、心理的効果はあくまで RAA の前後での変化として見出されたのであり、接触行動、ロボットと参加者の相互作用、参加者間の相互作用、場の雰囲気、あるいはとにかく日常生活と異なる環境



におかれたことなど、どの要素が影響したのかは不明である。

しかし、認知症を示す本研究の参加者らは、ロボットについての「記憶」はあいまいなままで、ロボットとの具体的な相互作用である接触行動を安定させていたことから、本 RAA における接触行動とコミュニケーションについては、次のような生成過程が想定される。

- 1) ロボットの（意味的ではなく）物質的な側面に支えられ、探索的な接触行動が収斂する。
- 2) 接触行動の収斂により、参加者個人とロボットとの行為循環が安定する。
- 3) 各参加者が抽出する物理的側面は同一とは限らず、したがって行為循環も同一とは限らない。
- 4) 但し、同一の場を共有する RAA では、他者とロボットとの行為循環も観察可能である
- 5) 自己の行為循環と他者の行為循環を、（対立・協調の）構図＝イメージとして実際に観察可能であることが、それぞれの行為循環の安定に寄与する（図 11）
- 6) 上記の対立的・協調的関係の把握には、象徴レベルで情報処理する必要はない
- 7) したがって、RAA の現場限りにおいて、お互いにコメント可能であり、コミュニケーションが成立するが、RAA 終了後には記憶に残らない
- 8) このような RAA の成立において、一定の認知機能の向上がみられた

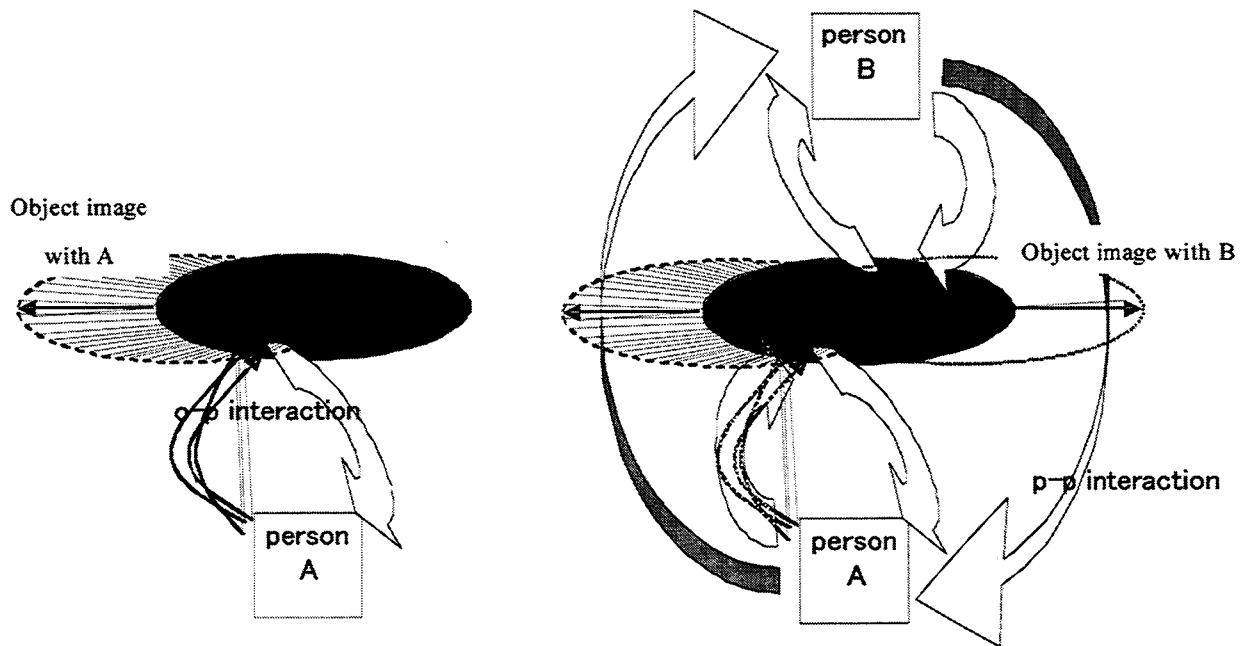


図 11 複数参加者の行為循環の構図が、コミュニケーションの土台となる

運動機能、また視覚や聴覚の衰え、あるいは認知症によって言語による認識が不得手になった高齢者にとって、接触は有望なチャンネルであると思われる。上記のように、接触は対象の物理的特徴を抽出し、対象が安定している場合には、行為者と対象の関係をも直接的に安定させるからである。よく見聞きできない対象、さらに再認できない対象であっても、本 RAA は納得いくまでの接触を保証する。時間をかけた接触は、高齢者の生活を現実と結びつけ、豊かにする可能性があるのではないだろうか。

ただし、その対象がロボットであることの意味は、改めて問わねばならないだろう。ロボットが媒介する「生活」とは何であるのか。AAA との連続でいえば、生命を感じることに、あるいは「もっぱらケアされる対象である高齢者がケアする側になること」と考えられるが、果たしてそうであるのか。

例えば、より生活においてリアルな接触対象である編み物などの実践にも、重要な意味があるのか

も知れない。これについては、より長期的な観察が必要である。

#### 引用文献

- 1) 江口保子・西片久美子 2005 援助者のタッチによる痴呆性高齢者の反応 日本赤十字看護学会誌, 5, 117- 123.
- 2) Folstein M., Folstein S. and McHugh P. 1975 Key Papers in Geriatric Psychiatry: mini-mental state: a practical method for grading the cognitive state of patients for the clinician. Journal of Psychiatric Research, 12, 189-198.
- 3) 本多雅亮, 吉山容正, 渡邊晶子, 角田恵麻, 旭俊臣 2001 デイケアプログラムにおける痴呆患者の表情による心理評価スケールの作成. 老年精神医学雑誌 12 : 787-793
- 4) 加藤謙介・渥美公秀・矢守克也 2004 ロボット介在活動における物語生成- 有料老人ホームにおけるペット型ロボットを用いた活動の事例- 実験社会心理学研究, 43, 155- 173.
- 5) 川野健治, 柴田崇徳, 和田一義 2005 ロボットが媒介する高齢者のコミュニケーション. 日本社会心理学会第 46 回大会論文集, 214-215
- 6) 中里克治, 下仲順子, 成田健一, 本城由美子 2001 高齢者のための行動評価表の作成. 日本老年医学会雑誌 28, 790-800
- 7) Shibata T. ,2004 An overview of human interactive robots for psychological enrichment, Proc. IEEE, 92 (11), 1749-1758

It is known for a psycho-social effect on elderly to participate in animal assisted activities (AAA). This study investigated a robot assisted activities which is alternative of AAA and whether or not two effects were on dementia elderly. (1) Improvement of cognitive function, (2) availability of touch communication. On ahead, we observed about 10 dementia elderly playing with a seal robot "PARO", which was designed to afford a touch from person. And then an original robot assisted activity was planed and worked out for two groups of 4 elderly, doing 2 sessions for a week and total of 6 sessions. It was estimated by 3 measures of QOL, MMSE, and Behavior check list for elderly (Nakazato et al.,2001 ) and all sessions were videotaped. The results were as follows. First, three type of communication mediated by robot were observed. Second, some of elderly showed an improvement of cognitive function. Third, touch behaviors of elderly were converged with one for each through the session. Behind these results, there were some properties of this interaction between the robot and person, which generated an exploring and continuing touch contact. At last, the importance of touch behavior for elderly was discussed.

## 総括

これまで報告してきたとおり、身体接触とは人間の生涯発達のあらゆる時期に、さまざまな対象のさまざまな部位に対して、さまざまな行動で向けられ、そのことのゆえにさまざまな機能を付与された行動である。当然ながら、身体を背景とした生物学的要因に支えられつつ、社会文化的な規定性も併せもっている。

本報告書ではまず、胎児期における胎動が採り上げられた。胎児期は、人間の一生のうちでももっとも濃厚な身体接触の時期である。ただ、母親にとって気づかれにくいだけのことである。それが母親にとっても実感されるのが胎動である。岡本の「オノマトペ」の研究は、その身体接触、つまり子どもの能動的な動きを母親が子宮で感じ取ることが母親に重要なメッセージとして伝わり、コミュニケーションのチャンネルとなっていることを教えてくれる。

その体験は、母親にとって出産後の子どもとの身体接触を左右するものに違いあるまい。母親にとってはその部位が体内から体表面へと推移するのに対して、子どもには同じく体表面の皮膚であり続けるのであり、その意味は一層大きいと考えられる。胎動としては子どもの動きが契機とされるが、子どもにとっては母親の立ち居振る舞いが契機となる。胎児と母親との身体接触的コミュニケーションは、これからの重要な研究テーマである。

続いての話題は、ベビーマッサージであった。マッサージを行う親とそれを受ける赤ん坊の間に一種の予定調和があると言うことを想定させる内容であろう。「アフォーダンス」といいかえてもよい。子どもの身体が「さわること」をアフォードするのである。そしてそのことを通じて触っている親の側も、子どもの身体によって触られている感じを受け取る。これは体内から体外環境に出てきた子どもと親の、重要な接点であろう。それがやがて、子どもの能動性によって導かれるようになり、さらに親子双方の身体志向性から子どもの関心が外界に向きかわり、マッサージが終息へと向かう様は、親子間の身体接触の発達的变化として興味深い。

子どもの身体は、「抱き-抱かれ」という形で母子関係のあり方を結びつける媒体となっている。7, 8ヶ月の時点でそこに大きな変節がみられ、それが親には「抱きにくさ」と感じられるということは興味深い。抱きとは実は親が子どもに対して一方通行的に行為を向けるものではない。子どももそこに能動的に参与しているのである。子どもが幼いときはそれでも、親の主導性が子どもの能動性を包み込み、調和的に抱きが成立していた。しかしながら7, 8ヶ月以降、子どもの主導性が大きくなり、その結果として母親に抱きにくさの感覚が発生した。これも見事なまでの子どもの身体性の主張であり、それを通じて親子の身体接触の変化が導かれたことの例証である。

そのような間身体性の変化は、次の身体接触遊びにも見られるものであった。身体接触遊びが発声と連動することは、その遊びが実は母子の全身体活動の総動員でなされているものであることを強く示唆するが、そこにも身体的アフォーダンスの存在が指摘でき、身体が親子の関係形成・維持・発展のための重要な媒体であり続けることが認められた。しかしながら、3項関係の導入などに絡んでの文化的要因の介在も同時に指摘できた。

3項関係と身体接触の問題は、実験場面における共同注意と抱きの関連性の問題としても取り上げられた。これまでの研究は、接触が身体感覚的な快や気持ちよさの提供者であるという知見をもたらしていたのに対し、この研究は、親子間で「意図」を媒介するものとしての抱きの意味を議論したものとして注目される。「肌は口ほどにものを言う」といったところであろう。身体の志向性を通じた意図の伝達・共有・拮抗などの舞台としての身体接触の重要性を教えられる研究成果である。

身体接触の拮抗的あるいは反発的側面は、攻撃や拘束といった状況で顕わになる。親が子どもを押さえつけて動きを封じるということは、親が子どもの世話をするときには必ずと言っていいほど伴われる行動であるが、それは子どもの意思と無関係に子どもに向けられることも多く、子どもの能動性はそれに抵抗する。ベビーマッサージが消滅していく過程にも実はそのことは見られていたが、「同じ文脈は着替え・おむつ換えや歯磨き、寝かしつけなどでも見られる。また場合によっては、子どもが親の意図を読みとって協力したり、あるいは逆にそれに逆らって遊んだりもする。おむつ交換場面の研究ではそのことが見事に描かれていた。

寝かしつけ場面でもそのことは同様に指摘できたが、興味深いのはその際の身体接触のあり方に対する日英の文化差であった。子どもの身体を拘束するのに親や保育士など大人の身体が用いられるが、その間に「モノ」が介在してその身体間の直接的な接触を実現させないということがしばしば生じる。それは人間の育児の大きな特徴であるが、そこに大きな文化差がある。日本に比べて英国の保育園でなされている寝かしつけの習慣の違いは、親子の間身体性とそこに介在する「モノ」、そしてその結果としての「子別れ」のあり方に大きな文化差があることを教えてくれている。

間身体性の問題が指摘できるのは、当然ながら大人と子どもの間だけではなく、子ども同士でも重要な機能を果たしている。他の接触的動物の多くと同様、彼らも集団における仲間関係の維持のために、身体を有効に使っている。むしろ、言葉を自由に操れるようになる以前の子ども達にとって、身体接触的宥和は最も重要な関係調節機構かもしれない。幼児が保育園で行っているやりとりのエピソードの豊かさは、そのことを示唆してくれている。

さらに、障害をもった子ども達にとっても、そのことは妥当する。自閉症児におけるくすぐり遊びの研究からは、接触の重要な機能が伝わってくる。くすぐり遊びが自閉症児にできるようになることと、子どもが相手の意図の理解ができることとの間に大きな関連があり、それが対人関係の改善の指標でもあり、その方向に子どもを変える介入にもなっているということが示され、身体接触の強力な対人関係構築機能が明らかにされた。

その機能は、臨床場面での行動改善においても指摘されていた。対人関係における「つく」「離れる」という行動の切り分けは、親からの子どもの自立過程において、親子共々大きな課題となる。とくに性の成熟が始まる思春期という時期は、子どもが自分の身体性をもてあまし、また親や異性などとの身体距離関係のリセットを迫られる時期である。人生のこういう時期において身体接触がもつ深刻な意味と、またそれゆえに対人関係の調整においてそれが果たす大きな役割とが実感される。

青年期はまた、友人関係を重んじる時期でもあり、同時にそれに悩む時期でもある。このような時期において身体接触が担う役割も大きい。そのことを実験的に調べた研究からは、対人関係の不安と触れ合うことへの抵抗との関連性が明らかになった。身体接触には本来ポジティブな面とネガティブな面とが共存するものであるが、青年期という時期は性や攻撃性の成熟とともに、そういうアンビバレンスが増大するということが示唆された。

そのようなアンビバレンスは、子どもの側だけでなく親から子にも向けられる。親子関係は子どもからのベクトルと親からのベクトルの二つの合力で定まるものであり、親からも子どもとの身体接触に対して正負の意味合いの移ろいが語られる。身体接触と一口に言っても、親子関係のなかでは世話や愛情表現など様々な意味合いで発現するのであるが、それはまた子どもの発達段階に応じて変化する。さらに、それは親子が相互に相手の心情を読みとることによって複雑な構図となる。それは乳児期、あるいはさらに胎児期からの親子の身体接触のあり方をふまえ、再現したり、あるいは敢えてその反転を目指したりされるものであろう。

本報告書では最後に、高齢者の身体接触の問題を採り上げている。「ロボット」との身体接触という、ある意味で特殊な、またある意味で大変今日的なテーマが検討されていた。この結果は身体接触が人間の一生にわたる重要な課題であることを改めて私たちに教えてくれる。それが媒介するものはいったい何なのか、そして人生の終着点で求められ、あるいは疎まれる身体接触というものがどのようなものであるのか、さらにそれは若い頃のどのような身体接触体験と関連するのか、など

について考えさせられる。

このように「身体接触」は、発達初期のみならず人間の生涯全般にわたって、関与する身体部位や相手の属性、意味などを様々に変化させながらも、一貫してその重要性を失わない。そこには関係構築の土台としての「身体」という確固とした存在がある。身体接触がになう正負の意味合いと、それを指向する強烈な主体性・能動性を理解する必要がある。そのような理解へのまなざしを貫き通したその先に、人間の生涯発達を包括的にとらえる鍵が存在するように思われるのである。

身体は、それを構成する物質は代謝して置き換わっていくとしても、存在自体は持続的実体である。そして、それを他者と触れあわせるという体験も、他者の身体と触れあうという皮膚感覚の記憶も持続する。しかし同時に、発達とともに身体はその機能・意味を変貌させるし、それにともなって接触の意味も推移していく。身体接触の生涯発達に焦点化するという事は、一つにはその諸発達段階における意味を明らかにしていくということがあろうし、それについて本研究は、一定の成果をあげたと思われる。

ただし、身体接触の生涯発達を問うことのもう一つの意味、つまりある発達段階での身体接触の体験が、同じ人物の別の発達段階での身体接触のあり方にどのような影響をもたらすかという側面については、研究の目的として掲げたにもかかわらず、結局のところ尻切れトンボのままになってしまった。この問いへの答えは、単なる個々の発達段階ごとの身体接触の検討を横に並べて相互比較するだけでは得られるものではなく、個々の研究の中に縦断的な視点が盛り込まれていなくてはならない。その点は、目標としつつも本研究が到達できなかったテーマであると、反省を込めて認めざるを得ない。研究を統括した者として、自らの今後の課題としたい。

研究代表者 根ヶ山光一